

Title	ウィリアム・モリスの生活芸術思想に関する建築論的研究(Dissertation_全文)
Author(s)	杉山, 真魚
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2011-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k16073
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	author

ウィリアム・モリスの生活芸術思想に関する建築論的研究

杉 山 真 魚

2011

ウィリアム・モリスの生活芸術思想に関する建築論的研究

目次

はじめに	1
研究の背景と位置づけ	
研究の目的と方法	
論文の構成	
序章 「生活芸術」の諸相—モリスの活動の拡がり	9
0-1 「生活芸術」なる概念の成立	
0-1-1 最初の講演におけるモリスの洞察	
0-1-2 中産階級からみる「簡素な生活」	
0-1-3 労働者階級からみる「慎みある生活」	
0-1-4 ユートピアにおける「新生活」	
0-2 生活芸術思想の方法的特性	
0-2-1 日常生活批判としての理論と実践	
0-2-2 モリスの自然観	
0-2-3 モリスの歴史観	
小結	
第1章 モリスの装飾芸術論	27
1-1 ヴィクトリア朝の装飾芸術論	
1-1-1 功利主義と芸術のための芸術	
1-1-2 中世主義と三人の思想家	
1-1-3 デザインの原理とコール・グループ	
1-2 「自然」と装飾芸術	
1-2-1 パターンデザインにおける「コンベンション」	
1-2-2 「生命」と「コンベンショナルライズド・フォーム」	
1-3 「歴史」と装飾芸術	
1-3-1 ゴシック芸術と「スタイル」	
1-3-2 ゴシックにおける「伝統」の意味	
小結	
第2章 モリスの住まい論	45
2-1 「家造り」にみる技術論的契機	
2-1-1 「工芸」なる概念	
2-1-2 「家造り」の実践的内容	
2-2 「庭作り」にみる環境論的契機	
2-2-1 「庭作り」の実践的内容	
2-2-2 「自然の美」と「芸術の美」	
2-2-3 「トランジション」としての「庭」	
2-3 生活芸術思想と「喜び」の概念	
2-3-1 「民衆の芸術」における制作者と受容者	
2-3-2 「ひとつの喜び」なる全体	
2-3-3 補論：ラスキンと「テオリア」の概念	
小結	

第3章 モリスの社会主義論 -----	65
3-1 1880年代の社会主義運動とモリス	
3-1-1 1880年代のモリスの言説	
3-1-2 弁証法的歴史観の醸成	
3-1-3 芸術の目的としての「慎みある生活」	
3-2 「手工芸」の方法による制作の意味	
3-2-1 モリスの機械観	
3-2-2 「手工芸」にみる建築的契機	
3-2-3 「手工芸」と制作者	
3-3 「手工芸」と「美しい環境」	
3-3-1 「工場」とモリスの環境論	
3-3-2 制作の源泉としての「大地」	
3-3-3 補論：ラスキンと「固有価値」の概念	
小結	
第4章 モリスの書物論 -----	85
4-1 1890年代の書物論の位置づけ	
4-1-1 晩年の活動	
4-1-2 書物の二重性	
4-2 芸術作品の二大原理	
4-2-1 作品における「叙事詩的なもの」	
4-2-2 作品における「装飾的なもの」	
4-3 「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」との相関	
4-3-1 制作における「自然への愛」	
4-3-2 制作の伝承としての「ロマンティックな特質」	
4-4 文学作品にみる「叙事詩的なもの」	
4-4-1 物語における虚構の意味	
4-4-2 物語の伝承性	
小結	
結章 -----	107
5-1 モリスの生活芸術思想の構造	
5-2 「生活芸術」の可能性	
資料 -----	115
主要参考文献	116
邦文献リスト	120
訳語・原語リスト	128
モリス著作リスト	135
図版出典	152
論文目録	153

凡例

- ・本文中のモリスらの言説はすべて筆者の日本語訳による。
- ・引用文（引用語）は原則として「……」、あるいは2字下げゴシック字体による段落によって示す。
- ・引用文（引用語）のうち原文（原語）を付記する場合、日本語訳の直後に（……）、あるいは2字下げによる段落によって示す。
- ・筆者により引用文を省略する場合、（…中略…）と表記する。原文中の省略箇所は（……）と表記する。
- ・筆者による内容補足を行う場合、引用文中に（引用者注：……）として示す。
- ・モリスに依拠しない言葉を強調する場合、〈……〉と表記する。
- ・引用文の出典は注記により、講演等の表題、引用文献（略号の後にハイフンにて引用部頁番号を示す）の順に表記する。各講演等の初出時に、注記にて内容を補足する。
- ・引用文の出典に関して、モリスの言説についての基礎的研究と位置づけられる LeMire, Eugene D.: A Bibliography of William Morris, Oak Knoll Press, 2006 および同: The Unpublished Lecture of William Morris, Wayne State University Press, 1969 を参照する際、[EL-頁番号] および [UL-頁番号] と略記する。
- ・引用文献は[略記]を用いて記す。略記は以下の通りである。

- [XVI] : Morris, May (ed.) : News from Nowhere ; A Dream of John Ball ; A King's Lesson : The Collected Works of William Morris, volume XVI, London, Longmans Green, 1912
- [XXII] : Morris, May (ed.) : Hopes and Fears For Art, Lectures on Art and Industry : The Collected Works of William Morris, volume XXII, London, Longmans Green, 1914
- [XXIII] : Morris, May (ed.) : Signs of Change, Lectures on Socialism : The Collected Works of William Morris, volume XXIII, London, Longmans Green, 1915
- [i] : Morris, May (ed.) : William Morris, Artist, Writer, Socialist, vol.1, Oxford, B. Blackwell, 1936
- [ii] : Morris, May (ed.) : William Morris, Artist, Writer, Socialist, vol.2, Oxford, B. Blackwell, 1936
- [OC] : Morris, William, et al. : The Oxford and Cambridge Magazine for 1856, Bell and Daldy, 1856
- [E9] : The Encyclopædia Britannica 9th edition Volume XVII 'Mural Decoration', Adam and Charles Black, 1884
- [SO] : Morris, William and Bax, E.Belfort: Socialism: Its Growth and Outcome, London, Swan Sonnenschein, 1893
- [AC] : Members of the Arts and Crafts Exhibition Society: Arts and Crafts Essays, London, Rivington Percival, 1893
- [MII] : Mackail, J.W.: The Life of William Morris Volume II, London, Longmans Green, 1899
- [NG] : Ruskin, John: The Nature of Gothic : A Chapter from The Stones of Venice, London, George Allen, 1900
- [PC] : Morris, William: The Pilgrims of Hope and Chants for Socialists, London, Longmans Green, 1915
- [LE] : Henderson, Philip(ed.): The Letters of William Morris to His Family and Friends, London, Longmans Green, 1950
- [UL] : LeMire, Eugene D.(ed.): The Unpublished Lecture of William Morris, Detroit, Wayne State University Press, 1969
- [IB] : Peterson, William S.(ed.): The Ideal Book, Essays and Lectures on the Arts of the Book by William Morris, California, University
- [PW] : Salmon, Nicholas(ed.): Political Writings: Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890, Bristol, Thoemmes Press, 1994
- [JO] : Salmon, Nicholas(ed.): Journalism: Contributions to Commonweal 1885-1890, Bristol, Thoemmes Press, 1996
- [AH] : Morris, William: Architecture and History Essays 1870-1884, Wildside Press, 2003

はじめに

研究の背景と位置づけ

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) は、19 世紀後半の英国において活躍した装飾芸術家・社会主義者・詩人として知られ、今日までかれの思想や作品について多方面から研究が継続的に行われてきた^{注1)}。また、モリスに関する評伝も多数出版されている^{注2)}。まず、モリス研究の動向を概観する。

20 世紀前半には、モリスは〈近代デザインの先駆者〉として受け容れられ、かれが過去の様式から脱却を図ったことに焦点が当てられた。モリスの意義が〈近代デザイン〉という枠組みの中で問われていたのである。建築の分野に限れば、建築家の創造の関心が様式から空間へと移行する過渡期にあつて、モリスが生活空間を発見し、グロピウスがそれを工業化と結びつけたというペヴスナーに代表されるきわめて明快な近代建築史観が描き出されたのである^{注3)}。モリスは近代社会の生産体制における人間性疎外を危惧し、人間と技術の関係や人間と環境の関係を問い直したが、このような内容はかれの先駆性を論じる中では取り上げられなかった。

1950 年代になると、社会主義者としてのモリスの活動が見直され、工芸家モリスにとって社会主義運動は逸脱であるという〈モリス神話〉からの解放が目論まれた^{注4)}。このことは政治的な意図によってモリスを正統のマルクス主義者とする主張を生んだ。ここでは工芸家モリスと社会主義者モリスを貫く思想基盤が問われていなかった。

1970 年頃には、近代技術による無思慮な大量生産・大量消費・環境破壊への反省として、モリスの思想が再評価されるようになる^{注5)}。1990 年以降、エコロジー思想の隆盛とともに、モリスの思想の環境論的側面を論じる研究が多くみられる^{注6)}。しかしこれらは環境思想の重要性を説くことに主眼をおき、モリス自身の思想体系については概説に留まっている。また、90 年代には、建築史学的見地からモリスの古建築物保護の理論や実践も明らかにされた^{注7)}。現代では、文化経済学の分野において、モリスやその師であるラスキンの思想の重要性が認められており、かれらの思想を社会システムの再構築に応用する方法が検討されている^{注8)}。

モリスに関する解釈の多様性はかれの活動の拡がりに起因するが、中には恣意的に曲解した論述もある。現在、諸学提携によってモリスを包括的に把握するという研究史上重要な試みもなされている^{注9)}。かれの活動の複層性をかれの独自性として捉えること、このことが求められている。モリスの多岐にわたる活動の底流にはいかなる思索の構造があるのか。本研究はこの動機に基づき、モリスの思想総体を生活芸術思想と呼称し、建築論的制作論の視点から、かれの思索の道を辿り直すものである。建築論的制作論とは、森田慶一著『建築論』において規定される、〈建築とは何か〉という問いに答えるため、建築を全一的に捉えてその本質を探究する理論的・体系的な考察としての建築論^{注10)}を範例とした、〈制作とは何か〉という問いに答えるための理論的・体系的な考察を意味する^{注11)}。

森田建築論の方法により、モリスの思想に接近したものとして、白石博三の研究が挙げられる。白石による京都大学学位請求論文『ラスキンとモリスとの建築論的研究』、1957 は、ラスキンを理論家、モリスを実践家と前提し、両者を総合的に体系化することを主たる目的としている。白石の研究は研究対象をラ

スキンやモリスの建築に関する著作に限定し、西洋建築思潮史の一部にラスキンとモリスとを複合的に位置づけたものである。本研究は、モリスの思想を生活芸術思想という独自性において検討するものである。

研究の目的と方法

本研究の主題に掲げる「生活芸術」とはモリス自身による、民衆の生活に即した芸術を意味する言葉であり、装飾芸術家、社会主義者、詩人の別なく志向されるものである。本研究の目的は、制作という観点からモリスの生活芸術思想の内実を明らかにし、生活を基盤とした建築制作の可能性を探求することにある。現代において、建築の分野に限らず、創造・生産における倫理が問題となっているが^{注1 2)}、モリスの思想を読み解くことはこのような社会的文脈においてとくに意義があるものと考えられる。工芸品、家具、住宅建築などの日常使用のものをいかに制作するかということをモリスがどのように捉えていたのかを明らかにすることにより、近代的パラダイムと異なる、生活者の視点から捉えた人間—技術、人間—自然の関係を示すことができると考えられる。このことは持続可能な環境や文明をいかに創出するかという問題にひとつの姿勢を提示することになるであろう。

本研究は考察に際して、モリスの思索の道を辿り直し、思索の形成過程において基本概念を再構成することを方法とする。基本概念とは、論者がモリスの生活芸術思想を体系化する上で鍵となると認めるものである。実践活動を通して思索するモリスの態度を考慮し、諸概念の社会的、歴史的背景を伴った広がりについても検討する。ここで予め断っておくと、本研究は、モリスの思索の展開に即していくことを原則とするが、すべてを年次順に辿るわけではない。「生活」と「芸術」の関わりが孕む問題性を、特定の角度から照らしながら解説するため、扱うテキストが前後することもある。

本研究はモリスの制作に関わる諸概念を体系的に構造化するという方法に独自性を見出す。工芸品、家具などの日常使用のものは、その数の多さから個々の作品については、染色の具体的方法や織物の歴史など工芸の専門的知識がなければ解説できないが、〈制作とは何か〉を問う研究においては、工芸的内容であっても、技術や環境の問題へと還元することにより、建築の問題として解釈しうる。本研究の方法の企図はこのことにある。

本研究では、白石が研究対象から除外した書簡、雑誌記事、詩や散文などの著作に加えて、近年まとめられたモリスの講演録や書物に関する論考なども対象とする。表1に一次資料を示す(詳細は凡例を参照)。

	一次資料	著者・編者および内容
①	The Collected Works of William Morris (全 24 巻) 第 16 巻内の社会主義機関紙に掲載された 2 編の文学作品 (News from Nowhere／A Dream of John Ball), 第 22 巻 (芸術論集: Hopes and Fears For Art, Lectures on Art and Industry) 内 20 編, 第 23 巻 (社会主義論集: Signs of Change, Lectures on Socialism) 内 15 編を主たる研究対象とする。	実娘 May Morris によって編集された全集
②	William Morris, Artist, Writer, Socialist (全 2 巻) 第 1 巻内 18 編の芸術論, 第 2 巻内 31 編の社会主義論を 主たる研究対象とする。	実娘 May Morris によって編集された①の補遺集
③	Socialism: Its Growth and Outcome	Belfort Bax との共著による社会主義論
④	Arts and Crafts Essays	アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会編の芸術論集
⑤	The Pilgrims of Hope and Chants for Socialists	モリス作の詩集
⑥	The Letters of William Morris to His Family and Friends	Philip Henderson によって編集された書簡集
⑦	The Unpublished Lecture of William Morris	Eugene D. LeMire によって編集された未刊講演集で あり, 10 編の芸術や社会に関する論考がみられる
⑧	The Ideal Book, Essays and Lectures on the Arts of the Book by William Morris	William S. Peterson によって編集されたモリスの書 物論集
⑨	Political Writings, Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890	Nicholas Salmon によって編集されたモリスの雑誌記 事・論文集

表 1

論文の構成

本論文は序章、結章を含め 6 章より成る。

序章において「生活芸術」の諸相を、モリスの活動内容と思索の方法的特性の概説により予描する。

第 1 章から第 4 章では、「生活芸術」の内実について、序章において見出される装飾芸術論、住まい論、社会主義論、書物論という四つの論点に即してそれぞれ一章を充て明らかにする。装飾芸術論と書物論では〈芸術の生活化〉という方途を探り、住まい論と社会主義論では〈生活の芸術化〉という方途を探る。

第 1 章では、まず、ヴィクトリア朝の装飾芸術の動向、モリスの立場を確認する。次に、モリスが制作者のデザインの源泉とする「自然」と「歴史」の問題について記述—分析する。ここから「コンベンション」や「スタイル」という概念を抽出し、それらのデザインにおける意味について「生命」という概念とともに論じる。

第 2 章は、前章におけるデザインの方法が問われる前提となる生活者、とりわけ中産階級の「住まい」が中心主題である。モリスが「住まい」を「家造り」と「庭作り」という二つの契機から考えていることに着目し、各々の実践的側面を明らかにしたのち、各々に通底する倫理的側面を「喜び」という概念を通して考察する。

第3章では、モリスの1880年代の活動を取り上げる。この時期、モリスの思想は「工場」などの労働環境を含めた生活環境への問いが中心となり、社会と芸術を架橋するものとして「手工芸」の方法による人間性回復を説く。本章では1880年代の英国における社会主義運動とモリスの関係を検討したのち、「手工芸」の方法に潜む共同性の諸相について論じる。

第4章では、モリスの晩年の活動を取り上げる。装飾芸術家、社会主義者として実践を重ねたモリスは、晩年に書物制作、文学の創作、書物に関する論述を通して、芸術の理想的な在り方を呈示している。本章ではモリスが書物論において強調する芸術についての「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」というパラダイムの意味について考察する。

結章において、モリスの生活芸術思想を定式化し、その可能性について論じる。

以下に、研究方法および論文構成の概略を図示する。

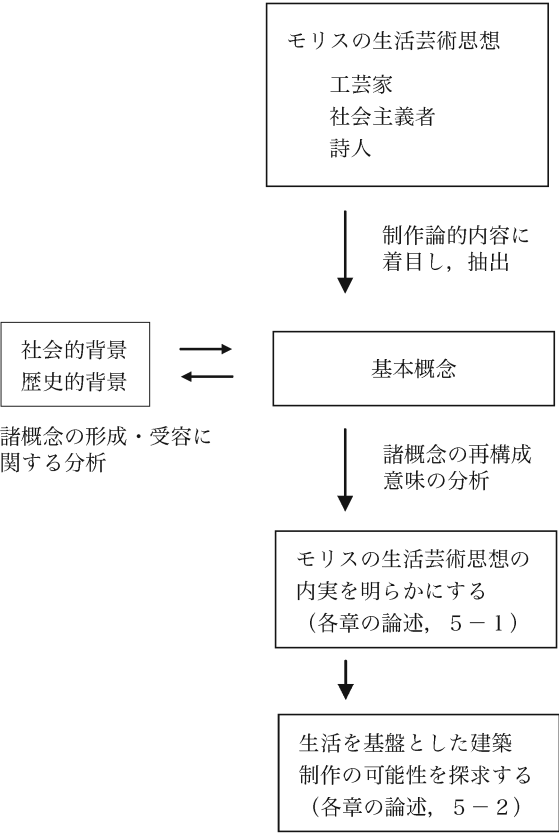


図1 研究方法のダイアグラム

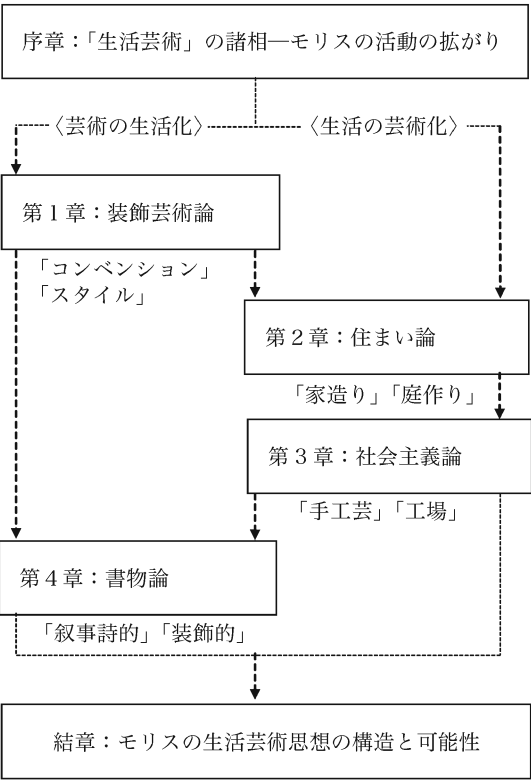


図2 論文構成のダイアグラム

はじめに 注記

注1) モリス研究の第一人者である小野二郎の『ウィリアム・モリス研究』(小野二郎著作集1), 晶文社, 1986 は, モリスの広汎な活動を総合的に分析したものであり主要な参考文献として位置づけられる。小野はこの研究の中で, モリスの伝記作家がモリスを説明するのによく「詩人・工芸家・社会改革家」や「芸術家・作家・社会主義者」など三つ重ねの表現を用いてきたことを指摘し, 「たしかにモリスの活動の世界は大まかにいって三つの分野に及ぶといってよい」としている。モリスの活動を細分化すれば, 「詩人, 作家, 画家, デザイナー, 実業家, 翻訳家, 手稿本彩色家, カリグラファー, 染織工芸・研究家, 美術館アドバイザー, 園芸家, 古建築物保護運動家, 社会主義活動家, 自然環境保護推進者, 古書蒐集家, 出版・発行人(ダーリング・ブルース他著『ウィリアム・モリス: ヴィクトリア朝を超えた巨人』, 河出書房新社, 2008 に拠る)」などが挙げられる。これらの各々の活動について研究が蓄積されている。今日までのモリスに関する代表的文献目録として以下の四つのものが挙げられる。

①Aho, Gary L.: William Morris : a reference guide, G.K. Hall & Co. , 1985

1897 年から 1982 年までのモリスに関する文献や論文がまとめられたもの。

②Latham, David and Latham, Sheila: 'William Morris : An Annotated Bibliography', "The Journal of William Morris Studies", William Morris Society, 1983-2008

13 編の文献目録により, 1978 年から 2005 年までのモリスに関する文献や論文が網羅されている。

③モリス生誕百年記念協會編『モリス記念論集』, 川瀬日進堂書店(神戸)／西澤書店(東京), 1934

「日本モリス文献目録」として, モリスに関する著述が見られる, 1934 年以前の専載本, 雑載本, 定期刊行物, 展覧会目録, 各大学卒業論文がまとめられている。

④小野二郎『ウィリアム・モリス: ラディカル・デザインの思想』, 中央文庫, 1992 の巻末

「参考文献」および「ウィリアム・モリス著作リスト」は発表時における研究成果を知る上で重要である。

以下, 諸分野におけるモリスに関する代表的研究を挙げる。社会学的見地として, 大熊信行の研究『社会思想家としてのラスキンとモリス』, 東京商科大学『商学研究』第一巻第二号, 1924 は, モリスの思想における装飾美術と社会との関係を, 労働理論を中心に据えて考察している。内藤史朗はモリスの思想を教育学的見地から捉え直し, 『民衆のための芸術教育』, 明治図書出版, 1973 としてモリスの芸術に関する論著を再編集している。モリスの作品研究として, Watkinson, Ray: William Morris as Designer, Studio Vista, 1967 が挙げられる。この研究は, 図版により作品を解説しており, モリスの実作品の構造分析をしている点で本論に示唆を与えてくれる。

Lemire, Eugene D.: A Bibliography of William Morris, Oak Knoll Press, 2006 は, モリス自身の著作を体系化したものであり, モリスの言説研究の基礎となる研究である。

注2) Mackail, J.W.: The Life of William Morris, 2vols., Longmans, 1899 はモリス没後3年後に書かれたものであり基礎的評伝として位置づけられる。モリスの終生の友であったバーン・ジョーンズ夫妻が娘婿のマッケイルに依頼して書かせた伝記である。Henderson, Philip: William Morris: His Life, Work and Friends, Thames and Hudson, 1967 (川端康雄他訳『ウィリアム・モリス伝』, 晶文社, 1990) ではモリスの活動を「ロマンス(1834-76), コミットメント(1876-90), ユートピア(1890-96)」という時系列により分類し, 主として書簡を通して活動を

追っており、モリスの全体像を理解するための画期的な研究である。また、Thompson, Paul: The Work of William Morris, Oxford University Press, 1991 はモリスの作品や概念を現在の視点から再評価するという企ての下に著されたものであり、モリスと同時代のデザイナーや初期の近代建築家らとの連関についても分析している。

注3) Pevsner, Nikolaus: Pioneers of Modern Design from William Morris to Walter Gropius, 1st edition, Faber and Faber, 1936; 2nd edition, The Museum of Modern Art, 1949 (白石博三訳『モダン・デザインの展開: モリスからグロピウスまで』, みすず書房, 1957), 第一章「モリスからグロピウスまでの芸術論」を参照。

注4) 1950年代のモリス研究の動向については、木村正身「ウィリアム・モリス解釈の新段階」『香川大学経済論叢』第二十九巻第五号, 1957, pp.429-69 に詳しい。〈モリス神話〉については、木村竜太『空想と科学の横断としてのユートピア: ウィリアム・モリスの思想』, 晃洋書房, 2008, pp.25-30 を参照。同書, p.34 において、工芸家モリスと社会主義者モリスの分離を前提に考察することはあり得ないと指摘されており、本研究も木村の主張に同調する。本研究は、モリスの制作概念を軸に工芸家と社会主義者の二重性を読み解くことに独自性を見出す。

注5) Schuhl, Pierre-Maxime: Machinisme et philosophie, 3rd edition, Presses Universitaires de France, 1969 (栗田賢三訳『機械と哲学』, 岩波新書, 1977) は、機械と人間の関係を考察し、その結論において「われわれはウィリアム・モリスの言う、楽しい労働の芸術、美の創造の欲望が発達してゆくようになることを期待したい」と、モリスの理論の可能性を示唆している。藤井正一郎『近代建築再考』, 鹿島研究所出版会, 1970 では、近代技術のありようを省察し、結章において、近代建築発展のプロセスには「自らが生活の場を創造する喜びなど入りこむ余地など存在しなくなる危険がある」と述べ、モリスの思想を引照している。また、中村良夫『風景学入門』, 中央公論新社, 1982 では、工業時代においてモリスの思想を生活景思想として捉え直す意義が論じられている。

注6) モリスの思想の環境論的側面を論じた代表的研究として、Bate, Jonathan: Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition, Routledge, 1991 (小田友弥, 石幡直樹訳『ロマン派のエコロジー: ワーズワスと環境保護の伝統』, 松柏社, 2000) および David Pepper: ECO-SOCIALISM: from deep ecology to social justice, Routledge, 1993 (小倉武一訳『エコロジーの社会: 生態社会主義』, 農山漁村文化協会, 1996) が挙げられる。また、Faldet, David: The River at the Heart of Morris's Ecological Thought (Latham, David(ed.): Writing on the Image: Reading William Morris, University of Toronto Press, 2007 所収) では、モリスのユートピア物語“News from Nowhere”(1890)におけるテムズ河の描写の環境保護的側面が論じられている。ファルデットは環境倫理学の祖とされるアルド・レオポルド(Aldo Leopold, 1887-1948)の「土地倫理」の考え方を援用しながら、モリスの思想の現代性を考察している。

注7) 鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』, 中央公論美術出版, 1996。藤田治彦「ウィリアム・モリスと反修復運動」『美学』46巻4号, 1996, pp.1-12。これらの先行研究によって、古建築物保護協会(The Society for the Protection of Ancient Buildings, 通称 SPAB)の歴史的経緯やその理論, 実践についての具体的内容が明らかにされている。

注8) 池上惇『文化と固有価値の経済学』, 岩波書店, 2003 参照。池上は同書 p.232 においてモリスの学説が現代の産業論として示唆に富むとし、伝統的な産業構造論に対して、情報技術時代において農林漁業, 製造業, サービス

業がそれぞれ新たに発展するという視点を、特に教育という観点から論じている。

注 9) 前掲注 6) 内の Latham 編の文献は、モリスに関する 16 人の個別研究を諸学提携を目論んで編纂されたものである。巻末の文献目録はとくに英語圏における研究成果を知る上で重要である。

注 10) 森田慶一『建築論』, 東海大学出版, 1978, pp.5-6 参照。

注 11) 〈制作〉という概念は、道具の製作、芸術作品の創作、社会的生産などを統べる概念であり、一義に固定することは困難である。装飾芸術家・社会主義者・詩人としてのモリスは、製作、生産、創作など〈制作〉の諸事態を二者において経験した人物である。したがってモリスの多岐にわたる活動の基底を〈制作とは何か〉という問いとともに捉え直すことができると考える。〈制作とは何か〉を問うためには、人間の行為（日常における〈使う〉や〈作る〉という経験）に関する具体的な記述から、つまり、固定観念や客観的科学的概念に最初から頼ることなく、それらの根拠そのものの成立に立ち会うことから出発する必要がある。本研究はこのような現象学的接近法による建築技術論とも呼べるものである。本研究では、「コンペンション」「スタイル」「家造り」「庭作り」「手工芸」「叙事詩的なもの」「装飾的なもの」など技術に関わる諸概念を遡行的に問う。

注 12) 近年、環境問題の深刻化、情報技術の発達、脳科学の発達など、人間の技術が関わる様々な局面において〈倫理〉が問われている。ここでの〈倫理〉とは規範を一方的に強制するものではない。環境倫理学者、辛島司朗は、「倫理は個人的道徳の時代的社会的集約であり、逆にまた時代的社会的掟の個人道徳的分割共有である」とする（『環境倫理の現在』, 世界書院, 1994, p.244）。本研究において〈倫理〉という概念を用いるとき、環境倫理学での扱いと同様、強制的な規範ではなく、個人と社会の相互関係や世代間などにおいて取り決められるべき態度を意味する。

序章 「生活芸術」の諸相—モリスの活動の拡がり

0-1 「生活芸術」なる概念の成立

0-1-1 最初の講演におけるモリスの洞察

モリスは 1877 年、公開講演活動を開始し、芸術問題や社会問題に関して発言するようになる。これ以降、芸術や社会に関する論文や雑誌記事も残されている。講演活動は没年まで 600 回以上行われ、当時、一部の講演は活字化された^{注1)}。モリスが公の場において講演を行うようになるのは、古建築物に対する「修復 (restoration)」という行為と関わっている。かれは『アシニウム』誌の 1877 年 3 月 5 日付の投書において、G.G.スコット (Sir George Gilbert Scott, 1811-1878) によるテュークスベリ修道院教会の修復に対し、「風雨を防ぐこと以上を意味するすべての『修復』に抗議する」と異議を唱え、3 月 22 日には古建築物保護協会 (the Society for the Protection of Ancient Building) を設立している^{注2)}。この団体は、「修復」という行為は古建築物が宿している歴史を剥ぎ取ることであるとし、修理という方法によって古建築物を荒廃から守ることを主張する。こうした実際の活動を伴いながら、モリスが思想の核に据えるのは、芸術総体の在り方、芸術についての民族感情といった巨視的な問題へのラディカリズムである。かれはこの頃までに工芸家としてはモリス商会の成功をもって名声を得ており、また詩人としてはオックスフォード大学の詩学教授に推薦される水準を有していた^{注3)}。かれは「修復」への批判を念頭におきつつ、工芸家の経験や詩人の感覚により培ってきた芸術観を反映させた内容の講演を行う。最初の講演は「装飾芸術—その現代生活および進歩との関係」と題されたものであり、その後の講演や論述を貫く芸術や社会を把握する基本的態度が示されている。講演の冒頭、次のように言われる。

私の考えでは、大芸術を今私が話そうとしている、いわゆる装飾芸術という小芸術と分離することはできない。両者が分離するようになったのはごく近年、生活条件が複雑をきわめるに至ってからである。そして私はそれらが分離することは、芸術全体の病であると思う。(…中略…) しかし私は、狭義の建築、彫刻、絵画についてあなたがたに話そうとしているのではない。なぜなら、きわめて不幸なことだが、これらの師なる芸術すなわち特に知性的な芸術は、今日では、狭義の装飾と分離しているからである。我々が問題とするのは、人々が日常生活で見慣れているものをいつでも、いくぶんでも美化しようとしてきた多くの芸術である。^{注4)}

I cannot in my own mind quite sever them from those lesser so-called Decorative Arts, which I have to speak about: it is only in latter times, and under the most intricate conditions of life, that they have fallen apart from one another; and I hold that, when they are so parted, it is ill for the Arts altogether: (……) However, I have not undertaken to talk to you of Architecture, Sculpture, and Painting, in the narrower sense of those words, since, most unhappily as I think, these master-arts, these arts more specially of the intellect, are at the present day divorced from decoration in its narrower sense. Our subject is that great body of art, by means of which men have at all times more or less striven to beautify the familiar matters of everyday life:

ここにモリスが芸術を「大芸術」と「小芸術」に二分しつつも、二者を分離できない「芸術全体」という枠組において把握していることが示される。分離した両者を「芸術全体」へと再融合すべく、日常生活に存する「小芸術」に足掛かりを求めるのである。「小芸術」とは具体的には「家造り (house-building),

塗装、家具木工、鍛冶、製陶、ガラス製造、機織などの工芸 (crafts)」であるとされ^{注5)}、日常生活において一般の民衆によって使用されるものの制作を意味する。モリスは、民衆が「小芸術」の在り方を問い直し、芸術の理解が高まることで、「大芸術」も「民衆の芸術の威厳 (their dignity of popular arts)」を回復すると考えた^{注6)}。このことが古建築物の修復を阻止する手立てでもあったのである。

では、なぜ、「大芸術」と「小芸術」は分離するに至ったのか。モリスはその原因を「生活条件」の複雑化という社会問題に見ている。モリスの生きたヴィクトリア朝時代は、有閑階級と労働者階級の間位置する中産階級という富裕層が勃興した時代であり、かれらは住宅建築の施主となり、都市郊外に居を構えるようになる^{注7)}。かれらの邸宅内には種々の装飾芸術品が飾られた。モリスはこの階級の功利主義的な考え方や道楽的銜学趣味によって、本来、日常生活に直接的に関わるべき装飾芸術が、人々の日常生活から遊離した「流行」という基準において価値づけされていることに注目する^{注8)}。「生活条件」の複雑化が、このような「流行」への志向に起因すると考えられるのである。こうした時代の傾向に対して、モリスは「生活の簡素さ」というテーゼを掲げる。

生活の簡素さ—それは趣味の簡素さ、すなわち甘美で高尚なものへの愛を生むものである—は、われわれが切望する新しくよりよい芸術の誕生のためにもっとも必要な事柄である。宮殿であれ、田舎屋であれ、あらゆる所に簡素さが必要である。^{注9)}

Simplicity of life, begetting simplicity of taste, that is, a love for sweet and lofty things, is of all matters most necessary for the birth of the new and better art we crave for; simplicity everywhere, in the palace as well as in the cottage.

「生活の簡素さ」とは人間の生き方の問題であり、「趣味の簡素さ」とは生き方に連なる芸術享受や芸術表現の問題と言えよう。最初の講演の狙いは、民衆、とりわけ手工芸職人に、芸術に関する「趣味」の問題を芸術の内部から単なる表現の問題として捉えず、「生活」という次元から根本的に問う態度を知らしめることにあった。ここでモリスのいう「生活」の指し示す範囲について注意が必要である。

モリスは、1883年に社会主義者を自認し、芸術の正しい在り方を社会構造の変革に求めるようになる。通常、この転回以前のモリスを「ロマン主義的反抗の芸術家」、以降を「革命的社會主義者」と呼ぶ^{注10)}。さらに、1889年にモリスは「共產主義者」と自称し、社会主義運動の無政府主義的側面を批判することになる。この時期にモリスはユートピアン・ロマンスと呼ばれる文学作品を残しており、この時期から没年までを「ユートピア」の時代とする評伝もある^{注11)}。これらの転回に伴う「生活」概念の捉え方の変容（もしくは揺らぎ）について概略を示し、本研究が主題に掲げる「生活芸術」の諸相をみておきたい。

0-1-2 中産階級からみる「簡素な生活」

モリスによる初期の講演のうち5編が第1講演集『芸術の希望と不安』(*Hopes and Fears for Art*)としてまとめられ、1882年に出版された。5編を講演年順に列挙すれば、「小芸術」(1877、収録時に「装飾芸術—その現代生活および進歩との関係」から改題)、「民衆の芸術」(1879、収録時に表題がつけられた)、

「生活の美」(1880, 収録時に「労働と喜び対労働と悲しみ」から改題), 「最善を尽くすこと」(1880, 収録時に「家の装飾に関する心得」から改題), 「文明における建築の前途」(1881) となっている^{注12)}。モリスは 1880 年の書簡において講演集を出版する意思を示し, 「静謐で威厳のある生活」を実現するのに「これ以上重大な主題はない」と言う^{注13)}。5 編に共通して前提されている「生活」とは主として中産階級によるものを意味する。「最善を尽くすこと」の冒頭, 「この主題を扱うにあたって, 必然的に主として私がもっとも知っている中産階級の住まいについて話すことになるだろう」と端的に態度表明されている^{注14)}。モリス自身, 中産階級の人間であり, 経験的事実から「住まい」を再構成しようとする。この 5 編において問われる「生活」とは, 概して生活様式と関わっている。虚飾を排した「簡素な生活」という生活様式の獲得が目論まれる。モリスは, ヴィクトリア朝の一般的な中産階級の求める「贅沢 (luxury)」 「俗悪さ (vulgarity)」を「簡素さ (simplicity)」 「正直さ (honesty)」によって改良しようとする。この講演集において, 「生活」と不可離な芸術を意味するために, 「小芸術」「民衆の芸術」「日常の生活芸術」「生活の小芸術」などの言葉が用いられている^{注15)}。

0-1-3 労働者階級からみる「慎みある生活」

モリスの社会問題に関する主要な講演は第 2 講演集『変化の兆し』(*Signs of Change*) に 7 編収録され, 1888 年に出版された。それらは, 「有用な仕事対無用の労苦」(1884), 「いかに生きているかといかに生きるべきか」(1884), 「文明の希望」(1885), 「新時代の曙」(1885), 「保守派, 民主派, 社会主義者」(1886), 「芸術の目的」(1887), 「封建時代の英国」(1887) である^{注16)}。モリスは 1880 年代の英国社会主義復興の機運の中に, それまでに抱懐してきた理想を実現する可能性を認め, 1883 年 1 月に「民主連盟」^{注17)} に加盟した。機関紙『ジャスティス』への寄稿や, 自身による「社会主義同盟」の結成, 機関紙『コモンウィール』の創刊などを通して 1880 年代の革命的社會主義運動^{注18)} の中心人物のひとりとなった。かれは中産階級という身分でありながら, 労働者階級の人間性回復や主体形成に関心を抱くようになる。1888 年の書簡において「社会主義とは, 社会の進化, すなわち社会的存在としての人間の進化を出発点とする生活の理論である」と述べられており^{注19)}, 「社会的存在としての人間」がいかに生きるかという問題を考察する態度が確認できる。前掲の 7 編や『コモンウィール』などの社会主義的著作では, 生活様式という個別的内容よりも生活の意味に関わる普遍的内容が問われている。この時期の著作において「慎みある生活」という言葉が頻出しており, 「社会的存在としての人間」により営まれる「生活」を捉えたものであると考えられる。論考「芸術の目的」において社会主義的見地から芸術の範囲が次のように定義される。

芸術の生産とその結果生じる作品における喜びは絵画や彫像などの芸術作品の制作のみに限定されるのではなく, 様々な形式の労働の一部をなしてきたのであり, またそうでなければならない。^{注20)}

Also you must understand that this production of art, and consequent pleasure in work, is not confined to the production of matters which are works of art only, like pictures, statues, and so forth, but has been and should be a part of all labour in some form or other :

モリスは社会主義を推進するにあたり、とくに「労働」と「芸術」の關係に着目する。「様々な形式の労働」に芸術的契機を認めることは、「生活」のあらゆる局面において生産されるものが芸術作品となることを意味する。社会主義的著作では「生活」「民衆」「芸術」という概念の指示範囲が広い。「生活芸術」という言葉が独立的に使用されるのもこの時期である。また、芸術を意味するために「生活の喜び」という言葉が多用される。「生活芸術」や「生活の喜び」という考え方は、芸術界の動向を超えて、社会における人間についての徹底的な反省により成立したのである。

0-1-4 ユートピアにおける「新生活」

モリスの生活芸術思想は「簡素な生活」という生活様式への志向と「慎みある生活」という生活の意味への志向を孕んでいることが確認されたが、これらは即座に現実化できるものであろうか。モリスは、社会主義は共産主義社会への移行期にあたるという考え方をもち、「我々一世代の努力によって社会をまったく新しいものに築きあげようとは思わない」としている^{注21)}。晩年、モリスは理想社会を『ユートピアだより』(*News from Nowhere*)に代表される文学作品において描出する^{注22)}。『ユートピアだより』には、来るべき社会における無産階級の「新生活」の始まりを描いた一章があるが、その中で次のように述べられている(テキストの特質については第4章において詳述する)。

新しい時代、我々の時代精神は世界の生命への喜びであるべきだ。それは人間が住まう大地のまさに肌そのものや大地の表面を熱烈に大げさなくらい愛することだ。^{注23)}

The spirit of the new days, of our days, was to be delight in the life of the world; intense and overweening love of the very skin and surface of the earth on which man dwells,

ユートピアにおいて想定される「新生活」は「世界の生命」と関わっている。「愛する」とは「喜び」を伴う芸術行為による人間と世界の関わりを指すであろう。モリスは、中世における「神学」は「世界の生命」を志向していたが、近代における「科学」はそのような観点を捨象するとみている^{注24)}。モリス自身は「喜び」を外化する「生活芸術」に依拠し、「世界の生命」を説く。「世界の生命」という言葉は初期の講演集『芸術の希望と不安』の中にも散見されるが^{注25)}、それが理想的なヴィジョンであるという特性上、その内容は文学作品において仔細に伝えられる。また、晩年のモリスは文学作品において「新生活」という理想的な生活を描出しつつ、文学作品が載る書物それ自体を論じ、装飾芸術作品としての書物を制作するようになる^{注26)}。「良い家と良い書物を享受することは、すべての人間社会が今、懸命に求めているべき喜ばしい目標であると思う」と述べられており^{注27)}、家と書物は主目的が物質的要求の充足にあるものと精神的要求的充足にあるものを代表すると考えられる。書物における文学作品と装飾芸術作品の重なりには詩人モリスと装飾芸術家モリスに通底する制作観を探ることができるであろう^{注28)}。

0-2 生活芸術思想の方法的特性

0-2-1 日常生活批判としての理論と実践

「生活芸術」という言葉によって捉えられる芸術の範囲は実生活と関わる人間の営為である。絵画や彫刻をいわゆる純粋芸術として定義すると実生活とは遊離したもののように思われる。モリスは絵画や彫刻を「大芸術」として、その多くを語らず、「生活芸術」についてかれの造語になる「小芸術」という日常必要物の制作・受容の問題を重視する。このことは一見、かれが「大芸術」をいわゆる純粋芸術として思索の対象から除外しているように思われる。しかし、事実はそのようなことはない。モリスは「生活の小芸術」と題された論考において、「生活の小芸術」と「生活の大芸術」というように「生活の (of life)」という語句を伴って芸術の範囲を区分している^{注29)}。モリスにあつては「生活」というありのままの日常についての反省こそが重要であつた。「小芸術」と「大芸術」を分離することの意味は、分離そのことにあるのではなく、「小芸術」を顕在化させ、民衆の存在を再発見することにある。民衆の日常生活が回復された地平にある純粋芸術、これが「生活の大芸術」である。モリスは芸術が少数の富者によって功利的、あるいは衒学的に価値づけられる社会において、民衆が芸術から疎外され、絵画や彫刻の主題を理解できなくなっていると言う。「たいていの民衆はかれらが完全に精通している場面を表象する絵画以外からはほとんど印象を受け取ることがない」とし^{注30)}、素朴な民衆の共感が得られるための方途を探求するのである。さしあたり、この方途は〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉という二重の性格を有すると考えられる。前者は芸術の取材する主題や芸術家の領分の捉え直しを指し、後者は通常芸術に含まれない日常的事柄を芸術とすることを指す。前者は作品への問い、後者は生活への問いであると考えられる。

以上のような日常生活への批判的態度^{注31)}に基づいて、制作者はどのような方法的態度をとるか。モリスは最初の講演において制作者への提言として、「あなたたちの師について言うと、それは自然と歴史 (Nature and History) でなければならない」と述べている^{注32)}。かれは他講演においても「自然に倣え (follow nature)」「古物を研究せよ (study antiquity)」ということを繰り返して説いている^{注33)}。これは工芸家・社会主義者・詩人であるモリスにおける制作論的姿勢であると考えられる。以下、制作の問題の深淵についての考察は措くとして、モリスの自然観および歴史観を素描しておきたい。

モリスはその生涯を通じて自然と歴史を研究し続けた。少年時代に遊んだエピングの森、モールバラ校時代に見た先史の遺跡が散在するウィルトシャーの風景、オックスフォードや大学在学中に訪れた北フランスとフランドルの中世的街並、1870年代初頭に訪れたアイスランドの荒涼たる風景などがかれの原風景であると言われている^{注34)}。個別の自然物や歴史的遺物に加えて、自然と歴史が渾然となった風景への洞察がかれの思想形成に深く関わっていると見えよう^{注35)}。本章では両者の関わりについては問わず、自然と歴史それぞれへの眼差しを確認する。

0-2-2 モリスの自然観

モリスは「自然について学ばなければならないことは明白である」とし、「人間の手によって作られたもの」の「形態」が「自然と調和すれば美しく、自然を助ける」と述べている^{注36)}。「小芸術」と「自然」との関わり合いについて、過去の日常必要物を捉えた次の言説が注目される。

(引用者注：過去の装飾の) 形態や複雑な模様は必ずしも自然を模倣したものではなく、職人の手が、自然の作用するように働かされて、その結果ついに織物やコップやナイフが、ちょうど緑の野原や川の土堤や山の石のように自然に、さらには美しく見えるようになったものである。^{注37)}

(……): forms and intricacies that do not necessarily imitate nature, but in which the hand of the craftsman is guided to work in the way that she does, till the web, the cup, or the knife, look as natural, nay as lovely, as the green field, the river bank, or the mountain flint.

ここにモリスの言う「自然と調和する」ということの実相が示されている。「自然」と「装飾」との「調和」を「自然の作用」と「職人の手」との類似性に見ている。緑の野原—織物、川の土堤—コップ、山の石—ナイフがそれぞれ対応関係として示され、「自然」に倣い、「装飾の形態」が把握されている。「形態」の形象的側面を超えて、自然および人間の作用性という次元において観察する態度が読み取れる。モリスの制作における自然探求の方法が「模倣」によるものではないことを指摘しておこう。自然から学ぶ方法について、パタンデザインに関する論考を通して、本研究第1章において改めて考察することとする。

社会主義的著作において述べられる「自然」は上記のような「形態」の問題と位相が異なる。モリスは、自然と対峙する中で人間が構築する文明の発展性を認めつつ、近代文明社会において生産者の労働力が非生産者によって搾取されることは「生活の糧は労働に従う」という「自然の法則」に反すると言う^{注38)}。そこでモリスは人間が自然を克服してきた文明史を示し、近代文明社会における労働では意識的に芸術的側面が問題となることを説くという方法をとる^{注39)}。論考「芸術の目的」では、モリスはこう言っている。

自然の諸過程を我々は時に科学と呼ぶが、古い時代の人間はそこにおいて無意識に生きていた。人間は真の幸福の秘密は、日常生活のあらゆる細部に真正の興味を抱くことにありと発見、いや再発見するであろう。(…中略…) 歴史の太初から人間を芸術の実践へと駆り立てた衝動はかれらの内部になお働いていると私は思う。^{注40)}

the processes of Nature, of what we sometimes call science, which men of the earlier days unwittingly lived in. They will discover, or rediscover rather, that the true secret of happiness lies in the taking a genuine interest in all the details of daily life, (……) I cannot help supposing, that the impulses which have from the first glimmerings of history urged men on to the practice of Art were still at work in them.

モリスは「自然の諸過程」を分析的に扱う科学的観察よりも、「諸過程」の事実を「真正の興味」をもって捉える経験的観察や「諸過程」における「芸術の実践」を重視する。かれは「自然の克服」「自然への勝利」「自然との闘争」など自然作用の脅威的側面を強調した表現^{注41)}を用いる一方で、「自然が我々に植付けた生命への愛」「我々を自然の一部とを感じる」など自然と人間の同一性にも言及している^{注42)}。上述の「自

然と調和する」や「自然の法則」という考え方は、後者に属するであろう。この矛盾的自然把握の構造について本研究第2章において解き明かすことになる。

0-2-3 モリスの歴史観

制作者が眼を向けるべきもののひとつに挙げられる「歴史」とはいかなるものであろうか。モリスは「歴史」を「いわゆる歴史」と「芸術史」とに区分し、「いわゆる歴史」とは「王や勇士」による「破壊」の歴史だとし、「芸術史」とは「民衆」による「創造」の歴史だとする^{注43)}。「民衆の芸術」の復興を唱えるモリスが重要性を強調する「歴史」とは「芸術史」のことである。かれの言う「芸術史」とは民衆（職人）が日常生活の中で作り続けてきた「小芸術」の歴史であり、英雄的芸術家の作品を時代区分とともに概観したものではない。芸術の出自はあくまでも民衆の手にあるとし、その民衆の表現の変遷史に意義を見出しているのである。

モリスは「芸術史」における中世期の芸術、中でもゴシック建築に関心があった。かれはゴシック建築を「広く諸芸術を含む調和的建築」と規定し、「我々が建築を手に入れようと思うならば、中世にこそその伝統の糸を辿らねばならぬ」と言う^{注44)}。このような態度成立の契機として、かれがオックスフォード大学在学中にジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）の著書『ヴェニス石』第2巻の「ゴシックの本質」という章を読んだことが挙げられる。モリス自身、この章の生涯にわたる影響を認めており、1892年には自らこの章のみを独立させて再版している^{注45)}。モリスによる「緒言」の中で、「ゴシックの本質」には「芸術に関する側面」と「倫理のおよび政治的側面」とが著述されており、二者のうち、より重要なのは後者だとされる^{注46)}。それは「芸術とは人間が労働の中に見出す喜びの表現である」と約言される^{注47)}。モリスが歴史観ないし芸術史観の根本に据える「喜び」とは静止的な観点を拒絶するものである。1879年の論考「パタンデザイン史」において次のように言われる。

私が愛するのは生きている芸術であり、生きている歴史だ。もし、我々が未来に希望をもっていないなら、我々が過去を喜びを持ってふり返ることがいかにできるのか、私には分からない。^{注48)}

it is living art and living history that I love. If we have no hope for the future, I do not see how we can look back on the past with pleasure.

モリスは社会主義的活動を通してここに萌芽的に見られる弁証法的歴史観を醸成していくことになる。弁証法的歴史観については本研究第3章において詳述するが、モリスは過去、現在、未来のつながりを「直線ではなく螺旋という真の発展の線に沿った上方への歩み」と規定し、静止した「永遠性（the eternity）」ではなく「無常性（the transient）」や「永久の変化（perpetual change）」を洞察しようとする^{注49)}。モリスは歴史探求の方法についてこう述べる。

この新しい歴史認識のとり方について、それは言語の研究と古物の研究という二種類ではないだろうか。すなわち、人間の思想の口話による表現と手仕事による表現の研究である。言い換えれば、人間の創造的行為の記録についての研究である。^{注50)}

Now, further, as to the instruments of this new knowledge of history, were they not chiefly two: study of language and study of archaeology? that is, of the expression of men's ideas by means of speech, and by means of handiwork, in other words the record of man's creative deeds.

歴史認識の方法について、二度言い換えられていることは看過されてはならないだろう。一般的には「言語の研究」と「古物の研究」はそれぞれ言語学と考古学を指す。しかし、モリスは「口話による表現」と「手仕事による表現」というように「言語」や「古物」以前の「口話」や「手仕事」という人間の身体を伴う行為に着目する。これをかれは包括的に「創造的行為」という表現によって捉えている。この引用は1884年の「建築と歴史」と題された論考の冒頭のものであり、この論考では主として建築と手仕事や職人の関わりについて論じられている。モリスはこの時点では、「言語の研究」について、深く関心があるが話す知識がないとしてとくに言及していない。しかし、モリスは1887年にホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を韻文詩に翻訳する仕事を端緒として、「言語」や「口話による表現」の内部世界に入っていく。かれの擬古文体の散文ロマンスがこれ以降発表されることになる。モリスはホメロスから何を感じ取ったのか。翻訳を発表した年に、『コモンウィール』に「一芸術家の思うアーティストとアーティザン」という論文を寄稿し、次のように述べている。

近代の研究はホメロスが曖昧で不確かな幻影であるとしたが、一方でそれは民衆の生活についての我々の見解に鮮明さを与えた。そして、当時の民衆こそがホメロスの詩行の真の作者である。^{注51)}

But modern research has made Homer a dim and doubtful shadow to us, while it has added clearness to our vision of the life of the people of that time, who were the real authors of the Homeric Poems.

『オデュッセイア』に代表される口承文学作品はその性質上、その作者や内容の真偽をめぐる議論が絶えない^{注52)}。モリスは作者や起源的内容の特定という科学的分析よりも、「口話による表現」が時代ごとの人々の生活過程に影響されて変容する事実に関心を抱く。ホメロスの世界を「民衆の生活」という観点から解釈するモリスの態度の意味について、本研究第4章において論じる。

小結

本章により、本研究の主題に掲げる「生活芸術」の枠組がモリスの諸活動に即して、「生活」概念の拡がりとともに概観された。「簡素な生活」には、虚飾への反動としての「小芸術」のデザイン原理に関する論点（装飾芸術論）と個々の「小芸術」が配される総体としての「住まい」の構成に関する論点（住まい論）とが内包されている。「慎みある生活」を志向すること（社会主義論）においては、「労働」と「芸術」という観点から、表現主体に関する徹底的反省がみられる。晩年の活動では書物論や文学作品によって「新生活」という人間生活の理想状態が描出されている。

また、本章において見出されたモリスの制作論的態度と考えられる自然探求と歴史探求を基軸として、次章以降、制作に関わる概念を析出していく。モリスの自然探求および歴史探求を諸実践活動に即して記述—分析すること、これが本研究の方向性である。具体的には、工芸家的側面として、装飾芸術における自然と歴史の作品化の問題（第1章）、日常的住まいにおける自然と人間の関わりあいの問題（第2章）、社会主義者の側面として、弁証法的歴史観により把握される職人技術と自然資源の問題（第3章）、詩人的側面として、言葉による自然と歴史の作品化の問題（第4章）を扱う。第1章と第4章は〈芸術の生活化〉の方法を探り、第2章と第3章は〈生活の芸術化〉の方法を探るものである。

序章 注記

注 1) モリス没後も実娘のメイ・モリスらによって講演の一部が講演集としてまとめられている。Lemire, Eugene D.(ed.): *The Unpublished Lecture of William Morris*, Wayne State University Press, 1969 はモリスの未刊の自筆原稿をおこしたものであり、その巻末にモリスの講演リストがある。

注 2) 投書の内容は、To the Editor, *The Athenæum* (5 March 1877), [LE-85-6] に拠る。「古建築物保護協会」を含め英国の建築保存の通史に関しては、大橋竜太『英国の建築保存と都市再生：歴史を活かしたまちづくりの歩み』、鹿島出版会、2007 に詳しい。

注 3) モリス商会は 1861 年 4 月にレッド・ライオン・スクエアにおいて Morris, Marshall & Faulkner and Co.; Fine art worker in painting, carving, furniture and metals として設立された。1875 年 3 月に改組されモリスが単独で経営するモリス商会となった。壁面装飾、ステンドグラス、家具など室内装飾全般を扱う商会である。また、モリスが 1867 年に発表した物語詩『イアソンの生と死』(*The Life and Death of Jason: A Poem*, 全集第 2 巻所収, [EL-15-26] 参照), 1868 年から 1870 年にかけて発表した物語詩『地上の楽園』(*The Earthly Paradise*, 全集第 3 巻から第 6 巻所収, [EL-26-46] 参照) が好評を博し、広く読まれていた。

注 4) *The Lesser Arts*, [XXII-3-4]

・*The Lesser Arts*, 「小芸術」は 1877 年 12 月 4 日、ロンドン職業組合講座のために「装飾芸術—その現代生活および進歩との関係」という演題で行われた講演である([UL-292] [EL-78-80] 参照)。モリスが行った最初の公開講演である。『芸術の希望と不安』に収録される際に上記のように改題された。

注 5) 上掲書, [XXII-4]

注 6) 上掲書, 同頁

注 7) ヴィクトリア朝の郊外住宅についての事例研究として、片木篤『イギリスの郊外住宅』、住まいの図書館出版局、1989 が挙げられる。

注 8) *The Lesser Arts*, [XXII-13-4]

注 9) 上掲書, [XXII-24]

注 10) 安川悦子『イギリス労働運動と社会主義：「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究』、御茶の水書房、1982, p.248 の表現に拠る。安川は社会主義者以前のモリスの活動を「退廃したブルジョワ俗物主義へのブルジョワ的なボヘミアンの反抗」とも呼んでいる。本研究は「ロマン主義的反抗」から「革命的社會主義」へという経緯をモリス独自の思索の深化として辿るものであるが、「革命的社會主義へ」という帰結を政治的意図により積極的に評価した代表的研究として、Thompson, E.P.: *William Morris: Romantic to Revolutionary*, The Merlin Press, 1955 が挙げられる。

注 11) 本研究「はじめに」における注 2) 内、Henderson による評伝参照。

注 12) 『芸術の希望と不安』([EL-84-8] 参照) に所収の 5 編のうち既出の「小芸術」をのぞく 4 編を列挙する。

- ・ The Art of the People, 「民衆の芸術」は 1879 年 2 月 19 日, バーミンガム芸術協会およびデザイン学校のために行われた講演である ([UL-293] [EL-80-2] 参照)。講演時には表題がなかったが、『芸術の希望と不安』に収録される際に上記のような表題がつけられた。
- ・ The Beauty of Life, 「生活の美」は 1880 年 2 月 9 日, バーミンガム芸術協会およびデザイン学校のために「労働と喜び対労働と悲しみ」と題されて行われた講演である ([UL-294] [EL-82] 参照)。『芸術の希望と不安』に収録される際に上記のように改題された。
- ・ Making the Best of It, 「最善を尽くすこと」は 1880 年 11 月 13 日にロンドン職業組合講座のために「家の装飾に関する心得」という演題で行われた講演である ([UL-295] 参照)。『芸術の希望と不安』に収録される際に上記のように改題された。同年 12 月 8 日にも同講演が行われている。
- ・ The Prospects of Architecture in Civilization, 「文明における建築の前途」は 1881 年 3 月 10 日ロンドン協会で行われた講演である ([UL-296] 参照)。

注 13) A Letter to Mrs. Burne-Jones (10 August 1880), [LE-133-4] 「静謐で威厳のある生活」[LE-134] (a calm, dignified, and therefore happy life) and 以下を省略した。

注 14) Making the Best of It, [XXII-83]

注 15) 「小芸術」や「民衆の芸術」は第 1 講演集における表題として用いられている。「日常の生活芸術」という表現は The Art of the People, [XXII-45] に見られる。「生活の小芸術」も講演の表題である。

- ・ The Lesser Arts of Life, 「生活の小芸術」は 1882 年 1 月 23 日, 古建築物保護協会のために行われた講演である ([UL-297] 参照)。

注 16) 『変化の兆し』([EL-125-7] 参照) に所収の 7 編を列挙する。

- ・ Useful Work *versus* Useless Toil, 「有用な仕事と無用な労苦」は 1884 年から 88 年にかけて 10 回以上行われた講演であり, 1885 年に冊子として出版された。([UL-299] [EL-104-8] 参照)。
- ・ How We Live and How We Might Live, 「いかに生きているかといかに生きるべきか」は 1884 年から 87 年にかけて 10 回以上行われた講演である。1887 年 6 月から 7 月にかけて『コモンウィール』紙上に掲載された ([UL-301-2] [EL-125-6] 参照)。
- ・ The Hopes of Civilization, 「文明の希望」は 1885 年に 3 回, 1888 年に 1 回行われた講演である ([UL-303-4] 参照)。
- ・ The Dawn of a New Epoch, 「新時代の曙」は 1885 年に 2 回, 1886 年に 5 回行われた講演である ([UL-305] 参照)。
- ・ Whigs, Democrats, and Socialists, 「保守派, 民主派, 社会主義者」は 1886 年 6 月 11 日, フェビアン協会の会議における講演である ([UL-306-7] 参照)。
- ・ The Aims of Art, 「芸術の目的」は 1886 年に 5 回行われた講演であり, 1887 年に冊子として出版された。([UL-305] [EL-113] 参照)。

- ・ Feudal England, 「封建時代の英国」は 1887 年に 3 回行われた講演であり, 「英国—過去, 現在, 未来」という三部作の二番目に相当する ([UL-308-9] 参照)。

注 17) 「民主連盟」は 1881 年ヘンリー・ハインドマン (Henry Mayers Hyndman, 1842-1921) が設立した当時の英国における唯一の社会主義団体。1884 年に「社会民主連盟」と改称。

注 18) モリスの「革命的社会主義」については名古屋行『ウィリアム・モリス』(イギリス思想叢書 11), 研究社, 2004 および同『イギリス社会民主主義の研究: ユートピアと福祉国家』, 法律文化社, 2002 に詳しい。

注 19) A Letter to the Rev. George Bainton (2 April 1888), [LE-282] 以下原文。

Socialism is a theory of life, taking for its starting point the evolution of society; or, let us say, of man as a social being.

注 20) The Aims of Art, [XXIII-84]

注 21) True and False Society, [XXIII-236] 以下原文。

I must again remind you that we Socialists never dream of building up by our own efforts in one generation a society altogether anew.

- ・ True and False Society, 「真の社会と偽りの社会」は, 1886 年から 1887 年にかけて 10 回以上行われた講演である。1886 年に「社会主義者の視点からの労働問題」と題した冊子として出版された ([UL-307] [EL-111-3] [EL-273-4] 参照)。この講演において資本主義から共産主義の移行期としての社会主義という考え方が示された。

注 22) モリスは晩年に 10 編の散文ロマンスと呼ばれる文学作品を残している。小野二郎による分類に従い, 以下に作品を列挙する。小野二郎『ウィリアム・モリス研究』(小野二郎著作集 1), 晶文社, 1986, pp.300-1 参照。

〈ユートピアン・ロマンス〉

- ・ *A Dream of John Ball*, 『ジョン・ボールの夢』, 1886 年 11 月から 1887 年 1 月まで『コモンウィール』に連載, 1888 年に出版 (全集第 16 巻所収, [EL-324] [EL-118-25] 参照)。
- ・ *News from Nowhere; or, An Epoch of Rest*, 『ユートピアだより—あるいは休息の時代』, 1890 年 1 月から 10 月まで『コモンウィール』に連載, 同年出版 (全集第 16 巻所収, [EL-343] [EL-139-48] 参照)。

〈歴史ロマンス〉

- ・ *A Tale of the House of the Wolfings and All the Kind*, 『ウォルフイング族の家の物語』, 1888 年出版 (全集第 16 巻所収, [EL-127-33] 参照)。
- ・ *The Roots of the Mountains*, 『山々の麓』, 1889 年出版 (全集第 15 巻所収, [EL-133-7] 参照)。

〈純然たるロマンス〉

- ・ *The Story of the Glittering Plain*, 『輝く平原の物語』, 1891 年出版 (全集第 14 巻所収, [EL-153-9] 参照)。
- ・ *The Wood beyond the World*, 『世界のかなたの森』, 1894 年出版 (全集第 17 巻所収, [EL-186-94] 参照)。
- ・ *Child Christopher and Goldilind the Fair*, 『チャイルド・クリストファーと麗しのゴルディリンド』, 1895 年出版 (全集第 17 巻所収, [EL-198-9] 参照)。

- ・ *The Well at the World's End*, 『世界の果ての泉』, 1896 年出版 (全集第 18 巻・第 19 巻所収, [EL-201-6] 参照)。
- ・ *The Water of the Wondrous Isles*, 『不思議な島々のみずうみ』, 1897 年出版 (全集第 20 巻所収, [EL-212-6] 参照)。
- ・ *The Sundering Flood*, 『引き裂く川』, 1897 年出版 (全集第 21 巻所収, [EL-218-23] 参照)。

注 23) *News from Nowhere; or, An Epoch of Rest*, [XVI-132] 「新生活の始まり (The Beginning of the new life)」が描かれているのは第 18 章。

注 24) *Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages*, [IB-4] / *Early Illustration of Printed Books*, [IB-23] / *The Aims of Art*, [XXIII-95] の内容を要約。

注 25) 『芸術の希望と不安』中, *The Lesser Arts*, [XX II -3] a sign of the world's life / 同書, [XX II -10] We who believe in the continuous life of the world (……) / *Making the Best of It*, [XX II -81] the general life of the world / *The Prospects of Architecture in Civilization*, [XX II -123] If the life of the world is to be brutalised by her death, the rich must share that brutalisation with the poor. の四箇所に確認できる。

注 26) モリスの書物に関する講演および論文は 8 編あり, 文献 [IB] にすべて収められている。それらは 1890 年代に発表されたものである。以下に 8 編の概要を示す。

- ・ *Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages*, 「中世の彩飾写本に関する若干の考察」は, 未刊の論考であり, 1892 年かそれ以降に書かれたものとされる。[IB] の编者 William S. Peterson が原稿を起こしたもの。
- ・ *Some Notes on the Illuminated Books of the Middle Ages*, 「中世の彩飾写本に関する覚書」は, 1894 年 1 月『マガジン・オブ・アート』誌第 17 巻に掲載された論考である。
- ・ *Early Illustration of Printed Books*, 「印刷本の初期の挿絵」は 1895 年 12 月 14 日, ロンドン州議会アーツ・アンド・クラフツ学校で行われた講演である。
- ・ *The Woodcuts of Gothic Books*, 「ゴシック本の木版画」は 1892 年 1 月 26 日, 芸術協会において口頭により発表された論文である。1892 年 2 月 12 日付の『芸術協会機関誌』に掲載された。
- ・ *On the Artistic Qualities of the Woodcut Books of Ulm and Augsburg in the Fifteenth Century*, 「15 世紀のウルムとアウグスブルグの木版画本の芸術的特性について」は, 1895 年, 『ビブリオグラフィカ』第 1 巻に掲載された論文である。
- ・ *Printing*, 「印刷」は, 1893 年, 『アーツ・アンド・クラフツ論集』に収録された論文である。
- ・ *The Ideal Book*, 「理想の書物」は, 1893 年 6 月 19 日, 書誌学協会において口頭により発表された論文である。1893 年, 『書誌学協会紀要』第 1 巻に掲載された。
- ・ *A Note by William Morris on His Aims in Founding the Kelmscott Press*, 「ケルムスコット・プレス設立趣意書」は, 1896 年, 『モダン・アート』第 4 巻に掲載された。

モリスの書物制作は、初期の詩集に適用した彩飾写本や、1872年の物語詩『恋だにあらば』(*Love is Enough*, 全集第9巻所収, [EL-57-62] 参照)の装幀などに萌芽的に見られるが、1891年のケルムスコット・プレス設立をもって本格化する。

注 27) *Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages*, [IB-1] 以下原文。

To enjoy good houses and good books in self-respect and decent comfort, seems to me to be the pleasurable end towards which all societies of human beings ought now to struggle.

注 28) 小野二郎は書物制作を開始した頃のモリスが、「装飾芸術家として円熟した技能を体内に蓄積し、そこから自然に生まれてきた芸術観がそのまま世界観であるような確固とした思想の持主となっていた」と述べている(小野二郎『ウィリアム・モリス研究 小野二郎著作集1』, 晶文社, 1986, p.285)。小野はモリスが種々の装飾芸術の技術を習得した後での書物制作の水準の高さについて論じているが、本研究において注目したいのは詩人モリスの側面も制作に寄与しているであろうという点である。

注 29) *The Lesser Arts of Life*, [XXII-235]

注 30) *Art and the Beauty of the Earth*, [XXII-164] 以下原文。

I believe most people receive very little impression indeed from any pictures but those which represent the scenes with which they are thoroughly familiar.

・*Art and the Beauty of the Earth*, 「芸術と大地の美」は1881年10月13日にスタフォード州バーズレム公会堂にてウェッジウッド協会のために行われた講演である([UL-296] [EL-83-4] 参照)。

注 31) 本項を〈日常生活批判としての理論と実践〉としているのは、本章第1節にてモリスが社会主義を「社会的存在としての人間」の「生活の理論」とすること、およびユートピアという空想世界を描くことを確認した上で、モリスが現実的なものと可能的なものの間において日常生活における民衆の在り方を問いつつ理論と実践を展開したことが予見されるからである。〈日常生活批判〉という表現は、アンリ・ルフェーブル著／田中仁彦訳『日常生活批判序説』, 現代思潮社, 1968を参考にした。ルフェーブルは、「真に人間的な人間」の回復を目指して、「日常生活研究は日常生活をそれ自体においても、また日常生活が支えている分化した上部形態との関係においても、研究する」と、日常生活の両義性に着目し、日常性と祝祭、集合と例外的瞬間、現実と夢などの間の正確な探求を方法とするとしている(田中仁彦訳『日常生活批判序説』, p.264-5)。

注 32) *The Lesser Arts*, [XXII-15]

注 33) 「自然」と「歴史」を制作に関わらせるべきだという内容は、1879年の講演「民衆の芸術」[XXII-28], 最晩年(1894年)の講演「芸術学校生への講話」[XXII-436]にも見られる。

・*An Address delivered at the Distribution of Prizes to Students of the Birmingham Municipal School of Art* (これ以後、全集の表記に倣い、*An Address... Birmingham* と略記), 「芸術学校生への講話」は1894年2月21日、バーミンガム芸術学校生のために行われた講話である([UL-321] [EL-183-5] 参照)。

注 34) モリスは1856年、オックスフォード大学の学生とき、*The Churches of North France: Shadows of Amiens* ([EL-2-5] 参照) という題の論文を雑誌に発表している。この論文はかれが1855年に友人と共に北フランスに

旅行し、アミアン、ボーヴェ、シャルトルなどの大聖堂を訪れたときの感動を書いたものである。モリスの原風景について、藤田治彦『ウィリアム・モリス：近代デザインの原点』、鹿島出版会、1996、pp.13-32 および同『ウィリアム・モリスへの旅』、淡交社、1996 参照。

注 35) モリスは大学在学時に中世北欧神話に会い、1868 年から 70 年にアイスランド・サガと呼ばれる文学を翻訳し（1891 年から 94 年の間にも）、1871 年と 1873 年にアイスランドへ実際に訪れている。どのような自然的条件の中でアイスランド人が生活し、文学作品が生み出されるのか、このことが関心の中心にあったようである。

注 36) The Lesser Arts, [XXII-15] および [XXII-4]

注 37) 上掲書, [XXII-5]

注 38) Monopoly ; or, How Labour is Robbed, [XXIII-235]

・ Monopoly ; or, How Labour is Robbed, 「独占労働はいかに収奪されるか」は、1887 年から 89 年にかけて 20 回以上行われた講演である ([UL-309] [EL-137-9] 参照)。

注 39) Useful Work *versus* Useless Toil, [XXIII-104-7] / How We Live and How We Might Live, [XXIII-14-5] に簡潔な説明が見られる。

注 40) The Aims of Art, [XXIII-94]

注 41) 「自然の克服」The Hopes of Civilization, [XXIII-70] (man's mastery over the forces of Nature), The Aims of Art, [XXIII-93] (such mastery over Nature) / 「自然への勝利」Useful Work *versus* Useless Toil, [XXIII-105] (our victory over Nature) / 「自然との闘争」Useful Work *versus* Useless Toil, [XXIII-104] (that struggle with Nature) ・ [XXIII-113] (man's contest with Nature) / 「自然の超克」The Dawn of a New Epoch, [XXIII-125] (the conquest over Nature) など自然の威力を把握する表現が社会主義的著作に見られる。

注 42) 「自然が我々に植付けた生命への愛」The Aims of Art, [XXIII-95] (that love of life which Nature (…中略…) has implanted in us) / 「我々を自然の一部とを感じる」Useful Work *versus* Useless Toil, [XXIII-108] (feel ourselves a part of Nature)

注 43) The Art of the People [XXII-32] から要約。同論文で「7 世紀から 17 世紀までの間に建てられた建築物はすべて圧迫され無視された人々の労働の結果であることを示している」と述べ、かれらは「暴虐な圧制の下にあった。(…中略…)」しかし当時も今と同じように日々の労働はかれらの生活の主要な部分を占めていたのであり、日々の労働は日々の芸術の創造によって楽しくされたに違いない」と中世期の社会の構造の欠点を認めながらも、「労働」と「芸術」とが切り離されていなかったと推察している。

注 44) Gothic Architecture, [i -268]

・ Gothic Architecture, 「ゴシック建築」は 1889 年から 90 年にかけて 7 回行われた講演である。1889 年 11 月 7 日、第 2 回アーツ・アンド・クラフツ展覧会の開会時にも行われた ([UL-314, 316] [EL-176-7] 参照)。

注 45) ラスキンの原著は Stones of Venice, The vol.2, 1853 であり、The works of John Ruskin, Library edition, 39 vols, edited by E.T. Cook and Alexander Wedderburn, George Allen & Co., 1903-1912. に収められている。モリスの緒言が見られるのは The Nature of Gothic, George Allen & Co., 1892 である。

注 46) Preface, [NG-ix]

注 47) 上掲書, [NG-vii]

注 48) The History of Pattern-Designing, [XX II -233]

- ・ The History of Pattern-Designing, 「パタンデザインの歴史」は 1879 年 4 月 8 日にロンドン職業組合講座のために行われた講演である（そのときの題目は、The History of Pattern Design であり、4 月 19 日付の『アーキテクト』誌に「ウィリアム・モリス氏, エジプト, ギリシア, ローマ芸術について」として掲載）。1882 年 2 月 23 日にケンジントン・ヴェストリ・ホールにおいて古建築物保護協会のために同講演を行った。古建築物保護協会による講演集に‘The Lesser Arts of Life’とともに収められている（[EL-272] [EL-310] 参照）。

注 49) 「直線ではなく螺旋という真の発展に沿った上方への歩み」 The Arts and Crafts of To-day, [XX II -233] / 「永遠性」「無常性」 Socialism from the Root Up, [PW-497] ([SO-20]) / 「永久の変化」 Address at the Twelfth Annual Meeting, [i -152]

- ・ The Arts and Crafts of To-day, 「今日の芸術と工芸」は 1889 年 10 月 30 日, エディンバラにおいて全国芸術促進協会のために行われた講演である（[UL-316] 参照）。協会は「応用芸術」という表題で講演を依頼したが上記の表題に改められている。前年の 11 月にアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会の第 1 回展覧会が開催されたこととこの表題の選択は無縁ではないであろう。
- ・ Socialism from the Root Up, 「根源からの社会主義」はモリスとベルフォート・バックス（Ernest Belfort Bax, 1854-1926）の共著として『コモンウィール』1886 年 5 月から 1888 年 5 月まで連載された（[EL-320] 参照）。1893 年に、加筆、修正された『社会主義—その成長と帰結』（[SO]）として出版された（[EL-178-9] 参照）。
- ・ Address at the Twelfth Annual Meeting, 「第 12 回年次総会での講演」は、1889 年 7 月 3 日, 古建築物保護協会第 12 回年次総会のときに行った講演である（[UL-315] [EL-341] 参照）。

注 50) Architecture and History, [XX II -298]

- ・ Architecture and History, 「建築と歴史」は 1884 年 7 月 1 日, 古建築物保護協会第 7 回年次総会のときに行った講演である（[UL-300-1]（[EL-314-5] 参照）参照）。

注 51) Artist and Artisan as an Artist Sees It, [PW-277-8]

- ・ Artist and Artisan as an Artist Sees It, 「一芸術家の思うアーティストとアーティザン」は 1887 年 9 月 10 日付の『コモンウィール』に掲載された論文である（[EL-329] 参照）。

注 52) ホメロスの叙事詩の伝承や論争について、和辻哲郎『ホメロス批判』, 要書房, 1946 および岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 創文社, 1988 に詳しい。

第1章 モリスの装飾芸術論

1-1 ヴィクトリア朝の装飾芸術論

1-1-1 功利主義と芸術のための芸術

モリスの生涯はヴィクトリア女王（在位 1837-1901）が英国を統治していたヴィクトリア朝時代とほぼ重なる。この時代は英国史において産業革命による経済発展が成熟に達した絶頂期とされる。英国が産業革命によって獲得した成功を展覧するものとして、1851 年に大英博覧会が開催された。モリスは水晶宮内に展示されているものの虚栄と醜悪さを聞き、会場に入ることを拒んだと言われている^{注1)}。まず、モリスが批判的にみた装飾芸術をめぐる動向を確認する。

ヴィクトリア朝時代に中産階級が勃興したことで産業革命によって大量生産が可能になったことは、装飾芸術において新たな潮流を生む。中産階級を中心とする社会構造に適した様式の模索と商業主義における商品の生産というふたつの潮流である。これらを把握する上で重要な概念として、comfort が挙げられる^{注2)}。comfort は従来、英国の貴族階級の生活における「快適さ」を意味するものとして用いられていた。ヴィクトリア朝では、この概念が中産階級に導入され、身の周りの事物に「快適さ」を求めるようになる。しかし、このことと商業生産が結合したときに、功利主義的原理による「快適さ」の一般化が起こる。さらに、中産階級の人々が comfort を貴族階級への憧れを伴って把握したことから、「贅沢さ」を意味する言葉として受容されていった^{注3)}。モリスは comfort の各人が受け取る「快適さ」という意味は非難しないが、一般化された「快適さ」や「贅沢さ」を総じて功利主義的であると断じている。

様式に関する中産階級の立脚点は、新様式を確立する視点と過去の様式（とりわけ中世）への回顧的視点とに分かれた。無論、両者を止揚する立場も存した。モリスはいわゆる「芸術のための芸術」を否定している^{注4)}。このことはふたつの制作態度に向けられている。ひとつは、唯美主義（耽美主義）的態度であり、存在理由は存在すること、という芸術作品における美の自立性を説く態度をとる。この態度は、美の判断に際して道徳など社会的（非個人的）基準は外的要因であるとみなす。もうひとつは、過去の様式の形態的正確さのみを求める銜学趣味であり、芸術作品を学問的に分析し、得られた知識を別の作品において再生産する態度をとる。この態度は、過去の作品の静的な形態に美の規範を求め、その変化や制作過程に意義を見出さない。

次に、唯美主義によって否定される、芸術外の基準を装飾芸術に適用しようとしたモリス以前の思想家と、銜学趣味とは異なる仕方で学問的に装飾芸術にアプローチしたモリス以前の思想家について辿ってこう。

1-1-2 中世主義と三人の思想家

中世を過去回帰的に志向し、中世の道徳性を現在の無秩序と対照させようとした人物として社会批評家トマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)、建築家オーガスタス・ノースモア・ピュージン (Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-1852)、芸術批評家ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の三人が挙げられる。かれらは保守的な中世主義者として知られ、中世社会を理想化し、騎士道精神やキリスト教に代表される宗教的精神を現代に復古しようとした。

カーライルは産業革命からヴィクトリア朝時代への過渡期に『衣服哲学』(Sartor Resartus, 1836)において「装うために生きる」という衣服に関する美学的態度を批判するなど、個人による物質的欲望から自由と存在の絶対性の回復を説いた。また、かれは『英雄論』(On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History, 1841)を著し、英雄を崇拝することから精神の内なる英雄的なものが回復されることを説いた。歴史は利害を超越した英雄的決断を通して進行し、道徳的資質をもった新たな貴族階級によって産業の封建制が確立されるとした。このことは『過去と現在』(Past and Present, 1843)で自由放任を基礎とする産業資本主義との対照によって浮き彫りにされる。

社会批評家として産業構造を外側から暴く態度をとったカーライルとは異なり、ピュージンは内側から実践的建築家として現在を変革していく。『過去と現在』にみられる対照的図式を建築や装飾芸術の問題として描いたのが『対比』(Contrasts, 1836)である。ピュージンはゴシック様式を形態におけるひとつの様式としてではなく宗教として認識した上で、その内在原理を明らかにしようとする。例えば、アーチについて、カトリック信仰の証として高さを判断基準とし、半円形よりも尖頭形の方が「使用目的に対応する」と言う。また、『尖頭形すなわち教会建築の真の原理』(The True Principles of Pointed or Christian Architecture, 1841)では、「デザインの二大原理」を記し、第一は「便利さ、構造、適切さ (convenience, construction, or propriety) の観点からみて必要性のない特徴を有してはならない」であり、第二は「すべての装飾 (ornament) は、建物の本質的構造 (essential construction of the building) を豊かにするべきものとして存在するべきである」としている。これらの原理は建築のみならず装飾芸術のデザインに多く採用された。「便利さ、構造、適切さ」という合目的性 (第一原理) および「装飾」と「構造」の関係性 (第二原理) という原理探求の前提に宗教に根ざした「使用目的」があることが特筆されてよい。なぜなら、本研究において論究するモリスの思想においてキリスト教の教義は制作の基底に不在であるからである。

カーライルやピュージンにより提示された宗教の時代としての中世というヴィジョンを、ラスキンは、建築やそれに付随する装飾芸術に携わる工人が社会においてどのような存在であったか、という問いとして引き継いだ。ラスキンの芸術思想は、『近代画家論』(Modern Painters, 1843-60)、『建築の七燈』(The Seven Lamps of Architecture, 1849)、『ヴェニス石』(The Stones of Venice, 1851-53)などの著作によって知られ、「中世主義 (mediævalism)」という言葉を作った人物であると言われている^{注5)}。ラスキンは社会の質が工人の仕事の質を規定し、それが芸術の質に表象されると考える。かれはゴシック建築の特徴的な道徳的要素として、重要度の高い順に、1. 野蛮性 (Savageness) 2. 多様性 (Changefulness) 3. 自

然主義 (Naturalism) 4. 怪奇性 (Grotesqueness) 5. 剛直性 (Rigidity) 6. 過剰性 (Redundance) を挙げ^{注6)}。「野蛮性」や「怪奇性」など異様な言葉によって捉えられるのは、「石材を彫る職人の生命と自由の表象」であり、表現者としての「喜び」の発露である。個々人の表現が重層化され、ゴシック建築が成立しているとするのである。モリスはこのようなラスキンの把握した「喜び」の考え方を継承していくことになる。ただ、「喜び」という概念を通して社会における労働を解釈したのはラスキンが初めてではない。ロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) やシャルル・フーリエ (Charles Fourier, 1772-1837) など初期社会主義者が「喜び」を説いている。しかし、モリスによれば、オーウェンは「友情と互助」に、フーリエは「士気の鼓舞」に「労働の喜び」の原動力を求めたという^{注7)}。つまりかれらにとって「労働」そのものは忌むべきものと捉えられているのである。ラスキンは「労働」と「喜び」の直接的連関を説くが、その基底にはカーライルらと同様の宗教的感情があった。モリスは中世主義を領有しつつも、キリスト教という絶対的要素から解放されていた。このことはモリスが中世の芸術に批判的な眼差しももちえたことを示しているであろう。

1-1-3 デザインの原理とコール・グループ

ヴィクトリア朝の装飾芸術を把握する上で、上述の功利主義 (商業主義)、唯美主義、銜学趣味、中世主義のいずれとも異なる、国家主義の立場にも言及する必要がある。この立場は、私的企業を中心とした産業構造により英国のデザインが国家的な水準においてヨーロッパ諸国に劣っているとみなす。1835年に政府委員会が組織され、官立のデザイン学校について検討し、1837年にロンドン・デザイン学校が設立された。これは英国における初の国立教育機関でもあった^{注8)}。初期には混乱していたが、1852年にヘンリー・コール (Henry Cole, 1808-1882) が校長となり、理論化されたデザインを基盤とする。コールやその同僚であるリチャード・レッドグレイブ (Richard Redgrave, 1804-1888) やオーウェン・ジョーンズ (Owen Jones, 1809-1874) らは『月刊 デザインと製造業』 (Journal of Design and Manufactures, 1849-1852) を通して自然主義的な様式を批判し、デザインの原理の源泉は幾何学にあるとした。このことは英国を中心とするヨーロッパの覇権とも関わっている。例えば、ジョーンズの主著『装飾の文法』 (Grammar of Ornament, 1856) ではとりわけアラベスク文様が称揚されるが、それはヨーロッパの美の原理としての幾何学により十全に説明されることによるからである^{注9)}。かれらの活動や著述の背景には、非ヨーロッパの装飾をヨーロッパに回収する意図が存する。

1-2 「自然」と装飾芸術

1-2-1 パタンデザインにおける「コンベンション」

モリスは装飾芸術の中でも、パタンデザインと関わりのある工芸品を生涯作り続けた。パタンデザインとは繰り返しパタンによって複製可能なデザインの方法であり、それが適用される工芸として、捺染テキスタイル、壁紙、刺繍、織物、絨緞、タピストリ、木版画などが挙げられる。作業工程を示そう。まず、雛形となる下絵を木炭や水彩によって描く。そして捺染や壁紙であれば、平板に下絵の文様を彫って版木を作り、それを用いて布や紙に色を置き重ねる。また織物などは織機と染色された糸を用いて制作される。モリスは「自然」にデザインの源泉を求め、植物や鳥などをモチーフに採用するが、かれはいかに「自然」を作品化するのであろうか。

もちろんあなたがたは自然を完全に模倣することは不可能であるとおわかりだろう。もっとも写真主義の画家による最高のリアリズムも完璧には程遠い。また、未熟で美に疎い普通の人間による作品について言えば、リアリズムに到達しようとする試みはきっと彼らの知性を不明瞭にするということになるし、あなたが心に抱いている全ての美を枯渇させるという結果に終わるのであろう。美とは芸術によって表現するものであるということをあなたは学んでいないのである。^{注10)}

Of course you understand that it is impossible to imitate nature literally; the utmost realism of the most realistic painter falls a long way short of that; and as to the work which must be done by ordinary men not unskilled or dull to beauty, the attempt to attain to realism would be sure to result in obscuring their intelligence, and in starving you of all the beauty which you desire in your hearts, but which you have not learned to express by means of art.

この言では、「自然」と「芸術」との峻別が示されている。「自然」を作品化し、「美」を創出するということはその外見を直写する「リアリズム」という方法に拠るのではない。別の言で「美」には「自然の美」と「芸術の美」の二者が存するとし、自然と人間との差異を認めている^{注11)}。「芸術の美」の根拠はあくまでも「人間の手」にあり、「自然」を直写する「リアリズム」という方法は「芸術」ではないのである。そこで「自然」を「芸術」によって表現する際に必要なものとして「秩序 (order)」と「意味 (meaning)」という特性を挙げている。この二特性はモリスによって「道徳的特性 (moral qualities)」と呼ばれる。かれはパタンデザインについて「道徳的特性」「素材的特性」「技術的特性」という三側面から説明している^{注12)}、とりわけ「道徳的特性」はパタンデザインという範疇に限らずに「自然」を取扱う芸術家の方法的態度を示唆するものである。以下、「秩序」と「意味」についてみていこう。

モリスは二者の関わり合いについて次のように述べている。

秩序がなければ作品はないも同然であり、意味がなければ作品はないほうがましである。(…中略…)

意味とは全ての芸術においてその魂を為すものであり、意味を秩序との絆に合わせれば、実体を得て、

眼に見える存在となる。^{注13)}

Without order your work cannot even exist; without meaning, it were better not to exist. (……)
As to the second moral quality of design, meaning, I include in that the invention and imagination

which forms the soul of this art, as of all others, and which, when submitted to the bonds of order, has a body and a visible existence.

作品の成立契機の一側面が示されている。ひとつは作品を「眼に見える存在」へと高める「秩序」という形式的側面、もうひとつは「魂を為すもの」として作品に伏在する「意味」という内容的側面である。また引用から「意味」の次元の優位性が読み取れる。

モリスは「秩序」を探究することは「制限 (limitations)」を受けると言う。その「制限」の要因として二つが提示される。「芸術それ自身の本質」と「素材」とである^{注14)}。前者は先の引用の「自然を完全に模倣することは不可能である」という「自然の作用」と「人間の手」の差異に起因する表現性を指し、後者は作品を現実化するために用いられる状況的な自然物、具体的には版木のための木材、染色するための糸等の素材を指すであろう。

「意味」については「その中に想像力 (imagination) と発明力 (invention) が含まれる」^{注15)}とされる。「想像力」とは作品に表現された世界としての「意味」であり、「発明力」とは作品を実現せしめる技術的な「意味」としてと解される。さらにかれは「発明力」を鑑賞者が「解説できないように」しなければならないと言う。鑑賞者は制作者の「想像力」を享受するべきであり、作品の技術面を詮索するものではないというのがモリスの趣旨であろう。ただし、芸術家は「発明力」についての洞察も持ち合わせていなければならないのである。「想像力」や「発明力」については「歴史」の問題とともに後述する。

以上は、デザイン一般に通じる「道徳的特性」なるものであるが、パタンデザインにおいて「秩序」を媒介として「自然」を看取り、看取された「自然」を「素材」へ具現化する方法概念は「自然のコンベンションナライジング」と呼ばれる^{注16)}。「自然のコンベンションナライジング」によって「秩序」を得ることとは「自然」の抽象化に他ならない。しかし、モリスの言う「自然のコンベンションナライジング」とは単に幾何学的なデザインを得るというものではない。かれは抽象化された形態には、「幾何学的な構成」と「自然主義的な構成」があり、「パタンが果たすべき役目」によってその程度が決まると言う^{注17)}。「役目」とは壁紙、織物、絨緞などの精神的用途を指す。かれは制作において一回性の規則によって構成されたものとして「秩序」を見出していたと言える。かれはこう述べている。

コンベンションは他の時代や人々からの借物ではなくて、あなた自身のものでなくてはならない。つまり、今扱いつつある自然と芸術の両者を完全に理解することによってそのコンベンションを自分自身のものにしない^{注18)}

It follows from this that your convention must be your own, and not borrowed from other times and peoples; or, at the least, that you must make it your own by thoroughly understanding both the nature and the art you are dealing with.

「コンベンション」は一般的には「慣習」や「因習」の意に用いられ、「他の時代や人々から」受け継がれる様式や形式のことを指すが、モリスは異なる意味に用いている。「自分自身」の「コンベンション」であることが求められるのである。このことは「他の時代や人々」の形式を否定するのではなく、それらを追

体験する中でその形式を吟味し、自身の方法論を確立するということである。モリスの企図する「自然」を「コンベンショナルライジング」することとは単に「自然」を抽象化してデザインを得るということではなく、日常使用品の実用性から、デザインを適用する「素材」までを全的にラディカルに問いながら「自然」を抽象化することを意味している。形式化した静的な「因習」としての「コンベンション」を模倣することなく、「コンベンショナルライズ」する過程そのことに意義を見出していたのである。この「コンベンショナルライズ」する過程、換言すれば、作品において「秩序」と「意味」とを統合する過程には「人間の手」が不可欠であり、「人間の手」が自由に創意を発揮できるか否かという問題を孕んでいる。それゆえ、かれは「秩序」と「意味」とを「道徳的特性」と呼ぶのであろう。

1-2-2 「生命」と「コンベンショナルライズド・フォーム」

前節では「自然」をいかに作品化するかという方法的問題が問われたが、モリスはなぜ「自然」を「小芸術」に適用するのであろうか。かれの言う「小芸術」とは日常使用品の制作のことであり、その適用範囲としての日常生活に関して、「いかなる時間でも、全面的に生命と美が取り除かれることが望ましいということには賛成できない」^{注19)}と述べている。日常生活に「生命と美」を供すること、このことが「自然」を作品化する根拠であると考えられる。モリスは「小芸術」の中でも殊更に「家庭の壁面」の装飾について関心があった。かれは、壁面の被覆について5点に要約し、説明している^{注20)}。

- (1) まずそれが我々にとって入手可能な何ものであること
 - (2) 美しい何ものであること
 - (3) 我々を不安や無感動に陥らせたりしない何ものであること
 - (4) 我々にそれ自体を超えた生命について想起させ、そして人間の想像力がそれに対して強く印象づけられるような何ものであること
 - (5) 多くの人たちが過剰な困難によってではなく、喜びをもって為し得る何ものであること
- Now, to sum up, what we want to clothe our walls with is (1) something that it is possible for us to get; (2) something that is beautiful; (3) something which will not drive us either into unrest or into callousness; (4) something which reminds us of life beyond itself, and which has the impress of human imagination strong on it; and (5) something which can be done by a great many people without too much difficulty and with pleasure.

(1) は素材の問題、(2) から (4) は表現の問題、(5) は技術の問題である。本章において注目したのは (2) から (4) において著述される事柄である。これらは「家庭の壁面」の装飾に求められる内在原理と解される。(3) に言われる「不安」とは「大芸術」と称される絵画や彫刻が主題とするべきものであると同論文において説明されている。また、「無感動」は「装飾のない壁面をそのままにしておくこと」に起因するとされる。モリスは無装飾を「不健康である」と否定している^{注21)}。では、どのような装飾が求められるのか。(4) にある「それ自体を超えた生命」なるものが注目される。モリスは「コンベンショナルライジング」によって獲得される「秩序」を表現し、かつ「意味」を内包させた形態のことを「コンベンショナルライズド・フォーム」や「自然形態」と呼ぶ^{注22)}。「自然形態」について次のように言われる。

秩序は美しい自然形態を創造するのであるが、その形態は理性と想像力を備えた人間を魅了して、彼にそれらが再現している自然の部分のみを彼の心の中に想起させるばかりではなく、その部分を越えてある多くのものを想起させるのである。私はすでに自然物をこのように取扱うためのいくつかの理由を暗示してきた。あなたがたは自分の部屋の中へ、田園全体を、あるいは野原全体を、いやそれどころかひとかたまりの茂みでさえも持ち込むことはできないのである。^{注23)}

That is to say, order invents certain beautiful and natural forms, which, appealing to a reasonable and imaginative person, will remind him not only of the part of nature which, to his mind at least, they represent, but also of much that lies beyond that part. I have already hinted at some reasons for this treatment of natural objects. You can't bring a whole country-side, or a whole field, into your room, nor even a whole bush;

この言では「想起」について二様、示されている。ひとつは「自然形態」が「再現している部分」の「想起」、もうひとつは「部分を越え」る「想起」である。前者は観察者の「理性」や「想像力」による、装飾から「自然の部分」への移行、後者は「自然の部分」から「自然」そのものへの移行であると解される。観察者は抽象化された「コンベンショナルライズド・フォーム」を見ることによって、「田園全体」「野原全体」「茂み」などの「自然」を「想起」できるのである。かれは「想起」されるものとして他に、「つたの絡まった格子垣」「ナイル川の原木や流れ」「吠えている犬」「飛んでいくツバメ」「雲間から現れる太陽」など動的性格をもったものを挙げる^{注24)}。モリスの言う「それ自体を超えた生命」とはこれらの動的な「自然」そのものの謂であろう。パターンデザインそれ自体は静的な作品であるが、「想像力」により「それ自体を越え」た動的な事態として把握されるのである。

ここに序章第2節で見た「形態」が「自然と調和すれば美しい」ということの真意が読み取れる。「自然」に存する「生命」の原理を作品に抽象化することにより「形態」と「自然」とは調和し、「美」として成立するのである。その際、「職人の手」は「自然の作用するように働く」のである。

1-3 「歴史」と装飾芸術

1-3-1 ゴシック芸術と「スタイル」

モリスはゴシック建築の形態的側面を称揚するだけでなく、その形態を生み出した中世の社会における芸術の在り方を洞察し、次のように言う。

ゴシック芸術は、親方や利益搾取者のために働いたわけではない自由な職人の作品であり、かれらは自分たちの作品を通して自分の思考を表現することができたのだ。それはかれらにとって単なる重荷ではなく、喜びと一体となっていた。芸術すなわち美は全ての手工芸にとって必然的な出来事であり、商品として支払われる対象ではなく、リンゴの色や稲穂の美しい線と同じように、いわば内的に与えられたものであった。^{注25)}

the Gothic art which we have tried to revive was the work of free craftsmen working for no master or profit-grinder, and capable of expressing their own thoughts by means of their work, which was no mere burden to them but was blended with pleasure; that art or beauty was a necessary incident to all handicraft and was not paid for as a distinct article but was given in over and above just as the colour in an apple or the lovely drawing in a wheat ear is.

モリスはゴシック芸術に制作の本来的在り方を見出している。それは、職人が商品価値などの外在的要素に捕われず、「喜び」をもって作品と対峙し「思考」を重ねるということである。「思考」とは前節で見た「想像力」や「発明力」を含むと解される。したがって、かれが「古物を研究せよ」と提言するとき、単に形態についての外的側面の研究のみではなく、制作者の「喜び」や「思考」という作品の内的側面に関する研究も含意されていると言える。

モリスが「古物を研究せよ」と繰り返し述べることは、当時の古建築の置かれていた状況と深く関わっている。19世紀、英国では、歴史的建造物を修復（restoration）という名の下に、ゴシック様式により改築することが広く行われた。モリスは「古建築の修復」を「致命的」とであると断じている。かれはいわゆる「ゴシック・リヴァイヴァル」という運動が、その初期において「中世の建築の構造と細部に関する正確な考古学的知識」をもたらした反面、それに熱狂するあまり「完全に中世風にする」ことを目的とした「修復」という「破壊」行為を生んだと言う^{注26)}。ゴシック様式の外形的側面についての嗜好を理由として中世へ遡行しようとすることは「見かけ倒しの反動」とであるとされる。モリスはゴシック建築について、「未来においても我々の建築スタイルはゴシック建築でなければならない」^{注27)}と述べる一方で、「尖頭形アーチのような特定の形態に対する単なる恣意的な好み」^{注28)}については消極的であった。このことから、上掲の「スタイル」という言葉を、形態的分類によるひとつの「様式」として捉えることはモリスの意に反すると言える。初期のゴシック・リヴァイヴァル運動について次のようにも述べられる。

最初我々はゴシック芸術のスピリットを理解することなく、その外的な側面を模倣した。それはルネサンスの芸術家が古典芸術を扱った方法と同じだった。ゴシック期の人々が生きているスタイルを作

り出すために（引用者注：その時代のスピリットを）吹き込んだようには、我々の時代のスピリットを吹き込むことをしなかったのだ。^{注29)}

At first we imitated the outward aspects of Gothic art without understanding its spirit much as the Renaissance artists had done with the old classical art, but without infusing any of the spirit of our own times into it as they had done so as to make a living style.

モリスはルネサンス期の芸術が千年前の古典芸術を複製しようとしたことを別の箇所では「芸術のための芸術」や「銜学的な懐古趣味」とも呼ぶ^{注30)}。また、「ルネサンス期までの芸術の目的は見ること（to see）であったが、ルネサンス期にはその目的は見られること（to be seen）だけになった」^{注31)}とも言われ、芸術を事物的側面の美しさや正確さのみによって捉えることはモリスにとって空疎であったと言える。人間の主体性を孕んだ「見ること」という表現には、見るべきものは、芸術作品の「外的な側面」を超えた制作者の「スピリット」であるということが含意されている。「スピリット」を内包した「生きているスタイル」、このようなスタイルは現代にはなく、唯一ゴシック建築に見出すことができると言うのである。「未来においても我々の建築スタイルはゴシック建築でなければならない」という言の真意は、「生きている」建築を制作し続けるということである。次のようにも言われる。

建築スタイルは真の意味で歴史的とならなければならない。^{注32)}

The style of architecture will have to be historic in the true sense.

「スタイル」とは、時代ごとに区分できるものではなく、過去、現在、未来という永遠性の中に位置づけられる「歴史的」な制作の仕方を意味していると言えよう。モリスの思想においてゴシック・リヴァイヴァル運動によって生き返る（revive）べきものは「尖頭形アーチのような特定の形態」ではなく「生きている」という在り方であったと解される。また、モリスにあっては「ゴシック」なる言葉は、本来的な制作を形容する通時的概念であったと言える。以下、「生きている」ということ具体相をみていこう。

1-3-2 ゴシックにおける「伝統」の意味

モリスは「スタイル」という言葉を用いて、ゴシック建築のことを次のように示している。

欠けるところのない完全で論理的なスタイル

人間の想像力と知性への敬意を要求するスタイル

成長する要素を内包しているスタイル ^{注33)}

a complete and logical style with no longer anything to apologise for
a style claiming homage from the intellect, as well as the imagination of men
a style which had in itself the elements of further growth

上記の意味を明らかにすることにより、「生きている」ということの意味も明らかになるであろう。ゴシック建築は「完璧な有機的形態」とであるとされ、次のように言われる。

私が思うに、有機的建築、すなわち必然的に成長する建築というものはアーチの習慣的な使用から発達している。この使用が、用と美とを結合させたことを考えると、これは人類最大の発明であると言わなければならない。^{注34)}

To my mind, organic Architecture, Architecture which must necessarily grow, dates from the habitual use of the arch, which, taking into consideration its combined utility and beauty, must be pronounced to be the greatest invention of the human race.

「有機的建築」は「必然的に成長する建築」と言い換えられる。「必然的に成長する」ということの根拠は「成長する要素を内包している」ということである。その「要素」とは「用と美」とが「結合」している事態を指すと解される。「用と美」とが「結合」していることが「完全で論理的」であり、「想像力と知性との敬意を要求」されるということの所以である。また、「用と美」との「結合」のされ方の変化性を捉えて「成長」と呼んでいると解される。

モリスは、ローマ建築からゴシック建築に至る過程におけるアーチの使われ方について解説している。かれは「アーチの任務をごまかすことなく、これを飾り光栄あるものにするスタイルこそが優れたスタイルである」^{注35)}と言う。また、ローマ建築はアーチの発明によって「贅沢な素材など必ずしも必要ではなく、貧弱な断片的な素材からも相当に良い結果を生むようになった」^{注36)}と構造に関する進歩を認める一方で、ローマ建築は「構造と装飾が互いに浸透しあっていない」「美しい構造を大理石の上張りで隠している」^{注37)}とも述べている。アーチそのものを装飾的にするのではなく、アーチの表面に装飾を付加するような方法では「用と美」との「結合」は実現されないとされる。さらに、ローマ建築は「建築というよりも土木術とでも呼ばなければならぬ」^{注38)}とも言われる。「用」のみが充足されるだけでは不十分なのである。モリスの建築思想において「用と美」とが「結合」されるとは、用即美もしくは構造即美ということではなく、二元的に捉えられた「用」と「美」とが乖離せずにその一者性が実現されることである。このような理解はアーチにのみ関わるものではない。過去の日常の使用品の制作を捉えて次のように言われる。

人が車輪を転がし、梭を投げ、鉄片を槌で打つ時、彼は単に水瓶、布切れ、小刀以上のものを作ることを期待されていた。彼は同時に芸術作品を作ることを期待されていたのである。(…中略…)そしてこれこそ私の言うところの建築なのである。日常の必要物を転じて芸術作品とすることである。^{注39)}

When a man turned the wheel, or threw the shuttle, or hammered the iron, he was expected to make something more than a water-pot, a cloth, or a knife: he was expected to make a work of art also: (……) and this is it which I have called Architecture: the turning of necessary articles of daily use into works of art.

「水瓶」「布切れ」「小刀」が道具としての「用」を充足させつつ、装飾による「美」と「結合」することで芸術作品として成立すると言える。モリスの思想において「建築」なる概念は、「用と美」とを統合することを意味していたのである。「建築」によって「生きているスタイル」がもたらされると言えよう。

「用と美」との「結合」に要求される思惟作用が前節で見た「想像力」および「発明力」である。「発明力」は「知性」とも言い換えられる。モリスが「想像力」と「発明力」とを対置して述べる時、「想像力」とは非実在的な作品世界と関わる思惟作用、「発明力」とは素材や用途などの実在的要求と関わる思惟作用を意味する。かれは本来的な装飾に内包される「想像力」や「発明力」は、「生きている仲間との交流」と「伝統すなわち先人の思考」とによって統制されたものであると言う^{注40)}。「想像力」や「発明力」を単に個人の能力に帰さず、「交流」や「伝統」といった人間との連帯の中で捉えていると言えよう。またモリスはとくに「発明力」の「伝統」について、「伝統とは世代を超えて受け継いだ人間がもつ、蓄積された技のことである」^{注41)}とする一方で、「発明力を追従的に模倣し、生命の徴である変化を少しもそれに加えないようでは伝統とは呼べない」^{注42)}とする。「生きているスタイル」を持続させるためには「伝統」を絶えず更新しなければならないのである。「想像力」と「発明力」とによって、「用と美」との「結合」を問うことは、現在における一回性の制作でありながらも、「伝統」を追体験しながら「必然的に成長する」ことなのである。

モリスは、ゴシック・リヴァイヴァル運動が志向するべきは「人間の統一と人間の不断の生命」であると言う^{注43)}。「人間の統一」とは共同制作の場合に「想像力」と「発明力」が乖離しない、具体的にはデザイナーと職人が乖離しない事態を意味し、「人間の不断の生命」とは人間が時代を超えて「有機的形態」もしくは「有機的建築」を制作し続ける事態を意味していると解される。モリスが、「歴史」に眼を向けなければならないとするのは、現在における制作も「歴史」の一部である、換言すれば「不断の生命」としての制作者は「伝統」を捉え直し、それを継承すべきであるという信念によるものであると考えられる。モリスの言う「歴史」とは過去だけではなく、現在、未来をも含む永続的な時間を意味していることが分かる。現在の制作と過去の制作とは形態的模倣によって関係づけられるのではなく、「用と美」との一者性を企図するという「スピリット」の次元において結合されるべきであると言えよう。

小結

モリスの装飾芸術論における「自然」と「歴史」の作品化に関わる思索の構造の解明を目的として本章の問いは進められた。第1節では、ヴィクトリア朝の装飾芸術論の動向について、comfort 概念の意味の変容の事態、および功利主義、唯美主義、銜学趣味、中世主義、国家主義という立場を確認した。第2節では、「自然」を作品化することについて、「コンベンショナライジング」なる方法概念が示され、「コンベンショナライジング」によって「生命」の原理を作品に抽象化することが「美」の創出に関わっていると考察された。第3節では、モリスがゴシック建築を「生きているスタイル」と指定していることの意味を「用と美」との「結合」を問い直す「伝統」の問題として考察された。

ここで「コンベンション」という言葉と「スタイル」という言葉の類似性が指摘できよう。両者とも静的な「因習」や「様式」という意味ではなく、過去の作品を動的に捉え直し、更新することという意味である。しかし、「コンベンション」なる語は、パタンデザインの方法を示す「コンベンショナライジング」という動詞との関わり合いにおいて用いられるのに対し、「スタイル」なる語に対応する動詞は見当たらない。モリスの志向する「生きているスタイル」とは狭義の建築に止まらず、全ての芸術に向けられていることを考えれば、かれがパタンデザインにおいて自覚した「コンベンショナライジング」なる方法は、全ての制作において「スタイル」を確立するために希求される根源的なものであると言えるであろう。

また、モリスはヴィクトリア朝の虚飾に対して、ローマ詩人ユベナリスの「生活 (life) のために生きる理由 (reasons for living) を失うのは何故か」^{注44)}という言葉を引きしている。本章から明らかなように、ここに言われる「生きる理由」とは「芸術」もしくは広義の「建築」を意味している。モリスの装飾芸術論において「芸術」ないし「建築」の本質は「生命」という言葉に示される。モリスの言う「生命」には二義ある。ひとつは「自然」に存する生命の原理という意味であり、もうひとつは「歴史」の中で生成されてきた「伝統」を受け継ぐ人間、すなわち「不断の生命」という意味である。「生活」には本来、この二義を担う「生命」が内包されていなければならないが、装飾を実用性と遊離させるような仕方ではそれが実現されないのである。「生活」に「生命」を取り込むためには、現在的視座から徹底的に「コンベンション」や「スタイル」を更新しなければならないのである。

第1章 注記

注1) ピーター・スタンスキー著／草光俊雄訳『ウィリアム・モリス』, 雄松堂出版, 1989, p.10 参照。

注2) 海野弘『モダン・デザイン全史』, 美術出版社, 2002, p.55 参照。

注3) チャールズ・ロック・イーストレイク (Charles L. Eastlake, 1833-1906) は著書『家庭の趣味に関する心得』(Hints on Household Taste in Furniture: Upholstery and other details, 1868) の中で, 「人々は頻繁に‘luxurious’と‘comfortable’という言葉と同義語であるかのように関連づけて考える。私の考えではこれらは非常に異なる観念を伝える。けばけばしい更紗, 精巧な壁紙, フランスニス, 全面にわたるひだつきカーテンは, 多大の費用や luxury という一定の秩序を表すが, 確実に comfort は表さない」と述べている。ヴィクトリア朝において comfort 概念の意味が物理的要因からくる快から精神的要因からくる快へと転化していたことを裏付ける言説である。

注4) The Art of the People, [XXII-39] (art for art's sake)

注5) ニコラウス・ペヴスナー著／鈴木博之訳『ラスキンとヴィオレ・ル・デュク』, 中央公論美術出版, 1990, p.90 を参照。

注6) [NG-4]

注7) 「友情と互助」[NG-ix] (companionship and goodwill) ／「士気の鼓舞」[NG-ix] (incitements)

注8) ロンドン・デザイン学校の歴史的経緯については, 菅靖子『イギリスの社会とデザイン: モリスとモダニズムの政治学』, 彩流社, 2005, pp.51-82 参照。

注9) 鶴岡真弓「オーウェン・ジョーンズ『装飾の文法』の世界像」, 比較文明学会編『比較文明』, 2006, pp.35-55 を参照。

注10) Some Hints on Pattern-Designing, [XXII-178]

・Some Hints on Pattern-Designing, 「パタンデザインに関する若干の心得」は, 1881年12月10日, ロンドン労働者カレッジにおいて行われた講演である。『建築家』誌上に掲載された ([UL-296] [EL-312] 参照)。

注11) 「自然の美」と「芸術の美」という対表現は, [XXII-426] に見られ, 「自然作品 (works of Nature)」と「芸術作品 (works of Art)」という対表現 [XXII-428] も用いられる。モリスはこれら二者が各々自立しながら融合したもののとして「大地の美」が構成されたとする。「大地の美」は論考“The Prospects of Architecture in Civilization”の主題である。かれは work という動詞を働く, 作用するという意に用い, 自然が作用した結果生じるものを works of Nature, 人間が作用した結果生じるものを works of Art と呼ぶ。自然と人間が各々働くことによって大地が構成されるという考え方がモリスの中心にある。かれはこの人間が働くことを「芸術」と定義する。かれの関心の対象が芸術から社会へと深化するのは, 働くことを徹底的に問うたからだと言える。「自然の美」と「芸術の美」については, 第2章第2節にて詳述する。

注12) Some Hints on Pattern-Designing, [XXII-179]

注13) Making the Best of It, [XXII-106-110]

注14) 上掲書, [XXII-106]

注15) 上掲書, [XXII-110]

注 16) 「コンベンショナルライジング」という表現は二箇所確認できる。Making the Best of It, [XXII・107] (natural form you are conventionalizing)／Some Hints on Pattern-Designing, [XXII・181] (the conventionalizing of nature) いずれもパタンデザインについて考察する文脈において用いられている。また、conventionalized representations という表現が [E9-35] に見られる。conventionalizing という語に対して、既往研究では、「様式化」(小野二郎『ウィリアム・モリス研究』(小野二郎著作集 I), 晶文社, 1986, p.206), 「形式化」(大槻憲二訳『藝術の恐怖』, 小西書店, 1923, p.247, 「便化」(レイ・ワトキンソン著／羽生正気, 羽生清訳『デザイナーとしてのウィリアム・モリス』, 岩崎出版社, 1985, p.89) などの訳が試みられているが、ある定型の様式や形式を生み出すことの意にならぬよう、本稿では訳出するにあたり「コンベンショナルライジング」を表記として採用する。「コンベンショナルライジング」はモリスの独自概念ではなく、オーウェン・ジョーンズやリチャード・レッドグレイブなど装飾芸術の研究家によって「コンベンショナルな表現」や「コンベンショナルな処理」として著述されてきた背景に位置づけられる概念である。ジョーンズは世界中の装飾モチーフを集大成した主著『装飾の文法 (Grammar of Ornament)』の中で歴史的装飾を 37 の命題 (proposition) にまとめている。このうち 13 番目の命題に次のように記されている。「草花やその他の自然物はそのまま装飾として用いられるべきではなく、それらを基礎にコンベンショナルな表現 (conventional representations) によって表現されていなければならない。」また、レッドグレイブは著書『デザインの手引き (Manual of Design)』において自然物の直接的な模倣ではなくコンベンショナルな処理 (conventional treatment) の必要性を説いている。例えば、インドの衣服のデザインを捉えて次のように言われる。「自然の花は決して模倣的に、もしくは遠近法的に用いられていない。それは平面的に構成されることによって、またシンメトリカルな配置によってコンベンショナルライズされている。すべてのその他の対象、動物や鳥でさえも装飾として用いられるとき、単純な平面形態に還元されている。」このようにジョーンズやレッドグレイブは自然の抽象化について「コンベンショナル」や「コンベンショナルライズ」という言葉を用いて表現している。ジョーンズやレッドグレイブらはコールサークルという組織に属し、この系譜を引くデザイナーにクリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser, 1834-1904) が挙げられる。かれはモリスの同時代人であり、主著に『装飾デザインの原理 (Principles of Decorative Design)』, 『デザインの研究 (Studies in Design)』がある。ジョーンズらもドレッサーも装飾の原理、手引き、法則について図解を通して流布させようとしたと言える。このことは原理や法則が形骸化する危険性を孕んでいたのに対し、モリスは原理化すること自体を個人に求めたと言える。本章で既にみたようにモリスは「道徳的特性」として「秩序」と「意味」を挙げる。形態に関する教条的理解では「意味」の次元に到達し得ないと言えよう。

注 17) Making the Best of It, [XXII・107] 1883 年のボストン舶来製品展示会のためにジョージ・ウォードル (George Wardle, 1834-1910) が作成したモリス商会のパフレット中、「壁紙」の項目にパタンの役目を示唆する内容が記されている。「パタン制作 (pattern-making) と同様、パタン選択 (pattern-choosing) も建築的芸術です。ひとつのパタンは装飾計画の一部であるだけでなく、その価値は多分にその環境から引き出されます」とパタン選択が壁紙を適用する環境と空間的に関わることを示した上で、実例 (モリス商会の作品名) が挙げられていく。以下、内容を要約しながら実例を数点確認しておこう (記号は論者による)。

①パタンの明確さによる区分

①-A 壁を非常に静かに保つ理由があるなら、際立った線のない、全体を満遍なく覆うパタンがよい。

例：Diapers (図3), Mallows, Venetians (図4), Poppy, Scroll, Jasmine

①-B より明確なパタンを求め、常に肯定的なパタンであってほしいなら以下の例が挙げられる。

例：Daisy (図5), Trellis, Vine, Chrysanthemum, Lily, Honeysuckle, Larkspur (図7), Rose, Acanthus

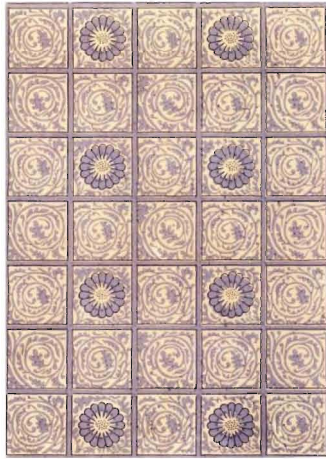


図3 〈Diapers〉



図4 〈Venetians〉



図5 〈Daisy〉

②「部屋の様子 (the look of the room)」に依拠した構成に関わる区分

「ごく簡潔に言えば、建築的効果は水平、垂直、斜めのよい釣合によっている」とされ、以下の三点が示される。

②-A 落ち着きが必要であるならば、水平に配列されているパタンを選ぶとよい。

例：(パンフレットに例示なし／上掲の Daisy はその一例であろう)

②-B 厳格すぎるのが欠点となる場合、柔らかく滑らかな線をもつ、大胆な円か斜めの波状のパタンがよい。

例：Scroll (図6), Vine, Pimpernel, Fruit

②-C 壁があまりに低く長い場合のように、各部分に際立った形式性がなく、水平線が優勢すぎるのが欠点となる場合、柱状のパタンを選ぶとよい。あるいは襷をつけたチンツや布を壁に掛けるとよい。

例：Larkspur (図7), Spray, Indian (図8)



図6 〈Scroll〉



図7 〈Larkspur〉

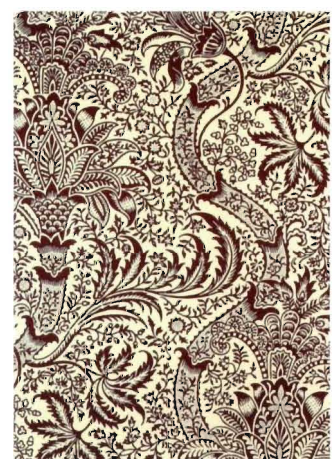


図8 〈Indian〉

②-C における Larkspur が自然主義的でありながら柱状パタンという垂直性を有していることから推察されるように、モリスの言う「幾何学的な構成」と「自然主義的な構成」は二者択一的に決定されるものではない。

注 18) Making the Best of It, [XXII-107]

注 19) Some Hints on Pattern-Designing, [XXII-177]

注 20) 上掲書, [XXII-179]

注 21) 上掲書, [XXII-175-6] において示される。「不安」とは次の言に示されていよう。「大芸術は美しいだけでなく、しばしば人間の情熱や熱望を奮い立たせたり、悲しげであったり、恐ろしくさえあるのだ。(…中略…) 人類の未来の幸福への苦闘、利己的でない愛、一方的な貢献、これらのものが大芸術の主題である。これらの主題においては、確かに希望がある。しかしそれらの様子は悲しげであることが多い。それらの大半の表面には、勝利の種が敗北する様子や生命の種が死ぬ様子などが描かれているであろう。」また、「装飾のない壁面」に関連して、Making the Best of It, [XXII-97] では「部屋が非常に高い場合は床から 8 フィート以上の所には眼を引くようなものは何も置かないのが最善である」とされる。人間的尺度である 8 フィートを装飾の範囲として規定していると言える。装飾を人間の生活との関わり合いにおいて把握しているのである。

注 22) 「コンベンショナルライズド・フォーム」は Making the Best of It, [XXII-107] に、「自然形態」は Some Hints on Pattern-Designing, [XXII-181] / The Gothic Revival, [UL-59] に確認できる。

・The Gothic Revival, 「ゴシック・リヴァイヴァル」は 1884 年 3 月 3 日と 3 月 10 日の 2 回に分けて、パーミ
ングム・ミッドランド協会の聴衆に向けて行われた講演である ([UL-300] 参照)。

注 23) Some Hints on Pattern-Designing, [XXII-181]

注 24) 上掲書, [XXII-178]

注 25) The Gothic Revival, [UL-88]

注 26) 上掲書, [UL-76-7] トマス・リックマン (Thomas Rickman, 1776-1841) は『イギリス建築様式判別試論 (An Attempt to Discriminate the Styles of English Architecture from the Conquest to the Reformation)』において英国におけるゴシック様式を初期イングランド様式、装飾式、垂直式に分類している。この区分法は現在でも用いられる。モリスはリックマンについて「注意深い古物愛好家」であり「英国におけるゴシック建築の様式を驚くべき明快さをもって区分した」[UL-75] と称えている。しかし、モリスはリックマンの功績であるゴシック建築の細部についての知識を、そのまま修復に適用することは非本来的な制作の在り方であるとするのである。

注 27) Gothic Architecture, [i-285]

注 28) The Gothic Revival, [UL-81]

注 29) 上掲書, [UL-82]

注 30) 「芸術のための芸術」The Art of the People, [XXII-39] / 「学術的な懐古趣味」Gothic Architecture, [i-283]

注 31) Art and the Beauty on the Earth, [XXII-161]

注 32) Gothic Architecture, [i-285]

注 33) 本論では、style なる語を訳出するにあたり、時代区分や形態的分類による様式という意にならぬよう、「スタイル」という表記を採用する。また、モリスは「スタイル」なる語を狭義の建築以外にも用いる。例えばパタンデザインについて著述される‘Some Hints on Pattern-Designing’で題された論文では、「スタイルという言葉につ

いて少し触れよう」と述べ、「過去の芸術からの助けなしに、突如としてスタイルを構築することはできない。(…中略…)しかし、いかなるスタイルも模写してはならない。スタイルはあなた自身のものでなければならない」としている。「スタイル」なる語が、個人の制作の仕方を意味していることが分かる。引用は以下の通り。「欠けるところのない完全で論理的なスタイル」Gothic Architecture, [i -277] / 「人間の想像力と知性への敬意を要求するスタイル」Gothic Architecture, [i -277] / 「成長する要素を内包しているスタイル」The Gothic Revival, [UL-82]

注 34) Gothic Architecture, [i -271]

注 35) 上掲書, 同頁

注 36) 上掲書, 同頁

注 37) 上掲書, [i -272]

注 38) 上掲書, [i -271]

注 39) The Prospects of Architecture in Civilization, [XX II -144]

注 40) The Gothic Revival, [UL-88-9]

注 41) 上掲書, [UL-91]

注 42) Making the Best of It, [XX II -111]

注 43) The Gothic Revival, [UL-81]

注 44) Decious Junus Juvenalis A.D.60 頃・130 頃 原文は“propter vitam vivendi perdere causas” モリスによる英訳は“for the sake of life to cast away the reasons for living” (Making the Best of It, [XX II -117]) となっている。

第2章 モリスの住まい論

本章は、生活環境を制作すること、とりわけ「家造り」や「庭作り」に関わる言説を析出し、かれの企図する「住まい」を明らかにすることを目的とする。

前章では、モリスが制作者の見るべきものとして「自然」と「歴史」を挙げ、眼を鍛え、自身の方法論を確立する必要性を説いていることを論じた。前章では、制作者の方法的態度に焦点を絞ったが、モリスは制作者のみならず、生活環境における作品の受容者、すなわち生活者の視点を含めて制作論を展開している。序章において、モリスがヴィクトリア朝時代の中産階級の生活様式に対して批判的であったことを確認したが、かれは中産階級の邸宅について「功利主義の小屋以上には見えない」と断じている^{注1)}。そこでモリスは「民衆の芸術」の復興を唱えるのであるが、次のような注目すべき言葉が残されている。

私は民衆の芸術について語った。しかしそれは建築なる一語に尽きる。一切の民衆の芸術もこの偉大な全体の部分であるに過ぎない。そして家造りという芸術は全ての始まりである。^{注2)}

I have spoken of the popular arts, but they might all be summed up in that one word Architecture; they are all parts of that great whole, and the art of house-building begins it all:

モリスは「建築」を「民衆の芸術」の総体として位置づけ、「民衆の芸術」＝「工芸」のひとつである「家造り」を「全ての始まり」とする。この意味は後に問われてよいであろう。また、モリスは「家」を単に工芸的側面から取り扱うのではなく、「住まい (dwelling)」という生活の場としての側面にも着目し、次のように述べている。

芸術の主要なものは住まいだろう。もし我々が誤って自然を外へ追いやらないかぎり、住まいは美を欠くことがない。なぜなら自然が自由に美を与えるからだ。^{注3)}

his own due share of art, the chief part of which will be a dwelling that does not lack the beauty which Nature would freely allow it, if our own perversity did not turn Nature out of doors.

「芸術の主要なもの」として「住まい」を挙げ、その「美」が「自然」との関わり合いにおいて成立することが示される。同論考において「庭はしばしばまさに家屋敷 (homestead) を作るものである」とし、生活の場における「庭作り (gardening)」について言及されている^{注4)}。「庭」と「自然」とはいかに関わるのであろうか。

以下に本章の構成を示す。第1節では「家造り」の実践的側面、続く第2節では「庭作り」の実践的側面を明らかにする。そして第3節にて、前2節で明らかにされた実践的側面から遡行し、その基底にある倫理的側面を考察する。

2-1 「家造り」にみる技術論的契機

2-1-1 「工芸」なる概念

モリスは、「高尚な工芸」として「家造り」を挙げ、「他のどの工芸にも劣らない」としている^{注5)}。本節冒頭では「全ての始まり」と言われていた。ここでまずモリスの思索における「工芸 (craft)」なる概念の捕捉する内容を明らかにする。かれは craft という語の他に, handicraft という「手」の重要性を強調した語, craft という行為の主体を意味する craftsman や handicraftsman という語, 職人の技量を意味する craftsmanship という語も用いている^{注6)}。モリスは職人によって制作される工芸品が芸術作品と一線を画するとされる社会通念に対し批判的であり, 職人と芸術家に本質的差異はないとする^{注7)}。論考「今日の芸術と工芸」では、「工芸」の代わりに「応用芸術 (applied art)」という言葉を用いて, こう述べる。

我々が絵画と彫刻とを, 応用芸術と区別するのは単に便宜上のことにすぎない。なぜなら応用芸術の同義語は建築であり, 絵画も彫刻もそれが建築の一部でないならば, ほとんど役に立たない。建築的感覚をもっている人は, 常にどんな絵画や彫刻もこの観点からみる。^{注8)}

I take it that it is only as a matter of convenience that we separate painting and sculpture from applied art: for in effect the synonym for applied art is architecture, and I should say that painting is of little use, and sculpture of less, except where their works form a part of architecture. A person with any architectural sense really always looks at any picture or any piece of sculpture from this point of view;

ここに「応用芸術」＝「工芸」の射程が示されている。モリスにとって芸術と応用芸術の二元論, すなわち芸術と工芸の二元論は空疎なものであったと言える。「絵画」「彫刻」といういわゆる芸術と「応用芸術」は「建築」に統合される。また, 前章において確認したように, モリスは「水瓶」「布切れ」「小刀」を道具かつ芸術作品として制作すること, このことが「建築」だとする。「日常の必要物を転じて芸術作品とすること」, これがモリスの広義の「建築」の定義であり, 「工芸」の定義であるとしてよいであろう。同内容は別箇所では, 「有用であると同時に美しくつくること」「用と美という二つの要素の統合」と表現される^{注9)}。モリスは日常使用品に「美」が適用されることなく「用」のみが充足されるだけでは, それは「一種の抽象的なものとして存在する」とし, 「美」の必要性を説く^{注10)}。そして, 「想像力の表現」により「美」がもたらされると言う^{注11)}。ここでは「美」の表現内容については仔細にふれないが, 前章にみるように, モリスにとって「用」と「美」の結合とは用即美ということではなく, 二元的に捉えられた「用」と「美」の一者性の実現のことである。次の言では「美」の表現主体である人間と, 表現媒体である素材が問題となっている。

日常の必要物が, 芸術作品とみなすよう何かを要求するのであれば, それらはその制作の性質に必要な機械以外を間にはさむことなく, 頭脳によって直接導かれた人間の手の明らかな痕跡を示さなければならない。(…中略…) いかなる芸術も, 自然で無理のない方法によって, その日常の必要物が作ら

れた素材から展開されるべきである。そして、その結果は、他のどんな素材からも出てこないようなものになるはずである。^{注12)}

Furthermore, if any of these things make any claim to be considered works of art, they must show obvious traces of the hand of man guided directly by his brain, without more interposition of machines than is absolutely necessary to the nature of the work done. (……) Again, whatsoever art there is in any of these articles of daily use must be evolved in a natural and unforced manner from the material that is dealt with: so that the result will be such as could not be got from any other material;

「頭脳」と「手」の直接的連関によって「日常の必要物」が「芸術作品」として成立することが示される。

「手」を媒介とした「頭脳」と「素材」との関わり合いそのことが「美」の創出に関わると解される^{注13)}。

モリスの希求する「美」とは形式的事柄だけではなく、制作者の自由という形式以前の事柄を含んでいる。

かれは制作における人間的要素についてこう述べる。「人間の創意が独創的な作品を産み出すときは必ずそれを着想する頭脳とそれをこしらえる手に対する第三者として喜びというものが伴うものである」^{注14)}と。

「美」と「喜び」の関係については第3節で後述する。

2-1-2 「家造り」の実践的内容

生活における道具の制作のひとつである「家造り」はどのように把握されていたのか、次の言説に根本的な内容が示されている。

わずかに木材と石材と石灰とそれらを切るための数個の道具とがあれば、すべての芸術を導くような価値ある芸術を造ることができるであろう。その芸術は、風雨を凌ぐだけでなく、我々の内に燃える思考と欲求とを表現するのである。^{注15)}

we might yet frame a worthy art that would lead to everything, if we had but timber, stone, and lime, and a few cutting tools to make these common things not only shelter us from wind and weather, but also express the thoughts and aspirations that stir in us.

「風雨を凌ぐ」ことは「用」と関わり、「思考と欲求とを表現する」ことは「美」と関わると言える。「家造り」という「工芸」における「用」や「美」とはいかなるものか、みていこう。

モリスは家について、ロンドンなどの都市部（郊外を含む）と英国の田園地方という二つの土地から説明している。前者は醜悪だとされ、その改善方法が考察されるのに対し、後者の中でもコッツウォルズ地方^{注16)}が賛美され、そこに理想的な家の在り方を見出している。ロンドンの家についての言説から「工芸」としての「家造り」の実践的内容を読み取ることができる。

論考「建材の建築への影響」^{注17)}では、「素材の問題は建築の基礎である」とされ、適切な「素材の選択」と「素材の使用法」について語られる。モリスは、「建物の素材を考える上でまず考えるべきものは壁である」とし、壁に使用されるべき「素朴でありふれた素材」として三種挙げる。それらは「崇高な順に、石材、木材、煉瓦」であるとされる。当時、家の装飾のために頻繁に使用されたテラコッタを嫌悪し、そ

の理由は「装飾以外には使用できないからである」と言う。テラコッタを外壁に上貼りする方法では家という芸術作品が家の「素材から展開」されないのである。次のように言われる。

ロンドンの家の外観に関して、現在もっとも必要とされないものは装飾である。換言すれば、ロンドンのように、嘆かわしいほど、また恐ろしいほど醜悪な家の巨大な寄せ集めが存する所では、装飾を抑制し、家や建物を堅牢で合理的であるように見えるようにすべきである。そして人々に、それらは自分たちの用途に明らかに順応しているという印象を与えるべきである。^{注18)}

I am rather inclined to think that of all things not wanted at the present day, and especially in London outside a house, the thing that is least wanted is ornament. That is to say, as long as there is a huge congeries of houses, as in London, the greater part of which are lamentably and hideously ugly, I think one ought to pitch one's note rather low, and try, if one can manage it, to get the houses and buildings to look solid and reasonable, and to impress people with their obvious adaptation to their uses;

モリスはヴィクトリア朝時代の家や建物が功利主義的な原理によって建てられ、非本来的な装飾が施されている傾向に対して批判的であった^{注19)}。引用では、「装飾」という事柄を留保し、「用途」という人間生活の根本へ立ち返ることを促している。「用」と離れて「美」が成立し得ないとするモリスにとって「用」と乖離した「装飾」は排除すべきもののなのである。また、「すべての素材には克服しなければならない困難があると同時に利用すべき便利なところがある」^{注20)}とも別言されていることから、人間の「用途」を求めつつも、「素材」の属性への配慮を欠いてはならないことが分かる。「堅牢」と「合理的」とは、「素材から展開」した結果、家に見出される性質のことである。「堅牢」ということは「石材、木材、煉瓦」などの自然物の属性に起因し、「合理的」ということは「頭脳」と「手」を用いる人間が「素材」の属性を吟味し、「用途」を獲得する過程に起因する、と解される。また、家の外観と同様、家の内部についても「用途」や「素材」の観点から言及されている^{注21)}。

ここで注意しなければならないのは、「用途」のみの実現では、上述のように、「一種の抽象的なものとして存在する」ということである。本来的には、家の外観と内部の両者において「想像力の表現」によって「美」も実現されなければならない。しかし、モリスは既存のロンドンの家に改善策を講じるにあたって、外観についての言及は少なく、「どんな色をつけるにしろ、なるべく単純な色にしなければならない。主に白かもしくは白みがかかったものがよい」^{注22)}とする程度である。かれは「美」の回復をもっぱら家の内部から実現しようとする。次のように言われる。

現代の家はその大小を問わず、品格および設計の統一というものが無い。現代の家は例外なく偶然に乱雑に扱われた部屋の集合であり、中心や個性がない。だから私が言おうとすることは、その単位を家よりもむしろ部屋におくのである。^{注23)}

there is no dignity or unity of plan about any modern house, big or little. It has neither centre nor individuality, but is invariably a congeries of rooms tumbled together by chance hap. So that the unit I have to speak of is a room rather than a house.

生活の簡素さから美への憧憬が起こる。その憧憬は人間の魂から消えているはずはない。^{注24)}

And then from simplicity of life would rise up the longing for beauty, which cannot yet be dead in men's souls,

「生活の簡素さ」を志向することによって人間生活に真に必要なものを自覚し、「部屋」を構成し直すこと、ここに「美」の回復契機があることが分かる。人間生活が営まれる「部屋」を考慮せず、家の外貌のみに関心を抱くような態度は退けられるのである。かれは「部屋」を「壁、天井、床、窓、扉、暖炉、家具」など必要最小限の事物的構成要素の集合と捉える^{注25)}。ここに言われる「家具」とは造り付けのものを意味している。「部屋」の「用途」と構成要素の「素材」を追究することにより「想像力の表現」を可能にする基盤が獲得される可言えよう。そして「部屋」の「用途」や「素材」に応じてそれぞれ本来的な装飾が為され、日常生活に不可欠な工芸品や絵画などが配置されることによって「部屋」にそれぞれ異なる意味が付与され、自ずから家に「中心や個性」が生じるのである^{注26)}。

本節の冒頭においてモリスが「家造り」を「他のどの工芸にも劣らない」としていることを指摘した。以上から、その理由として、「家造り」は生命維持という最も根幹の「用」を扱うこと、「部屋」の「美」を実現するには構成要素に応じた複合的な工芸の技術が求められること、家は他の工芸によって制作されたものが配置される基盤となること、が挙げられるであろう。

2-2 「庭作り」にみる環境論的契機

2-2-1 「庭作り」の実践的内容

「家造り」は他の工芸と異なり、自然環境や歴史的環境など外的環境との関わり合いにおいて成立する工芸である。そこでモリスが着眼するのが、「庭作り」である。モリスは庭を主題とした論文は残していないが、理想とする庭の構想について家に関する論考の中で述べている^{注27)}。上述のように、家については、都市と田園という二視点から捉えられている。このような二視点からの考察は庭にも当てはまる。庭は「山が多く美しい田園」にはなくてもよいが、「平地で単調な田園」や「大都市」には必要であると言^{注28)}。「平地で単調な田園」と「大都市」はともに自然の作用性を見出し難い土地であり、これらが英国の国土の大半を占めている。その差異は外的自然を遠くに見渡せるか否かである。では、庭はどのように制作されるのであろうか。以下、実践的内容をみていく。

モリスはロンドンの住宅地における庭について次のように述べる。

ロンドンの郊外にいる造園家たちは、しばしば風景庭園様式の醜い大きな庭を愚かにも模倣して、わずかな砂利道と草地を蛇行させる。そして入手できた最も整形的な植物をその空間に、変な強情さをもって満たす。しかし、少しの常識があれば、一片の土地を最も単純に設計することができる。^{注29)}
our suburban gardeners in London, for instance, oftenest wind about their little bit of gravel walk and grass plot in ridiculous imitation of an ugly big garden of the landscape-gardening style, and then with a strange perversity fill up the spaces with the most formal plants they can get; whereas

the merest common sense should have taught them to lay out their morsel of ground in the simplest way,

ここで指摘される「風景庭園様式の醜い大きな庭」とそれを模倣した庭が具体的にどの庭を指すかは特定できないが、モリスが「風景庭園」に対して懐疑的であったことが窺える。「風景庭園」は18世紀初頭からヴィクトリア朝時代に至るまで、地主貴族の遊興を目的として知識人や芸術愛好家が様々な理論を展開し、創出したものである^{注30)}。とくに18世紀後半が盛期だとされる。そこでは庭園を自然の風景のように見せるため非整形の曲線が多用され、人間の手の介入を感じさせないようにするという人為が働いていた。モリスは中産階級の生活の場である郊外住宅地に「風景庭園」とは別の庭の在り方を求めている。かれは自生の素朴な花を植えることを推奨する。引用中の「最も整形的な植物」とは花卉栽培家^{注31)}によって品種改良された、その地域の植物相と無関係な植物のことである。ヴィクトリア朝時代には中産階級に園芸が普及するようになるが、過度に色彩鮮やかな毛氈花壇(carpet bedding)が流行し、品種改良されたものや外来種が導入された。モリスは「毛氈造園(carpet-gardening)」を人為的過ぎると批判している^{注32)}。また都市において昔から存在する樹木を家の建設のため無反省に切り倒すことを疑問視し、樹木を取り込むような家の制作方法を喚起する^{注33)}。庭の在り方について次のように言われる。

庭は大小に関わらず、秩序があると同時に豊富でなければならない。それは外の世界から垣によって区切られていなければならない。また、自然の我儘さや粗野性を模倣してはいけぬ。家の近くでなければ見られないようなものにしておくてはならない。^{注34)}

And now to sum up as to a garden. Large or small, it should look both orderly and rich. It should be well fenced from the outside world. It should by no means imitate either the wilfulness or the wildness of Nature, but should look like a thing never to be seen except near a house.

庭は(…中略…)人間と自然とがともに長い間、根気よく働きかけてきたものである。^{注35)}
generous garden, (……) where man and nature together have worked so long

庭は「外の世界」から人間生活を庇護する圏域であると同時に家の近傍に「秩序」や「豊富さ」を生じさせるものであると言える^{注36)}。「秩序」は人間に起因し、「豊富さ」は自然に起因すると解される。人間は「我儘さや粗野性」といった自然固有の「豊富さ」を形態において「模倣」することなく、人間固有の「秩序」を媒介として、庭を構成しなければならないのである。しかし、ただ人為に拠るのではない。自然が「働きかける」ことも意図されているのである。

モリスは「都市を美しい家々を含むひとつの庭にしたい」^{注37)}とも述べており、一軒の家の延長としての庭とは異なる意味で庭の概念を用いる。都市を庭にするとはいかなる事態であろうか。次項において自然と人間の関わり合いの問題として考察する。

2-2-2 「自然の美」と「芸術の美」

モリスは「この大地において何を見るべきか」について、「自然の美と芸術の美 (the beauties of Nature and the beauties of Art)」だとする^{注38)}。また「自然作品 (works of Nature)」と「芸術作品 (works of Art)」という対表現も用いる^{注39)}。beauties や works という複数形による表現は看過されてはならない。かれは、「偉大な師、自然の作品 (works of the great master, nature)」と表現している^{注40)}ことから、「自然作品」は自然の作用によって形成されるものの個別な様相を意味すると解される。一方、「芸術作品」は広義には「人間の創造した何か」であり^{注41)}、「畑や牧場の整地」「都市計画」「道路計画」などを含む「生活のあらゆる外的表現」によるとされる^{注42)}。かれが、beauties や works という複数形による表現を用いるとき、自然もしくは人間が形成したものの多様性に注目していると言える。モリスは「自然の美」と「芸術の美」をそれぞれ自立したものとして認めつつも、これら二者を「大地の美 (the fairness of the earth)」や「土地の表面の美 (the beauty of the face of the land)」という不可分の全体として捉える^{注43)}。自然と人間を「頭脳」や「手」の有無により区別しつつも「大地」に作用する (work) という点で同一視するのである。次の言説をみよう。

おそらくあなたたちは、私が今までにも、単なる非融合の自然作品に触れなかったと言うだろう。なるほどその通りである。すべての古い文明国でも、一軒の家も見えない田舎でさえも、その場所の様相は人間の作用によって大いに影響を受けるのである。灌木の並び、道路とそれから分かれた小道、すべて人間の手によって植えられた木々、育ちゆく作物、飼育された家畜と羊、堤で囲い水門を設けられた河川、これらのすべてが、我々の目前にある美を構成するのに役立っているのである。しかし、英国では、それに加えて、一軒の家も見られないことはめったにないし、ほんの少し前に見えた家を思い出せないということは全くない。つまり、我々英国人はいつでも、上述のような自然作品と芸術作品のトランジションにいるのだ。^{注44)}

Now perhaps you will say that, even so far, I have not been speaking of the simple unblended works of Nature. That is true. In all old civilized countries, even when we are in the country, out of sight of a single house, the aspect of the place is largely influenced by the work of man: the hedge-rows, the road, the lanes leading out of it, the trees which have all been planted by men's hands, the growing crops, the tame beasts and sheep, the banked and locked river, all these go to making up the loveliness which lies before us. But, besides all that, it is seldom in England that we can be out of sight of a house, never out of memory of one seen but a little while ago. So here we are brought at once to that transition between works of Nature and of Art,

「非融合の自然作品」とはスイスの山や溪谷、アペニン山脈など人為の加わらないものであると別言されている^{注45)}。引用では、人間生活の営まれる場所において、「自然作品」に「人間の作用」が加わったものの具体例が示される。例えば、「灌木の並び」は「灌木」という「自然作品」と「並べる」という「人間の作用」の融合によって成立する「場所の様相」である。かれはこのような自然と人間の交差する場所を時間概念である「トランジション」という言葉を用いて把握している^{注46)}。「大地」への自然と人間との遷移的な働きかけを可能にするよう、時間や変化を考慮して家の制作に始まる「生活のあらゆる外的表現」を

せねばならぬ、というのがモリスの趣旨である。前節でふれた「都市を美しい家々を含むひとつの庭にしたい」とは、この地平からの発言であると言えよう。

2-2-3 「トランジション」としての「庭」

モリスは、都市と単調な田園の双方において庭を設ける必要性を説く。都市では家だけではなく、工場などの働く場所にも庭を作るべきだと言う^{注47)}。この視座から都市と田園を捉え直すと、都市には自然がなく、田園には自然があるという対立的な見方は不問となる。どちらにも親和的な自然はないのである。庭を考えることは自然と人間の共生的関係を自覚することである。庭は人間の要求によって「家造り」の延長として生じ、自然が「働きかける」ことを受容する「トランジション」とであると解される。庭が遷移的变化の場として開かれることは、家と外的環境とを緩やかに融合し、家と庭が都市や田園の風景として成立する契機となると言えよう。

2-3 生活芸術思想と「喜び」の概念

2-3-1 「民衆の芸術」における制作者と受容者

前2節により、モリスの住まい論における、「家造り」と「庭作り」の実践的側面が考察された。両者に通底して、自然（自然物）を徹底的に洞察しながら芸術を考える態度が窺える。かれは「素材」や「トランジション」という自然と芸術の両義的性格を有するものに眼を向けようとする。本節ではこの意味について、モリスの制作論の中核にある「喜び」という倫理的概念を整理しながら考察する。

モリスはオックスフォード大学在学中にジョン・ラスキンの著書『ヴェニス石』第2巻の「ゴシックの本質」という章に感銘を受け、生涯にわたる影響を認めている。この章に書かれている内容は「芸術的（artistic）側面」と「倫理的（ethical）および政治的側面」に大別でき、両者とも称揚すべき内容だが、「幾世代にも受け継がれるべき」ものは後者だとされる^{注48)}。前者はゴシック芸術の形態に関する考察、後者は中世社会におけるゴシック芸術の在り方に関する考察のことである。次の言をみよう。

ここにラスキンが教示するのは、芸術とは人間が労働の中に見出す喜びの表現である、ということである。^{注49)}

For the lesson which Ruskin here teaches us is that art is the expression of man's pleasure in labour

モリスの著作において「喜び」なる語は多用される。上引では、労働における「喜び」が問題となっているが、かれはそれを「ものを作る喜び」とも呼び、「ものを買う喜び」や「ものを売る喜び」よりも上位としている^{注50)}。なぜなら、市場価値という外在的基準ではなく、ものに内在する作り手の「喜び」の有無によって「美」を判断しようとするからである。かれは芸術という概念を社会全般の労働に敷衍することによって人間性回復の方途を見出している。論考「芸術と労働」^{注51)}では、芸術を次のように定義している。

芸術とは、精神的であれ肉体的であれ人間の労働によって創出される美であり、大地におけるあらゆる環境を含む生活において人間が興味を抱いたことの表現である。換言すれば、芸術とは人間がもつ生活の喜びである。^{注52)}

beauty produced by the labour of man both mental and bodily, the expression of the interest man takes in the life of man upon the earth with all its surroundings, in other words the human pleasure of life is what I mean by art.

芸術という言葉には芸術作品と芸術行為という意味があるが、ここに言われる「美」とは芸術作品に見出される特質であり、「表現」とは第1節でみたように、芸術行為における「想像力」の行使を意味する。また、「喜び」は「美」という対象的側面と「表現」という作用的側面の両者を含む概念であり、芸術作品の制作者と受容者の両者に共有されると言える。このような「喜び」を介した、制作者↔芸術作品↔受容者の全体的な関係を実現するためには「民衆の芸術」の復興が必要であるとされる。「民衆の芸術」は「生活の喜び」とも呼ばれ、制作者と受容者に同一の思想的基盤がある上で、生活に必要なものを制作すること、またはその制作されたものを意味する。民衆の労働とは人間の日常生活と不可分であり、本来的にはそこに何らかの「美」を見出せると言うのである。モリスは講演「装飾芸術——その現代生活および進歩との関係」の中で、「装飾の役目」について次のように説明している。

我々が必然的に使用するものに喜びを与えることが装飾の一方の役目であり、我々が必然的に制作するものに喜びを与えることがもう一方の役目である。^{注53)}

To give people pleasure in the things they must perforce USE, that is one great office of decoration; to give people pleasure in the things they must perforce MAKE, that is the other use of it.

引用中の「必然的に」という表現には、使用するもの、制作するものはまず実用性に根差しているという前提が含意されているであろう。「使用するもの」に見出される「喜び」とは「装飾」により惹起されるのであり、「使用するもの」の実用性によるのではないことが分かる。あくまで使用者は制作者の「喜び」を共有できるべきなのである。引用部の直後、モリスは「制作するものに喜びを与えること」を説明するのにラスキンの「ゴシックの本質」を引いている。モリスは「制作する」という観点だけではなく「生活」において「使用する」という観点を含めて「喜び」を論じている。モリスはラスキンが「ゴシックの本質」によって提示したゴシック芸術における「労働」と「喜び」の問題を、「生活の喜び」という観点から解釈し、独自の芸術論を展開したと言える。

白石の研究^{注54)}で明らかにされているように、ラスキンはモリスのように工芸を芸術の範疇に入れることをせず、日常使用品が主題化されることは少ない。対し、モリスは工芸を芸術の範疇に入れ、「民衆の芸術」や「生活の喜び」という表現によって工芸を捉えようとする。その理由として craft という言葉の限界が指摘できる。craft という言葉は工芸という行為を意味し、工芸品という意味はない。それに対し、art や pleasure という言葉は行為と作品の両義を担うことができる。「民衆の芸術」や「生活の喜び」という表現は、日常使用品に本来的に備わるべき制作者と受容者（使用者）の双方向的な関係を端的に示し得る

のである。そしてかれは「民衆の芸術」＝「生活の喜び」の初発的なものとして家を掲げ、究極的には民衆が自足的に家を構えることを理想とするのである。かれは労働者が「生活の喜び」を奪われた状況を嘆き、次のように述べる。

労働者は喜びのある家や喜びのある場所に住まうことを主張しなければならない。^{注55)}

The workman must claim to live in a pleasant house and a pleasant place.

「家」と「場所」とが pleasure と同根の語 pleasant によってそれぞれ形容される。この峻別は何を意味するのか。自然の作用を凝視するモリスにとって「場所」に見出される「喜び」とは「民衆の芸術」の所産に限られないと推察される。第2節において、モリスの言う「自然の美」と「芸術の美」を取り上げ、これら二者が「大地の美 (the fairness of the earth)」という全体として把握されていることを確認した。本論では、fairness を「美」と訳出したが、「公平」「公正」とも訳し得るこの倫理的な言葉から分かるように、モリスは万人、さらには万物に共有される「大地」を見据えている。このこととかれが「喜び」という概念を「場所」に適用することの連関が問われてよいであろう。ここで「喜び」という概念の実相が明らかにされなければならない。

2-3-2 「ひとつの喜び」なる全体

先に、「喜び」が芸術作品の制作者と受容者の双方に共有されるものであることを指摘した。モリスはそのためにはまず、「芸術に内在する生命 (life in Art)」を観照する「眼」を鍛えなければならないと言う。受容者の「喜び」についてこう著述する。

主として眼によって生きる人々は、芸術の事柄を取り扱う際にかれらの知性も使うことが実際にできなければならない。しかしやはり本質的なことは、民衆は一般に眼によって様々な印象を受け取ることができるべきであり、この過程が喜びとなるべきである。(…中略…) これは芸術から受ける喜びは本来、感覚的であるという明白な事実を述べているだけである。^{注56)}

it is indeed necessary that those who live chiefly by the eyes, should be able to use their intelligence also in dealing with matters of art; but, nevertheless, the essential thing is that people generally should be capable of receiving impressions through the eyes, and this process should be a joy to them, (……) This is, of course, only stating the obvious fact, that the pleasure taken in art is primarily sensuous;

「知性」と「印象」とが、対応関係として挙げられており、「印象」に「喜び」の根拠を見出している。前章にみるように、モリスは「用」と「美」との結合には、「発明力」と「想像力」というふたつの思惟作用が関わるとする。引用中の「知性」は「発明力」と同義であり、表現媒体の素材や用途など実在的要求に関わり、「印象」は「想像力」によって非実在的な作品世界を享受するときに生じるものであり、表現内容と受容者の主体性に関わると言える。ここでは、「芸術の事柄」について述べられているが、モリスは人間

による芸術だけでなく、自然と人間によって構成されるものを観照する能力の必要性を説く。次の言をみよう。

トランジションでは、自然作品と芸術作品が独自の役割を果たし、両者がさいわいに調和されたら、眼がもつことができ、もっとも直接想像力に訴える最大の喜びを創出するのである。^{注57)}

transition between works of Nature and of Art, wherein each plays its own part, and which, when they are happily harmonized, produce the greatest pleasure that the eye can have, and appeal most directly to the imagination.

「最大の喜び」と言われていることから、自然と人間が関わることにより形成されてきた「トランジション」という歴史的風景にとくに価値を見出していることが分かる。かれはまた、「英国の風景」から「特性 (character)」を読み取る能力が必要だとする。「特性」は「眼を通して想像力に触れること」によって見出されるものであるとされる^{注58)}。「印象」や「特性」という一義的に決定されない「感覚的」なものへの志向性は何に起因するのであろうか。「眼」(観照能力)を鍛えることと「創造」の関係が、次のように言われる。

人々が大地の表面や、大地に存在する人間から自発的に為された作品を見ると同時に、今もなおそれらに明らかに残されているひとつの喜びを見ることができるようになり始めるころには、かれらもそのような作品の創出に貢献する必要がある、創造へと駆り立てられなければならないと気づくであろう。^{注59)}

I feel sure that by the time people have begun to see the face of the earth, and the works of mankind upon it that were done spontaneously, and with a pleasure which is still obvious upon them, they will find it necessary to do their share in the production of such works, and be impelled toward creation.

「大地の表面」とは「自然作品」と「芸術作品」の融合により形成される「トランジション」のことであり、「英国の風景」もそのひとつである。ここで、「大地の表面」や「作品」という複数の対象に「ひとつの喜び (a pleasure)」という同一のエートスが措定されていることが注目される^{注60)}。このような把握を可能ならしめるのは、自然と人間の同一性を認める次のような考え方である。

全ての人間は、いや、全ての生き物もそうであるが、働かねばならない。だから、犬は狩り立てることに、馬は走ることに、鳥は飛ぶことに喜びを見出し、そのみならず、大地も大地の構成要素も、そのあてがわれた仕事をするのを喜んでいると、我々はひそかに想像している。^{注61)}

all men, nay, it seems all things too, must labour; so that not only does the dog take pleasure in hunting, and the horse in running, and the bird in flying, but so natural does the idea seem to us, that we imagine to ourselves that the earth and the very elements rejoice in doing their appointed work;

モリスは、「人間」だけでなく、「犬」「馬」「鳥」など「全ての生き物」の動性、さらには「大地」や「大地の構成要素」(=素材)の動性にも「喜び」を見出す。前述の「ひとつの喜び」は万物に普遍的な動的事

態の謂であると解される。この動性は「感覚的」にしか把捉することができず、その過程が「喜び」を伴って「印象」や「特性」を創出すると言えよう。また、制作者は「ひとつの喜び」という自然と人間の同一性を一切の制作の基盤に据えて、自発的に「想像力」を行使することに、個々の「ものを作る喜び」を得るのである^{注62)}。作品の観照から「ひとつの喜び」を発見し（多即一）、個々の「喜び」を伴って作品を創造する（一即多）という連鎖的制作として、モリスは日常使用品、家、庭の制作を捉えたと言えるであろう。ここに前項でふれた、「家」と「場所」の峻別は次のように解される。「家」とは「人間」の働きと「大地の構成要素」から成る「素材」によって構成されるものである一方で、「場所」とは「全ての生き物」および「大地の構成要素」の働きとともに構成されるものである、と^{注63)}。

2-3-3 補論：ラスキンと「テオリア」の概念

ラスキンは『近代画家論』（1846）第3部第1節第2章‘Of the Theoretic Faculty as Concerned with Pleasures of Sense’の中で「美の印象 (impressions of beauty) は肉欲的 (sensual) でも知的 (intellectual) でもなく道徳的 (moral) である」とし、「その印象を受け取る能力に関して言えば、その能力が単なる知覚と異なることを直ちに説明しようとすれば、ギリシャ人の用いる“*Theoretic*”という言葉よりも正確で便利な言葉はない。そして私はいつもこの言葉を用い、その能力の作用を *Theoria* と呼ぶことをお許しください」と「印象」を受け取る能力に着目している。*Theoria* は「観照」「観想」「凝視」「構想」と訳されるものであり、*Aesthesis* と区別される。かれは *pleasure* という言葉を用いて、*Aesthesis* は「pleasantness についての単なる動物的知覚」であり「肉欲的な pleasures」という継続できないものの知覚（触覚、味覚、唯美的 (aesthetic) な把握に留まる美的感覚）であるとし、*Theoria* は「私たちを創造し、育む知性的存在の直接の作用を知覚すること」（視覚、聴覚）であり、「これらの pleasures は果たすべき機能がなく、それ自身が目的であるため目的を達成してもその継続に限界がない」とされる。ラスキンは *Theoria* に伴う *pleasure* の自足性と永遠性を「神」に帰着させる。*Theoria* の対象は「優しいものだけではなく、粗野で恐ろしいもの、さらには、粗末で平凡に見えるあらゆるもの」だとする。モリスは、*Theoria* なる言葉を用いることはなく、「神」に *pleasure* の根拠をみることもないが、モリスの言う「印象」はラスキンのそれとほぼ同義であろう。

小結

本章の目的はモリスの「住まい」に関する思索の構造を解明することにあつた。以下、各節で得られた見解を要約する。第1節では、「工芸」なる概念が「用と美という二つの要素の統合」という意味において、「建築」と同義であること、「家造り」が「高尚な工芸」とされるのは、生命維持という「用」に関わり、「部屋」の構成において複合的な工芸の技術や他の工芸品の配置に関わるためであることが分かった。第2節では、「庭作り」が人間生活の庇護に関わりつつ、人間の「秩序」と自然の「豊かさ」によって制作されること、「庭」の概念が「トランジション」という自然と人間の共生的関係を成立させる遷移的変化の場を示すものとして用いられることが明らかとなった。第3節では、モリスが「家造り」と「庭作り」の両者において自然と芸術の両義的性格を洞察する根拠を「喜び」の問題として解説し、「喜び」の感覚性が万物の動的事態に起因し、そこに観察と創造の連鎖的關係が見出されていることを論じた。

ここで改めて、モリスが芸術と工芸を「建築」という概念によって捉え、「家造り」を「全ての始まり」としていること、都市と田園の両者を「庭作り」から問い直そうとしていることを指摘したい。モリスは、芸術と工芸、都市と田園という二元的な把握をするが、それは同時代の人々がどちらか一方を偏重していることに起因するのであり、かれにとって本質的差異はない。さらにかれは「喜び」という制作および受容における倫理的作用に着目し、「家造り」と「庭作り」を同じ精神によって捉えていたと言える。それこそが「工芸」の精神であり、「建築」の精神である。日常生活の場としての家や庭を問うこと、すなわち「住まい」を問うことは、「ひとつの喜び」という「大地」の根源へと回帰し、「住まうこと＝生きること (to live)」の日常性を再発見する契機となるのである。

第2章 注記

注1) The Gothic Revival, [UL-85]

注2) The Beauty of Life, [XXII-73-4]

注3) Making the Best of It, [XXII-116]

注4) The Beauty of Life, [XXII-91]

注5) Art and the Beauty of the Earth, [XXII-155]

注6) craft の他に, work という語の派生語 handiwork, workman, worker, workmanship も散見される。「働くこと」への問いが, かれの芸術論と労働理論の同一基底にある。

注7) The Lesser Arts, [XXII-14]

注8) 上掲書, [XXII-359]

注9) それぞれ to make their household and personal goods beautiful as well as useful (Of the Origins of Ornamental Art, [UL-138]) / to unite these two elements of use and beauty (Art and the Beauty on the Earth, [XXII-155])
・ Of the Origins of Ornamental Art, 「装飾芸術の起源」は 1886 年 5 月 19 日のケルムスコット・ハウスにおけるものの他に数回行われた講演である ([UL-136,306] 参照)。

注10) The Arts and Crafts of To-day, [XXII-356]

注11) The Lesser Arts of Life, [XXII-236]

注12) 上掲書, [XXII-239-40]

注13) 前章において「人間の手」と「素材」との関わり合いを表現の問題として論じた。その中で, 「想像力」と「発明力」という思惟作用を挙げたが, 本章で取り上げた「頭脳」はこれらの作用を統制する器官として考えることができる。

注14) The Art of the People, [XXII-41]

注15) The Beauty of Life, [XXII-74]

注16) Cotswolds は, グロースターシャの東部が大部分を占め, ウスターシャ, ウォーリックシャ, オックスフォードシャ, ウィルトシャの一部から成る英国中央部の丘陵 (wold) 地帯。1966 年に特別自然美観地域 (Area of Outstanding Natural Beauty) に指定された。'Making the Best of It' では, コッツウォルズ北部のブロードウェイ村について述べられている。モリスの後継者のひとりである C.R. アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) は 1902 年にギルド・オブ・ハンディクラフトの実践の地としてブロードウェイ村の北東にあるチップینگ・カムデン村を選んでいる。

注17) The Influence of Building Materials upon Architecture, [XXII-391-405]

・ The Influence of Building Materials upon Architecture, 「建材の建築への影響」は 1892 年 11 月 20 日, ロンドンにおいてアート・ワーカーズ・ギルドのために行われた講演である ([UL-318] 参照)。アート・ワーカーズ・ギルドは, 1884 年にセント・ジョージ芸術協会を母体として創設された, 諸芸術の交流を目的として議論・集会を行う組織である。

注 18) 前掲書, [XXII-397]

注 19) モリスはヴィクトリア朝の醜惡な家や建物を規模に関わらず, Victorian Architecture という一時代の様式として括っている。『フォートナイトリー・レビュー』1888 年 5 月号に寄稿した論文“The Revival of Architecture”([EL-333] 参照)において Victorian Architecture の具体例として「郊外における安普請の家々, 海岸沿いにおけるスタッコの行列, 英国のあらゆる町角にある派手なパブ (public-houses), エディンバラのクイーンズ・パークの壮麗な風景を台無しにする瘦せこけた醜惡な家々」が挙げられている。Victorian Architecture についての記述は, Gothic Revival, [UL-81,87] / The Arts and Crafts of To-day, [XXII-364] にも見られる。モリスが Victorian Architecture を話題にするとき, 「様式 (style)」という概念と関連している。かれは a really living style (The Influence of Building Materials upon Architecture, [XXII-391]) や a universal architectural style (The Revival of Architecture, [XXII-329]) という表現を用いて一時代に限定されない建築の在り方を説明している。style については前章第 3 節において「歴史」や「伝統」の概念とともに論じた箇所を参照されたい。

注 20) Making the Best of It, [XXII-107]

注 21) ‘Making the Best of It’において示される内容を要約すれば, 「天井」は「根太や梁」を直に装飾できるように, 露出するのが良い [XXII-94]。「窓をむやみに大きくしすぎると光が入りすぎて, 内部にいる者はシャッター, ブラインド, カーテンなどが必要となる」ので適切な大きさにすべきである [XXII-94]。「床」は「実際の床を見ることが快適である」ように上質の素材を用いた方が良い [XXII-93]。

注 22) Making the Best of It, [XXII-91]

注 23) 上掲書, [XXII-83]

注 24) The Prospects of Architecture in Civilization, [XXII-150]

注 25) Making the Best of It, [XXII-92] モリスはこの講演において家の内部空間を論じる場面に至り, まず次のように述べている。「我々は家の内部空間に辿りついた。我々は住もうとする部屋の中にいる。部屋で何でも何とでも呼びなさい」(So we have got to the inside of our house, and are in the room we are to live in, call it by what name you will.) と。モリスが「部屋」を既知のものとして名指しする態度を拒否していることが分かる。

注 26) 装飾には「用途」や「素材」に応じた程度があると言う。具体的な例を示す。「壁紙」は「一室内に一種以上の模様を用いない」(Making the Best of It, [XXII-96])。「天井も壁のように紙を貼ってはどうかと言われる」が, 「一面に紙を張り詰めた部屋ではまるで紙箱の中に住んでいるようである」(前掲書, [XXII-94])。「暖炉」は「壁に適当な形の穴をあけ, 煉瓦かタイルを貼った」ものでよく, それは「火にも耐え, 掃除もすぐのできる」(前掲書, [XXII-112])。「特別家具」(造り付け家具)は「用のためであると同時に, 美のためであることを要する。それには装飾 (ornament) を惜しむ必要はない」(The Lesser Arts of Life, [XXII-262])。以下, 「中心や個性」に関する具体的事例をモリスの自邸であるレッド・ハウスに一瞥する。レッド・ハウスは 1859 年から翌年にかけて, フィリップ・ウェブ (Philip Webb, 1831-1915) がモリスの依頼を受けて設計したものであり, ケント州ベクスリーヒースに建つ。この作品にはモリスの「家造り」に関する考え方が反映されている。モリスは「四角い箱に蓋をしたような家」を嫌い, レッド・ハウスでは L 字型の平面を採用している。この家では, L 字の屈曲

点に配された階段室（ホール）、1階ダイニング、2階客間が家の「中心」を構成している。また、立面における造形的な多様性は個々の「部屋」の「個性」が表出していることによると言える。例えば、2階東棟の南面に配された丸窓の列は、客間と書斎とを媒介する廊下の「個性」が立面に表出したものであり、西側立面の張り出し窓は2階客間に要求される腰掛の「個性」として理解できる。

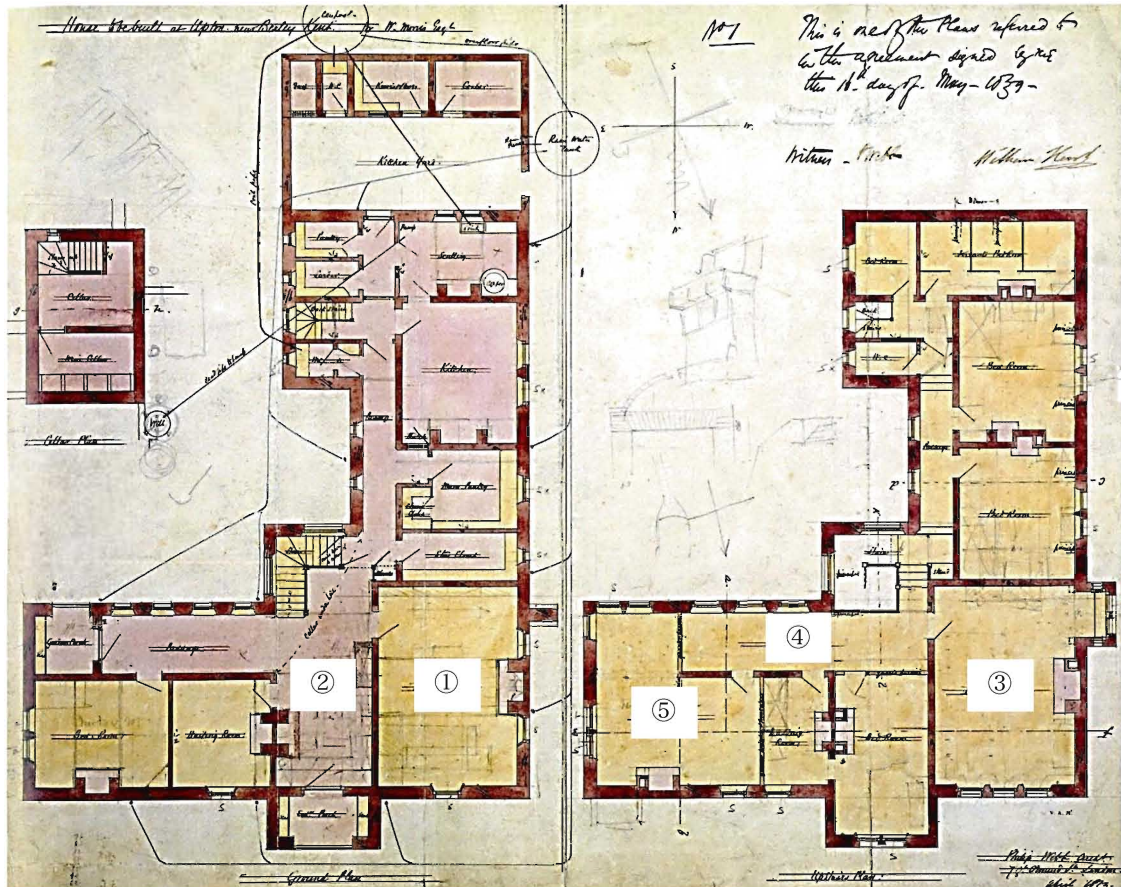


図9 フィリップ・ウェブによる図面

左が1階平面図、右が2階平面図、方位は図面上部が南。

①Dining Room ②Hall ③Drawing Room ④Passage ⑤Study



写真1 レッド・ハウス中庭側外観



写真2 レッド・ハウス西側外観

注 27) モリスの構想する庭についての先行研究として Duchess of Hamilton, Jill, Hart, Penny, and Simmons, John:

The Gardens of William Morris, Frances Lincoln, 1998 (鶴田静訳『ウィリアム・モリスの庭：デザインされた自然への愛』, 東洋書林, 2002) が挙げられる。この研究では、「モリスとその庭」として、モリスの住居であるレッド・ハウス、ケルムスコット・マナー、ケルムスコット・ハウス、仕事場であるマートン・アビーの庭が実証的に考察されており、実践的内容を知る上で本論に示唆を与えてくれる。

注 28) Making the Best of It, [XXII-91]

注 29) 上掲書, [XXII-87]

注 30) 「風景庭園」の理論については安西信一『イギリス風景式庭園の美学：〈開かれた庭〉のパラドックス』, 東京大学出版会, 2000 に詳しい。安西は「風景式庭園をめぐる美学的言説史」を風景式庭園の誕生以前から現代まで射程に入れ分析している。岩切正介『英国の庭園：その歴史と様式を訪ねて』, 法政大学出版局, 2004 では「風景庭園」が英国庭園史の中で捉えられ、作品と共に解説されている。ここでは「アーツ・アンド・クラフツの庭」としてモリスの庭が紹介されており、英国庭園史という一連の流れの中でモリスの庭を把握する際に一助となる。

注 31) モリスは同論文において、花卉栽培家 (florist) がバラの大輪を得ようとして品種改良したことについて次のように述べている。「彼らはバラそのものの本質を取り逃がしてしまった。彼らはその中には豊満と贅沢しかないと思ったのであり、これを誇張しようとして大味なものにしてしまったのである。一方彼らは、形態の美しい精妙さ、組織の優美さ、色彩の妙味を捨ててしまったのである。」[XXII-88]「バラ」という自然作品に人間が品種改良を加えることは「バラ」に内在的な作用性を損なうことになるのである。

注 32) Making the Best of It, [XXII-90]

注 33) 上掲書, [XXII-87]

注 34) 上掲書, [XXII-91]

注 35) The Prospects of Architecture in Civilization, [XXII-129]

注 36) 「外の世界から垣によって区切る」「家の近くでなければ見られない」というモリスの「庭作り」の方法は、「風景庭園」がその初期に〈ハハ〉と呼ばれる隠し堀によって外部の自然と庭とを視覚的に連続させる方法を用いたことと対照的であると言えよう。また、「家の近くでなければ見られない」ものは外来種を用いて植物の形態を主張するといういわゆる「ガーデネスク (J・C・ラウドン (John Claudius Loudon, 1783-1843) による造語。詳細はラウドン『19 世紀イギリス：庭園・農業・田園建築百科事典』および安西信一による別冊解説『ガーデネスクなガーデン』, Athena Press, 2007 を参照のこと)」の効果によるのではなく、生活の場の延長として生活者の個性 (秩序) を庭に表出するという仕方によって実現されると言えよう。

注 37) Town and Country, [MII-306]

・Town and Country, 「都市と田園」は 1892 年 5 月 29 日に行われた講演であり、マッケイルのモリスに関する評伝から部分的に内容を知ることができる ([UL-319] 参照)。

注 38) An Address... Birmingham, [XXII-426]

注 39) 上掲書, [XXII-428]

注 40) Art : a Serious Thing, [UL-43]

・ Art : a Serious Thing, 「芸術－真面目なこと」は 1882 年 12 月 12 日, リーク芸術学校において行われた講演である ([UL-297-8] [EL-312] 参照)。リマイアによれば, この表題はモリス自身によるのではなく, W.R. レサビー (William Richard Lethaby, 1857-1931) によると考えられる。

注 41) The Lesser Arts of Life, [XXII-235]

注 42) Art under Plutocracy, [XXIII-164-5]

・ Art under Plutocracy, 「金権政治下の芸術」は 1883 年 11 月 14 日, オックスフォードのユニバーシティ・カレッジにおいて行われた講演である ([UL-298-9] [EL-313] 参照)。講演会にはラスキンも同席していた。『ジャスティス』誌 1884 年 2 月号に掲載の際, 上記の表題がつけられた。『ジャスティス』は, 1884 年 1 月から社会民主連盟によって発行された週刊の社会主義機関紙であり, モリスはその資金援助も行った。

注 43) An Address... Birmingham, [XXII-428]

注 44) 上掲書, 同頁

注 45) 上掲書, [XXII-427]

注 46) transition は一般的には「移行」「変遷」と訳される時間概念であるが, 本論では, モリスが遷移的な変化に開かれた場所という意味で用いていることを考慮し, 「トランジション」とカタカナ表記とする。モリスは「トランジション」という言葉の他に, 「同化する」という表現を用いて, 「自然作品」と「芸術作品」の時間的な関わり合いに眼を向けている。次のように著述される。「時の経過が建物を周囲の自然に同化し, ついにそれは人為のものとは思われなくなり, むしろまさに土壌そのものから成長してきた, 人為的ではない必然的な成長物であるように見えるのである。」(The lapse of time (……)will assimilate it (=a good building) to the surrounding nature, until it seems at last scarcely to have been made, but rather to have grown up from the very soil, an unartificial, inevitable growth.) An Address... Birmingham, [XXII-433]

注 47) A Factory as It Might Be, [II-131]

・ A Factory as It Might Be, 「あるべき工場」は, 1884 年 5 月 17 日付, 5 月 31 日付, 6 月 28 日付の『ジャスティス』紙に分載された論文である ([EL-244-5] 参照)。

注 48) Preface, [NG-ix]

注 49) 上掲書, [NG-vii]

注 50) The Lesser Arts, [XXII-23]

注 51) Art and Labour, [UL-94-118]

・ Art and Labour, 「芸術と労働」は 1884 年 4 月 1 日にリーズ哲学文学会において行われた講演であり, 後にレスター, ロンドン, マンチェスター, ニューカッスル, プレストン, グラスゴーなどの聴衆に向けて同講演が行われた ([UL-94, 300] [EL-315] 参照)。講演の冒頭で, 「この大工業都市において」という表現が見られるが, リマイアは上記の都市はすべて「大工業都市」とみなしうることを指摘している。

注 52) 上掲書, [UL-94]

注 53) The Lesser Arts, [XX II -5]

注 54) 白石博三『ラスキンとモリスとの建築論的研究』, 中央公論美術出版, 1993, pp.158-61

注 55) Art and Labour, [UL-114]

注 56) An Address... Birmingham, [XX II -424]

注 57) 上掲書, [XX II -428]

注 58) 上掲書, [XX II -427]

注 59) 上掲書, [XX II -434]

注 60) 同内容を示す a pleasure という表現は [MII -301-6] に所収の 'Town and Country' にもみられる。次のように用いられる。「ここに居る人々は、緑の野原、木々、川、山などにひとつの喜びを抱かないような異常な人々ではないだろう。人間を含む生き物はこれらの場面、言い換えれば、自然の普遍的な美と出来事に居住するのである。」

(there is nobody here so abnormally made as not to take a pleasure in green fields, and trees, and rivers, and mountains, the beings, human and otherwise, that inhabit those scenes, and in a word, the general beauty and incident of nature:) 本論の引用部では志向的对象として a pleasure は用いられているが、ここでは作用の意味で用いられている。

注 61) The Art of the People, [XX II -42]

注 62) ここで付言しておく、モリスは芸術の形態やそれを実現させる「知性」を副次的なものとしているのではない。

「喜び」の根拠となる「印象」やそれを創出、受容する作用である「想像力」を欠いて「知性」を偏重することに批判的なのである。モリスは自然にデザインの源泉を求めるが、人間と自然との差異を認め、自然をそのまま模倣するのではなく「知性」によって人間の表現と素材の属性との間に「秩序」を見出すことの必要性を説く。かれは人間と自然とは働くという次元においては同一であるとしつつも、「知性」を具えた人間が「人間の不断の生命」という「伝統」を更新することも重視する。

注 63) モリスの言う pleasure と英国の近代都市計画における鍵概念 amenity の類似点を指摘しておく。周知のように amenity の簡潔な定義は the right thing in the right place である。本章において示したモリスの言葉, to live in a pleasant house and a pleasant place が思い出される。David L. Smith は Amenity and Urban Planning, Crosby Lockwood Staples, 1974 (川向正人訳『アメニティと都市計画』, 鹿島出版会, 1977) において amenity の意味をその語源を辿って紹介している。amenity は pleasantness と同義であり、ラテン語の amoenitas (pleasant の意) から派生したものであり, amare (love の意) という語源にまで遡れると言う。また、辛島司朗は『環境倫理の現在』, 世界書院, 1994 の中で「生の働きを推進するものが(愉)快 pleasure であり,(安)楽にするのが好ましき amenity であり、総じては「よろこび」である」と定義し, amenity は「快を補償するものの中の特に場所的環境要素」だとする。モリスの示す pleasure は場所的要素にも見出されるものであり、現代の環境問題を自然と人間の適切な関係という観点から捉えるとき、有効となろう。

第3章 モリスの社会主義論

前章では、「民衆の芸術」を家や庭という生活環境についての制作者および生活者の問題として論じた。初期の講演を収録した『芸術の希望と不安』では、家や庭に関する言及は主として都市郊外における中産階級の日常生活を対象としている。しかし、『変化の兆し』に代表される社会主義的著作では労働者階級の労働環境を含めて、生活そのものが捉え直されることになる。この時期モリスの制作に関する方法論も深化していると考えられる。本章では、モリスが1880年代後半から社会主義の実践と並行してアーツ・アンド・クラフツ展覧会に関与していることに着目し、制作概念と社会概念の両面をもつ「手工芸」という概念に関わる諸問題を分析することにより、1880年代の思想の核に迫りたい。

モリスはアーツ・アンド・クラフツ展覧会の創始期に「手工芸のリヴァイヴアル」という論文を著し、「手工芸」の方法に立ち返ったとき、労働者に「美しい環境と幸福な仕事という二重の喜び」が付与されている^{注1)}。この論文においてアーツ・アンド・クラフツ運動と社会主義運動が結束することの必要性が述べられており、「手工芸」の方法への問いがかれの主たる関心であったことが窺える。藤田の研究によって明らかにされているように、「アーツ・アンド・クラフツ」という言葉を「美術と工芸」というように捉え、アーツ・アンド・クラフツ運動を工芸を美術に高める運動であると理解することは誤謬である^{注2)}。この運動の名は1887年に結成されたアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会に由来する^{注3)}。協会の初代会長であり、モリスの弟子であったウォルター・クレイン (Walter Crane, 1845-1915) は、1893年に出版された論文集の中で協会を組織した動機について次のように述べている。

すべての芸術の真の根源と基盤は手工芸の中にある。デザインと職人技術に存する真に芸術的な力や感情を認識する機会がなければ、また、芸術が素朴な対象や素材に認められず、賞を与えられるような絵画的な技法にのみ価値があると感じられたら、芸術は健全な状態にあるはずがない。^{注4)}

The true root and basis of all Art lies in the handicrafts. If there is no room or chance of recognition for really artistic power and feeling in design and craftsmanship—if Art is not recognised in the humblest object and material, and felt to be as valuable in its own way as the more highly rewarded pictorial skill—the arts cannot be in a sound condition.

藤田の論考に依拠すれば、ここで並置される「デザインと職人技術」を「アーツ・アンド・クラフツ」として理解できる^{注5)}。「デザインと職人技術」の根源的な存在様態が「手工芸」の方法にあると考えられるが、その内実とはいかなるものであろうか。

本章では、第1節にて、1880年代の社会主義運動におけるモリスの立脚点を確認する。第2節にて、「幸福な仕事」を実現する「手工芸」の方法について論じる。第3節にて、「手工芸」の方法によって創出される「美しい環境」について論じる。

3-1 1880年代の社会主義運動とモリス

3-1-1 1880年代のモリスの言説

モリスの後継者のひとりとして知られるチャールズ・アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) は1906年に出版された著書『社会主義と政治—生命の価値の再整理に関する研究』の中で、20年前に「価値 (value)」と「財貨 (riches)」という概念の定義が問題となっていたことを指摘している^{注6)}。当時の英国では、マルクス主義の最初の世代が形成されつつあった^{注7)}。モリスもカール・マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818-1883) の思想に感化されたひとりである。かれは1883年に仏語版の『資本論』第1巻を読み、その経済学的著述の部分よりも歴史的著述の部分に強く惹かれた^{注8)}。安川の研究^{注9)}に詳述されているように、ここでモリスは階級概念と弁証法的歴史観をその思想に組み込んだ。1883年以降、生産階級と所有階級という分類から生産の意味を問う言説や中世と現代の連続性を主題とした言説が見られるようになる。モリスはこれらの言説の中で「価値」や「財貨」について言及している。後述するが、かれは「価値」についてマルクスの価値論のように経済学的に接近するのではなく、「生命の価値」という倫理的な観点から捉えている。また、「財貨」については1883年に「芸術、豊かさ、財貨」という題目の講演を行い、その中で次のように述べている。

豊かさとは慎みある生活をする手段を意味し、財貨とは他人への支配力を行使する手段を意味する。

注10)

wealth as signifying the means of living a decent life, and riches the means for exercising dominion over other people.

このように「豊かさ」と「財貨」を定義した上で、「芸術」とは「豊かさ」を創出する行為であるとの見解をもって社会をみるのである。

上の引用において「慎みある生活」ということが志向されているが、この時期の言説に特徴的なこととして、モリスが life (本論では適宜、文意により、「生活」と「生命」という訳語を使い分ける) という言葉とともに階級の問題や歴史の問題を捉えることが挙げられる。以下、life という言葉の使われ方をみてみよう。モリスは「ゴシック・リヴァイヴァル」と題された講演の中で、「人間の統一と人間の不断の生命 (the unity and continuous life of man)」という考え方に至ったと言う。また、同年に社会主義機関紙『コモンウィール』に掲載された「なぜいけないのか」という論考の中で、自分たちの理想的な原理は「生活の喜び (the pleasure of life)」であると表明しており^{注11)}、この「生活の喜び」という表現は同年の講演「芸術と社会主義」や「芸術と労働」においても鍵語として用いられている^{注12)}。1888年には「生活芸術 (the arts of life)」という言葉が使われるようになる^{注13)}。モリスは「手工芸のリヴァイヴァル」の中で、「生活芸術の詳細に関心のある人々は概して生産のために手工芸の方法に立ち返りたいと感じている」^{注14)}と述べている。「手工芸」の方法による生産が前提とする「生活」とはいかなるものか。この「生活」を共通基盤としてモリスは社会主義運動と芸術運動に関わっていたと考えられる。

3-1-2 弁証法的歴史観の醸成

モリスの「生活」についての記述を辿る前に、前節でふれた弁証法的歴史観についてみておこう。このことにより「立ち返る」という意味を明らかにしておきたい。1884年の論考「建築と歴史」において、古建築物について具体的に言及する前に、アカデミーの歴史家が示す学術的な歴史の世界は真実性のないものとし、歴史の捉え方が次のように示される。

もっとも最初の原初的秩序、それは様々な人種や国の中で変容するが、つねに同じ法則に支配される。その法則とは、原初的秩序が出発してきたところのものとは正反対に見える何ものかに向かって絶えず運動し続け、そしてそれにも関わらず、より初期の秩序は決して死なず新しいものの中で生き、そしてゆっくりそれより前のもの自体の再創造へと変化するということである。^{注15)}

(……); inchoate order in the remotest times, varying indeed among different races and countries, but swayed always by the same laws, moving forward ever towards something that seems the very opposite of that which it started from, and yet the earlier order never dead but living in the new, and slowly moulding it to a recreation of its former self.

モリスは社会主義運動の中で、歴史が「原初的秩序」への遡行を孕みながらその「再創造」として螺旋的に発展すると考えた。その状態が序章で言及した「無常性」や「永久の変化」と呼ばれる。かれの歴史観には「原初的秩序」という人間存在の根源的な在り方への問いと、「再創造」の事態が精練されているかという人間の行為の進歩性への問いが重ねられており、単なる懐古趣味ではない。その上で、モリスは人間生活の「原初的秩序」を「慎みある生活」として、分析していくのである。

3-1-3 芸術の目的としての「慎みある生活」

モリスは論考「いかに生きているかといかに生きるべきか」において、自身の追求する「慎みある生活」に必要な事柄を「生活条件 (the conditions of life)」として四点にまとめている。

第一に、健康的身体、

第二に、過去、現在、未来と共感した活動的知力、

第三に、健康的身体と活動的知力のための職業、

第四に、生きるための美しい世界。^{注16)}

To sum them up in brief, they are: First, a healthy body; second, an active mind in sympathy with the past, the present, and the future; thirdly, occupation fit for a healthy body and an active mind; and fourthly, a beautiful world to live in.

「第一」のものとして「健康」が最重要視され、その意味は「ただ生命に喜びを感じる事」であり、それはすなわち「人間という動物として当然の身体的欲求を充足することを喜ぶこと」であると言う^{注17)}。当時、商業主義的生産において労働者の身体が非人格化されている状況は動物に劣る生活だとするのである。次に求められるのが動物と人間とを区別する「知力」である。資本主義社会において、「身体」を隷属

させられる生産階級と「知力」を行使する所有階級という対立が生じているが、本来、「身体」と「知力」とは一個人の主体性に関わるものであり分離できないというのがモリスの見解である。モリスは論考「独占労働はいかに収奪されるか」において、「食料、衣料、住居（housing）—これらは人間の物質的条件（the material condition）の中で重要な三つの項目である」と述べている^{注18)}。人間の労働に「身体」や「知力」の本来性が回復され、「食料、衣料、住居」という生活の必要物が独立小生産者の労働形態によって生産されることが求められるのである^{注19)}。これらの生産には人間の組織化、モリスの言葉を借りれば「人間の統一」が不可欠であり、「第三」に掲げられる「職業」が問題となる。「職業」とは一個人を超えた共同性の次元に開かれているものであり、民族や風土に応じて構成されるものである。「第四」の「生きるための美しい世界」という表現は、「家」という個人の生活環境と「共同のホール」や「工場」など集団の生活環境の総称として用いられる^{注20)}。この時期、モリスは労働者の労働環境の在り方にとくに注目する。「第一」から「第三」の条件を満たした人間の働く場所が問題となるのである。次のように言われる。

仕事をする場所は、工場であろうと工房であろうと、我々のもっとも必要な仕事が為される畑とまさに同様に、喜びあるものでなければならない。^{注21)}

the places I worked in, factories or workshops, should be pleasant, just as the fields where our most necessary work is done are pleasant.

「工場」「工房」「畑」などは衣食住に関わる生産物を生産する場所である。「畑」の場合、生産行為によって生じる生産物は生産環境の一部である。「工場」や「工房」については、生産行為と生産環境の関わり合いの問題として、第3節において後述する。

「慎みある生活」とは生産行為と生産環境とが労働者（生活者）に直接的に関連することに始まるものである。モリスにあつては労働と芸術とが重ね合わせて把握される。ここで注目されるのが「芸術の目的」という論考である^{注22)}。モリスは自身の生活を詳細に考えたとき、それが「活動の気分（the mood of energy）」と「無為の気分（the mood of idleness）」という二つの「気分」のどちらかに支配されていることに気づいたと言う。これらの二つの「気分」に応じることが芸術の目的だとされる。すなわち「活動の気分」における実践対象としての芸術と「無為の気分」における鑑賞対象としての芸術とがあると言う。「活動の気分」に応じるために上述の「第一」から「第三」に示される個人的動機と社会的動機を含む生産行為の諸側面が必要とされ、「無為の気分」に応じるために芸術作品の資質を備えた「美しい世界」としての生産環境が必要とされるのである。人間存在の「気分」に着目し、生活（生きること）と生産（作ること）の不可分性を説きながら芸術と社会の在り方を問うところにモリスの思想の独自性がある。

以上、モリスの生活観なるものが生産の問題と関連づけられることを確認したが、ここでは生産の方法論にはふれなかった。「慎みある生活」を実現するために必要な生産物や生産環境はいかに制作されるのか、このことが問われなければならない。

3-2 「手工芸」の方法による制作の意味

3-2-1 モリスの機械観

モリスは「手工芸」と対照的なものとして「製造業 (manufacture)」を挙げる。かれは「製造業」という機械生産体制によって商業主義的製品が生産されることに批判的であった。「manufacturer とは自分の手で制作する者を意味するので、非常に不合理にそう呼ばれていることになる」と、manufacturer の語源の意味を強調することによっても「製造業」を批判している^{注23)}。「手工芸」と「機械」について次のように言う。

手工芸から機械への変化は良いのか、悪いのか。私の友人のベルフォート・バックスが述べているように、静的には悪く、動的には良い。生活条件として機械生産は完全に害悪である。しかしよりよい生活条件を我々に強いる手段としてはこれまでもそうであったし、これからしばらくの間も不可欠のものとなる。 ^{注24)}

Is the change from handicraft to machinery good or bad? And the answer to that question is to my mind that, as my friend Belfort Bax has put it, statically it is bad, dynamically it is good. As a condition of life, production by machinery is altogether an evil; as an instrument for forcing on us better conditions of life it has been, and for some time yet will be, indispensable.

「生活条件」としての機械生産が否定されていることがわかる。前節において確認した四つの「生活条件」と照らして考えると、機械生産が「職業」として目的化することはない、と言えよう。このことは、講演「文明における建築の前途」において詳しく述べられている^{注25)}。そこでは「建築」という言葉を「相互に助け合い、調和的に従属しあっている諸芸術が結合したもの」と定義した上で、当時、生産の分業化が進む中で、建築制作に関わる仕事が「三種に分類できる」と思われていることを批判している。「三種」は「機械的労苦 (Mechanical Toil)」「知性的仕事 (Intelligent Work)」「想像の仕事 (Imaginative Work)」とされる。モリスは「機械的労苦」が何よりも除去されなければならないと言う。かれは機械そのものを否定するのではない。人間の身体の延長にある機械の使用を認めている。次のように言われる。

今日、生活の美が損なわれているのは、機械を我々の召使にするのではなく、主人にすることによる。

(…中略…) ある時点での社会状態では、おそらくまず最初に実際に役に立つ目的のために機械の大発展が起こるのであると本当に信じている。 ^{注26)}

it is the allowing machines to be our masters and not our servants that so injures the beauty of life nowadays. (……) I will say that I believe indeed that a state of social order would probably lead at first to a great development of machinery for really useful purposes,

ここでは、文明社会における機械の存在が肯定的に見られている。「ある時点の社会状態では」という表現が目立つ。先の引用では、「これからしばらくの間も」という限定的な表現が見られた。モリスは「機械の大発展」のその後を次のように想像している。

機械の精密化は、生活の簡素化を導き、再び機械を制限するであろう。 ^{注27)}

the elaboration of machinery, I say, will lead to the simplification of life, and so once more to the limitation of machinery.

モリスは正しい機械の使用の下では、人間の労働時間が短縮され余暇が増し、「よりよい生活条件」が必然的に獲得されると考えていた。「生活の簡素化」とは、余暇を得た人間が生活の必要物を捉え直す事態である。「生活の簡素化」を志向すれば、手工芸が取り扱う日常使用品以外に必要なものはほとんどないことが省みられ、結果的に「再び機械を制限する」ことになると言える。

3-2-2 「手工芸」にみる建築的契機

「手工芸」の方法による制作は手作業による制作のみを意味するのではない。モリスは方法的態度として「手工芸」を捉えている。以下、「手工芸」の方法の実相をみていこう。かれは「芸術とその生産者たち (Art and its Producers)」の中で生産者の態度を三つに分けて説明している。

生活芸術を普及し、促進するという企図の始まりにおいて、私の論文の主題は非常に熟慮されなければならない。(…中略…) 私はあなたがたに三つの質問をしよう。第一に、我々は建築や建築的芸術の真実性をもたないままそれらを生産するふりをするのだろうか。第二に、絶望し、気にかけることをせず、真実性をもつことをあきらめるのであろうか。第三に、真実性をもとうと努力するのであろうか。^{注28)}

it seems to me that at the inception of an enterprise for the popularizing and furtherance of the arts of life, the subject-matter of my paper is very necessary to be considered.(……) the question I ask you is threefold. First, shall we pretend to produce architecture and the architectural arts without having the reality of them? Second, shall we give them up in despair or carelessness of having the reality? Or, third, shall we set ourselves to have the reality?

モリスが選択するのは「第三」の態度である。「第一」の態度は、商品価値を重んじる当時の機械生産体制を意味する。「第二」の態度はあらゆる責任から解放されたものであり、実際の生活から遊離した実現不可能なものであるとされる^{注29)}。この引用から分かるように、「生活芸術」について「建築」や「建築的芸術」という範疇から捉えられている。既述のように、モリスは工芸を広義には「建築」であるとしていることから、「建築的芸術」とは生活の必要物を制作することであると解釈できる。かれは「建築」や「建築的芸術」に通底する建築的契機を見据えていると言える。この引用における「真実性」という概念が注目される。次の言説をみよう。

建築的芸術は、それが真実的であるならば、すべての役に立つ必要物にある一定の美と興味とを加えることを意味する。そのようなものを使用者は使用したいと願い、制作者は制作したいと願うのである。^{注30)}

The architectural arts, therefore, if they are anything real, mean the addition to all necessary articles of use of a certain portion of beauty and interest, which the user desires to have and the maker to make.

モリスの言う「真実性」とは「美と興味」を付与することが制作者に委ねられていることにより感得されるものである。美のための美を目的とした商品には「真実性」がないと言える。また「役に立つ」という使用目的のみが充足されるだけでは「真実性」は得られないことも分かる^{注31)}。「美と興味」はいかに付与されるのであろうか。モリスは論考「手工芸のリヴァイヴァル」の冒頭で次のように述べている。

ここ最近、現代の通用語で言えば、芸術職人技術といわれるものに大きな関心が示されてきた。そしてごく最近になって、この価値ある芸術職人技術によって、作品の計画をするが実制作はしない芸術家のデザインから得るアートに加えて、職人の個性をいくらか作品に加えなければならないという意識が高まってきた。^{注32)}

For some time past there has been a good deal of interest shown in what is called in our modern slang Art Workmanship, and quite recently there has been a growing feeling that this art workmanship to be of any value must have some of the workman's individuality imparted to it beside whatever of art it may have got from the design of the artist who has planned, but not executed the work.

〈Art Workmanship〉なる言葉を「芸術職人技術」と訳出したが、これは「芸術に携わる者の職人技術」という意味であることを付言しておく^{注33)}。この引用では「芸術家のデザイン」と「職人の個性」とが作品成立のための要素であることが示されている。前者には壁紙の図案や建築設計図などの制作が含まれ、後者には壁紙を刷るための版木を彫る技巧や大工の技術などが含まれるであろう。「デザイン」と「職人技術」はともに人間の制作行為であるから両者にそれぞれ「美と興味」の誘因があると言える^{注34)}。

以上より、モリスは使用と制作の相関性および制作における諸過程の相関性を建築的契機として見出していたと言えよう^{注35)}。「手工芸」の方法とはこのような建築的契機に応答するものであり、それは「デザイン」と「職人技術」を日常使用の制作物において遂行することとして理解される。

3-2-3 「手工芸」と制作者

モリスは「芸術とその生産者たち」の結末部において社会と生産の在り方について次のように述べている。「職人技術」の歴史性が含意された文節である。

平等な社会は真の職人技術が生産の規則となり得る状況を形成する。その状況下では、仕事は我々自身の活動力の喜びある行使や、我々の仲間、すなわち人類全般の能力や願望への共感を含むものとなる。^{注36)}

Society of Equals, which, as I have already said, will form the only conditions under which true craftsmanship can be the rule of production; that form of work which involves the pleasurable exercise of our own energies, and the sympathy with the capacities and aspirations of our neighbours, that is, of humanity generally.

ここから社会における生産には「職人技術」が不可欠な要素であり、それが「活動力」という個人的動機（「生活条件」の「第一」「第二」^{注37)}）に関わると同時に「人類全般の能力や願望」という社会的動機（「生

活条件」の「第二」「第三」^{注38)}）に関わることが分かる。この引用ではもっぱら「職人技術」に主眼がおかれ、「デザイン」についての言及はない。これは何を意味するのか。

先にふれたようにモリスは「機械的労苦」「知性的仕事」「想像的工作」という分類から生産体制について分析している。かれは「機械的労苦」と後二者の間に本質的差異を認め、後二者の間の差異は程度の問題だと言う。「知性的仕事」とは「職人技術」を要する制作を指し、「想像的工作」とは「デザイン」と「職人技術」を自由に表現できる制作を指す^{注39)}。前者は見習職人の制作であり、後者は親方職人の制作であるとも言える。モリスは理想とすべき制作の在り方は「想像的工作」だとする。「知性的仕事」と「想像的工作」について次のような言説がある。

生活の簡素さから美に対する憧憬が起こる。その憧憬は人間の魂から消えているはずがない。そして知性的仕事が想像的工作へと高まるという欲求にのみ満足するのである。こうなればすべての「作業員」は職人となり、芸術家となり、人間となるのである。^{注40)}

And then from simplicity of life would rise up the longing for beauty, which cannot yet be dead in men's souls, and we know that nothing can satisfy that demand but Intelligent work rising gradually into Imaginative work; which will turn all 'operatives' into workmen, into artists, into men.

先に「生活の簡素化」という態度が生活の必要物の捉え直しになることを確認したが、それは同時に人間を制作行為に導く。「作業員」として「機械的労苦」に従事していた労働者がまず取り組むべきは「職人技術」の鍛錬だとされる。モリスは「職人技術」の習得過程において「デザイン」への欲求が必然的に生じると考えていた^{注41)}。かれが「デザイン」ではなく「職人技術」から制作を論じるのはこのためである。モリスは自身を「芸術家兼手工芸職人」と称している^{注42)}ことから、かれは「芸術家」と「職人」を職業として分離せずに「人間」という主体に備わる芸術的欲求と技術的欲求の二面性として把握していたと言える。これらの欲求が相互補完的に物質世界と関わる時、「人間」の「手」を媒介として、「建築」や「建築的芸術」が現出するのである。

3-3 「手工芸」と「美しい環境」

3-3-1 「工場」とモリスの環境論

本章の冒頭でみたように、モリスは「手工芸」の方法に立ち返ったとき、「美しい環境と幸福な仕事という二重の喜び」が得られるとしている。1880年代、モリスは「工場」の再構築を主題としながら、生産行為と生産環境、およびそれらの関わりあいについて論じている^{注43)}。かれは「工場」について「仕事」「教育」「環境」の三つの論点を提示する。

かれが理想とする「仕事」の在り方は既に述べた「想像的工作」であり、「生活芸術」と言い換えることもできるのである。「有用な仕事」とも呼ばれる^{注44)}。

モリスは「工場は教育施設となるであろう」とし、「工場」を子供に開くことで、自身の能力に適応した職業を選択するのに役立つこと、また、一般市民に開くことで現在の製造技術を知る機会となることを指摘する^{注45)}。「工場」が人々に開かれることは、技術や素材という制作物の出自を共有する地平が拓かれることを意味すると言えよう。

モリスにとって、「美しい環境」の実現は「幸福な仕事」によって制作された作品が生活環境に適用されることのみによるのではない。「手工芸」の方法が必要とする生産環境そのものが問題視されるのである。論考「なぜいけないのか」の冒頭で、次のように言う。

入会地保存協会の集会において、ある聡明な講演者が「とくにロンドンのような英国の大都市は際限なく拡大し続けることになる」という考えを述べると、聴衆はいつものようにその考えを満足そうに受け入れた。^{注46)}

At a meeting of the Commons Preservation Society I heard it assumed by a clever speaker that our great cities, London in particular, were bound to go on increasing without any limit and those present accepted that assumption complacently, as I think people usually do.

入会地保存協会は都市の無秩序な拡大による田園の破壊を阻止することを目的として 1865 年に設立された団体であり、入会地が不法に囲い込まれることに抗議した。英国における入会地の存在様態は田園地帯における牧羊地、都市郊外の森林などのレクリエーション地、都市内部のオープン・スペースなど様々である^{注47)}。特に都市の内部では、工場に代表される劣悪な環境の肺臓としてオープン・スペースの保存が唱えられていた。モリスは、引用における聴衆の態度を悲嘆し、都市の拡大の背景には、労働者の劣悪な住居や職場の問題、大気汚染、河川汚染があることを指摘する。かれが入会地保存協会の活動とどのように関わっていたのか、詳細は分からないが、かれの関心は入会地 (commons) という個別の対象よりも、労働環境それ自体の改善に向いている。労働と余暇の関係を工場と入会地の関係として空間的に分けることをしないのである。このことは、先に述べた人間存在の「気分」の二元性から理解できるであろう。

モリスは労働環境の改善策について、二側面から検討している。ひとつは生産手段の所有についてである。都市問題の元凶は、「個人の利益 (the profit of individuals)」を追求する資本主義体制であるとし、「共同体が機械、工場、鉱山、土地を所有し、それらが共同体の益 (the benefit of the community) のために管理される」社会主義体制の必要性を主張する。生産手段を生産者の手中におくための方策と言える。もうひとつは労働環境を美化することについてである。「工場」について次のように言われる。

工場に広い部屋、十分な空気、最小限の騒音があってはならない理由はない。それどころか、工場の種類に従って美しくあるべきだ。そして、木々や庭によって囲われなければならない。多くの場合、製造に必要なものはその環境を美しくするために利用されなければならない。例えば、織物の制作には大きな貯水池が必要である。^{注48)}

there is no other reason why there should not be ample room in them; abundant air, a minimum of noise; nay they might be beautiful after their kind. And surrounded by trees and gardens: in many

cases the very necessities of manufacture might be made use of for beautifying their surroundings; as for instance in textile printing works which require large reservoirs of water.

「部屋」「空気」「騒音」という「工場」の内部環境と「木々」「庭」「貯水池」という「工場」の外部環境の両者が「工場」という働く場所を成立せしめると言える。「工場の種類に従って」という表現は看過されてはならない。モリスは、「工場の外観は合理的で楽な仕事を表出する」と述べており^{注49)}、その「工場」が何を製造するかによって、建物内部に関する要求が異なり、自ずと外観も異なることが分かる。また引用において「織物」と「貯水池」が関係づけられているように、製造するものの差異は、外部の周辺環境の差異を生じさせると言える。モリスはこのように製造するものと建物および周辺環境が関連づけられることは「工房」の在り方に等しいと言う。個別の work を表出するものとして workshop は成立するという言葉の構造が読み取られているのであろう。しかし、かれは「工場」と「工房」の差異についても言及している。

我々の（引用者注：工場の）建物は工房のようにそれ独自の簡素な美によって美しくなるだろう。（…中略…）しかしその上、我々の工場は単に工房だけではなく、工房以上に装飾を含む建物を所有するだろう。というのは、工場には食堂、図書館、学校、諸研究施設などが必要となるからである。^{注50)}
So in brief, our buildings will be beautiful with their own beauty of simplicity as workshops, (……) but moreover besides the mere workshops, our factory will have other buildings which may carry ornament further than that, will for it will need dining hall, library, school, places for study of various kinds, and other such structures;

「工場」が単に作業場であるだけならば、「工房」と変わらない。しかし、モリスは「工場」における人間の行為について省察することで、作業以外の行為に瞩目し、それらを「食堂」「図書館」「学校」などとして空間化する必要性も説く。ここで装飾の程度が問題となっているが、前章にみるように、モリスは用途に応じた装飾の在り方を主張する。精神的な要求の度合いが高いところでは装飾は惜しむ必要はないとされる^{注51)}。モリスにとって「工場」の再構築とは、「工場」における人間の行為を分節していき、それぞれに適応した環境の在り方を問いながら、「工場」を全体として人間生活の延長とすることを意味していたと考えられる。

3-3-2 制作の源泉としての「大地」

前項において、モリスが「機械、工場、鉱山、土地」という生産手段を「共同体の益」として管理しなければならないとしていることを確認した。「鉱山」や「土地」は自然が産出する生産手段（資源）であるのに対し、「機械」や「工場」は人間によって制作される生産手段である。既述のように、モリスは「機械」や「工場」を人間の延長として使用しようとする。本節ではこの意味について考察する。

本章第1節においてみたように、モリスは「豊かさ」を「慎みある生活をする手段」と定義している。このことの具体的内容について論考「有用な仕事と無用な労苦」の中で述べられている。

豊かさとは自然が我々に与えるものと合理的な人間が合理的な使用のために自然の恩恵から作り出すことのできるものである。日光、新鮮な空気、損なわれていない大地の表面、必要で慎みある食料、衣服、住居、あらゆる種類の知識の蓄積、それらの知識を普及する力、人間相互の自由な意思疎通のための手段、人間がもっとも人間であり、もっとも野心があり、思慮深いときに創造する美である芸術作品—これらすべては自由で人間らしく堕落していない人々の喜びに役立つものである^{注5 2)}

Wealth is what Nature gives us and what a reasonable man can make out of the gifts of Nature for his reasonable use. The sunlight, the fresh air, the unspoiled face of the earth, food, raiment and housing necessary and decent; the storing up of knowledge of all kinds, and the power of disseminating it; means of free communication between man and man; works of art, the beauty which man creates when he is most a man, most aspiring and thoughtful - all things which serve the pleasure of people, free, manly, and uncorrupted.

ここからモリスの言う「豊かさ」を三種類に分類できる。ひとつは「自然」が産出する「日光」「空気」「大地の表面」という自然物である。「鉱山」や「土地」はここに含まれる。ふたつめは、衣食住に関わるものであり、モリスは別箇所「身体に良く、必要なもの」とも述べている^{注5 3)}。最後は、「知識」や「芸術」に関わるものであり、「知力に良く、必要なもの」とも別言される^{注5 4)}。モリスの掲げる「手工芸」の方法による「生活芸術」においては、これら三者が同時に成立することが必要とされようと言えよう。モリスはこの引用のあと、「これらの項目のいずれにも入らず、もつ価値のあるものを考えられない」と断言している。ここで、生産手段としての「機械」や「工場」は「豊かさ」ではないのか、という疑問が生じる。これは現状において「工場」を運営するための「物質的手段 (material means)」がどこから供給されるのかと問い、次のように答える。

労働者諸君、「堕落した組織者」によってあなたがたの労働から絞り出された何百万もの剰余価値からくるのである。それは天才たちが幾世代にもわたって発明してきた道具や機械を使用するために、あなたがたから搾取されている。大地すなわち共同の母のうちのあなたがたの取り分を使用するために搾取されているのだ。^{注5 5)}

Fellow-workers, from the millions of surplus value wrung out of your labour by the 'organisers of filth'; screwed out of you for the use of tools and machines invented by the gathered genius of ages, for the use of your share of earth the Common Mother.

ここでは「物質的手段」の一例として「工場」において使用される「道具や機械」が挙げられている。モリスは、「道具や機械」が雇用主によって所有・供給され、それらの使用が目的となる労働に対して批判的であった。剰余労働を生む労働形態に対置させて説かれるのが本章第1節において取り上げた独立小生産者の労働形態である。後者においては、「道具や機械」が「共同の母」と呼ばれる「大地」の所産として生産者と直接的に関わることができるとするのである^{注5 6)}。「共同の母」とは先の引用における「自然の恩恵」を産出する自然そのものの謂であると解釈できる。また、「道具や機械」を「天才たちが幾世代にもわたって発明してきた」という言説から、モリスが「道具や機械」の産出される過程を捉えていることが分かる。「道具や機械」およびそれらを用いる作業の場である「工場」を人間の延長として把握することは、「自然

の恩恵から作り出す」という「芸術」の根源的意味を問い、それらを「芸術作品」として制作するという動機に起因すると言えよう。制作の過程において「物質的手段」の物質性を通して「大地」が想起されるとき、それらは「豊かさ」と呼べるのであろう。

上の引用において「剰余価値」^{注57)}と言われているが、本章第1節においてふれたように、モリスは「価値」という概念を経済学的観点からではなく、「生命の価値」という倫理的観点から説明する^{注58)}。かれは、論考「ゴシック建築」の中で、理想の建築とは諸芸術が統合されたものだと定義した上で次のように述べている。

これらの諸芸術作品は生命の価値についての人間の表現であり、またこれらの制作はかれの生命を価値あるものにする。^{注59)}

Now, these works of art are man's expression of the value of life, and also the production of them makes his life of value:

「生命の価値」といわれるときの「生命」と「かれの生命」といわれるときの「生命」には決定的な差異がある。前者は生あるものの総体をさすのに対し、後者は制作者としての個々人の生をさすと解することができる。後者は個々人の生活環境と直接的に関わるものである。モリスにあつては、生活環境とは制作に先立って存在するものではなく、個々人の「生命」を投影するものとして構築するものだという認識がある。しかし、それは単なる個人主義的な制作ではなく、「生命の価値」という全体性を内包させた制作である。モリスは、1894年の論考「私はいかにして社会主義者となったか」において、自身の性格について「ただ大地とその上の生命への深い愛と、人類の歴史への情熱をもっている」と述べている^{注60)}。本論においてみてきた「手工芸」の方法は、「大地」と「その上の生命」の不可分性を露にし、「大地」における人間の「取り分」をいかに獲得し、変容させるかという問題に導く。本節冒頭の引用から分かるように、モリスは「大地の表面」が人間によって損なわれてはならないとする^{注61)}。制作の源泉に「大地」の産出力を見定め、自然と人間との相補的關係を保持しながら、「大地の表面」から得られる物質によって生活環境を「大地の表面」の一部として構築するとき、その制作は「歴史」という地平に拓かれるのである^{注62)}。

3-3-3 補論：ラスキンの「固有価値」の概念

倫理的観点から「価値」を定義した人物としてジョン・ラスキンが挙げられる。ラスキンは1872年に著した『ムネラ・プルウェリス』において次のように述べている(Munera Pulveris: Six Essays on the Elements of Political Economy, London, George Allen, 1904による)。「『価値』とは生命を維持する何らかの物のもつ力もしくは効用性を意味する。『価値』は常に二重である。第一に内在的(INTRINSIC)であり、第二に有効的(EFFECTUAL)である。(p.170)」ここに示されるふたつの「価値」はそれぞれ「内在的価値」と「有効的価値」と呼ばれる。「内在的価値」は自然物や人間に固有に備わる「絶対的な力」であり、人間の「生命」を増進するとされる。また、「有効的価値」は「内在的価値」をもつものに見出され

るものであり、「受容能力」の程度に基づく相対的な価値である。ラスキンは「価値ある物質」を5項目に分類し、①空気、水、生物を含む土地、②家、家具、道具、③食物、葉、衣服などの装身具、④書物、⑤芸術作品としている (p.171)。本章において述べたモリスの「工場」や「豊かさ」に関する認識との類似性が指摘できる。例えば、「工場」における労働者、部屋、空気、木々、庭、道具、機械は、すべて人間が生命を維持する上で本来的に必要であり、労働者は最大限の能力を発揮し、諸物はその固有性を保持しながら人間生活と関わるという認識はラスキンの提示する「価値」の二重性と変わらない。また、モリスが強調する「教育」とはラスキンの言う「受容能力」を向上させる実践的機会であると言える。

小結

本章の目的は「手工芸」に関わるモリスの言説を解説することを通して、かれの芸術理解と社会理解に通底する思索の構造を明らかにすることにあった。以下、各節で得られた見解を要約する。第1節では、芸術運動と社会主義運動の共通基盤としての「慎みある生活」の諸相を確認し、その初発として生産者と直接的に関わる生産行為と生産環境とが求められること、およびその関わりは人間存在の「気分」の二元性から把握されていることが分かった。第2節では、「手工芸」の方法とは、「デザイン」と「職人技術」を日常使用品において遂行することであるが、「職人技術」に人間の主体性回復の契機があり、その習得過程において「デザイン」への欲求が必然的に生じるという考え方が示された。第3節では、「手工芸」の方法によって創出される「美しい環境」について、生産環境の美化と生産手段の供給というふたつの観点を検討し、生産環境と生産手段が人間生活の延長として把握されるのは、「大地」への眼差しによることが分かった。

本章により、モリスが制作における「手」の意味を問い直し、人間の本有的能力や生活環境の固有性を「職人技術」「共同体」「大地」「生命」などの全体性の中で論じていることが明らかとなった。1880年代、モリスは労働者を一制作者として捉え、「工場」の在り方に注目する。かれはそこに三つの共同性を見出している。ひとつめは、協業という意味での共同性である。「デザインと職人技術」の共属的關係を一制作者において成立させるべく、「職業」の組織化が目論まれる。ふたつめは、共同社会という意味での共同性である。「工場」を単なる作業場ではなく人間生活の営まれる領域として捉えるのである。最後は、人間と自然の共同性である。制作の究極的目標として「大地」への帰属が掲げられるのである。協業や共同社会を実現した人間の制作が「大地」という包括的な源泉に根差さないかぎり「美しい環境」は顕現しないのである。

第3章 注記

注1) The Revival of Handicraft, [XXII-338]

・The Revival of Handicraft, 「手工芸のリヴァイヴアル」は『フォートナイトリー・レビュー』誌, 1888年11月号に掲載された論文である([EL-336] 参照)。

注2) 藤田治彦「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌: ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって」『美學』54巻1号, 2003, pp.14-26を参照。藤田の研究は, 日本において「美術と工藝」という誤解を伴った訳語が与えられたことをめぐって考察しており, 本研究は多くの示唆を得ている。

注3) アーツ・アンド・クラフツ運動の歴史的経緯については Mary Greensted(ed.): An Anthology of Arts and Crafts Movement, Lund Humphries, 2005に詳しい。アーツ・アンド・クラフツ運動と近代建築運動を結びつけ, モリスを近代デザインの父と位置づけた研究として, Nikolaus Pevsner: Pioneers of Modern Design from William Morris to Walter Gropius, Museum of Modern Art, 1949(白石博三訳: モダン・デザインの展開 モリスからグロピウスまで, みすず書房, 1957)が挙げられる。

注4) Of the Revival of Design and Handicraft, [AC-4-5]

・Of the Revival of Design and Handicraft, 「デザインとハンディクラフトのリヴァイヴアル」はアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会によって初めて出版された論文集の基調論文である([EL-277] 参照)。

注5) 藤田は上掲注2)の論文, p.17において「アーツ・アンド・クラフツ」が「デザインとクラフト」であることを指摘している。また別の論考, 藤田治彦「柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ」『美術フォーラム 21』第6号, 2002, pp.115-9において「アーツ・アンド・クラフツ」という言葉について詳述されている。本章で取り上げている論文集のタイトルである Of the Revival of Design and Handicraft に示される Design と Handicraft の対は制作者としての decorative artist (装飾芸術家) と handicraftsman (手工芸職人) の対に対応し, 当時「装飾芸術」と「デザイン」がほぼ同義であったとされる。藤田は緻密な解説を通して, 「〈アーツ・アンド・クラフツ〉の〈アーツ〉は〈美術〉ではなく〈デザイン〉を, 〈クラフツ〉は〈ハンディクラフト〉を意味しているのである」と結論づけている。本章注4)の引用において示される「手工芸 (handicrafts)」は種々の手工芸の総称であり, 各々が「デザインと職人技術」の両者から成っている。この handicraft は論文集の表題に掲げられる Handicraft, すなわち手工芸職人の制作行為のみを指すものではないと考えられるが, 「デザインと職人技術」の対は Design と Handicraft の対に等しいと言えよう。art と handicraft (craft) という概念は, 広義的にはともに装飾芸術家と手工芸職人の両方の制作行為が統合された制作行為 (art の場合は制作物を意味することもある) を指す。art と handicraft (craft) とが対の概念として把握される文脈においては, art は design とも言い換えられ, 装飾芸術家の制作行為を意味し, handicraft (craft) は手工芸職人の技能を伴う制作行為を意味する。本章第2節にて後述するが, モリスは装飾芸術家と手工芸職人とが分離されない制作を理想としており, その状況では装飾芸術家と手工芸職人, および design と handicraft は厳密には区別できない (同一人物が装飾芸術家であり手工芸職人である場合もある) ことを指摘しておく。本研究において訳語は文意により以下のように統一することとする。広義の handicraft = 「手工芸」, 狭義の handicraft = 「ハンディクラフト」, 広義の art = 「芸術」, 狭義の art =

「アート」。また、design は「デザイン」と訳出し、図案（図案制作）を意味し、craftsmanship は「職人技術」と訳出し、デザインを素材に具現化する技術を意味する。注4）に示す論文中の handicraft とは design を包摂するものと考えられるため、「手工芸」と訳出した。

注6) Ashbee, C.R.: *Socialism & Politics: a Study in the Readjustment of the Values of Life*, Brimley Johnson & Ince, 1906, p.4 による。アシュビーとモリスの関係については、菅靖子『イギリスの社会とデザイン：モリスとモダニズムの政治学』、彩流社、2005, pp.119-46 に詳しい。

注7) 本研究序章注10) 安川の研究によって1880年代の英国における労働運動と社会主義の関係が明らかにされている。この研究によれば、1880年代には「世界の工場」としてヴィクトリアの繁栄を謳歌してきた英国の資本主義が急速に翳りをみせ、産業全体が大不況となった。ヴィクトリアの繁栄を支えてきたトレード・ユニオニズムが転換を迫られたとき、「社会主義」が復活し、不熟練労働者が組織され、新ユニオニズムが生み出された。当時、マルクス主義の反資本主義とチェンバレンやフェビアン社会主義者による改良主義の両方が、反レッセ・フェールのゆえに「社会主義」という言葉で括られていた。前者は労働者の階級的主体形成を問題にするのに対し、後者は中産階級の危機意識を媒介にして自由主義国家から福祉国家への転換を図るものである。本章の見出しに掲げる「社会主義運動」とは、前者のマルクス主義的社会主義に基づく運動の意味である。フェビアン社会主義とモリスの関係については本研究序章注18) の研究に詳しい。

注8) *How I Became a Socialist*, [XXIII-278]

・*How I Became a Socialist*, 「私はいかにして社会主義者になったか」は1894年6月14日付の『ジャスティス』紙上において発表された論文である（[EL-207] 参照）。

注9) 本研究序章注10) の研究。モリスの社会主義思想やその思想形成に大きく関わっているベルフォート・バックス（Ernest Belfort Bax, 1854-1926）の思想が英国労働史に位置づけられており、本研究は多くの示唆を得ている。

注10) *Art, Wealth, and Riches*, [XXIII-143]

・*Art, Wealth, and Riches*, 「芸術、豊かさ、財貨」は1883年3月6日、マンチェスター王立協会のために行った講演である（[UL-298] [EL-88-9] 参照）。

注11) *Why Not?*, [PW-24]

・*Why Not?*, 「なぜいけないのか」は1884年4月12日付の『ジャスティス』紙に掲載された論文である（[EL-314] 参照）。

注12) *Art and Socialism*, [XXIII-192-214] / *Art and Labour*, [UL-94-118]

・*Art and Socialism*, 「芸術と社会主義」は1884年1月23日にレスター無宗教協会のために行われた講演である（[UL-299] [EL-94-6] 参照）。

注13) 「生活芸術」という表現がみられるのは、*The Revival of Handicraft*, [XXII-331] / *Art and its Producers*, [XXII-342, 354]

・*Art and its Producers*, 「芸術とその生産者たち」は1888年12月5日にリヴァプールにおいて全国芸術促進協会のために行われた講演である（[UL-313] [EL-337] 参照）。

注 14) The Revival of Handicraft, [XXII-331]

注 15) Architecture and History, [XXII-298]

注 16) How We Live and How We Might Live, [XXIII-25]

注 17) 上掲書, [XXII-17]

注 18) Monopoly ; or, How Labour is Robbed, [XXIII-239]

注 19) 安川は、上掲注 13) の研究, pp.260-1 においてこのような独立小生産者の労働形態を理想とするモリスの考え方を「労働全収権」という用語によって説明している。

注 20) How We Live and How We Might Live, [XXIII-22] において「家々はその明らかな慎ましさと秩序によって自然を装飾するものとなるべきだ」と述べられている。また、同書, [XXIII-23] において「未来の崇高な共同のホール (communal hall)」は「美と合目的性のためにどんな私的な計画も近寄ることのできない人間の住まい (an abode of man) である」としている。モリスはこれらに「工場」などの働く環境を含めて、「生活環境 (the surroundings of life)」(同書, [XXIII-24]) や「生きるための美しい世界」と呼ぶ。次のようにも言う。「わが家 (my home) とは私が共感し、愛する人々と出会う場所である」(同書, [XXIII-23]) と。私的領域としての「家」と公的領域としての「ホール」や「工場」を「わが家」という言葉によって括るのである。

注 21) 上掲書, [XXIII-21]

注 22) The Aims of Art, [XXIII-81-97]

注 23) Useful Work versus Useless Toil, [XXIII-109] 「有用な仕事と無用な労苦」は 1884 年から 88 年にかけて 10 回以上行われた講演であり、1885 年に冊子として出版された。1888 年に出版されたモリスの第二講演集『変化の兆し』にも収められている ([UL-299] [EL-104-8] 参照)。

注 24) The Revival of Handicraft, [XXII-335-6]

注 25) 以下、The Prospects of Architecture in Civilization, [XXII-145-8] の内容による。「文明における建築の前途」は 1881 年 3 月 10 日ロンドン協会で行われた講演である ([UL-296] 参照)。

注 26) How We Live and How We Might Live, [XXIII-24]

注 27) 上掲書, [XXIII-25]

注 28) Art and its Producers, [XXII-342-3]

注 29) 上掲書, [XXII-343]

注 30) Art and its Producers, [XXII-343]

注 31) 前章において指摘したように、モリスは日常使用品に「美」が適用されることなく「用」のみが充足されるだけでは「一種の抽象的なものとして存在する」と言う。

注 32) The Revival of Handicraft, [XXII-331]

注 33) 1884 年に諸芸術に携わる者の交流を目的として議論・集会を行う組織として〈Art Workers Guild〉が創設されていることから、〈Art Work〉が「芸術に関わる仕事」の意であることがわかる。注 3) のグリーンステッド

の研究において、1880年代に組織されたアート・ワーカーズ・ギルドとアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会のふたつがアーツ・アンド・クラフツ運動と直接関係する組織であることが指摘されている。

注 34) モリスは「美と興味」の他に「喜びと興味」という対表現も用いている (Art and its Producers, [XXII-351])。

「美」や「喜び」は、前章にみるように、制作者の自由に伴う倫理的事柄である。「デザイン」と「職人技術」が自由という条件の下で遂行されるとき、どちらも「喜び」を伴い、表現内容と表現技術という「興味」を制作物に付与すると考えられる。

注 35) このような考え方はクレインにも見られ、本章の冒頭において示した「真に芸術的な力や感情」のことをクレインは「相関の感覚 (sense of relation)」や「構成的感覚 (architectonic sense)」と言い換えている ([AC-4])。

注 36) Art and its Producers, [XXII-355]

注 37) 「活動力」は本章第1節において取り上げた「生活条件」の「第一」に挙げられる「身体」の「活動力」と「第二」に挙げられる「知力」の「活動力」の両方を指すであろう。

注 38) 本章第1節において取り上げた「生活条件」の「第二」において、「知力」が「過去、現在、未来と共感した」とされるのは、「知力」が時代を超えた「人類」の伝統となるからであろう。また、「第三」において示される「職業」とは、同時代的な「人類」の「能力や願望」を組織立てることを意味しているであろう。

注 39) 本研究第1章で述べたとおり、モリスの思索における「想像力」とはデザイナーが担う非実在的な作品世界と関わる思惟作用、「知性」は「発明力 (invention)」と同義であり、職人が担う素材や用途など実在的要求と関わる思惟作用である。モリスが「想像の仕事」と言うとき、「想像力」と「知性」の両者を統率する制作を意味する。モリスは The Prospects of Architecture in Civilization, [XXII-146] において、「他により言葉がないので想像の仕事と呼んでいる」としている。「想像の仕事」という表現では「想像力」だけでなく「知性」の作用も含むことを示し難いことを自覚していたのであろう。

注 40) The Prospects of Architecture in Civilization, [XXII-150]

注 41) モリスは 'The Lesser Arts of Life', [XXII-235-69] の中で、「デザイン」と「職人技術」の在り方について、陶器、ガラス容器、織物、タペストリ、染物、壁紙、衣服などの日常生活の必要物を例示しながら説明している。同書、[XXII-236] で次のように言う。「熟練の者だけが人間の精神的要求 (spiritual wants) を満たすものを完全に作ることができ、未熟な者はその第一目的が人間の身体的要求 (bodily wants) を満たすことであるようなものを作るのである。理論的には、想像力の表現、すなわちアートの実践などがなくても身体的要求は満たされるかもしれない。(…中略…) しかし、歴史はそれでは終わらないことを伝えている。ものを作り上げる (fashioning things) ことに熟達した手をもつ人間は、作りながら考えずにはいられない」と。この引用における「想像力の表現」がモリスにおける「デザイン」の意である。「職人技術」の熟達の過程には「考える」という契機が潜んでいる。モリスは「知性」をもって「考える」ことから「想像力」をもって「考える」ことへの成長を必然的帰結として捉えていたと言える。

注 42) A Factory as It Might Be, [II-131] 「あるべき工場」は、1884年5月17日付、5月31日付、6月28日付の『ジャスティス』紙に分載された論文である ([EL-244-5] 参照)。

注 43) 「工場」に関する言説として代表的なものは、「なぜいけないのか」と「あるべき工場」である。「あるべき工場」は「なぜいけないのか」の内容を発展させたものであるとモリス自身が述べている (A Factory as It Might Be, [II-131])。「工場」の再構築についての言及は, Useful Work versus Useless Toil, [XXIII-114-6]／How We Live and How We Might Live, [XXIII-21] にもみられる。

注 44) モリスは Useful Work versus Useless Toil, [XXIII-100] の中で「有用な仕事」を次のように説明している。「自分がそのものを作ることを望み, 作っているからこそ, そのものは存在し続けるであろうと実感する仕事に携わっている人間は, かれの身体の活動力と同時に知力と魂の活動力を発動させている。かれが働いているとき, 記憶と想像力がかれを助ける。かれの思考だけではなく, 過去の人々の思考がかれの手を導く。そして人類の一部として創造するのである」と。「作ること」を基礎として「仕事」の在り方を問うモリスの態度が分かる。

注 45) A Factory as It Might Be, [II-136-7] の内容による。

注 46) Why Not?, [PW-24]

注 47) 入会地保存協会の活動についての日本における先行研究として, 平松紘「イギリス「入会地保存協会」創成期における活動: 入会の比較研究のための準備的考察」『青山法学論集』, 26 巻第 3 号, 1985, pp.19-47 が挙げられる。また, 英国における入会地の存在様態を知る上で, 同『イギリス環境法の基礎研究: コモンズの史的変容とオープンスペースの展開』, 敬文堂, 1995, 岩本純明「公共空間としての入会地: イギリスの経験」『日本村落研究学会』5 巻第 1 号, 1998, pp.9-20 を参考にした。

注 48) Why Not?, [PW-26]

注 49) A Factory as It Might Be, [II-132]

注 50) 上掲書, 同頁

注 51) 前章およびその注 26) 参照。

注 52) Useful Work versus Useless Toil, [XXIII-103]

注 53) Art, Wealth, and Riches, [XXIII-157]

注 54) 上掲書, 同頁

注 55) Why Not?, [PW-26-7]

注 56) モリスは, 「大地」の産出力を知ることを重要視していた。例えば, Useful Work versus Useless Toil, [XXIII-112] において, 「生活の一部を, すべての仕事の中でもっとも必要でありもっとも喜びある仕事, すなわち大地を耕すこと (cultivating the earth) をして過ごしたいと思わない人間はほとんどいない」と述べている。かれが「大地を耕すこと」を「もっとも喜びある仕事」とするのは, 生産物が生じる過程において「大地」と直接的に関わることが求められるからであると考えられる。「道具や機械」は「大地」と間接的な生産物であるが, 「物質的手段」と言われることから推察されるように, 「物質 (原料)」から生成されることを考慮すれば, 「大地」からの所産であることは明らかである。

注 57) 「剰余価値」なる概念は, マルクスが『資本論』の中で取り上げているものであり, モリスが「なぜいけないのか」を書いた前年に『資本論』を読んでいることからその影響を受けていると推察される。

注 58) モリスがマルクスの価値論に懐疑的であったことは、フィリップ・ヘンダーソン著／川端康雄他訳：ウィリアム・モリス伝、晶文社、1990、pp.405-6 から知ることができる。

注 59) Gothic Architecture, [I -266-7] 原文は, these works of art are man's expression of the value of life, and also the production of them makes his life of value であり, value と life の語の繋ぎ方に工夫が見られる。

注 60) How I Became a Socialist, [XXIII-280]

注 61) モリスは The Prospects of Architecture in Civilization, [XX II-119] において「建築とは人間の要求に応じてまさに大地の表面を成形改変することを意味する」と述べている。「大地の表面」の「成形改変」の仕方は人間中心的なものであろうか。モリスは同論考において「芸術」の真の意味は、「自然畏敬の表現であり、自然の冠すなわち大地における人間の生命である」としている（同書, [XX II-125]）。以上より、かれは建築が「大地の表面」において「自然の冠」として成立しなければならないという認識をもっていたと言える。自然と人間の相互補完的な関係が「大地の表面」において実現されることが求められるのである。

注 62) 「大地」の産出力を見定め、「大地の表面」を制作するとき、その制作は一切の生成に予想される技術の領域に立ち会っている。その技術は、ギリシア語のテクネー (technē) が意味する「知る」ことを指すであろう。プラトンは『饗宴』において次のように述べる。「創作 (ポイエーシス) というのは、広い意味の言葉です。言う迄もなく、いかなるものであれ非存在から存在へ移行する場合その移行の原因はすべて、創作です。したがってまた、あらゆる技術に属する製作は創作であり、それに従事する工作者は創作者であるわけです。」(鈴木照夫訳『饗宴』, プラトン全集第五巻, 岩波書店, 1974, p.84) ここで言われる非存在とは物の不在, 存在とは物の在ることである。ハイデガーは『技術論』において、テクネーは出で一來一たらずことすなわちポイエーシス (poiēsis) に属するとする。ポイエーシスは隠蔽性からの顕現であり、「ただに職人的な仕上げだけでもなければ、また芸術的に詩い出しつつ輝きと象に持ち来たすことだけでもない。physis (ヒュシス, 自然), すなわち自ら一然か一成こともまた、一つの出で一來一たらずことであり、ポイエーシスである」と言う (マルティン・ハイデッガー著／小島威夫, アルブムスター共訳『技術論』, 理想社, 1965, p.26)。本研究はハイデガーの思惟の尺度において制作を論じるものではないが、モリスが「大地」と「大地の表面」の峻別から技術の本質を古代ギリシアの意味において捉えていたことを知る上で一助となる。

第4章 モリスの書物論

4-1 1890年代の書物論の位置づけ

4-1-1 晩年の活動

モリスは1880年代後半から散文ロマンスと呼ばれる文学作品の創作に取り組むようになる。また、かれは1891年、ケルムスコット・プレスを設立し、書物の印刷・出版に着手する。ケルムスコット・プレスからはモリス自身の著作23点を含む53点の書物が刊行されている^{注1)}。この時期、モリスは書物を主題とした講演活動や論文執筆も行っている^{注2)}。モリスの書物論はアーツ・アンド・クラフツ運動の只中で展開されている。「印刷」という論文がアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会のメンバーによる1893年の論文集に寄せられたことや「印刷本の初期の挿絵」と題された講演がアーツ・アンド・クラフツ学校で行われたことがその証左として挙げられる。かれはこれらの著作の中で、主として中世の写本（manuscripts）と印刷本（printed books）に共通の特質について説明しているが、その内容は書物を制作するための技術的内容にとどまらず、芸術全体の在り方など倫理的内容にまで及んでいる。モリスの書物論に示される倫理的内容は、アーツ・アンド・クラフツ運動の方向付けとも関わっていると考えられる。

モリスは芸術全体における書物の重要性について次のように述べている。

芸術のうち最も重要であり最も切望される生産物は何かと問われたならば、美しい家であると答えるであろう。そしてさらに次に重要であり切望される生産物は何かと問われたならば、美しい書物と答えるであろう。^{注3)}

If I were asked to say what is once the most important production of Art and the thing most to be longed for, I should answer, A beautiful House; and if I were further asked to name the production next in importance and the thing next to be longed for, I should answer, A beautiful Book.

この言説は1890年代のものであるが、本論において辿ってきた、それ以前のモリスの言説の特徴を整理しておきたい。モリスは1877年以降、「民衆の芸術」を基軸とした制作論を表明するようになる。「生活の美」と題された講演において、「家造りという芸術は全ての始まりである」^{注4)}とされているように、モリスの制作論の起点には人間の住まう「家」についての徹底した見直しがある。「有用であると思われないものや美しいと信じられないものを一切家の中におくな」^{注5)}という金言を掲げ、第一に有用性が充足される必要性を説く^{注6)}。1880年代になると、社会主義運動の実践も加わり、「共同体」という枠組における人間存在の意味が問われるようになる^{注7)}。1890年代以前には日常生活において直接的に関わる実用品や環境の本来的な在り方が目指されていたと言える。

モリスは書物に関する論考の中で、直接的な実用品や環境についての言説では十全に説明できないと思われる芸術的精神についてゴシック芸術を例に挙げ、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」というふたつの側面を取り上げている。これらは書物に顕著な二特質である。次のように言われる。

すべての有機的芸術、すなわち真に成長しているすべての芸術には二つの特質がある。叙事詩的なものと装飾的なものである。それらは物語を語ることと空所すなわち触知できるものを飾ることとして機能する。^{注8)}

All organic art, all art that is genuinely growing, opposed to rhetorical, retrospective, or academical art, art which has no real growth in it, has two qualities in common: the epical and the ornamental; its two functions are the telling of a story and the adornment of a space or tangible object

「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」とを併置してゴシック芸術の「有機的」な事態が把握されているが、このような把握の仕方は晩年のモリスの思索を特徴づけるものである。本研究第1章において述べたように、モリスは「有機的建築」について「用と美」（＝「構造と装飾」）の結合という観点から説明するが、書物のように精神的要求の充足が主目的となる作品を論じる場合、「美」の内容に関する諸側面が主題的に捉えられるのである。これらは中世期の芸術に限定される特質ではなく、現代にも受け継がれるべき本質的特質であるというのがモリスの見解である。以下、本節にて、芸術作品としての書物の構造を示し、次節にて、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」に関する内包的問題をそれぞれみていこう。

4-1-2 書物の二重性

モリスが晩年に制作や論述の対象とする書物は、文学作品と装飾芸術作品の両義的性格をもつ芸術作品である。書物において詩人モリスと工芸家モリスが融合するとみなすこともできるであろう。モリスが理想とする書物の事例をみておこう。

モリスは、1886年に『ペル・メル・ガゼット』誌の編集者に「良書百選」のアンケートを求められ、54のリストと解説文を提出している^{注9)}。本論では最初の8編に注目したい。

1. ヘブライ聖書（重複部分や単なるユダヤ教会主義的部分は除く）
2. ホメロス
3. ヘシオドス
4. エッダ（他の古ノルド語のロマンティックな系譜の詩を含む）
5. ベーオウルフ
6. カレワラ、シャー・ナーメ、マハーバーラタ
7. グリムや北欧民話を筆頭とする民話集
8. アイルランドとウェールズの伝承詩集

これらはマッツィーニが「バイブル」と呼ぶ種類の書物である。これらは必ずしも文学的基準によって評価できるものではないが、私にはどんな文学よりもはるかに重要なものである。これらは、いかなる意味でも、個人の作品ではなく、民衆の心そのものから成長してきたものだ。

1. Hebrew Bible (excluding some twice done parts and some pieces of mere Jewish ecclesiasticism).
2. Homer
3. Hesiod
4. The Edda (including some of the early Norse romantic genealogical poems).
5. Beowulf.
6. Kalevala, Shahnameh, Mahabharata.
7. Collections of folk tales, headed by Grimm & Norse ones.
8. Irish & Welsh traditional poems.

These are the kind of book which Mazzini called 'Bibles'; they cannot always be measured by a literary standard, but to me are far more important than any literature. They are in no sense the work of individuals but have grown up from the very hearts of the *people*.

これらは伝承（口頭伝承および写本）により存続してきた作品群（民族叙事詩）である。モリスは他のリスト中「バイブル」の性質をもつものに＊を付し、伝承性を評価している。それらは、「ヘロドトス」「ヘイムスクリングラ（ノルウェイの王たちの物語）」「半ダースほどの最良のアイスランド・サガ」「ニーベルンゲンの歌」「デンマーク、およびスコットランド・イングランド辺境地方の伝承バラッド」「アーサー王の死」「千夜一夜物語」である。モリスが「叙事詩的」というとき、これらの作品が念頭にありと考えられる。叙事詩とは、神話、伝説、英雄の事蹟、歴史的事件などを題材とした物語詩を意味するが、モリスにおいては叙事詩の内容だけではなく、「成長してきた」と表現されるように、伝承という事柄も重要であった^{注10)}。

一方、装飾芸術作品としてモリスが称揚するのはいかなる書物か。かれは一連の書物論の中で、理想の書物の装飾的側面について、彩飾画（2編）、木版画（3編）、活字（3編）という三つの観点から、過去の実例を示しながら論じている。まず、彩飾画についてみていこう。モリスは『ケルズの書』に代表される8世紀頃から栄えたアイルランドの教会図書のカリグラフィ（能書法）と彩飾を英国における装飾芸術作品としての書物の起源とみている。しかし、それらは原始的装飾の部類であり、「人間と人間の営みを表現することにはほとんど関心をもたず、実際、いかなる有機的生命にもあまり関心がなく、抽象的線を絡み合わせることで満足している」と、装飾の抽象性に原始性を認め、否定的に捉えている^{注11)}。このアイルランド様式とビザンティン様式が融合し、11世紀初頭には「装飾と人物像を結合した非常に美しい彩飾の様式」であるアングロ・サクソン様式がウィンチェスターなどで発達した^{注12)}。モリスはこの様式から完全な中世の流派が生まれ、12世紀半ばの書物において、書物の内容とは関係のない、縁飾りや装飾文字の中で葉飾りと人や動物や怪物の姿が大胆に混合されていることを評価している。そして13世紀後半に彩飾画が最高潮に達したとみている。その例としてボドリー図書館の『ノリッジ詩篇』、大英博物館の『アランデル詩篇』『クイーン・メアリ詩篇』『テニソン詩篇』が挙げられている^{注13)}。

次に、木版画についてみていこう。木版画は彩飾画が手による直接的な装飾であるのとは異なり、木版という道具を用いた装飾である。これは、単純な機械によって製造される印刷本の発明とともに生じた。モリスは講演「ゴシック本の木版画」において幻燈スライドを用いて15世紀から16世紀における36の実例を紹介している^{注14)}。これら中世末期のデザインから学び、「挿絵を注意して見始める以前でさえ、いつどこで書物を開いても美的感覚を有した人間に真の喜びを与える」印刷本を制作する必要性を説く^{注15)}。

木版による挿絵は書物の内容を伝える情報源であるだけでなく、それ自体が木版画という芸術作品なのである。

最後に、活字について概説しておこう。先に木版画は印刷本と関連することを示したが、モリスは「15世紀の可動金属活字の発明が印刷術の発明である」とし、活字の中で最良のものは「グーテンベルク本」と呼ばれる1455年頃に制作された「四十二行聖書」であるという^{注16)}。15世紀の印刷本は、活字の力だけで常に美しいとされる。モリスは「美しい文字を鋳造し、版を組み、印刷するのに要する時間と費用は、醜い文字を使って同工程を行うのと変わらない」とし^{注17)}、ケルムスコット・プレスにおいてローマン字体であるゴールデン・タイプおよびゴシック字体であるトロイ・タイプとチョーサー・タイプを制作することになる^{注18)}。グーテンベルク以来、しばしば地元の大工や建具工によって制作された木製印刷機が使用されていた。しかし、19世紀初頭に鉄製印刷機が導入されて以来、功利主義的観点による印刷工程の機械化、加速化によって、活字の水準の低下および紙やインクの質の低下が起こった^{注19)}。モリスはこのような当時の印刷事情に対して活字再生を試みたのである。

4-2 芸術作品の二大原理

4-2-1 作品における「叙事詩的なもの」

「叙事詩的なもの」が「物語を語ること」として機能するとはいかなる事態であろうか。モリスは「叙事詩的なもの」の機能について「出来事への興味とともに物語を語ること」であると言う^{注20)}。語られるべき「物語」は「修辭的なもの」や「因習的なもの」であってはならないとされる^{注21)}。制作者の「出来事への興味」という一回性の内容が表現されていなければならないのである。モリスの言う「出来事」とは何か。かれが中世の神学の内奥に見出した中世の職人の世界観を示す次の言説が注目される。

中世の職人は美しい手工芸作品と商業主義の貪欲さによって悪化されていない自然の中に生きていただけではない。かれは当時理解されていた世界の叙事詩という感覚を深く吹き込まれていた。確かに、存在の神秘についての解答、すなわち当時の科学とは、カトリック教会という団体が説明する専斷的な神学によって与えられたものだった。しかし、一方でこの神学は現在カトリック教徒やプロテスタント教徒によって理解されている宗教と同一境界内のものではなく、中世の精神においては、それ（引用者注：神学）は単なる教義ではなく、事実の報告、過去、現在、未来の出来事の物語であり、すべての民衆によって本当に信じられているものだった。（…中略…）中世の職人・芸術家にとっては世界の生命の物語を絵にすることが本分だった。^{注22)}

The Mediæval workman not only lived amidst beautiful works of handicrafts, and a nature unspoiled by the sordidness of commercialism; but also he was deeply imbued with a sense of the epic of the World, as it was understood in his day. It is true that the solution of the mystery of existence, the science of the time, was given by an arbitrary theology, as set forth by the fellowship of the Catholic Church: but while on the one side this theology is not really conterminous with religion as understood both by Catholics and Protestants at the present time, so on the other to the mediæval mind it was no mere formula but a statement of fact, a tale of the events of the past, the

present and the future, and was really believed in by all people.(……) it was the business of the workmen artists of the Middle Ages to represent this story of the life of the World in pictures;

「事実」や「過去、現在、未来の出来事」が「世界の叙事詩」や「世界の生命の物語」と呼ばれる全体性において捉えられている。この全体性は同講演において「生命の連続性 (the continuity of life)」とも称される^{注23)}。かれの言う「出来事」とは「未来の出来事」を含んでいることから、空想的な内容でも受け容れられるものであると推察される。モリスは神学を通じた事物把握が空想性を可能にし、それが19世紀における科学的把握や教義的な宗教的把握と異質のものであることに注目する。引用の冒頭に示される「美しい手工芸作品」や「自然」という存在者の物性を実証的に解明することがいわゆる科学であり、物性から超越し神を措定することがいわゆる宗教であろう。モリスは個的存在者としての諸物が「出来事」の連続的關係として把握されることに意義を認める。そのためには「美しい手工芸作品」と「自然」を包含し得る通時的かつ共時的な総体としての「世界」が民衆の共通基底にあることが求められるのである。諸物の關係性を把握した「物語」とはつねに「世界の叙事詩」の一部として読まれる、言い換えれば「世界」へ還元されることへと通じているのである。モリスはこのように諸々の「出来事」を「世界」へ包摂する精神の働きに「宗教」という言葉の意味を見出している^{注24)}。

かれは社会主義的文獻においても「社会主義の宗教」など教義的な精神性とは異なる意味で「宗教」という言葉を用いている^{注25)}。1893年にバックスとの共著として出版された『社会主義—その成長と帰結』の最終章「社会主義の勝利」では、古代社会の宗教と来るべき社会の宗教との關係が述べられている^{注26)}。そこでは宗教に固有の信仰精神の脱迷信化が図られる。かれが中世の人々の精神に着目するのも、その信仰の内容よりも信仰そのことを重視するからである。「世界の叙事詩」の解釈は時代ごとに異なりつつも、信仰精神がその持続を担保するのである。モリスにおける信仰は何に向けられるのか。「世界」の実相が明らかにされなければならない。上記の「社会主義の勝利」における古代の宗教と現在の宗教に関する言説を並置しよう。

宗教は今日迷信と呼ぶものと結合することが不可避だった。というのは、人間と動物の生命や無生物などその他の存在者との間に区別がなく、すべての存在は等しく意識的で知性的であると考えられていたからだ。^{注27)}

That religion should then have been connected with what we now call superstition was inevitable, since no distinction was drawn between human and other forms of existence in animal life or in inanimate objects, all being alike considered conscious and intelligent.

教養ある階級に言わせれば、宗教は今や確実に超自然的になり、ついには superstitious という言葉の真の意味である、生き残りのものになった。なぜなら、宗教に内在する信仰という古い習慣が徐々に失われたからである。^{注28)}

Religion now became definitely supernatural, and at last superstitious, in the true sense of the word (*superstites*, surviving), as far as the cultured class was concerned, since it had gradually lost its old habit of belief in it.

ここに並置した宗教の在り方はそれぞれ「部族的，自然宗教」と「普遍的，倫理的宗教」と称される^{注29)}。モリスは古代の宗教における「すべての存在は等しく意識的で知性的である」という認識は迷信として否定するが，その信仰精神の基礎に据えられる人間と自然の未分化な関係への志向性は肯定する。宗教には本来，このような信仰が内在していなければならないとするのである。一方，現在の宗教が「超自然的」であることを否定する。「超自然的」とはいかなる事態か。モリスはこのことを説明するために，物質文明における階級問題を持ち出し，支配階級の台頭によって「人間による事物の支配」という関係性が「事物による人間の支配」という関係性に転じたこと，および支配階級が観察と内省の余暇を得たことで，種々の二元的把握が生まれたことを指摘する。それらを以下に要約しながら列挙する^{注30)}。

「意識的存在としての人間」と「残りの自然」という意識の有無による区別

the distinction of man as a conscious being apart from the rest of nature

「親しく既知の人間」と「神秘的で比較的に未知の自然」という人間の知識の程度による区別

on the one hand was man, familiar and known; on the other nature, mysterious and relatively unknown

「無意識な事物と見做される見える対象」と「それらの背後から働く想像された動力である『神意』」

という「自然」に関する区別

In nature itself there grew up a further distinction between its visible objects, now regarded as unconscious things, and a supposed motive power or “providence” acting on them from behind.

「個人」と「社会」という人間の在り方の区別

the distinction between the individual and society

「魂」と「身体」という個人における区別

within the individual, the distinction between the soul and the body

モリスはこれらの二元的把握によってどちらかが思考の対象から捨象されることに批判的であった。中でも「自然」に関する区別について次のように言っている。

これ（引用者注：「神意」）は特質において人間のようなものであるが，知識と力において人間に勝り，もはや自然物に内在的ではなく，それらの外にあり，それらを動かし制御していると考えられた。^{注31)}

This was conceived of as man-like in character, but above mankind in knowledge and power, and no longer indwelling in natural objects, but without them, moving and controlling them.

「見える対象」としての自然物の物性が外在的な「神意」によると解されること，これが「超自然的」という言葉の意味であろう。モリスはこれに対して，自然物の物性をその自然物に固有の内在的特性として，言わば自然的に把握する。「世界」とは上記の二元的分離を統合したときに見出されるありのままの自然物や人間によって構成されていると言えよう。これは前章でみた「大地の表面」に等しいと考えられる。来たるべき社会の人間はそうした「世界」に古代社会のような生物と無生物の一致をみるのではなく，様々

な差異や同一を含んだ関係性を「物語を語ること」により表現するというのがモリスの弁証法的歴史観の宗教への適用であり、それは「叙事詩的なもの」の内容を生成する芸術行為である。

4-2-2 作品における「装飾的なもの」

芸術作品における「装飾的なもの」について「空所すなわち触知できるものを飾ること」として機能するとされるが、どのように制作されるのか。モリスは装飾的側面とは「美しいものを表現する感覚と美しいものから受ける適合性の感覚、すなわち絵とそれが載る作品との釣合の観点である」とする^{注32)}。この言説では中世の印刷本における挿絵が主題となっているため、「美しいもの」として「絵」が例示されている。ここから装飾的側面は制作の観点から、次のふたつの側面をもつことが分かる。ひとつは「美しいもの」自体を制作するという形態的側面、もうひとつは「適合性」や「釣合」と呼ばれるように「美しいもの」をそれが適用される本体との関係において制作するという構成的側面である。「美しいもの」とは書物における縁飾りなどの装飾のみを意味するのではない。当時の印刷事情について次のように言われる。

印刷業者たちのただ単調な商売用の装飾ほど気が滅入るものを私は知らない。(…中略…) 簡素で飾りのない文字による書物のほうがはるかに装飾的であろう。^{注33)}

I do not know anything more dispiriting than the mere platitudes of printer's ornaments: trade ornaments. (……)books in which plain, unadorned letters would have been far more ornamental.

モリスは書物における活字や挿絵を単に書物の内容を媒介するものとして捉えるだけでなく、それら自体にも装飾的契機を見出している。さらに、活字、挿絵、その他の装飾が「ページの一部」となるように版面や余白を含め全体的に構成されなければならないと言う^{注34)}。こうして得られた全体は「美しいページ」と呼ばれる^{注35)}。

書物の装飾的側面についてその制作者という観点から捉え直すと、モリスの晩年の活動がそれまでの芸術論および社会主義論の集約されたものであることが分かる。「美しい書物を得るための唯一の可能な方法」が次のように述べられている。

実制作者の側からみれば、原画のデザイナーがかれであろうと他人であろうと、かれの仕事は原画の機械的再生産ではなく、共感的翻訳であることを理解しなければならない。このことを換言すれば、木版画のデザイナー、装飾木版のデザイナー、木版彫板師、印刷者、かれらすべてが思慮深く、勤勉な芸術家であり、ひとつの芸術作品の制作のために調和的協同のもとで働くということだ。^{注36)}

The executant, on his side, whether he be the original designer or someone else, must understand that his business is sympathetic translation, and not mechanical reproduction of the original drawing. This means, in other words, the designer of the picture-blocks, the designer of the ornamental blocks, the wood-engraver, and the printer, all of them thoughtful, painstaking artists, and all working in harmonious cooperation for the production of a work of art.

書物制作は部分的制作の総合が前提されている。前章でみた、モリスが「手工芸」に見出した建築的契機が如実に見出されるのである。現に、モリスは書物における装飾が書物という全体の一部として構成される様態を「建築的」と表現している^{注37)}。かれは構成的側面に関して、比例論的なプロポーションによってではなく、「共感的翻訳」という制作者の自由性や「調和的協同」という制作者の相互関係性から接近する。「美しいページ」や「美しい書物」という美的判断につねに倫理的判断が重層化されているのである。ここで付言しておく、モリスの印刷工房では原画のデザイナー（モリス自身）が描いたものを「翻訳」の余地があることを示す「スケッチ」という表現で彫板師が呼んでいると言う^{注38)}。原画の厳密的模写に意義を見出さないことを示す端的な事例である。

また、前章でモリスが「平等な社会は真の職人技術が生産の規則となり得る状況を形成する」と述べていることを確認したが、書物論では、彫板師の技術に焦点が当てられる。木版画の制作に関して、19世紀の職人は黄楊の小口に彫刻刀で彫るが、15世紀には柘や梨の木といった普通の木の板目にナイフで彫ったと言う^{注39)}。15世紀の職人技術には習得の難しさがあり、否応なく一彫板師が素材と直に向き合うことになる。このことにより作品に技術的直截さが表出されるからこそ、後代の人間が時代を超えて追体験し得ると言えよう。「装飾的なもの」には形態的側面と構成的側面に加えて、技術の伝承的側面も存することが指摘できる。

4-3 「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」との相関

モリスは書物の内容と装飾の程度についても考察している。「多かれ少なかれ実用的な挿絵を要する書物には実際の装飾は一切いらない」とされる^{注40)}。しかしながら、活字のデザイン、活字と挿絵の配置によって「美しいページ」が「装飾的なもの」として制作されるのである。「美しいページ」とは内容に関わらずそれ自体が職人や芸術家の出来事を内包する「叙事詩的なもの」として生活世界に現出するものであると言えよう。芸術行為を通して「叙事詩的なもの」が想起される作品を創出し、その作品も「叙事詩的なもの」となるという重層的関係への志向、これがモリスの書物論の特徴であり、アーツ・アンド・クラフツ運動の理論的背景となったのである。

「叙事詩的なもの」には「物語」という表現的側面と「物語」の解釈の変化という伝承的側面とが含意されている。「装飾的なもの」が「叙事詩的なもの」としての側面をもつことを指摘したが、より正確に言えば、「叙事詩的なもの」の伝承的側面のことを指している。本研究第1章で論じた装飾芸術における「伝統」の更新の問題に対応するであろう。モリスは「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」とを芸術の二大原理だとするが、これらに内在的な制作の伝承性や制作者の信仰精神を見落としてはならない。モリスは1891年、書物論を展開するより以前に、英国ラファエル前派絵画展のために講演を行っている^{注41)}、そこでも絵画という視覚芸術作品を論じるために、ゴシック芸術を例示し、「叙事詩的特質」と「装飾的特質」を挙げている。ただ、この講演では、これらの特質に加えて、「自然への愛」と「ロマンティックな特質」について言及されており、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」という二項構造に純化される前の四項構

造であると考えられる。以下、この講演に抛りながら、「自然への愛」と「ロマンティックな特質」についてそれぞれみていこう。

4-3-1 制作における「自然への愛」

ラファエル前派とは、ウィリアム・ホルマン・ハント（William Holmann Hunt, 1827-1910）、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882）、ジョン・エヴァレット・ミレー（John Everett Millais, 1829-1896）の三人の画家によって1849年に結成された集団である^{注42)}。かれらは因習的なアカデミズムに反発し、ラファエル出現以前の作品に見出されるような自然への素朴な態度に立ち返り、新鮮な感動を喚起する芸術の在り方を絵画制作や機関誌『芽生え』（The Germ）の発行などを通して表現した。モリスはラファエル前派の特徴について、「一言で、自然主義である」と言う^{注43)}。かれらの作品には自然の細密描写が顕著であるが、それは自然の直写を目的とするような「かろうじて事実の報告をしているにすぎない」類の自然主義ではないとされる^{注44)}。モリスはこう言っている。

ラファエル前派の自然主義は単なる科学的事実の表現に止まらず、芸術作品を制作するために必要な、入念に考慮された正当で適切な出来事へと向かっており、真に自然なコンベンションに基づいていた。

^{注45)}

Well the Naturalism of the pre-Raphaelites which did not stop at the simple presentment of scientific fact but when further and conscientiously considered the due and proper incidents that were necessary in order to make a work of Art, was founded on a genuinely *natural* convention.

ここではラファエル前派の自然主義的態度が「科学的事実の表現」という直写性を有しながらも、「出来事」の描写という想像的作用を含む点が評価されている。かれらの自然観察および物語の構築は「自然なコンベンションに基づく」と、その方法の自然性が強調される。「自然な」ということは、本研究第1章より、「自分自身の」と言い換えられるであろう。これは自然主義を標榜しつつも「因習的なコンベンション（conventional convention）」による流派への批判的言明でもある^{注46)}。ここでは芸術の主題としての自然とその描写方法が問われているが、モリスはラファエル前派から学ぶべき造形芸術の特質について、絵画を例にとり、こう続ける。

どんな絵画も私にとっては、自然の再現と物語を語るもの以上でなければ完璧ではない。それは限定的で、調和的で、意識的な美を有するべきだ。それは装飾的なものであるべきだ。それはそれ自身が部屋や教会やホールにおいて美しい全体の一部となることができるべきである。^{注47)}

No picture it seems to me is complete unless it is something more than a representation of nature and the teller of a tale. It ought also to have a definite, harmonious, conscious beauty. It ought to be ornamental. It ought to be possible for it to be part of a beautiful whole in a room or church or hall.

「物語を語るもの」とは上述の「叙事詩的なもの」の表現的側面に対応する。また、絵画が「装飾的なもの」として「部屋」「教会」「ホール」など絵画が配される空間内において成立することが言われる。これ

は上述の書物論における「装飾的なもの」の構成的側面に対応する。モリスは、一般公衆は絵画など造形芸術のこのような装飾的機能を考慮に入れることはほとんどない一方で、ゴシック芸術の装飾的側面には精通していると考えていた。そこでラファエル前派を論じる中で敢えてこの特質を抽出することで、ラファエル前派がゴシック芸術という唯一のスタイルの一支流であることを強調しようとする。そしてゴシック芸術の特質を次のようにまとめている。

自然への愛がゴシック芸術の第一の要素である。次に叙事詩的特質である。これら二者に加わるのが、人々がしばしばゴシック芸術が有する唯一の特質であるとおそらく考える特質であり、それは装飾的特質である。これらの特質は古代の有機的芸術の流派、とりわけギリシア芸術も共有していると言えるかもしれない。しかし、それ（引用者注：ゴシック芸術）がこれらから区別される特質が少なくともひとつある。それはロマンティックな特質である。私はこれよりよい言葉がないためにこのように呼ぶ。^{注48)}

Love of nature is the first element in the Gothic Art; next is the epical quality, and joined to those two things is what people very often think perhaps is the only quality it has got, and that is its ornamental quality. These qualities you may say it shares with the ancient organic Schools of Art, the Greek above all; (though it seems to me that it outgoes them in its epical and ornamental developments), but at least one quality distinguishes it from them, the *romantic* quality, as I must call it for lack of a better word;

「自然への愛」が「叙事詩的特質」の表現的側面の前提となることは本章の考察より明らかである。また、既述のように、モリスには種々の装飾芸術作品の「形態」が「自然と調和すれば美しい」という認識があった。このことから「装飾的特質」の一部を為す形態的側面にも「自然への愛」が作用していると言える。「自然への愛」とは芸術作品の叙事性と装飾性の両者における表現性の基底にあり、既にみたモリスの志向する信仰精神に等しいと言えよう。

4-3-2 制作の伝承としての「ロマンティックな特質」

先の引用において強調され、ゴシック芸術を他の芸術思潮と決定的に区別すると考えられる「ロマンティックな特質」とは何か。モリスは言葉の選択を躊躇しているが、このことは何を意味しているのであろうか。「ロマンティックな特質」を示す言説を、ひとつめは同講演から、ふたつめは1889年の第12回古建築物保護協会の年次総会における講演から引用する。

それ（引用者注：ロマンティックな特質）は叙事詩的特質の全体ではないが、その一要素である（ホメロスに顕著なように）。そしてそれは装飾に関する最大の精練、豊富さ、永続的な興味に必要である。

けれども、それは定義されるよりも感じるものだと認める。^{注49)}

It is an element of the epical quality (as notably in Homer), though it is not the whole of it; and is necessary to the utmost refinement, abundance and enduring interest of decoration; though I admit that it is rather to be felt than defined.

私は人々がロマンティックであるということを間違って用いているのを耳にしたことがある。ロマンスが意味することは、歴史を真に知覚する能力、すなわち過去を現在の一部とする力のことである。^{注50)}

I have heard people mis-called for being romantic, but what romance means is the capacity for a true conception of history, a power of making the past part of the present.

ふたつめの引用から「ロマンティック」という特質が「歴史」の連続性に作品が開かれることにより付与されることが分かる。このことを踏まえると、ホメロスに顕著な要素とは前述の「叙事詩的なもの」の伝承的側面のことでありと考えられる。また、装飾の「精錬、豊富さ、永続的な興味」とは装飾芸術作品がその自己完結性を越えて、その技術的側面が伝統として更新される事態を捉えていると解される。芸術作品の叙事性と装飾性の両者に見出される伝承的側面が「ロマンティック」という言葉によって一括されるのである。「ロマンティック」という概念は、いわゆるロマン主義の観点からすれば、制作者の主観性に依拠し、内的情趣が表現されたものという意味に用いられ、抒情的作品を形容することが多い^{注51)}。しかし、モリスは制作者の抒情性が「世界の生命」の叙事性に包摂されると理解し、独自の意味で「ロマンティック」という言葉を用いるのである。

4-4 文学作品にみる「叙事詩的なもの」

前節によって、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」に内包される同一構造として、「自然への愛」と「ロマンティックな特質」とが見出された。これら二項は、生活芸術思想における〈芸術の生活化〉の方向を示している。「装飾的なもの」に関するこれら二項は、第1章において扱った装飾芸術論における「自然」と「歴史」の問題に対応するであろう。本節では、「叙事詩的なもの」における「自然」と「歴史」の問題を、モリスの文学作品の主題とその伝承方法の問題として確認する。

4-4-1 物語における虚構の意味

モリスはラファエル前派絵画展での講演の中で、ロセッティやバーン＝ジョーンズの作品は「普通の現代生活の場面を表現することにまったく関心がない」と言う^{注52)}。これは、絵画の主題として「現代生活」を選択し、美を志向すると、ヴィクトリア朝の生活環境における醜悪さや貪欲さを緩和するという虚偽的表現を強いられるからだとされる。これは絵画だけではなく文学の場合にも相当するとし、当時、トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) らの小説が「現代生活」を表現するという方法を掲げながら、そこに描出される田園生活が理想化されていることを批判する^{注53)}。モリスにとって、理想的内容は現実世界と峻別された虚構世界において描写されねばならないのである。この方法論により、モリスは2編のユートピアン・ロマンスを書いている。『ジョン・ボールの夢』(*A Dream of John Ball*) と『ユートピアだよりーあるいは休息の時代』(*News from Nowhere; or, An Epoch of Rest*) である。いずれも社会主義機関紙『コモンウィール』に連載されたのちにケルムスコット・プレスから出版されている。以下に、両作品の概要を示す。

『ジョン・ボールの夢』は『コモンウィール』に1886年11月13日号から1887年1月22日号まで連載、1888年にリープス・アンド・ターナー社版、1892年にケルムスコット・プレス版が出版されている。1381年の「ワット・タイラーの乱」として知られる農民一揆を背景とする夢物語である。語り手の19世紀人の「私」がケントの農民と行動を共にする。「私」が一揆の指導者の一人である司祭ジョン・ボールに、14世紀から19世紀までの歴史や19世紀以降の見通しを語りつつ、生と死をめぐる対話の中で革命を支える精神を問う。14世紀の生活が「フェローシップ」という共同体の精神に根差していたということが主題として読み取れる。

『ユートピアだより』は『コモンウィール』に1890年1月11日号から10月4日号まで連載、同年ロバート・ブラザーズ社版、翌年リープス・アンド・ターナー社版他、1893年にケルムスコット・プレス版が出版されている。21世紀、革命後の英国の社会を語り手の19世紀人の「私 (ウィリアム・ゲスト)」が訪ね歩く夢物語である。前半、舞台はロンドンである。21世紀の社会が14世紀のような雰囲気であるとされる。19世紀社会を知るハモンド老人との対話を中心に革命の経緯を知る。後半、21世紀の住人とともにテムズ河をボートで遡り、モリス自身の居住地であったケルムスコットへ至る。21世紀の「新生活」において「世界の生命」の連続性が意識されていることが主題として読み取れる。

『ジョン・ボールの夢』では、現在→過去→現在、『ユートピアだより』では、現在→未来→現在という夢物語の構造を採る。しかし、単に過去や未来を理想世界として描くのではなく、その理想世界において「私」の19世紀人としての感覚を介在させ、現実世界と異化された理想世界の特徴を19世紀の読者が経験できるようになっている^{注54)}。モリスにとって、ユートピアン・ロマンスを創作する目的は完成された理想世界の提示ではなく、理想世界を通して人間生活の意味を考える契機を読者に供することにあった。ケルムスコット版の両著作に着目すると、物語中に登場する人間生活の意味を象徴する事物が、木版画として見返しに挿入されている。『ジョン・ボールの夢』では、農民たちが集会に向かう場面に登場する革命旗である。その場面は、次のように著述されている。

その旗には緑の木々を背景にして、動物の毛皮で半身をおおった一組の男女が描かれていた。男は鋤をもち、女は糸巻棒と紡錘をもっていた。粗雑に描かれていたが、確かなスピリットと深い意味がみてとれた。原初の世界と、人間の自然との最初の闘争を象徴するこの絵の下には、次のような文句が記されていた。

アダムが耕し、イヴが紡いだとき、

ジェントルマンなどいだろうか。^{注55)}

(……), a picture of a man and woman half-clad in skins of beasts seen against a back-ground of green trees, the man holding a spade and the woman a distaff and spindle, rudely done enough, but yet with a certain spirit and much meaning; and underneath this symbol of the early world and man's first contest with nature were the written words :

‘When Adam delved and Eve span,
Who was then the gentleman?’

ここには、14世紀と19世紀の革命に通底すべき精神が描かれている。「原初の世界」とは有閑階級が存在しない、原始共同体を指すと考えられる。「人間と自然との最初の闘争」とは「耕す」「紡ぐ」という人間から自然への働きかけがある一方で、背景の緑の木々、腰掛けとしての樹木、動物の毛皮、道具としての鋤、糸巻棒など自然から人間への働きかけがあるという共属的關係を意味するであろう。



図10 Morris, William: *A Dream of John Ball and A King's Lesson*, Kelmscott Press, 1892 見返しおよび初頁

『ユートピア便り』では第31章「新しい人々のなかの古い邸」における「古い邸」が木版画となっている。エレンが「古い邸」を見た際の発言が注目される。

ああ、大地、いろんな季節、天候、それに大地に関わりあるすべてのもの、そこから生まれるすべてのもの—ちょうどこの邸がそうして生まれたように、私はこれらをなんて愛しているのだろう。^{注56)}
O me! O me! How I love the earth, and the seasons, and weather, and all things that deal with it, and all that grows out of it, — as this has done!

物語において、エレンは21世紀のユートピアにいながら未来の不安を語る者として設定されており、彼女が地上で生きるものの意味を再発見する場面である。「すべてのもの」の源泉としての「大地」が賛美される。このことは、19世紀人の「私」と21世紀の住人に共有されると解釈できる。「古い邸」に見出される理想は、「大地」の産出力であり、それは人間の力を超えている。



図11 Morris, William: *News from nowhere: Or, An Epoch of Rest, Being Some Chapters from a Utopian Romance*, Kelmscott Press, 1892 見返しおよび初頁

ここに挙げたふたつの場面の類似構造として、歴史の連続性を顕在化するために、「原初の世界」という「私」と14世紀人にとっての過去、「古い邸」という「私」と21世紀人にとっての過去を描出すること、それらが「自然」や「大地」と関わることで挙げられる。NowhereあるいはUtopia（非一場）として設定された虚構世界に「原初の世界」「古い邸」という歴史的要素や「人間と自然との最初の闘争」「大地」という全体性を挿入することで、物語の虚構性が否定されると言えよう。これらの場面が著作の見返しに置かれていることは、物語以前の生活世界の問題として読者に前もって提示するためと解釈できる。

4-4-2 物語の伝承性

前項において物語の主題が問われたが、それはどのような方法によって描出されるのであろうか。上記の2編を含むモリスの散文ロマンスや詩の特徴について、『ナルニア国物語』の著者として知られるC・S・ルイス（Clive Staples Lewis, 1898-1963）は次のように評している。

明白な事実を極めて普遍的な言語で記述する。そのため我々は山の空気を真に味わうことができる。モリスのすべての物語に落ち着いた確信の雰囲気を与えているのは、この事実に即すことである。他のものは風景があるのみである。モリスのものには地形がある。かれは風景を「描くこと」に関心がなく、その土地の地勢を伝えるのだ。(…中略…) モリスの想像の世界はスコットやホメロスのように、風が吹き、触れることができ、音が鳴り、三次元的である。^{注57)}

ルイスが指摘する〈事実に即すこと〉という態度は「叙事詩的なもの」が成立する条件であろう。〈三次元的〉ということは読者の身体感覚を指しているであろう。モリスの言語を媒介として読者が空想世界へ導かれるためには、読者は言語を理解している必要がある。ルイスはモリスの言語を〈普遍的な言語〉と称しているが、ここでモリスの散文ロマンスの多くが擬古文体という 19 世紀の人々にとって馴染みのない文体で書かれていることを指摘しなければならない。上記の『ジョン・ボールの夢』においても中世の人間が語る言語は現代語ではない。モリスは作中にて、この意図を示唆する内容を 19 世紀人の「私」に語らせている。

私は奇妙な気持ちになった。私が知っている言葉が明らかにすること以上に私には言うべきことがあるようだった。誰かから一揃いの新しい言葉を欲しい感じであった。道を再び歩いていくと、その場面の偉大な美しさにあらためて感動した。家々、新しい内陣と月光を浴びた雪白の塔を有する教会、民衆すなわち男と女たち（女たちもそこでは男たちに合流していた）の衣服や武器、かれらの厳かで朗々とした言語、趣のある韻律の整った口話の形式、それらはあらためて私にとって驚異となり、涙が出るほどであった。^{注58)}

I felt strangely, as though I had more things to say than the words I knew could make clear: as if I wanted to get from other people a new set of words. Moreover, as we passed up the street again I was once again smitten with the great beauty of the scene; the houses, the church with its new chancel and tower, snow-white in the moonbeams now; the dresses and arms of the people, men and women (for the latter were now mixed up with the men); their grave sonorous language, and the quaint and measured forms of speech, were again become a wonder to me and affected me almost to tears.

モリスは 19 世紀の言葉によって 14 世紀の世界の雰囲気十全に捉えきれないと考えていた。こうした言葉への反省的態度は、comfort, convention, style, architecture, art, wealth, religion, romantic など本論において扱った概念が再定義されていたこととも通じている。言葉への反省を読者に促した上で、モリスは「私」に 19 世紀の言葉によって、14 世紀の世界を語らせる。読者は言葉に拘束されない世界に身を置くことを余儀なくされるのである。これに対し、14 世紀の言葉で語られる箇所は、読者につねに違和感を促しながら、14 世紀の世界を経験させるのである。

上の文章において、「場面」として、家々、教会、衣服、武器という物質的要素だけではなく、言語、口話の形式という非物質的要素も含まれていることは看過されてはならないだろう。ここに、19 世紀の言葉を回復する方法が暗示されている。「場面」の記述は民衆（男と女たち）を折り返し点としており、民衆に物質的要素と非物質的要素とが統合されていると言える。つまり、民衆という存在は自己と世界を主体と客体とみる二分法では捉えきれないのである。そのような世界において言葉（words）およびその総体である言語（language）は集合としての民衆によって共有される、自己と世界の両義を担うものである。言葉や言語という世界認識のための媒体が口話という身体感覚を通して民衆によって経験されるとき、それらは変化に開かれ、本来性を取り戻すと言えよう。

小結

本章では、モリスの晩年の制作観について、書物論を通して「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」という芸術的特性とともに考察した。第1節では、モリス晩年の活動において書物論がアーツ・アンド・クラフツ運動の方向付けと関わっていることを示し、書物の文学作品かつ装飾芸術作品という性格をモリスの称揚する作品の特徴によって把握した。第2節では、「叙事詩的なもの」の枠組について「出来事」と「世界」という概念をめぐって明らかにした。モリスは諸物（自然物）および人間を内在的特性に基づいて「出来事」の連続的關係として把握し、そこに「世界の生命」という全体性を見出していた。また、「装飾的なもの」の枠組について形態、構成、伝承の三側面を示した。第3節では、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」の同一構造として「自然への愛」と「ロマンティックな特質」が関わることが明らかとなった。第4節では、本章にて得られた見解をモリスのユートピアン・ロマンスにおいて確認した。

モリスは書物に顕著に現れる叙事性と装飾性という芸術の精神的用途を論じるが、それらを文学作品と装飾芸術作品に対応する特性として加算的に捉えているのではない。両作品を統べる制作以前の倫理的事柄である「自然への愛」および「ロマンティックな特質」に遡行することで見出された不可分な特性である。「世界の生命」を根拠として作品世界と生活世界を往還するとき、叙事性と装飾性の区別は不問となる。

第4章 注記

注1) ケルムスコット・プレスの刊本は、関川左木夫とコーリン・フランクリンによる先行研究『ケルムスコット・プレス図録』、雄松堂書店、1982によってリスト化されている。ケルムスコット・プレスの活動や影響については、[IB]の編者でもある William S. Peterson による The Kelmscott Press A History of William Morris's Typographical Adventure, Oxford University Press, 1991 (湊典子訳『ケルムスコット・プレス：ウィリアム・モリスの印刷工房』、平凡社、1994)に詳しい。

注2) 序章注26) 参照。本章におけるモリスの書物論の訳出に際し、川端康雄による訳書『理想の書物』、ちくま学芸文庫、2006を参考にした。

注3) Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages, [IB-1]

注4) The Beauty of Life, [XXII-73]

注5) 上掲書, [XXII-76]

注6) 第2章第1節参照。

注7) 第3章第3節参照。

注8) The Woodcuts of Gothic Books, [IB-26]

注9) A Reply to the Editor, The Pall Mall Gazette (2 Feb.1886), [LE-245] 本論中で示す8編以外を以下に列挙しておく。9.ヘロドトス 10.プラトン 11.アイスキュロス 12.ソポクレス 13.アリストパネス 14.テオクリトス 15.ルクレティウス 16.カトゥルス 17.プルタルコスの英雄伝 18.ヘイムスクリングラ(ノルウェイの王たちの物語) 19.半ダースほどの最良のアイスランド・サガ 20.アングロ・サクソン年代記 21.ウィリアム・オヴ・マームズベリ 22.フロワサール 23.アングロ・サクソンの抒情詩群(例えば「廃墟」とか「放浪者」) 24.ダンテ 25.チョーサー 26.農夫ピアズ 27.ニーベルンゲンの歌 28.デンマーク、およびスコットランドの伝承バラッド 29.イングランド辺境地方の伝承バラッド 30.オマル・ハイヤーム(ただしこの美しい詩の魅力がどのくらい訳者フィッツジェラルドの功績であるのか私にはわからない) 31.他のアラブとペルシアの詩 32.狐のルナール 33.最良の韻文ロマンス数点 34.アーサー王の死(マロリーの) 35.千夜一夜物語 36.ボッカッチョのデカメロン 37.マビノギオン 38.シェイクスピア 39.ブレイク(かれの内で生身の人間に理解できる部分) 40.コウルリッジ 41.シェリー 42.キーツ 43.バイロン 44.バニヤンの天路歷程 45.デフォーのロビンソン・クルーソー、モル・フランダース、ジャック大佐、船長シングルトン、世界周遊旅行 46.スコットの小説群(死の淵に書いたひとつかふたつは除く) 47.デュマ・ペール(かれのすぐれた小説) 48.ヴィクトル・ユゴー(かれの小説) 49.ディケンズ 50.ジョージ・ボロー(ラヴェンゲローとジプシー紳士) 51.サー・トマス・モアのユートピア 52.ラスキンの著作(とくにその倫理的部分と政治経済的部分) 53.トマス・カーライルの著作 54.グリムのドイツ神話学

注10) 工藤好美『叙事詩と抒情詩』、南雲堂、1955 参照。

注11) Early Illustration of Printed Books, [IB-20]

注12) Some Notes on the Illuminated Books of the Middle Ages, [IB-8]

注13) 上掲書, [IB-12]

- 注 14) The Woodcuts of Gothic Books, [IB-32-6] 以下に, 36 点の原典を示す。1.『往生術』2.『ソロモンの歌』3.4.5.『ボッカッチョの有名かつ高貴な婦人たち』6.7.8.『人生の鑑』9.10.『イソップ寓話』11.12.『ビドバイの寓話の書』13.14.『宝庫』15.16.『ニュールンベルク年代記』17.18.『ゾイゼの書』19.20.21.『キリスト伝』22.『黄金伝説』23.24.『歴史の海』25.26.『戦闘の樹』27.『二つの運命の治療』28.『羊飼いの暦』29.30.『時禱書』31.タイトル不明, 名目上イタリアの木版画 32.33.34.『四つの王国』35.『開運の書』36.タイトル不明, ヴェネツィア派の書物
- 注 15) 上掲書, [IB-36]
- 注 16) Printing, [IB-59]
- 注 17) 上掲書, 同頁
- 注 18) モリスが活字に関心を抱き, 印刷所を創設する直接の契機はエマリー・ウォーカー (Emery Walker, 1851-1933) による講演「活版印刷と挿絵」であったことが, 注 1) 内のピーターソンの研究によって指摘されている。ここに挙げた 3 種の字体については, A Note by William Morris on His Aims in Founding the Kelmscott Press, [IB-75-6] においてモリス自身がその実制作について具体的に著述している。

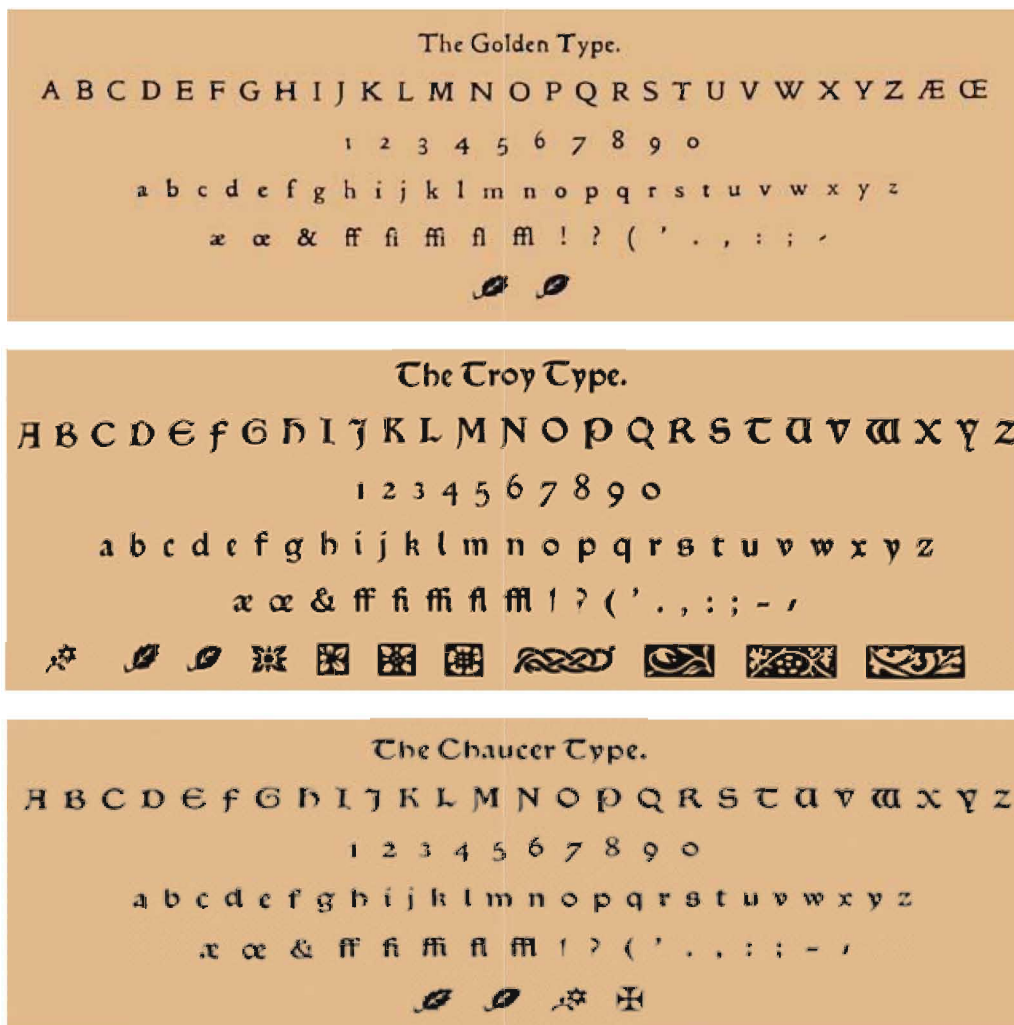


図 12 モリスが制作した活字体 上からゴールデン体, トロイ体, チョーサー体

注 19) ヴィクトリア朝の印刷事情に関する内容について注 1) 内のピーターソンの研究第 1 章「ヴィクトリア朝時代の印刷事情」を参考にした。

注 20) Early Illustration of Printed Books, [IB-20]

注 21) Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages, [IB-4]

注 22) 上掲書, 同頁

注 23) 上掲書, 同頁

注 24) モリスは注 22) の引用に続けて、次のように言っている。「そしてこのこと（引用者注：世界の生命の物語を絵にすること）を意識的に、芸術家が出来事を見たまに行うことが宗教的（編者による注：信仰の？）行為であったなら、疑いなく中世の芸術家はあらゆる人間の中でもっとも宗教的であった」（; and if the doing this consciously, and as the artist *saw* the event, was an act of religious[belief?], then undoubtedly the mediæval artists were of all men the most religious.）と。「世界の生命の物語」は中世の芸術家にとってあくまで「出来事」の直叙であったというのがモリスの見解である。

注 25) Why Not?, [PW-27]

注 26) 『社会主義—その成長と帰結』の資料情報は序章注 49) 参照。最終章「社会主義の勝利」は、1888 年 5 月 5 日付と 5 月 19 日付『コモンウィール』誌に分載された。掲載時と比較すると、宗教に関する記述の後に芸術に関する記述が大幅に加筆されている。

注 27) Socialism Triumphant, [SO-293]

注 28) 上掲書, [SO-294]

注 29) 上掲書, [SO-296] による。「普遍的、倫理的宗教」の原語は the universal or ethical religions, 「部族的、自然宗教」の原語は the tribal or nature-religions となっている。

注 30) 上掲書, [SO-293-4] を要約する。

注 31) 上掲書, [SO-294]

注 32) Early Illustration of Printed Books, [IB-20]

注 33) The Woodcuts of Gothic Books, [IB-38]

注 34) Printing, [IB-65]

注 35) The Ideal Book, [IB-68]

注 36) The Woodcuts of Gothic Books, [IB-40]

注 37) The Ideal Book, [IB-73] において、*architectural* と斜体表記される。同書, [IB-67] では、無装飾の書物を版面の鮮明さ、活字のデザイン、余白と版面の釣合によって構成することを「建築的配列（architectural arrangement）」と呼んでいる。

注 38) The Woodcuts of Gothic Books, [IB-39]

注 39) Early Illustration of Printed Books, [IB-20]

注 40) The Ideal Book, [IB-67]

注 41) ・ Address on the Collection of Paintings of the English Pre-Raphaelite School, 「英国ラファエル前派絵画展における講演」は、バーミンガム市美術館およびアート・ギャラリーにおいて 1891 年 10 月 2 日に行われた ([UL-318] [EL-171] 参照)。

注 42) のちに、ダンテ・ガブリエル・ロセッティ (本論ではこれ以降、ロセッティと呼ぶ) の弟である批評家ウィリアム・マイケル・ロセッティ (William Michael Rossetti, 1829-1919), 彫刻家トマス・ウルナー (Thomas Woolner, 1825-1892), 画家ジェームス・コリンソン (James Collinson, 1825-1881), 批評家フレデリック・ジョージ・ステープンス (Frederick George Stephens, 1828-1907) が加わり 7 人となる。かれらが正式のメンバーであるが、ロセッティの先輩格であるフォード・マドックス・ブラウン (Ford Madox Brown, 1821-1893) やロセッティを慕って集まったアーサー・ヒューズ (Arthur Hughes, 1832-1915), エドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-1898), モリスらをラファエル前派に一括することが多い。ラファエル前派の活動について、岡田隆彦『ラファエル前派 美しき〈宿命の女〉たち』, 美術公論社, 1984 を参照した。また、ロセッティの活動や作品については, Jacques de Langlade : Dante Gabriel Rossetti, Mazarine, 1985 (山崎庸一郎, 中条省平訳『D.G.ロセッティ』, みすず書房, 1990) に詳しい。

注 43) Address on the Collection of Paintings of the English Pre-Raphaelite School, [i -298]

注 44) 上掲書, [i -300]

注 45) 上掲書, [i -301]

注 46) 上掲書, 同頁

注 47) 上掲書, [i -302]

注 48) 上掲書, [i -303]

注 49) 上掲書, 同頁

注 50) Address at the Twelfth Annual Meeting, [i -148]

注 51) ロマン主義は古典主義に対抗する文芸・思想運動として打ち立てられた。森田慶一によれば、ロマン主義は「枠をはずした自由な創作活動, 個人の構想力 imagination に基づく主観的な創作活動, を重んずる」態度をとる。その一般的性格は「情緒的, 空想的, 非合理的, 神秘的—主観主義。混沌のうちに奇蹟を期待する。無限。断片的ながら宇宙の神秘に近づこうとする。漂渺・憂うつ。無形的, 内面的。見なれない, 奇妙な, 極端なものへの憧れ。絵画的。動的。」とされる。(『建築論』, 東海大学出版会, 1978, pp.219-220) モリスの言う「ロマンティック」は森田の規定するようなロマン主義の性格とは多くの点で一致しない。

注 52) Address on the Collection of Paintings of the English Pre-Raphaelite School, [i -304]

注 53) 上掲書, [i -304-5]

注 54) モリスの文学作品の創作における異化効果について, 建築の内部空間の問題として論考した川端康雄「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動: デザイン思想と社会改革のヴィジョン」『〈インテリア〉で読むイギリス小説: 室内空間の変容』, ミネルヴァ書房, 2003 を参考にした。

注 55) *A Dream of John Ball*, [XVI-228] 訳出に際し、横山千晶訳『ジョン・ボールの夢』、晶文社、2002 を参考にした。

注 56) *News from Nowhere; or, An Epoch of Rest*, [XVI-202] 訳出に際し、松村達雄訳『ユートピアだより』、岩波書店、1968 および五島茂責任編集『ラスキン モリス』(世界の名著 52)、中央公論社、1979 を参考にした。

注 57) C.S.Lewis : 'William Morris', "Selected Literary Essays", Cambridge University Press, 1969, p.221 以下に原文を付記する。There are a dozen differences between them, but there are two important similarities; both succeed so that we really taste the mountain air. It is, indeed, this matter-of-factness, as Clutton-Brock pointed out, which lends to all Morris's stories thir sober air of conviction. Other stories have only senery: his have geography. He is not concerned with 'painting' landscapes; he tells you the lie of the land, and then you paint the landscapes for yourself. (……) No mountains in literature are as far away as distant mountains in Morris. The world of his imagining is as windy, as tangible, as resonant and three-dimensional, as that of Scott or Homer.

注 58) *A Dream of John Ball*, [XVI-257]

結章

5-1 モリスの生活芸術思想の構造

本研究では、制作という観点からモリスの生活芸術思想の内実を明らかにし、生活を基盤とした建築制作の可能性を探ることを目的として、前章まで逐次、記述的に分析してきた。本節では各章の要点を整理する。

序章では、大きく三つの作業を行った。①モリスの諸活動を時系列的に辿り、生活芸術思想の枠組を装飾芸術論、住まい論、社会主義論、書物論という四つの論点により形成した。②「生活芸術」の実現には〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉という二つの方法があり得ることを示した。③モリスの自然探求および歴史探求を①の四つの論点に即して記述・分析することを本研究の方向性として定めた。

第1章では、中産階級により営まれる「簡素な生活」に求められる〈芸術の生活化〉の方法を探ることを目論んで、装飾芸術論のうち、とりわけパタンデザインの方法（自然の問題）とゴシック芸術の方法（歴史の問題）を明らかにした。パタンデザインにおける「コンベンショナライジング」という抽象化作用は自然に存する生命の原理を想起させることを目的としており、そのことにより日常生活に「美」がもたらされることが分かった。モリスがゴシック建築を「生きているスタイル」と呼ぶのは、人間が「不断の生命」として「伝統」を更新する事態を捉えているからであった。建築や日常使用品の現在性を保持しながら「用と美」の結合を捉え直すことが「伝統」の意味であった。

第2章では、「簡素な生活」に求められる〈生活の芸術化〉の方法への関心から、「住まい」という生活環境はいかに制作されるのか明らかにした。モリスは「家造り」を問い直すに際し、「装飾」に関する判断を留保し、「用途」という人間生活の根本および「素材」の自然的特性に立ち返る。また、「住まい」という生活環境には「庭作り」が求められ、庭は自然と人間の共生的関係を成立させる歴史に開かれた場であることを明らかにした。モリスは、自然の作用と人間の制作とに「喜び」を見出すが、それは詩的な表現であるだけでなく、万物の動性を意味していた。庭では親和的な自然の作用が〈生活環境の美化〉として「住まい」に寄与する。中産階級の「住まい」に関する論考では、日常生活を構成する事物の用途、素材、作用などの実在的側面から〈生活の芸術化〉や〈生活環境の美化〉が企図されていたと言える。

第3章では〈生活の芸術化〉の方法について、自然資源や職人技術の問題とともに労働環境の在り方（「手工芸」と「工場」）という角度から探った。社会主義的著作を通して発語される「慎みある生活」を実現するためには労働者階級の労働環境を美化するとともに、「生命の価値」という観点から人間生活そのものを問うことが求められる。〈労働環境の美化〉は、第2章でみた事物の実在的側面からの〈生活の芸術化〉だけでは実現されず、「作り出す」ことの根源に立ち返ることを要請する。そこから①自然資源、物質的手段、生活環境を「大地の表面」という同位相において捉えること、②制作の源泉に「大地」の産出力を見定めること、という「大地」についてのふたつの視点が開かれる。

第4章では、モリスが晩年に主題的に扱う書物の二重性（文学作品と視覚芸術作品）に着目し、〈芸術の生活化〉の方法を再度探った。モリスの書物論では、「美」の内容が「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」という表現によって捉えられる。これら両者に〈芸術の生活化〉を実現する主題（「自然への愛」）と方法（「ロマンティックな特質」）が含まれている。本章ではとりわけ「叙事詩的なもの」というモリス晩年に固有の概念を詳細に分析した。「叙事詩的なもの」の枠組について「出来事」と「世界」という概念をめぐって明らかにした。モリスは諸物（自然物）および人間を内在的特性に基づいて「出来事」の連続的關係として把握し、そこに「世界の生命」や「世界の叙事詩」という全体性を見出していた。

書物論は装飾芸術論の延長上に捉えることができ、「世界の生命」としての制作という統一的視点により、自然と歴史を、対象的事物として把握することから、制作物が還帰する世界として把握することへ思想の力点が移行したことを示している。「世界の生命」への制作者の眼差しを基礎づけているのは、〈生活の芸術化〉の範囲を「簡素な生活」から「慎みある生活」へと拡張することで見出された「生命の価値」という全体性である。「生活芸術」とは〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉の同時実現の上に成立するものである。そのためには制作者と生活者に共有される制作観ないし世界観が求められる。

5-2 「生活芸術」の可能性

本節では、モリスの生活芸術思想に関する以上の論述を踏まえ、〈はじめに〉でふれた創造・生産における倫理の問題に還る。まず、モリスの生活芸術思想における倫理的内容を整理する。次にその倫理性に依拠する制作の在り方を示す。そして最後にモリスの生活芸術思想の今日的意義を考察する。

モリスの生活芸術思想における倫理的内容

モリスは、ラスキンの「ゴシックの本質」を論じるにあたって、その「倫理のおよび政治的側面」を強調し、デザインを論じるにあたっては、「道徳的特性」なるものを各デザインを導く法則として規定づける^{注1)}。「倫理」「政治」「道徳」という言葉はかれの社会主義者の信条から発せられていることも忘れてはならないが、それらはプロパガンダとしての意味を越えた、制作における真実を捉えている。人間が人間である所以、技術が技術である所以、という制作以前の根源への眼差しがモリスをして倫理的地平の重要性を語らせるのである。モリスは日常使用の器物や日常の家や庭に、制作者と受容者の同一基底にある倫理性がことさらに顕在化されることをみた。かれはゴシック芸術を称揚し、次のように述べている。

小住宅も寺院も同じスタイルで建てられ、同じ種類の装飾が施されていた。貧しい家と広大な建物との相違は、ただ規模と、ときには素材とが違っただけである。^{注2)}

we know now that in that time cottage and cathedral were built in the same style and had the same kind of ornaments about them; size and, in some cases, material were the only differences between the humble and the majestic building.

モリスは日常使用の住宅などに関心を示しつつも、個人の使用に関わるもののみを制作対象とするべきとみているわけではないことが分かる。このことは本研究第3章でみたモリスの工場に関する記述からも明らかである。私的領域と公的領域の区別や装飾の程度は、使用目的（想定される使用者）に起因するのであって、制作方法が異なるということはないのである。

モリスの思索において、本来的な制作とは、制作者の「喜び」が制作物に内包される制作である。かれは「喜び」を「頭脳」と「手」に対する「第三者」であるとしていた^{注3)}。「第三者」という表現に「喜び」の存在様態を知ることができる。モリスは個々人の「喜び」の表現として芸術を捉えようとするが、個々人の「喜び」の根源を「ひとつの喜び」という万物の動的事態に見出していた。自然と人間に同一性を認めることは、自然に帰還し、原始的生活を営むということの意味するのではない。自然と歴史が一元化された世界を指定することで、日常生活に秘匿された「生命」のつながり（非生命も含めて）を露呈させることが目論まれているのである。それは「大地」の公平性の上に成立する共同性であろう^{注4)}。

モリスが「小芸術」と「大芸術」とを分類するのは便宜的なものであった。かれは芸術総体の回復を究極目標としたのであり、その足掛かりを日常使用品という民衆にとって卑近な事物に求め、それを論じ、その制作を実践したのである。モリスが社会主義者として芸術を論じるとき、その論点は芸術それ自体ではなく芸術の目的にあった。芸術の目的とは第3章においてみたように、「気分」の二元性の問題であった^{注5)}。論考「芸術の目的」の中で次のように述べられている。

単に表面的な表現を求めても芸術は得られない。（…中略…）芸術の外貌がどうなるかといったことにはあまり気を使わず、芸術の目的を理解しようと努めるならば、我々は欲するものを手に入れるようになるだろう。それは芸術という名で呼ばれるか、呼ばれないか、いずれにせよ、それは生命となるであろう。^{注6)}

we cannot have art by striving after its mere superficial manifestation, (.....) For my part I believe, that if we try to realize the aims of art without much troubling ourselves what the aspect of the art itself shall be, we shall find we shall have what we want at last: whether it is to be called art or not, it will at least be *Life*;

芸術についての先入見をもって芸術と非芸術とを名指しするような態度から退いて、人間存在の「気分」という根本的現象において芸術を捉え直すとき、芸術はその完結性をすりぬけて人間に鑑賞および実践されることになる。この動的事態が「生命」の意味であり、「世界の生命」とも言い換えられるであろう。人間の営為を「世界の生命」という全体性において捉えるということ、これがモリスの制作論の要諦であり、古典主義とロマン主義、科学と空想、近代性と普遍性を往来する視座を与えるであろう。論考「建築の歴史」の結末部において次のように述べられている。

少なくとも我々は歴史を振り返って次のようには言わない。あれは悪くこれは良い、とか私はこれは好きだがあれは嫌いである、と。そうではなく次のように言う。あれは生命であった、とかこれら祖

先の作品は生命の物質的形跡である、と。またあなたは忘れてしまったが、その生命はあなたの内に
生きている、と。^{注7)}

At least, we do not turn round on history and say, That is bad and that is good; I like this and I
don't like that; but rather we say, This was life, and these, the works of our fathers, are material
signs of it. That life lives in you, though you have forgotten it;

「あれは悪くこれは良い」という芸術についての判断を（客観的であれ主観的であれ）留保し、「生命の物質的形跡」という観点から歴史的存在としての芸術作品、および自己を再発見することが言われている。「生命」という全体性は「小芸術」と「大芸術」の両者に共有される。このことは広義の合目的性と言えるであろう。もしくは存在論的な機能と言えようか^{注8)}。自然や歴史は本源的にはここにおいてある。物質的用途に応じるものが「小芸術」として、精神的用途に応じるものが「大芸術」として成立するにすぎない。このことは狭義の合目的性と言えるであろう。全体的な「生命」が成立する世界においては、民衆の日常生活の本来性が回復していることを考慮すれば、モリスの言う〈the Lesser Arts of Life〉と〈the Greater Arts of Life〉とは、それぞれ「生命の小芸術」と「生命の大芸術」と訳出するのが適切であろう。さらに〈the arts of life〉も「生命芸術」とする方がよいであろう。しかし、このような芸術の理想的な在り方を示す表現よりも、モリスが日常生活の使用品からこの理想状態に到ろうとした道程に今日的意義が認められるうちは「生活芸術」という表現を用いるべきであろう。

「世界の生命」と制作

本研究においてモリスの日常生活批判としての生活芸術思想を辿ることで「世界の生命」へと導かれた。「世界の生命」は自己と世界の両義を担うと考えられる。この地平からの建築制作（建築的芸術）と文学の創作は同一の構造を有している。序章においてふれたように、モリスは「口話による表現」と「手仕事による表現」を「創造的行為」と呼ぶ。第4章において論じたように、叙事詩的文学作品を成立させる言葉や言語は「口話」という身体感覚によって経験される。言葉や言語の意味は固定的ではなく、その表現を経験する民衆によって変容させられる可能性に開かれている。モリスはこのような観点から「口話」と「手仕事」の類似的関係をみていたと考えられる。モリスは第12回古建築物保護協会の年次総会において中世の職人の仕事についてこう述べている。

確実な方法で石に働きかけるという無意識的習慣は人工的には与えられない。そしてこのような習慣に建物のまさしく生命というものが存する。それ（引用者注：無意識的習慣）は建物において物語が語られるときの言語であった。もしその言語を破壊したならば、その物語の文体を修復できるだろうか。せいぜいその図、すなわち価値のない残骸が得られるだけだ。^{注9)}

I say the unconscious habit of working the stone in a certain way cannot be supplied artificially, and in such habits lies the very life of the buildings; it was the language in which the story was told when stories were told in buildings. If you have destroyed the language, can you restore the style of the story? You can have but a diagram of it, a *caput mortuum*.

「石に働きかける」という「手仕事」の背後にある「無意識的習慣」が「言語」と呼ばれる。これは「伝統」とも言い換えられるであろう。この「無意識的習慣」に基づいて、物語が石という素材に彫琢されるのである。モリスは同論考で、建物の修復を批判して「問題の要点は我々は物を直に見なければならないということだ」と述べている^{注10)}。「物を直に見る」とは建物に秘匿された「創造的行為」を自身において追体験することを意味するであろう。これは思惟によって建物を固定した対象関係におくことなく、手という身体感覚を伴って遂行されるのである。「無意識的習慣」とはこのようにしてのみ獲得されると言えよう。「無意識的習慣」も実際の言語と同様、「手仕事」という「行為」を誘発することが分かる。複数の職人を相互包摂する「習慣」が変容しながら持続する動的事態を捉えて、モリスは「生命」（「世界の生命」と同義）と呼ぶのであろう。

以上より、「口話による表現」や「手仕事による表現」という「創造的行為」が単に制作者の身体の運動を指すのではなく、非人称的な自発性を有する言語を媒介とした自己と世界の相互作用であることが分かる。この地平において、成立する芸術が「生活芸術」であり、文学であれ、建築であれ、民衆的となる。民衆という制作者は、多数において成立し、個人ではない。この意味で民衆とは無名である。

「世界の生命」の連続性への自覚的態度によって導かれる制作は、「原初の世界」の再創造である^{注11)}。日常生活において、民衆はすでに「伝統」や「大地の美」という全体性に属している。それは民衆自らの「創造的行為」による変容をもって保持されるものである。技術や環境を既知のものとして受容せず、永久の変化へ開くこと、そのような姿勢をモリスの生活芸術思想は示している。モリスは、「直に見る」ことを知った人間が平凡な英国の田園風景を見る経験について次のように著述する。最晩年の言葉である。

ほとんどすべての野辺の果てが拒絶できない声で次のように呼びかけてくる楽園であることを見つけ出す。「あなたが住まう大地とあなたを育む土壌を愛せよ」と。^{注12)}

you will find almost every field's end a paradise that will cry out to you in a voice not to be resisted: "Love the earth which you dwell upon, and the soil which nourishes you."

「野辺の果て」という言わば此岸と彼岸の境界とも取れる場所が、「住まう」こと、「育む」ことの自覚によって現実世界の「楽園」となることが言われる。モリスが「大地」の「声」に聴従し、詩作するのほひとつの世界の再創造の在り方である。

モリスの生活芸術思想の今日的意義

現代世界は科学技術や商業主義に取り巻かれることによって錯綜している。人間の活動が高度に文明化され、人間社会において消費されるエネルギーや物質が地球全体の循環システムに影響を与えることで、地球環境問題が生じる結果となった。現在、自然を征服するという価値観を排し、持続可能な環境調和型の社会を実現することが求められている。こうした自然観や社会観の転換に、技術に関する根本的な問い

直しが必要であることは自明である。このような状況にあつて、建築に伴う諸々の技術も地球規模の枠組で考えることを余儀なくされている。

もちろん、資源の再利用や低炭素社会の実現など、地球環境問題に対する技術的な解決も実行されなければならない。しかし、このアプローチは「環境にやさしい」という標語を掲げる商業主義に転化する可能性がある。科学哲学者である村田純一は、20世紀に入って技術の在り方が「生産のなかの技術」から「生活のなかの技術」へと質的に転換したことを指摘しているが、われわれはこの「生活のなかの技術」の本質を見定めておく必要がある^{注13)}。その上で一切の技術的解決が図られるべきである。

近年、モリスの思想が環境思想の系譜に位置づけられ、文化経済学の分野で取り上げられるのは現代社会のシステムに対して、生活者に基づく社会という反省的視座を示しているからに他ならない^{注14)}。このことは、環境思想の中心概念のひとつである〈エコロジー〉と経済学を基礎づける〈エコノミー〉の語源を遡ると明確になる。〈エコロジー (ecology)〉は動物学者ヘッケルによる造語 *Ökologie* に由来し、ギリシア語の〈oikos (家, 生息地)〉と〈logos (論理)〉とが結合されている。生物と環境との諸関係について考察する学問としてエコロジーは成立した。一方、〈エコノミー (economy)〉はギリシア語の〈oikonomia〉に由来し、それは〈oikos〉と〈nomos (法, 秩序)〉とが結合された言葉である。エコノミーは元来、家の中の人間関係を含む「家政」を指すものであった。〈oikos〉に遡ると、環境と経済を相互に連想できることが分かる^{注15)}。

ここで本研究第2章の冒頭におけるモリスによる「民衆の芸術」の規定が注目される。モリスは「民衆の芸術」の総体として「建築」を位置づけ、「家造りという芸術は全ての始まりである」としていた^{注16)}。ここに言われる「芸術」は本論の考察から「技術」と読み替えても差し支えない。「家造り (house-building)」は古代ギリシアの〈oikodomicē=oikos+domicē (術)〉に相当する。「家造り」は「生活のなかの技術」の端的な例であり、それは生活者個々人の生活を目的とした制作行為である。ここで注意しなければならないのは、モリスの考え方に従えば、「家」が生活者と関係づけられるだけでは不十分であり、「民衆」の在り方そのものが「家」に投影されなければならないということである。生活者は容易に我欲に従って「家」を自身に帰属させ、「家」が自然環境、歴史的環境、社会的環境などの重なりの上に成り立つことを見失う。「生活のなかの技術」は個々人の生活を目的とする裏面に個性偏重の性格をもっている。われわれは常にすでに複数の「民衆」として「伝統」や「大地 (地球) の美」に属していることを自覚しなければならない。

このような生活者の在り方を踏まえると、モリスが「民衆の芸術」の総体を「建築」としていることは意義深い。「家造り」は複数の職人技術が関係することを前提しているが、その他の種々の職人技術も「建築」という全体において関係づけられる必要があるというのである。各々の職人技術に通曉し、全体にまとめる者が〈建築家〉に他ならない。〈建築家〉は生活者あるいは職人が日常性に頹落したとき、「民衆の芸術」の継起的事態を知らせる役目を負うであろう。

終章 注記

注 1) 序章注 45) および第 1 章第 2 節参照。

注 2) Art, Wealth, and Riches, [XXIII-148]

注 3) 第 2 章注 14) 参照。

注 4) 「大地」の公平性については第 2 章第 3 節において, fairness という言葉について論じた箇所を参照。「大地」と
共同性については第 3 章小結にて論じた箇所を参照。

注 5) 第 3 章注 22) 参照。

注 6) The Aims of Art, [XXIII-91-2]

注 7) Architecture and History, [XXII-316]

注 8) 〈存在論的な機能〉という表現は, 増田友也「豊岡市民会館 または建築 について」, 『増田友也著作集 V 建
築以前 建築について』, ナカニシヤ出版, 1999, p.17 を参考にした。

注 9) Address at the Twelfth Annual Meeting, [i -151]

注 10) 上掲書, [i -154] The upshot of the matter is that we must look things in the face.

注 11) 第 3 章注 15) の内容と第 4 章注 55) の内容を重ねて考察した。

注 12) An Address... Birmingham, [XXII-427]

注 13) 村田純一『技術の哲学』, 岩波書店, 2009, pp.4-8 参照。

注 14) 海上知明は『環境思想 : 歴史と体系』, NTT 出版, 2005, においてモリスの思想を「エコトピアの萌芽」とし
て分類している。文化経済学については, 池上惇『文化と固有価値の経済学』, 岩波書店, 2003 参照。

注 15) 近年, 環境的に持続可能な経済として「エコ・エコノミー」を説く論者もある。Brown, Lester R: Eco-Economy,
W.W.Norton&Company, 2001 (福岡克也監修, 北濃秋子訳『エコ・エコノミー』, 家の光協会, 2002) 参照。

注 16) 第 2 章注 2) の言説。

資料

主要参考文献

本研究において扱った文献について「ウィリアム・モリスの言葉」「邦訳書」「ウィリアム・モリス関連文献（Ⅰ～Ⅶに細分類）」「建築史関連の研究」「その他（Ⅰ）」に分類し、各項目内にて出版年次順に記す。本研究において直接的に引用はしていないが、研究の内容や方法を検討する上で参考にしたものを「その他（Ⅱ）」に著者名順に記す。

ウィリアム・モリスの言葉

- Morris, William, et al.: The Oxford and Cambridge Magazine for 1856, Bell and Daldy, 1856
Morris, William and Middleton, J.H.: The Encyclopaedia Britannica 9th edition Volume XVII 'Mural Decoration', Adam and Charles Black, 1884
Members of the Arts and Crafts Exhibition Society: Arts and Crafts Essays, London, Rivington Percival, 1893
Morris, William and Bax, E.Belfort : Socialism: Its Growth and Outcome, London, Swan Sonnenschein, 1893
Mackail, J.W.: The Life of William Morris Volume II, London, Longmans Green, 1899
Ruskin, John: The Nature of Gothic : A Chapter from The Stones of Venice, London, George Allen, 1900
Morris, May(ed.): The Collected Works of William Morris, volume I -XXIV, London, Longmans Green, 1910-15
Morris, William: The Pilgrims of Hope and Chants for Socialists, London, Longmans Green, 1915
Morris, May(ed.): William Morris, Artist, Writer, Socialist, vol.1-2, Oxford, B. Blackwell, 1936
Henderson, Philip(ed.): The Letters of William Morris to His Family and Friends, London, Longmans Green, 1950
LeMire, Eugene D.(ed.): The Unpublished Lecture of William Morris, Detroit, Wayne State University Press, 1969
Peterson, William S.(ed.): The Ideal Book, Essays and Lectures on the Arts of the Book by William Morris, California, University of California Press, 1982
Salmon, Nicholas(ed.): Political Writings, Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890, Bristol, Thoemmes Press, 1994
Salmon, Nicholas(ed.): Journalism: Contributions to Commonweal 1885-1890, Bristol, Thoemmes Press, 1996
Morris, William: Architecture and History Essays 1870-1884, Wildside Press, 2003

邦訳書

- [A] 佐藤清訳『モーリス 藝術論』, 日進堂, 1922
[B] 大槻憲二訳『藝術の恐怖』, 小西書店, 1923
[C] 本間久雄訳『吾等如何に生くべきか』, 東京堂書店, 1925
[D] 布施延雄訳『無何有郷だより』, 至上社, 1925
[E] 中橋一夫訳『民衆の芸術』, 岩波文庫, 1953
[F] 松村達雄訳『ユートピアだより』, 岩波文庫, 1968
[G] 生地竹郎訳『ジョン・ボールの夢』, 未来社, 1973
[H] 内藤史朗訳「モリス 民衆のための芸術教育」, 『世界教育学名著選 18 ラスキーン モリス』, 明治図書, 1973
[I] 中桐雅夫訳『サンダリング・フラッド』, 月刊ペン社, 1978
[J] 五島茂他訳「モリス ユートピアだより」, 『世界の名著 52 ラスキーン モリス』, 中央公論社, 1979
[K] 小野二郎訳『世界のかなたの森』, 晶文社, 1979
[L] 川端康雄他訳『世界のはての泉 上下巻』, 晶文社 2000
[M] 小野悦子訳『輝く平原の物語』, 晶文社, 2000
[N] 横山千晶他訳『ジョン・ボールの夢』, 晶文社, 2000
[O] 大塚光子訳『アイスランドへの旅』, 晶文社, 2001
[P] 斎藤兆史訳『不思議な島々のみずうみ 上下巻』, 晶文社, 2002
[Q] 川端康雄訳『ユートピアだより』, 晶文社, 2003
[R] 川端康雄訳『理想の書物』, ちくま学芸文庫, 2006

ウィリアム・モリス関連文献

I) モリスに関する文献目録, モリス研究の動向

東京キリアム・モリス研究会編『キリアム・モリス誕生百年祭記念 文獻繪畫目録 モリス書誌』, 東京キリアム・モリス研究会, 1934 (1900 年から 1934 年までの邦文献リストあり)

モリス生誕百年記念協會編『モリス記念論集』, 川瀬日進堂書店 (神戸) / 西澤書店 (東京), 1934

木村正身『ウィリアム・モリス解釈の新段階』, 『香川大学経済論叢第二十九巻第五号』, 1957, pp.429-69

Aho, Gary L.: William Morris : a reference guide, G.K. Hall & Co. , 1985 (1897 年から 1982 年)

小野二郎『ウィリアム・モリス ラディカル・デザインの思想』, 中央文庫, 1992 巻末「参考文献」

Latham, David and Latham, Sheila: 'William Morris : An Annotated Bibliography', "The Journal of William Morris Studies", William Morris Society, 1983-2008 (13 編の文献目録, 1978 年から 2005 年)

II) モリス自身の著作を体系化した, 言説研究の基礎となる研究

Lemire, Eugene : A Bibliography of William Morris, Oak Knoll Press, 2006

III) モリスに関する代表的評伝

Mackail, J.W.: The Life of William Morris, 2vols., Longmans, 1899

Henderson, Philip : William Morris : His Life, Work and Friends, Thames and Hudson, 1967

Thompson, Paul : The Work of William Morris, Oxford University Press, 1991

ピーター・スタンスキー著 草光俊雄訳『ウィリアム・モリス』, 雄松堂出版, 1989

IV) モリスに関する総合的研究

Thompson, E.P. : William Morris, Romantic to Revolutionary, The Merlin Press, 1955

小野二郎『ウィリアム・モリス研究 小野二郎著作集 1』, 晶文社, 1986

白石博三『ラスキンとモリスとの建築論的研究』, 中央公論美術出版, 1993

Latham, David (ed.) : Writing on the Image : Reading William Morris, University of Toronto Press, 2007

木村竜太『空想と科学の横断としてのユートピア—ウィリアム・モリスの思想—』, 晃洋書房, 2008

V) モリスの諸活動に即した研究

大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』, 東京商科大学『商学研究』第一巻第二号, 1924

Watkinson, Ray : William Morris as Designer, Studio Vista, 1967

Lewis, C.S. : 'William Morris', "Selected Literary Essays", Cambridge University Press, 1969

関川左木夫他『ケルムスコット・プレス図録』, 雄松堂書店, 1982

安川悦子『イギリス労働運動と社会主義 : 「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究』, 御茶の水書房, 1982

鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』, 中央公論美術出版, 1996

藤田治彦『ウィリアム・モリスと反修復運動』, 美学会編『美学』46 巻 4 号, 1996, pp.1-12

Duchess of Hamilton, Jill, Hart, Penny, and Simmons, John: The Gardens of William Morris, Frances Lincoln, 1998

Peterson, William S.: The Kelmscott Press A History of William Morris's Typographical Adventure, Oxford University Press, 1991

藤田治彦: アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌—ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって—, 美学会編『美学』54 巻 1 号, 2003

川端康雄『ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動 デザイン思想と社会改革のヴィジョン』, 『〈インテリア〉で読むイギリス小説—室内空間の変容—』, ミネルヴァ書房, 2003

菅靖子『イギリスの社会とデザイン モリスとモダニズムの政治学』, 彩流社, 2005

VI) モリス解説書

藤田治彦『ウィリアム・モリス 近代デザインの原点』, 鹿島出版会, 1996

名古忠行『イギリス思想叢書 11 ウィリアム・モリス』, 研究社, 2004

ダーリング・ブルース他著『ウィリアム・モリス: ヴィクトリア朝を超えた巨人』, 河出書房新社, 2008

VII) モリス再評価

Schuhl, Pierre-Maxime : Machinisme et philosophie, 3rd edition, Presses Universitaires de France, 1969

藤井正一郎『近代建築再考』, 鹿島研究所出版会, 1970

中村良夫『風景学入門』, 中央公論新社, 1982

Bate, Jonathan : Romantic Ecology : Wordsworth and the Environmental Tradition, Routledge, 1991

Pepper, David: ECO-SOCIALISM—from deep ecology to social justice, Routledge, 1993

池上惇『文化と固有価値の経済学』, 岩波書店, 2003

建築史関連の研究

- Rickman, Thomas: An Attempt to Discriminate the Styles of English Architecture from the Conquest to the Reformation, 1817
- Eastlake, Charles L.: Hints on Household Taste in Furniture, Upholstery and other details, Longmans Green, 1868
- Ashbee, C.R.: Socialism & Politics: a Study in the Readjustment of the Values of Life, Brimley Johnson & Ince, 1906
- Pevsner, Nikolaus: Pioneers of Modern Design, From William Morris to Walter Gropius, 1st edition, Faber and Faber, 1936; 2nd edition, The Museum of Modern Art, 1949
- 片木篤『イギリスの郊外住宅』, 住まいの図書館出版局, 1989
- 海野弘『モダン・デザイン全史』, 美術出版社, 2002
- Greensted, Mary(ed.): An Anthology of Arts and Crafts Movement, Lund Humphries, 2005

その他 (I)

- Carlyle, Thomas: Sartor Resartus, 1836
- Pugin, Augustus Welby Northmore: Contrasts, 1836
- Carlyle, Thomas: On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History, 1841
- Pugin, Augustus Welby Northmore: The True Principles of Pointed or Christian Architecture, 1841
- Carlyle, Thomas: Past and Present, 1843
- Ruskin, John: Modern Painters, 1843-60
- Ruskin, John: The Seven Lamps of Architecture, 1849
- Journal of Design and Manufactures, 1849-1852
- Ruskin, John: The Stones of Venice, 1851-53
- Jones, Owen: Grammar of Ornament, 1856
- Dresser, Christopher: Studies in Design, 1874-1876
- Dresser, Christopher: Principles of Decorative Design, 1873
- Redgrave, Richard: Manual of Design, 1876
- 和辻哲郎『ホメロス批判』, 要書房, 1946
- 工藤好美『叙事詩と抒情詩』, 南雲堂, 1955
- アンリ・ルフェーブル著／田中仁彦訳『日常生活批判批判序説』, 現代思潮社, 1968
- Smith, David L.: Amenity and Urban Planning, Crosby Lockwood Staples, 1974
- 森田慶一『建築論』, 東海大学出版, 1978
- 岡田隆彦『ラファエル前派: 美しき〈宿命の女〉たち』, 美術公論社, 1984
- 平松紘「イギリス「入会地保存協会」創成期における活動: 入会の比較研究のための準備的考察」, 『青山法学論集』, 26巻第3号, 1985, pp.19-47
- Jacques de Langlade: Dante Gabriel Rossetti, Mazarine, 1985
- 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』, 創文社, 1988
- ニコラウス・ペヴスナー著／鈴木博之訳『ラスキンとヴィオレ・ル・デュク』, 中央公論美術出版, 1990
- 辛島司朗『環境倫理の現在』, 世界書院, 1994
- 平松紘『イギリス環境法の基礎研究: コモンズの史的変容とオープンスペースの展開』, 敬文堂, 1995
- 岩本純明「公共空間としての入会地: イギリスの経験」, 『日本村落研究学会』, 5巻第1号, 1998, pp.9-20
- 増田友也「豊岡市民会館 または建築 について」, 『増田友也著作集 V 建築以前 建築について』, ナカニシヤ出版, 1999
- 安西信一『イギリス風景式庭園の美学: 〈開かれた庭〉のパラドックス』, 東京大学出版会, 2000
- 岩切正介『英国の庭園: その歴史と様式を訪ねて』, 法政大学出版局, 2004
- 海上知明『環境思想: 歴史と体系』, NTT出版, 2005
- 鶴岡真弓「オーウェン・ジョーンズ『装飾の文法』の世界像」, 比較文明学会編『比較文明』, 2006

その他（Ⅱ）

トマス・カーライル著／石田憲次訳『衣服哲学』，岩波書店，1946

加藤邦男『ヴァレリーの建築論』，鹿島出版会，1979

中村貴志訳・編『ハイデッガーの建築論：建てる・住まう・考える』，中央公論美術出版，2008

マルティン・ハイデッガー著／小島威夫，アルプムスター共訳『技術論』，理想社，1965

M・メルロー＝ポンティ著／竹内芳郎監訳「間接的言語と沈黙の声」『シーニュ1』，みすず書房，1969

前田忠直『ルイス・カーン研究：建築へのオデュッセイア』，鹿島出版会，1994

増田友也「建築以前（退官講義）」『増田友也著作集 V 建築以前 建築について』，ナカニシヤ出版，1999

ジョン・ラスキン著／内藤史朗訳『芸術の真実と教育：近代画家論・原理編 I』，法藏館，2003

邦文献リスト

1934 年以降のものに限る。1934 年以前の文献については、以下の文献に詳しい。

モリス生誕百年記念協會編『モリス記念論集』、川瀬日進堂書店（神戸）／西澤書店（東京）、1934

日本におけるモリスに関する論文

あ

天川潤次郎「ラスキン、モリスと日本の農民工芸運動」『経済学論集』 9 (2), 2001, pp.1-25

阿見明子「William Morris ゆかりの地を訪ねて」『英米文学研究』 13 (0), 1992, pp.39-52

出雲雅志「The Reception of William Morris in Early 20th Century Japan」『商経論叢』 42 (1), 2006, pp.25-35

磯部直希「ウィリアム・モリスにみる「東方」の位相―テキスタイル《Cray》の構造と起源」『立命館文学』 0 (582), 2004, pp.342-324

稲坂三喜恵「A Study of William Morris's Dream: ロマンズへの招待」『SELLA』 21 (0), 1992, pp.61-74

井本正人「ウィリアム・モリスと地方大学」『ふまにすむす』 0 (20), 2009, pp. 52-57

岩本俊郎「ウィリアム・モリスの教育思想」『教育学研究』 41 (1), 1974, pp.63-72

生地竹郎「中世への憧憬と革命の夢―William Morris の A Dream of John Ball」『英語青年』 119 (8), 1973, pp.8-9

大竹勝「再びユートピアについて―ウィリアム・モリスを中心に」『東京経済大学人文自然科学論集』, 1976, pp.188-157

岡本文子「現代ウィリアム・モリスデザインのカラリングについて」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』 3 (0), 2008, pp.205-223

小野二郎「タイポグラファーとしてのウィリアム・モリス」『明治大学人文科学研究紀要, 別冊』, 1981, pp.1-31

———「ウィリアム・モリスと古代北欧文学（北欧神話〈特集〉）」『ユリイカ』 12 (3), 1980, pp.114-118

———「自然への冠―ウィリアム・モリス紀行」『展望』, 1975, pp.16-39

か

勝俣好充「ウィリアム・モリス―芸術と政治(1)」『純心人文研究』 0 (16), 2010, pp.123-135

———「『ジョン・ボールの夢』と詩人」『純心英米文化研究』 17 (0), 2001, pp.1-14

———「ラスキン、モリス、貨幣」『純心英米文化研究』 16 (0), 1999, pp.1-19

———「ウィリアム・モリス、政治と歴史」『純心英米文化研究』 14 (0), 1997, pp.9-20

———「ウィリアム・モリスと歴史」『純心英米文化研究』 13 (0), 1996, pp.17-31

———「ウィリアム・モリス：新しい感受性」『純心英米文化研究』 12 (0), 1995, pp. 45-57

勝見勝「ウィリアム・モリスと美術工芸運動」『リビングデザイン』, 1955, pp. 24-28

金村京一「ウィリアム・モリスの講演活動」『成安造形大学研究紀要』 4 (0), 1997, pp.33-41

川端康雄「ウィリアム・モリス研究者としての大槻憲二―モリス誕生百年祭を中心に―」『社会情報論叢』 8 (0), 2005, pp.1-26

———「ウィリアム・モリスと書物芸術」『社会情報論叢』 2 (0), 1998, pp.79-104.

———「世界のはての泉について―ウィリアム・モリスのロマンスと社会主義（マルクスのいない社会主義〈特集〉）」『現代思想』 19 (8), 1991, pp.180-189

木村昭仁「Rural Romanticism とユートピア：ウィリアム・モリス、宮澤賢治、武者小路実篤の思想と活動」『デザイン学研究.研究発表大会概要集』 0 (45), 1998, pp.62-63

木村正身「ウィリアム・モリスとバーナード・ショー―芸術と社会主義の基本関連―」『研究年報』 20 (0), 1981, pp.1-69

———「ウィリアム・モリスにおけるユートピア思想の性格―労働本質観を中心に―」『研究年報』 3 (0), 1964, pp.1-52

———「「ロマン的反抗」の政策思想―ウィリアム・モリスの場合―」『香川大学経済論叢』 35 (4), 1962, pp.1-46

———「ウィリアム・モリス解釈の新段階」『香川大学経済論叢』 29 (5), 1957, pp.1-41

木村竜太「ウィリアム・モリス、アナーキズム、ユートピア―個と社会の融合を巡って」『社会思想史研究』 0 (33), 2009, pp.101-115

———「ウィリアム・モリスと「中世」」『文化史学』 0 (63), 2007, pp. 77-96

- 「フェローシップと歴史の希望：ウィリアム・モリスの『ジョン・ボールの夢』」『文化學年報』 51 (0), 2002, pp.123-146
- 「ウィリアム・モリスのコミュニズム」『文化史學』 57 (0), 2001, pp.129-151
- 清川祥恵「ウィリアム・モリスのフェローシップの理想：『ジョン・ボールの夢』を読む」『国際文化学』 21 (0), 2009, pp. 49-62
- 久保村里正「生活における労働と造形行為：ウィリアム・モリスとジョン・ラスキンの生活デザイン考」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』 0(55), 2005, pp.149-156
- 栗田禎子「ウィリアム・モリスとスーダン戦争—ヴィクトリア朝社会における反戦運動の一断面（特集：戦争・ジェンダー・表象）」『Image & Gender』 5 (0), 2005, pp.93-102
- 神代雄一郎「37) 近代建築の起點とウィリアム・モリス：技術史的考察」『日本建築學會論文集』 0 (38), 1949, pp.132-135
- 小泉公史「William Morris ユートピア「無何有郷だより」の研究」『人文研究』, 1983, pp.1-21
- 権修珍「W.モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動からみる文化の保存価値」『政策科学』 11 (2), 2004, pp.105-118
- さ
- 斎藤江江「ウィリアム・モリス紀行—コッツウォルド地方とその周辺」『河南論集』 0 (7), 2002, pp.242-270
- 「ウィリアム・モリス試論—ケルトに架ける橋」『芸術』, 2000, pp.74-84
- 佐々木毅「〈研究例会発表要旨〉マシュー・アーノルドとウィリアム・モリス：教育との関係でみた二人の文学者」『比較思想研究』 21 (0), 1994, pp. 150-153
- 白石博三「93. レッド・ハウスとウィリアム・モリス」『日本建築學會研究報告』 0 (30), 1955, pp.1-4
- 「62. ウィリアム・モリスの研究：News from Nowhere に表わされた芸術論」『日本建築學會研究報告』 0 (25), 1954, pp.281-284
- 新熊清「バーナード・ショーとウィリアム・モリス及びその家族たち」『名古屋学院大学論集, 人文・自然科学篇』 10 (1), 1973, pp.42-57
- 新谷式子「ウィリアム・モリスのパターン・デザイン—秩序による制限についての考察」『デザイン理論』 0 (54), 2009, pp.33-45
- 菅靖子「シンポジウム・フォーラム報告 財団法人ラスキン文庫創立 20 周年記念シンポジウム 芸術と大地の美—ウィリアム・モリスと〈保全〉の思想」『文化経済学』 4 (3), 2005, pp.103-105
- 鈴木博之「モリス商会の背景（ウィリアム・モリスの世界〈特集〉）」『英語青年』 136 (8), 1990, pp.390-392
- 「ヴィクトリアン・ゴシック末期の建築保存論：その 4. S.P.A.B. の建築保存論」『日本建築学会論文報告集』 0 (257), 1977, pp.141-147
- 関裕三郎「「ユートピアだより」について—ウィリアム・モリスの現代性」『明治学院論叢』, 1971, pp.1-36
- Seki, Yoshiko「William Morris as a Storyteller: His Position in the Aesthetic Movement」『待兼山論叢』 0 (42), 2008, pp.35-49
- 「William Morris in Apprenticeship: His Etude on the Arthurian Motif」『Osaka Literary Review』 0 (46), 2007, pp.17-34
- た
- 高橋徹「ウィリアム・モリスと現代」『東京経済大学人文自然科学論集』, 1971, pp.53-83
- 高宮利行「若きモリスと「アーサー王の死」—書物史的観点から（ウィリアム・モリスの世界〈特集〉）」『英語青年』 136 (8), 1990, pp.384-387
- Takeuchi, Masami「A Complete Narrator, Guest: William Morris' News from Nowhere」『Osaka Literary Review』 0 (40), 2001, pp.29-41
- 竹多亮子「ウィリアム・モリスとウィリアム・ド・モーガン—“空想の工場”を現実へ」『現代と文化』 0 (118), 2008, pp.125-139
- 「イギリス ヴィクトリア朝時代における環境保護運動についての考察—オクタヴィア・ヒルとウィリアム・モリスの場合」『現代と文化』 0 (112), 2005, pp.47-57
- 多田幸正「宮沢賢治とウィリアム・モリス—〈芸術〉と〈労働〉の関連について」『日本文学』 30 (10), 1981, pp.64-78
- 土田真紀「展覧会評 生活と芸術—アーツ&クラフツ展 ウィリアム・モリスから民芸まで」『民族芸術』 25 (0), 2009, pp. 215-218
- 樋谷茂「ウィリアム・モリス再論」『新潟大学教育学部紀要』 6 (1), 1964

- 堤祥子「William Morris and the Society for the Protection of Ancient Buildings」『日本女子大学英米文学研究』 42 (0), 2007, pp.41-54
- アスキュー・デイヴィッド「一九世紀末の社会主義ユートピア小説：ベラミーとモリスの場合(若林洋夫教授退任記念論文集)」『立命館経済学』, 57(5), 2009, pp.154-194
- 利光功「ウィリアム・モリスにおける芸術と政治(美学会第四十一回全国大会報告)」『美学』 41 (3), 1990, p.49
- な
- 永谷秀雄「最晩年の環境保護運動家ウィリアム・モリス」『阪南論集, 人文・自然科学編』 36 (3), 2001, pp.135-143
- 「ウィリアム・モリスと古建築保護協会」『阪南論集, 人文・自然科学編』 34 (4), 1999, pp.135-147
- 「工芸家 W.モリスと建築」『阪南論集, 人文・自然科学編』 32 (4), 1997, pp.89-94
- 仲間裕子「ウィリアム・モリスについての一考—共同研究会の講演から(産業社会学部共同研究会)」『立命館産業社会論集』, 1997, pp. 149-150
- 中村英子「William Morris とアーサー王伝説：Gueenever をめぐって」, 『Asphodel』 18(0), 1984, pp. 123-144
- 仲村政文「ロマン主義的ユートピア思想の一類型：ウィリアム・モリス」『鹿児島大学法学論集』 37 (1), 2003, pp. 1-A61
- 中山修一「ウィリアム・モリスの 20 世紀」『神戸大学発達科学部研究紀要』 5(2), 1998, pp. 277-293
- 西脇順三郎「William Morris」『英語青年』 99 (11), 1953, p.520
- Nijibayashi, Kei「The Two Phases of William Morris's Poetics」『九州工業大学研究報告.人文・社会科学』 53 (0), 2005, pp.17-26
- は
- 萩原博子「ペイターの「W.モリス論」のゆくえ」『城西大学教養関係紀要』 3 (1), 1979, pp.33-55
- 羽生正気「ウィリアム・モリスの住環境観—ケルムスコット・ハウスを中心とした居住歴をめぐって」『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文』, 1981, pp.67-114
- 「ウィリアム・モリスにおける作品の研究—パターン・デザインについて」『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文』, 1975, pp.23-52
- 「ウィリアム・モリスとモダン・デザイン(大会報告)」『美学』 24 (3), 1973, pp.44-45
- 「ポール・トンプソン, 『ウィリアム・モリスの作品』」『美学』 22 (4), 1972, pp.57-64
- 「ウィリアム・モリスにおける作品の研究—室内装飾および家具について」『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文』, 1972, pp.45-69
- 原田佳子「ウィリアム・モリスとそのデザイン思想」『芸術研究』, 1999, pp.134-117
- 「ウィリアム・モリス研究の今日的意義」『広島大学日本語教育学科紀要』 7 (0), 1997, pp.227-237
- 日高俊彦「20 ウィリアム・モリスの建築論にみられる内的発展性への指向(建築歴史・意匠)」『研究報告集.計画系』 0 (60), 1990, pp.325-328
- 「19 ウィリアム・モリスの建築論におけるジェントルマン的主張(建築歴史・意匠)」『研究報告集.計画系』 0 (60), 1990, pp. 321-324
- 「13 ウィリアム・モリスについての社会的考察(歴史・意匠)」『研究報告集.計画系』 0 (59), 1988, pp.269-272
- 平田耀子「ウィリアム・モリスと本間久雄」『人文研紀要』 0 (66), 2009, pp.115-146
- 蛭川久康「モリスのオックスフォード時代」『武蔵大学人文学会雑誌』 41 (3), 2010, pp.1-99
- 「ウィリアム・モリス：ヴィクトリア朝美術工芸家の軌跡」『武蔵大学人文学会雑誌』 40 (1), 2008, pp.1-38
- 福永幸子「ウィリアム・モリスの装飾芸術」『総合社会科学研究』 3 (1), 2009, pp.15-29
- 「イギリスにおけるアートアンドクラフツ運動(1)」『倉敷市立短期大学研究紀要』 0 (36), 2002, pp.49-55
- 「ウィリアム・モリスのテキスタイルデザイナー—鳥のモチーフについての研究」『倉敷市立短期大学研究紀要』 0 (37), 2002, pp.49-56
- 「メイ・モリスによる「ウィリアム・モリスの覚書集」の研究：パタンデザインのヒントについて」『倉敷市立短期大学研究紀要』 0 (33), 2000, pp.81-88
- 「日本の伝統的な植物模様とウィリアム・モリスのパタン・デザイン比較研究(英文)」『倉敷市立短期大学研究紀要』 28 (0), 1998, pp.87-94
- 「ウィリアム・モリスのテキスタイル・デザイン研究」『倉敷市立短期大学研究紀要』 27 (0), 1997, pp.77-83
- 藤田治彦「アーツ・アンド・クラフツと工芸の変貌：ウィリアム・モリスと柳宗悦をめぐって」『美学』 54 (1), 2003, pp.14-26
- 「柳宗悦とアーツ・アンド・クラフツ」『美術フォーラム 21』 0 (6), 2002, pp.115-9

——— 「ウィリアム・モリスと民族芸術（民族芸術学の諸相）」『民族芸術』, 1999, pp.104-109

——— 「ウィリアム・モリスと反修復運動」『美學』 46 (4), 1996, pp.1-12

本田司「ウィリアム・モリスの芸術観」『社会体制』 5 (4), 1955

ま

松林雄次「the Aims of Art」について : A Victorian Socialist Thinker の軌跡 覚書 5」『論集』 43 (0), 2002, pp.61-79

——— 「The Art of the People について : A Victorian Socialist Thinker の軌跡覚書 4」『論集』 42 (0), 2001, pp.115-127

——— 「the Lesser Arts of Life」について—a Victorian Socialist Thinker の軌跡覚書 3」『論集』 40 (41), 2000, pp.47-62

——— 「the Lesser Arts」について : A Victorian Socialist thinker の軌跡覚書 2」『論集』 40 (0), 1999, pp.77-91

——— 「Architecture and History」について : A Victorian Socialist Thinker の軌跡覚書」『論集』 39 (0), 1998, pp.79-91

三浦永光「生活の美の再生を求めて—ウィリアム・モリスにおける芸術と社会」『津田塾大学紀要』, 1999, pp. 155-208

宮井敏「ウィリアム・モリスと「東方問題」（同志社百周年記念号）」『同志社大学英語英文学研究』, 1976, pp. 87-103

——— 「William Morris の Past Utopia」『同志社大学英語英文学研究』 0 (11), 1975, pp.131-143

宮川英子「ラファエル前派詩人としてのウィリアム・モリス : 「グェニヴィアの弁明」の現代性」『中京大学教養論叢』 31 (2), 1990, pp.461-483

A・L・モートン著／高橋徹訳「イギリス・ユートピア思想の系譜とウィリアム・モリス」〔Three Works by William Morris(ドイツ刊「七つの海双書」1968)序文全訳〕(ウィリアム・モリスと現代)『東京経済大学人文自然科学論集』, 1971, pp. 53-75

門司勝「ウィリアム・モリス—抒情詩時代(1856~'59)—2—」『福岡学芸大学紀要』 10 (1), 1960

ウィリアム・モリス作「ウィリアム・モリスのデザイン—モリスの「アーツ&クラフツ」運動の夢」『版画芸術』 37 (4), 2009, pp.94-101

——— 著／顚原澄子訳「古建築保護協会宣言」『みすず』 46 (3), 2004, pp.8-17

——— 著／高橋徹訳「王の教訓(ウィリアム・モリスと現代)」『東京経済大学人文自然科学論集』, 1971, pp. 76-83

森田由利子「ウィリアム・モリスの理想の書物 : 後期散文ロマンスにおける書物の表象」『サピエンチア : 英知大学論叢』 43 (0), 2009, pp.179-194

や

藪亨「ウィリアム・モリスと美術産業(産業社会学部共同研究会)」『立命館産業社会論集』, 1997, pp.151-158

——— 「芸術と生活 : ウィリアム・モリスのユートピア構想をめぐって(美学会第四十六回全国大会報告)」『美學』 46 (3), 1995, p.60

山田眞實「William Morris から Herbert Read へ」『Asphodel』 17 (0), 1983, pp.117-133

——— 「明治期日本における William Morris」『Asphodel』 13 (0), 1980, pp.101-119

——— 「William Morris の生活革命論」『Asphodel』 10 (0), 1977, pp.90-108

湯浅恭子「Metamorphosis : C.S. Lewis as a Reader of William Morris」『札幌大学女子短期大学部紀要』 47 (0), 2006, pp.5-27

横山千晶「William Morris and the 'Ruskinian' Crafts Revival」『藝文研究』 73 (0), 1997, pp.240-261

——— 「「成長」の意味—ジョン・ラスキンとウィリアム・モリス(フォルム・リテラール特集)」『教養論叢』 100 (0), 1995, pp.124-125

——— 「宿命のミューズたち—ウィリアム・モリスと「ヴォルスンガ・サガ」(ラファエル前派—憂愁の美女たちの秘められた物語〈特集〉)」『ユリイカ』 22 (11), 1990, pp.170-177

——— 「ウィリアム・モリスの歴史観—その夢物語をめぐって」『芸文研究』, 1986, pp.21-36

わ

渡辺芳道「ウィリアム・モリスのデザイン活動と装飾デザイン」『岐阜女子短期大学研究紀要』, 1983, pp. 45-53

日本におけるモリス関連図書

あ

- ステイーヴン・アダムス著／野中邦子訳『アーツアンドクラフツ：ウィリアム・モリス以後の工芸美術』，美術出版社，1989
- 荒俣宏『ブックス・ビューティフル：絵のある本の歴史』，筑摩書房，1995
- 『別世界通信』，筑摩書房，1987
- 池上惇『文化と固有価値の経済学』，岩波書店，2003
- 『生活の芸術化：ラスキン、モリスと現代』（丸善ライブラリー 093），丸善，1993
- 井口佳世子『ニードルポイント：イギリス伝統図柄を刺す』，日本放送出版協会，1999
- 岩切正介『英国の庭園：その歴史と様式を訪ねて』，法政大学出版局，2004
- 岩崎広平『テムズ河ものがたり』，晶文社，1994
- サザビー・ウィルキンソン・アンド・ホッジ編『ウィリアム・モリス蔵書競売目録』，タングラム，1991
- ビル・ウォータース，マーティン・ハリスン著／川端康雄訳『バーン=ジョーンズの芸術』，晶文社，1997
- 海上知明『環境思想：歴史と体系』，NTT出版，2005
- うらわ美術館編『もうひとつの扉：20世紀・アーティストの本』，うらわ美術館，2000
- 大内秀明編著『賢治とモリスの環境芸術：芸術をもてあの灰色の労働を燃せ』，時潮社，2007
- 大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』（論創叢書 3），論創社，2004
- 大阪芸術大学芸術研究所研究調査補助費共同研究グループ編集（平成 9-11 年度）『ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス刊本：大阪芸術大学図書館所蔵品展』，大阪芸術大学，1999
- 編集『ヴィクトリア朝挿絵本とウィリアム・モリス：大阪芸術大学図書館所蔵品特別展』，大阪芸術大学，1996
- 大槻憲二『モリス』（復刻版），研究社出版，1980
- 大橋竜太『英国の建築保存と都市再生：歴史を活かしたまちづくりの歩み』，鹿島出版会，2007
- 大原三八雄『ラファエル前派の美学』，思潮社，1986
- 大輪盛登『グーテンベルクの鬚：活字とユートピア』，筑摩書房，1988
- 岡田隆彦『芸術の生活化：モリス、ブレイク、かたちの可能性』，小沢書店，1993
- 編著『ウィリアム・モリスとその仲間たち：アールヌーボーの源流』，岩崎美術社，1978
- 小野二郎著／川端康雄編『小野二郎セレクション：イギリス民衆文化のイコノロジー』，平凡社，2002
- 『ウィリアム・モリス：ラディカル・デザインの思想』（中公文庫），中央公論社，1992
- 『書物の宇宙』，晶文社，1986
- 『ウィリアム・モリス研究』，晶文社，1986
- 『紅茶を受皿で：イギリス民衆芸術覚書』，晶文社，1981
- 『装飾芸術：ウィリアム・モリスとその周辺』，青土社，1979
- 『ウィリアム・モリス：ラディカル・デザインの思想』（中公新書 336），中央公論社，1973

か

- リン・カーター著／中村融訳『ファンタジーの歴史：空想世界』，東京創元社，2004
- 片木篤『アーツ・アンド・クラフツの建築』，鹿島出版会，2006
- 『イギリスの郊外住宅』，住まいの図書館出版局，1989
- 兼松誠一編『日本におけるウィリアム・モリス文献：1882～1996』，兼松誠一，1997
- 北野佐久子『美しいイギリスの田舎を歩く！』，集英社，2007
- 木村竜太『空想と科学の横断としてのユートピア：ウィリアム・モリスの思想』，晃洋書房，2008
- 『反近代から「普遍」としてのヴィジョンへ：ウィリアム・モリスの思想展開』，木村竜太，2007
- ノエル・キャリントン著／中山修一，織田芳人訳『英国のインダストリアル・デザイン』，晶文社，1983
- 京都造形芸術大学比較芸術学研究センター編集『特集かざる』，淡交社，2007
- 草光俊雄，近藤和彦，斎藤修，松村高夫責任編集『英国をみる：歴史と社会』，リプロポート，1991
- クリشان・クマー著／菊池理夫，有賀誠訳『ユートピアニズム』，昭和堂，1993
- 黒田智子編『作家たちのモダニズム：建築・インテリアとその背景』，学芸出版社，2003
- シャーロット・ゲスト著／井辻朱美訳／アラン・リー挿画『マビノギオン：ケルト神話物語』，原書房，2003
- 五島茂責任編集『ラスキン モリス』，中央公論社，1971

R・コールマン著／柳坪葉子訳『仕事という芸術：モリスの夢、ダイダロスの復讐』、アグネ承風社、1997

さ

斎藤公江『モリスの愛した村：イギリス・コッツウォルズ紀行』、晶文社、2005

坂上貴之他編著『ユートピアの期限』、慶應義塾大学出版会、2002

坂本勉『ベルシア絨毯の道：モノが語る社会史』、山川出版社、2003

佐藤清隆、中島俊克、安川隆司編『西洋史の新天地：エスニシティ・自然・社会運動』、刀水書房、2005

清水晶子『ロンドンの小さな博物館』、集英社、2003

壽岳文章他『モリス記念論集』（覆刻）、沖積舎、1996

城一夫『西洋染織模様の歴史と色彩』、明現社、2006

白石博三『ラスキンとモリスとの建築論的研究』、中央公論美術出版、1993

——『ウィリアム・モリス』、彰国社、1954

菅靖子『イギリスの社会とデザイン：モリスとモダニズムの政治学』、彩流社、2005

鈴木せつ子写真・文『ガーデニング王国 花紀行-英国コッツウォルドの愛すべき風景』、日経 BP 出版センター、1998

鈴木博之『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』、中央公論美術出版、1996

——『建築の世紀末』、晶文社、1977

ピーター・スタンスキー著／草光俊雄訳『ウィリアム・モリス』、雄松堂出版、1989

関川左木夫他『ケルムスコット・プレス図録』、雄松堂書店、1982

ジャン・セルヴィエ著／朝倉剛、篠田浩一郎訳『ユートピアの歴史』、筑摩書房、1972

園井英秀編『英文学と道徳』、九州大学出版会、2005

た

武田徹『蘇るウィリアム・モリス：ハイテク時代の職人哲学』、徳間書店、1997

多田幸正『宮沢賢治：愛と信仰と実践』、有精堂出版、1987

田辺徹『美術批評の先駆者、岩村透：ラスキンからモリスまで』、藤原書店、2008

鶴田静文／エドワード・レビンソン写真『丘のてっぺんの庭花暦』、淡交社、2009

デザイン史フォーラム編『アーツ・アンド・クラフツと日本』、思文閣出版、2004

——『国際デザイン史：日本の意匠と東西交流』、思文閣出版、2001

東京キリウム・モリス研究会編『モリス書誌：キリウム・モリス誕生百年祭記念文獻繪畫展覽會目録』、東京キリウム・モリス研究会、1934

アラン・G・トマス著／小野悦子訳『美しい書物の話：中世の彩飾写本からウィリアム・モリスまで』、晶文社、1997

ポール・トムスン著／白石和也訳『ウィリアム・モリスの全仕事』、岩崎美術社、1994

な

永井隆則編著『デザインの力』、晃洋書房、2010

名古忠行『ウィリアム・モリス』、研究社、2004

——『イギリス社会民主主義の研究：ユートピアと福祉国家』、法律文化社、2002

新見隆『モダニズムの建築・庭園をめぐる断章』、淡交社、2000

ジリアン・ネイラー編／ウィリアム・モリス研究会訳『ウィリアム・モリス』、講談社、1990

は

橋本優子、菅谷富夫、肴倉睦子編『デザイン史を学ぶクリティカル・ワークズ』、フィルムアート社、2006

マルカム・ハスラム著／高野瑤子訳『ウィリアムモリスとアーツ&クラフツカーペット：英国・アイルランドにおける展開』、千禧館、1995

長谷川堯『建築逍遙：W・モリスと彼の後継者たち』、平凡社、1990

羽生清『デザインと文化そして物語』、昭和堂、1997

ジル・ハミルトン、ペニー・ハート、ジョン・シモンズ著／鶴田静訳『ウィリアム・モリスの庭：デザインされた自然への愛』、東洋書林、2002

リンダ・バリー編／多田稔監修『ウィリアム・モリス：決定版』、河出書房新社、1998

——、ギリアン・モス著／高野瑤子訳『ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動：146 枚の図版によるデザインの原典』、千禧館、1992

——著／多田稔、藤田治彦共訳『ウィリアム・モリスのテキスタイル』、岩崎美術社、1988

- ウィリアム・S・ピーターソン著／湊典子訳『ケルムスコット・プレス：ウィリアム・モリスの印刷工房』，平凡社，1994
- 久守和子，中川僚子編著『〈インテリア〉で読むイギリス小説：室内空間の変容』，ミネルヴァ書房，2003
- 平野甲賀『平野甲賀「装丁」術・好きな本のかたち』，晶文社，1986
- 広島女学院大学生活科学部生活文化学科編『21世紀情報時代の美的・知的生活』，広島女学院大学総合研究所，2003
- 藤岡洋保編『新しい住宅を求めて：近代の住宅をつくった建築家たち』，KBI出版，1992
- 富士川和男監訳『ヴィクトリア朝短編恋愛小説選』，鷹書房弓プレス，2003
- 藤田治彦『もっと知りたいウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』，東京美術，2009
- 編『芸術と福祉：アーティストとしての人間』，大阪大学出版会，2009
- 監修『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』，梧桐書院，2004
- 『ウィリアム・モリス：近代デザインの原点』，鹿島出版会，1996
- 文・写真『ウィリアム・モリスへの旅』，淡交社，1996
- コリン・フランクリン著／大竹正次訳『英国の私家版』，創文社，2001
- ダーリング・ブルース他著『図説ウィリアム・モリス：ヴィクトリア朝を越えた巨人』，河出書房新社，2008
- ジョナサン・ベイト著／小田友弥，石幡直樹訳『ロマン派のエコロジー：ワーズワスと環境保護の伝統』，松柏社，2000
- ニコラウス・ペグスナー著／小野二郎訳『モダン・デザインの源泉：モリス・アール・ヌーヴォー.20世紀』，美術出版社，1976
- 著／白石博三訳『モダン・デザインの展開：モリスからグロピウスまで』，みすず書房，1957
- デイヴィッド・ペバー著／小倉武一訳『エコロジーの社会：生態社会主義』，農山漁村文化協会，1996
- フィリップ・ヘンダーソン著／川端康雄他訳『ウィリアム・モリス伝』，晶文社，1990
- クリスチーン・ポールソン著／小野悦子訳『ウィリアム・モリス：アーツ・アンド・クラフツ運動創始者の全記録』，美術出版社，1992
- 星合千重子『物語るステッチ「刺繍にみる英国史」』，文化出版局，1999
- 本間久雄『生活の藝術化』，銀書院，1946
- ま
- ジャン・マーシュ著／中山修一，小野康男，吉村健一訳『ウィリアム・モリスの妻と娘』，晶文社，1993
- 松澤信祐『新時代の芥川龍之介』，洋々社，1999
- 松本路子文・写真『ヨーロッパパパラの名前をめぐる旅』，メディアファクトリー，2009
- 松村達雄『E.M.フォスター：その他』，研究社出版，1992
- ルイス・マンフォード著／関裕三郎訳『ユートピアの系譜：理想の都市とは何か』，新泉社，1971
- 南川三治郎写真・文『ウィリアム・モリスの樂園へ』，世界文化社，2005
- 明治大学政治経済学部創設百周年記念叢書刊行委員会編『アジア学への誘い：アジア研究班・論文集』，御茶の水書房，2008
- A・L・モートン著／上田和夫訳『イギリス・ユートピア思想』，未來社，1986
- 持田叙子『永井荷風の生活革命』，岩波書店，2009
- ウィリアム・モリス他作／ジョン・クリスチャン，ピーター・コーマック執筆『ラファエル前派からウィリアム・モリスへ』，「ラファエルから前派からウィリアム・モリスへ」展カタログ委員会，2010
- 他作『イギリスのリバティ手帖：The Story of Liberty』，ピエ・ブックス，2010
- 他作／朝日新聞社，京都国立近代美術館，東京都美術館，愛知県美術館編『生活と芸術—アーツ&クラフツ展：ウィリアム・モリスから民芸まで 図録』，朝日新聞社，2009
- 作／高野陽子，三田村泉美編集『ウィリアム・モリスの100 デザイン』，藝祥，2008
- 作／ピーター・コーマック，ウェンディ・キャプラン，木村博昭執筆／ブレントラスト，能登印刷出版部編集『モリスが先導したアーツ・アンド・クラフツ：イギリス・アメリカ』，梧桐書院，2008
- 著／W. S. ピーターソン編／川端康雄訳『理想の書物』，筑摩書房，2006
- 作／ブレントラスト，シナジ株式会社編集『ウィリアム・モリス：ステンドグラス・テキスタイル・壁紙デザイン』，梧桐書院，ウィリアム・モリス出版委員会，2005
- 著／川端康雄訳『ユートピアだより』，晶文社，2003
- 著／斎藤兆史訳『不思議な島々のみずうみ 上下巻』，晶文社，2002
- 著／大塚光子訳『アイスランドへの旅』，晶文社，2001
- 著／横山千晶他訳『ジョン・ボールの夢』，晶文社，2000

- 著／小野悦子訳『輝く平原の物語』，晶文社，2000
- 著／川端康雄他訳『世界のはての泉 上下巻』，晶文社 2000
- 作／京都国立近代美術館他編『モダンデザインの父ウィリアム・モリス』，NHK 大阪放送局，1997
- 他作／池上忠治監修『「英国のモダン・デザイン」展図録』，NHK きんきメディアプラン，1994
- 著／ウィリアム・S.ピーターズ編／川端康雄訳『理想の書物』，晶文社，1992
- 作／ノラ・C・ギロー序／海野弘訳『ウィリアム・モリスのデザイン』，千毯社，1990
- 作／ペギー・ヴァンス序文執筆『ウィリアム・モリスの壁紙デザイン』，千毯社，1990
- 作／土居義岳他訳／ブレントラスト編『ウィリアム・モリス展カタログ』，ウィリアム・モリス展カタログ委員会，1989
- 画『ウィリアム・モリスのデザイン』，創元社，1988
- 著／宇喜田敬介訳『世界のかなたの森：アダルト・ファンタジー』，東洋文化社，1980
- 著／五島茂他訳「モリス ユートピアだより」，『世界の名著 52 ラスキン モリス』，中央公論社，1979
- 著／小野二郎訳『世界のかなたの森』，晶文社，1979
- 著／中桐雅夫訳『サンダリング・フラッド』，月刊ペン社，1978
- 著／生地竹郎訳『ジョン・ボールの夢』，未来社，1973
- 著／内藤史朗訳『民衆のための芸術教育』，明治図書出版，1971
- 著／松村達雄訳『ユートピアだより』，岩波文庫，1968
- 著／吉松勉訳『有益な仕事と無益な労役』，松柏社，1958
- 著／中橋一夫訳『民衆の芸術』，岩波書店，1953
- 著／村山勇三訳『無何有郷通信』，春秋社，1933
- 著／田中清太郎編『三つのロマンス』，大学書林，1951
- モリス生誕百年記念協會編『モリス記念論集』，川瀬日進堂書店（神戸）／西澤書店（東京），1934
- モリス祭り共同作業者ブレ・ワークショップ・チーム編集制作『モリス祭りへの招待：小さな芸術の大きな世界』，けやき美術館，1991
- 森戸辰男『オウエン・モリス』，岩波書店，1938

や

- 安川悦子『イギリス労働運動と社会主義：「社会主義の復活」とその時代思想史的研究』，御茶の水書房，1982
- 山崎孝子他著『芸術と社会：美的ユートピアをめぐるウィリアム・モリスの総合的研究』，大阪芸術大学，1995
- 山田眞實『デザインの国イギリスー「用と美」の「モノ」づくり ウェッジウッドとモリスの系譜』，創元社，1997
- 山本正三『ウィリアム・モリスのこと』（相模選書），相模書房，1980
- 山本正編『ジェントルマンであること：その変容とイギリス近代』，刀水書房，2000

ら

- ノエル・ライリー著／棕田直子訳『タイル・アート：世界の壁面を飾った小さな美術品』，美術出版社，1990
- ベス・ラッセル著／山梨幹子訳『ヴィクトリアン花刺繍：ウィリアム・モリスの世界』，文化出版局，1994
- ライオネル・ラバーン著／小野悦子訳『ユートピアン・クラフツマン：イギリス工芸運動の人々』，晶文社，1985
- アーリーン・レイヴン解説／中上哲夫訳『ウィリアム・モリスのラッピング・ブック』，岩崎美術社，1987

わ

- 若桑みどり『薔薇のイコノロジー』，青土社，1993
- レイ・ワトキンソン著／羽生正気，羽生清訳『デザイナーとしてのウィリアム・モリス』，岩崎美術社，1985

訳語・原語リスト

見出し語（和訳）	本研究の頁	原語	備考（語句解説、見出し語の相関関係など）
関連語句（和訳）	同上	同上	同上

- ・頻出する見出し語については、本研究の主要な頁のみ示す。
- ・本文中にて訳出について言及したものは、備考欄にて該当箇所を指示する。
- ・他の見出し語を参照する場合 cf. 「他の見出し語」と表記する。

アーティザン	17	artisan	「職人」と同義。
アーティスト	17	artist	「デザイン」を制作する者の意 cf. 「芸術家」
アート	72,82	art	第3章注5）参照。
アーツ・アンド・クラフツ	66	arts and crafts	同上
家	13,49,52	house	
家々	51	houses	
家造り	10,46	house-building	ギリシア語〈oikodomicē（造家術）〉との関連について結章第2節参照。
家屋敷	46	homestead	
家の外観	49	outside a house	
現代の家	49	modern house	
わが家	81	my home	
家庭の壁面	33	domestic walls	内部空間の壁面を意味する。
生き返る	35	revive	「リヴァイヴァル（revival）」の語幹
田舎	52	country	文明との連関が強調されるとき訳語。 cf. 「田園」
意味	31	meaning	
入会地	74	commons	cf. 「共同」
印象	55,57	impression	2-3-3にてラスキンの impression について。
永遠性	16	the eternity	
永久の変化	17,68	perpetual change	
快適さ	28	comfort	第1章注3）参照。cf. 「贅沢さ」
科学	13,15	science	
価値	67,77	value	
剰余価値	76	surplus value	第3章注55）参照。
生命の価値	67	value of life	
活動力	72,83	energy	
感覚的	55	sensuous	
環境	54	surroundings	cf. 「生活環境」
簡素さ	11	simplicity	cf. 「生活の簡素さ」「趣味の簡素さ」「簡素な生活」「簡素な美」
機械	70,76	machinery/machines	
機械的	70	mechanical	
機械的労苦	70	Mechanical Toil	cf. 「知性的仕事」「想像の仕事」
機械的再生産	92	mechanical reproduction	
機能	57,87	function	物理的用途に応じるという意味での機能のみを指さない。
気分	69	mood	
活動の気分	69	the mood of energy	
無為の気分	69	the mood of idleness	
驚異	99	a wonder	
共感	68,72,81	sympathy	
共感する	81	sympathize	
共感的翻訳	92	sympathetic translation	
協同	92	cooperation	
共同	76	common	
共同体	74	community	
共同の母	76	the Common Mother	
興味	71	interest	第3章注34）にて「美と興味」について。
永続的な興味	95	enduring interest	
クラフト	66,79	craft	第3章注5）参照。cf. 「工芸」
アーツ・アンド・クラフツ	66	arts and crafts	同上
ハンディクラフト	79	handicraft	同上

芸術		54	art	cf. 「アート」「生活芸術」「芸術史」
	生きている芸術	16	living art	
	応用芸術	47	applied art	
	芸術職人技術	72	Art Workmanship	第3章注33) 参照。
	芸術全体	10	the Arts altogether	
	芸術のための芸術	28	art for art's sake	
	芸術の目的	69	the aims of art	cf. 「気分」
	小芸術	10	the lesser art	
	生活の小芸術	12	the lesser arts of life	
	装飾芸術	10	the decorative art	
	大芸術	10	the great art	序章注4) の言説に示されるように、「狭義の建築、彫刻、絵画」を指す。「師なる芸術」「知性的な芸術」も同義。
	日常の生活芸術	12	the daily arts of life	
	民衆の芸術	11,46	popular arts	
	54	the art of the people		
芸術家		72,73	artist	第3章注5) 参照。
芸術的		53,66	artistic	
形態		15,35	form	cf. 「自然形態」「コンベンショナルライズド・フォーム」「有機的形態」
街学的		68	pedantic	
言語		17,100	language	
原初			early / inchoate	
	原初的秩序	68	inchoate order	
	原初の世界	98,	the early world	
建築		16,37,46,47,71	architecture	
	建築スタイル	36	the style of architecture	
	有機的建築	37	organic Architecture	
	調和的建築	16	Harmonious Architectural unit	architectural unit を総体としての「建築」と解釈した。第2章冒頭の「建築」の規定参照。
建築的		47,71,93	architectural	
	建築的感覚	47	architectural sense	第3章注35) 内、クレインによる「相関の感覚」や「構成的感覚」と同義。
	建築的芸術	71	the architectural arts	
	建築的配列	104	architectural arrangement	
堅牢		49	solid	
行為		17	deed	
	創造的行為	17	creative deeds	
工芸		10,35,47,54	craft	2-1-1 にて craft の諸相を確認した。craft と art および pleasure との異同について 2-3-1 にて論じた。「応用芸術」「装飾芸術」と同義。
	職人	15,35	craftsman (craftsmen)	
	手工芸	47,67	handicraft	
	手工芸職人	47	handicraftsman	
	職人技術	47	craftsmanship	「職人」「職人技術」
工場		69,74	factory	
構成		32	structure	
	幾何学的な構成	32	the geometrical structure	「幾何学的な構成」と対比的に用いられる naturalism なる語は「自然主義的な構成」と訳出した
構造		35,37	construction	
	構造と装飾	37	the construction and ornament	
工房		69	workshop	3-3-1 にて workshop と語幹 work の関係。
功利主義		46	utilitarianism	
合理的		49,76	reasonable	
口話		17	speech	
言葉		100	words	
古物		14	antiquity	
	古物の研究	17	study of archaeology	考古学という訳を避けた。0-2-3 参照。

コンベンション		32,94	convention	訳出について第1章注16) 参照。
	因習的なコンベンション	94	conventional convention	
	コンベンショナルライズド・フォーム	33	conventionalized form	「自然形態」と同義。
	自然なコンベンション	94	<i>natural</i> convention	
	自然のコンベンショナルライジング	32	the conventionalizing of nature	第1章注16) 参照。
財貨		67	riches	
再創造		68	recreation	cf. 「創造」
作品		31,32	work	cf. 「作用」「仕事」「制作」
	偉大な師, 自然の作品	52	works of the great master, nature	
	芸術作品	12,37,52,77	works of Art	複数形の意味について2-2-2 参照。
	自然作品	52	works of Nature	同上
	非融合の自然作品	52	the unblended works of Nature	
作用		52	work	
	作用する	18	work	
思考		35	thoughts	
仕事		56	work	cf. 「制作」
	想像の仕事	70	Imaginative Work	imagination との関係について第3章注39) 参照。
	知性的仕事	70	Intelligent Work	
	手仕事	17	handiwork	cf. 「工芸」の項目内「手工芸」
自然		15,51	Nature/nature	cf. 「コンベンション」「作品」「作用」
	自然との闘争	16	man's contest with Nature	
	自然の恩恵	76	the gifts of Nature	
	自然の一部	16	a part of Nature	
	自然の克服	16	mastery over Nature	
	自然の諸過程	15	the processes of Nature	
	自然の超克	23	the conquest over Nature	
	自然の部分	34	the part of nature	
	自然の法則	15	a law of nature	
	自然への愛	94	love of nature	
	自然への勝利	16	victory over Nature	
	自然形態	33	natural form	cf. 「コンベンション」
	自然主義	32,94	naturalism	
	自然物	34,91	natural objects	
社会 (的)		11,13,68,91	society / social	
	社会主義	11,67	Socialism	第3章注7) にてモリスの社会主義の立場を概説した。
	社会的存在	12	a social being	
習慣		90,111	habit	
	無意識的習慣	111	unconscious habit	
住居		69	housing	cf. 「住まい」
宗教 (的)		89,90,104	religion / religious	4-2-1 の内容参照。
	社会主義の宗教	90	the religion of Socialism	
	宗教に内在する信仰	90	belief in it (=religion)	
修復		10,35	restoration	
趣味		11	taste	
	趣味の簡素さ	11	simplicity of taste	
使用する		54,71	use / USE	cf. 「制作する」
職人		15	craftsman	
		72	workman	
	職人技術	47	craftsmanship	cf. 「工芸」
		72	workmanship	cf. 「仕事」
叙事詩		87	epic	第4章注10) 参照。
	叙事詩的	89,95	the epical	
神意		91	providence	
神学		13,89	theology	

信仰		90,103	belief	
真の		15,36,66,72	true	
		17	real	cf. 「リアリズム」
	真実性	71	reality	
	真正の	15	genuine	
身体		68,83,91	body	
スタイル		35	style	第1章注33)参照。cf. 「様式」
頭脳		47	brain	第2章注13)参照。
スピリット		35	spirit	
住まい		46	dwelling	
	人間の住まい	81	an abode of man	
住まう		13	dwell	
	住まうこと／生きること	55	to live	
生活		11,14,67	life	
	簡素な生活	11	a simple life	
	慎みある生活	12,68	a decent life	
	新生活	13	the new life	
	生活条件	11,68,70	the conditions of life	conditions という複数形について、その多様性を重視すれば「生活状況」と訳出することも可能であるが、モリスが3-1-3や3-2-1のようにconditionの要素性に着目していることを考慮した。
	生活芸術	13,67,71	the arts of life	
	生活環境	69	the surroundings of life	第3章注20) 内の言説
	生活のあらゆる外的表現	52	the aspect of the externals of our life	
	生活の理論	12		
	生活の喜び	13,54	the pleasure of life	cf. 「喜び」
	生活の簡素化	70	the simplification of life	
	生活の簡素さ	11,50,73	simplicity of life	
	日常生活	10 15	everyday life the daily life	
	民衆の生活	17	the life of the people	cf. 「民衆」
制限		32	limitation	
制作		47,74	work	社会的な意味が強調されるとき「仕事」と訳出する。
		12	production	社会的な意味が強調されるとき「生産」、生成の事態が強調されるとき「創出」と訳出。
	制作者	71	maker	
	制作する	71	make / MAKE	「使用する」と併せて用いられる
生産		12	production	cf. 「制作」
	生産者	71	producer	
	生産の規則	72	the rule of production	
製造業		70	manufacture	3-2-1にて manufacturer の語源についてのモリスの言説を挙げた。
贅沢さ		28	comfort	cf. 「快適さ」
成長		36	growth	
	成長してきた	63,88	have grown up	建物や叙事詩の生成、持続の事態を含意させ訳出した。
	成長する	37	grow	
	成長物	63	growth	
生命		33,67,77	life	
	芸術に内在する生命	55	life in Art	
	生命の価値	67,77	value of life	cf. 「価値」
	生命の連続性	90	the continuity of life	
	世界の生命	13,90	the life of the world	
		13	the world's life	
	それ自体を超えた生命	33	life beyond itself	
	不断の生命	67	continuous life of man	
	有機的生命	88	organic life	cf. 「有機的」

世界		68,90	world	cf. 「世界の生命」「原初の世界」
	生きるための美しい世界	68	a beautiful world to live in	
	世界の叙事詩	90	the epic of the World	
	外の世界	51	the outside world	
創意		48	ingenuity	
想起させる		33,34	remind	
創出		56	production	cf. 「制作」「生産」
	創出する	54,56	produce	
装飾		49,60	ornament	
		10,54,95	decoration	
	装飾芸術	10	the decorative art	「小芸術」と同義。
	装飾の役目	54	office of decoration	
装飾的		92	ornamental	
	装飾的特質	95	ornamental quality	
	装飾的なもの	87	the ornamental	
創造		24,56	creation	cf. 「再創造」
	人間の創造した何か	52	some creation of man	
創造する		76	create	
想像力		32,82	imagination	cf. 「仕事」
素材 (的)		31,32,48,66	material	cf. 「物質的」
粗野性		51	wildness	
存在		12	being	
	意識的存在	91	a conscious being	
	存在物	32	existence	
大地		52,56,76	earth	第3章注56) 注61) 注62) 参照。
	大地の構成要素	56	the earth and the very elements	the very elements を抽出したため、the に「大地の」を与えた訳とした。
	大地の肌	13	the skin of the earth	
	大地の表面	13	the surface of the earth	
		56,76	the face of the earth	
	大地の美	52	the fairness of the earth	2-3-1 にて訳出の根拠を示した。
	大地における人間の生命	84	the life of man upon the earth	
立ち返る		67	revert	
建物		48,62	building(s)	
魂		31,50,91	soul(s)	
知性		36	intellect	
		31	intelligence	
	知性的	10	intelligent	cf. 「仕事」
秩序		31	order	
	秩序がある	51	orderly	
抽象的		47,88	abstract	
	抽象的線	88	abstract lines	
	一種の抽象的なもの	47	a kind of abstraction	
知力		68	mind	
作り出す		76	make out of	
慎ましき		81	decency	cf. 「慎みある生活」
手		15,48,52	hand	
出来事		89	events	
		35	incidents	
デザイン		31,66,72	design	第3章注41) 参照。
	パタンデザイン	31	pattern-design(ing)	
	デザインと職人技術	66	design and craftsmanship	
田園		50	country	自然との連関が強調されるとき cf. 「田舎」
	平地で単調な田園	50	a flat and dull country	
伝統		38	tradition	
同化する		63	assimilate	cf. 「トランジション」
道具		76	tools	
道徳的		31,57	moral	
特性		56	character	風景庭園を論じる中では通例、「性格」と訳出される言葉である。

都市		51	town	
	大都市	50	great towns	
土壌		62	soil	
土地		50,74	ground	
		52	land	
	土地の表面の美	52	the beauty of the face of the land	
トランジション		52,56	transition	第2章注46) 参照。
庭		46,50,51	garden	
	庭作り	46,50	gardening	「庭造り」という人為が強調される訳語を避け、自然の作用も含意される訳語とした。これに対し「家造り」は人為を強調する訳語とした。
	風景庭園様式	50	landscape-gardening style	ここでの gardening はモリスの意図とは関係のないものであり、「庭造り」や「造園」の意であるが、一般的な訳語である「風景庭園様式」とした。
	毛氈造園	51	carpet-gardening	
人間		12,50,51,67,73,76,91	man / men	
	人類	77	mankind	
	人類全般	72	humanity generally	
	社会的存在としての人間	12	man as a social being	
場所		52,69	place	
	場所の様相	52	the aspect of the place	
場面		14,64	scenes	
働きかける		51	work	「作用する」と同義。
働く		56	labour	
		59	work	第2章注6)
発明		37	invention	
	発明する	76	invent	
	発明力	32	invention	「想像力」と併せて用いられるときの訳語。
美		31,94	beauty	
	美しい全体	94	a beautiful whole	
	美しいもの	92	the beautiful	4・2・2内「美しいページ」「美しい書物」について論じた箇所参照。
	簡素な美	75	beauty of simplicity	cf. 「簡素さ」
	芸術の美	52	the beauties of Art	複数形の意味について 2・2・2 参照。
	自然の美	52	the beauties of Nature	同上
	美的感覚	88	a sense of beauty	2・3・3 参照。
	用と美	37	utility and beauty	
物質的		69	material	第3章注56) 参照。cf. 「素材（的）」
	物質的形跡	111	material signs	
	物質的条件	69	the material condition	
	物質的手段	76	material means	
部屋		49	room	
豊富な		51	rich	
見る		36,112	look/see	
	見ること	36	to see	
	見られること	36	to be seen	
	直に見る	112	look things in the face	
民衆		14,17,88,100	people	cf. 「芸術」の項目内「民衆の芸術」5・2にて民衆の意味について論じた。
無意識		111	unconscious	
	無意識な事物	91	unconscious things	
	無意識的習慣	111	unconscious habit	
無常性		17,68	the transient	
眼		55,56	eyes	
物語		87	story	
		89,94	tale	
模倣する		15	imitate	
役目		32,54	office	「機能」と同義。パタンデザインの効用を指す。

有機的		36,37,87	organic	cf. 「生命」の項目内「有機的生命」
	有機的形態	36	organic form	
	有機的芸術	87	organic art	
	有機的建築	37	organic Architecture	
豊かさ		67,76	wealth	
用		37,60	utility / use	「美」と併せて用いられるときの訳語。
様式		50,60	style	cf. 「スタイル」
用途		49	use/uses	
	役に立つ必要物	71	necessary articles of use	
	日常の必要物	37	necessary articles of daily use	
喜び		13,16,35,53	pleasure	craft と art および pleasure との異同について 2・3・1 にて論じた。第 2 章注 63) にて pleasure と amenity の類似性を示した。cf. 「生活の喜び」
	ひとつの喜び	56	a pleasure	
	二重の喜び	71	double pleasure	
	最大の喜び	56	the greatest pleasure	
	真の喜び	88	real pleasure	
	ものを作る喜び	53	the pleasure of working at <i>making</i> goods	
	ものを買う喜び	53	the pleasure of <i>buying</i> goods	
	ものを売る喜び	53	the pleasure of <i>selling</i> goods	
喜ぶ		56	rejoice	
リアリズム		31	realism	
リヴァイヴァル		35	revival	
倫理的		53	ethical	
流行		11	fashion	
歴史		14,77,82,96,110	history	
	新しい歴史認識	17	new knowledge of history	
	生きている歴史	16	living history	
	いわゆる歴史	16	history (so-called)	() はモリスによる。
	芸術史	16	the history of Art	
	人類の歴史	77	the history of the past of mankind	
	歴史の太初	15	the first glimmerings of history	
	歴史を真に知覚する能力	96	a true conception of history	cf. 「ロマンティック」
	歴史的	36	historic	
労苦		70,75	toil	
労働		15,23,53,76	labour	
労働者		76	worker	
		55	workman	cf. 「職人」
ロマンティック		95	romantic	4・3・2 にてモリスの「ロマンティック」概念の独自性を論じた。
	ロマンス	96	romance	
我儘さ		51	wilfulness	

モリス著作リスト

邦訳書の略号は主要参考文献を参照。引用文献の略号は凡例を参照。全集の略号は、巻数をローマ数字によって示す。

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
1	1856	The Story of the Unknown Church	無名の教会の物語		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , January	[OC-28-33]	[EL-2-5]
2	1856	Winter Weather	冬の天気			Verse					<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , January	[OC-63-4]	[EL-2-5]
3	1856	The Churches of North France, No. I. Shadows of Amiens	北フランスの教会—アミアンの幻影					Essay			<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , February	[OC-99-110]	[EL-2-5]
4	1856	A Dream	夢		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , March	[OC-146-55]	[EL-2-5]
5	1856	Men and Women, by Robert Browning	ロバート・ブラウニング著『男と女』について					Review			<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , March	[OC-162-72]	[EL-2-5]
6	1856	Frank's Sealed Letter	フランクの封書		Prose Fiction						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , April	[OC-225-34]	[EL-2-5]
7	1856	Riding Together	共に乗る			Verse					<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , May	[OC-321-2]	[EL-2-5]
8	1856	Gertha's Lovers I—III	ゲルサの恋人(I—III)		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , July	[OC-403-17]	[EL-2-5]
9	1856	Hands	手			Verse					<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , July	[OC-452]	[EL-2-5]
10	1856	Death the Avenger and Death the Friend	敵討の死神と友の死神					Essay			<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , August	[OC-477-9]	[EL-2-5]
11	1856	Svend and His Brethren	スヴェンドとその仲間		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , August	[OC-488-99]	[EL-2-5]
12	1856	Gertha's Lovers IV, V	ゲルサの恋人(IV, V)		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , August	[OC-499-512]	[EL-2-5]
13	1856	Lindenborg Pool	リンデンボーグの沼		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , September	[OC-530-4]	[EL-2-5]
14	1856	The Hollow Land I, II	虚ろな国(I, II)		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , September	[OC-565-77]	[EL-2-5]
15	1856	The Chapel in Lyonesse	リオネスの礼拝堂			Verse					<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , September	[OC-577-9]	[EL-2-5]
16	1856	The Hollow Land III	虚ろな国(III)		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , October	[OC-632-41]	[EL-2-5]
17	1856	Pray but One Prayer for Us	ひとつの祈り			Verse					<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , October	[OC-644]	[EL-2-5]
18	1856	Golden Wings	金色の翼		Prose Romance						<i>The Oxford and Cambridge Magazine</i> , December	[OC-733-42]	[EL-2-5]
19	1858	The Defence of Guenevere	『ギネヴィアの抗弁』			Poems					Bell and Deldy 処女詩集	[I]	[EL-5-15]
20	1867	The Life and Death of Jason	『イアソンの生と死』			Narrative Poem					Bell and Deldy他	[II]	[EL-15-26]
21	1868	The Earthly Paradise I	『地上の楽園』			Narrative Poem					Roberts Brothers他 The Lovers of Gudrun(1870)	[III][IV]	[EL-26-46]
22	1868	The God of the Poor	貧しき者たちの神			Verse					<i>The Fortnightly Review</i> 4, 1 August, 139-45	[IX-156-63]	[EL-308]
23	1868	The Two Sides of the River	川の両岸			Verse					<i>The Fortnightly Review</i> 4, October, 379-82	[IX-135-9]	[EL-308]
24	1869	The Saga of Gunnlaug the Worm-tongue and Rafn the Skald	『グンラウグのサガ』				Translation				<i>The Fortnightly Review</i> 5, January, 27-56 E.Magnússonとの共訳	[X-7-47]	[EL-308]
25	1869	Hapless Love	不幸な愛			Verse					Good Words, 10, 1 April, 264-5	[XXIV-347-51]	[EL-308]
26	1869	On the Edge of the Wilderness	荒野の果てにて			Verse					<i>The Fortnightly Review</i> 5, April, 391-4	[IX-146-8]	[EL-308]
27	1869	The Death of Paris	パリの死			Verse					<i>Every Saturday</i> , 8 April, 625-30	[V-5-29]	[EL-308]
28	1869	Grettis Saga: The Story of Grettir the Strong	『強者グレイティルのサガ』				Translation				F.S.Ellis他 E.Magnússonとの共訳	[VII]	[EL-46-51]
29	1870	Rhyme slayeth Shame	押韻が恥を殺す			Verse					<i>The Atlantic Monthly</i> , 25/148, February, 144	[XXIV-357]	[EL-308]
30	1870	May grown a-cold	冷淡になりし五月			Verse Sonnet					<i>The Atlantic Monthly</i> , 25/151, 1 May, 553	[XXIV-358]	[EL-308]
31	1870	The Earthly Paradise II, III	『地上の楽園』			Narrative Poem					Roberts Brothers他	[V][VI]	[EL-29-46]
32	1870	Review of Dante Gabriel Rossetti's Poems	ダンテ・ガブリエル・ロセッティの詩についての批評					Review			<i>The Academy</i> , 14 May, 199-200	[i-101-5]	[EL-308]
33	1870	Völsunga saga: The Story of the Völsungs&Niblungs	『ヴォルスング・サガ』				Translation				F.S.Ellis他 E.Magnússonとの共訳	[VII]	[EL-51-4]
34	1871	The Dark Wood	暗い森			Verse					<i>The Fortnightly Review</i> , February, 219-20 Missing, Error and Loss同じ	[IX-108]	[EL-51-5]
35	1871	The Seasons	四季			Verse					<i>The Academy</i> , 1 Feb, 109	[IX-189]	[EL-51-6]
36	1871	The Story of Frithiof the Bold	勇者フリシオフの物語				Translation				<i>The Dark Blue</i> , 1, March, April, 42-58, 176-82 E.Magnússonとの共訳	[X-48-80]	[EL-51-7]
37	1873	The King of Denmark's Sons'	デンマーク国民の王			Verse					<i>Scribner's Monthly</i> , January, 294-7	[IX-140-5]	[EL-51-8]
38	1873	Love is Enough	『恋だにあらば』		Prose Morality						Ellis and White	[IX-3-90]	[EL-51-9]
39	1874	Love's Gleaning Tide	愛が季節を集める			Verse					<i>The Athenaeum</i> , No.2424, 2 April, 492	[IX-120]	[EL-51-10]
40	1875	Three Northern Love Stories, and other Tales	『北方の三つの恋物語』				Translation				Ellis and White E.Magnússonとの共訳	[X]	[EL-51-11]
41	1875	The Aeneids of Virgil done into English Verse	『アエネーイス』				Translation				Ellis and White	[X I]	[EL-51-12]
42	1876	The First Foray of Aristomenes	アリストメネスの最初の襲撃			Narrative Poem					<i>The Athenaeum</i> , No.2533, 13 May, 663-4		[EL-51-13]
43	1876	England and the Turks	英国とトルコ						Letter		<i>The Daily News</i> 26 October 編集長への投書 (dated 24 October)	[ii-483-7]	[EL-51-14]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
44	1877	The Story of Sigurd the Volsung and the Fall of the Niblungs	ヴォルスング族のジグルドとニーブルング族の滅亡の物語			Narrative Poem					Ellis and White	[X II]	[EL-51-15]
45	1877	Society for the Protection of Ancient Monuments (On Tewkesbury Minster)	古記念物保護のための協会 (テュークスベリ修道院教会について)						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.2578, 10 March, 326 編集長への投書 (dated 5 March)	[i -106-7]	[EL-51-16]
46	1877	Restoration	修復						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.2580, 7 April, 455 編集長への投書 (dated 4 April)	[i -107-9]	[EL-51-17]
47	1877	Manifesto of the Society for the Protection of Ancient Buildings	古建築物保護協会のマニフェスト						Manifesto		submitted at a second meeting of SPAB, 29 March	[i -109-12]	[EL-51-18]
48	1877	Unjust War: to the Working-men of England	不当な戦争—英国の労働者へ						Handbill		The Eastern Question Association による出版か (issued on before 3 May)	[LE-388-9]	[EL-51-19]
49	1877	On Canterbury Cathedral 1	カンタベリー大聖堂1						Letter		<i>The Times</i> , 4 June	[i -157-8]	[EL-51-20]
50	1877	On Canterbury Cathedral 2	カンタベリー大聖堂2						Letter		<i>The Times</i> , 7 June	[i -158-60]	[EL-51-21]
51	1877	To the Very Reverend the Dean & the Reverend the Chapter, of Canterbury	カンタベリー大聖堂の敬愛なる司祭と大聖堂参事へ						Letter		<i>The Architect</i> , 8 July (dated 22 June)		[EL-51-22]
52	1877	The Decorative Arts (The Lesser Arts)	装飾芸術 (小芸術)	[B-1-60] [H-9-37]						Lecture	<i>The Architect</i> , 8 December, 308-12 (1st delivered on 4 Dec.) 4 Feb 1878に Ellis and Whiteから出版	[XX II -3-27]	[EL-51-23]
53	1878	Address to English Liberals	英国自由党員への演説							Lecture	delivered on 16 January	[ii -370-82]	[EL-51-24]
54	1878	Wake, London Lads!	目覚めよ, ロンドンの同志!						Handbill		The Eastern Question Association (issued 16 January)	[EL-77]	[EL-51-25]
55	1878	Cambridge School of Art	ケンブリッジ芸術学校							Speech	<i>The Cambridge Chronicle and University Journal</i> , 23 February (delivered 21Feb)		[EL-51-26]
56	1878	Destruction of City Churches	都市の教会の破壊						Letter		<i>The Times</i> , 17 April (dated 15 April)	[i -163-5]	[EL-51-27]
57	1878	Southwell Minster 1	サウスウェル修道院教会1						Letter		<i>The Architect</i> , 30 April (dated 17 April)		
58	1878	The Threatened Destruction of Blundell's Schools	ブルンデル学校に迫る破壊						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.2645, 6 July, 24		[EL-309]
59	1878	St Alban's Abbey 1	聖アルバン大修道院1						Letter		<i>The Times</i> , 2 August, 5 (dated 1 August)		[EL-309-10]
60	1878	The Annual Report 1	SPAB 年次報告1					Report			The First Meeting of SPAB, 21 June	[i -112-9]	[EL-310]
61	1878	St Alban's Abbey 2	聖アルバン大修道院2						Letter		intended for <i>The Times</i> (dated 26 Aug)	[i -165-7]	[EL-310]
62	1878	Southwell Minster 2	サウスウェル修道院教会2						Letter		<i>The Architect</i> , 30 August (dated 29 July)		
63	1879	Presidential Address (The Art of the People)	会長の講演 (民衆の芸術)	[A-31-70] [B-61-113] [E-5-37] [H-38-63]						Lecture	<i>The Birmingham Daily Post</i> , 20 February (delivered 19) Society of Arts and School of Design	[XX II -28-50]	[EL-80-2] [EL-310]
64	1879	Structural repairs to ancient buildings, the principles of the SPAB (Aims of SPAB)	古建築物への構造的修理, SPABの原則 (SPABの目的)						Letter		<i>The Architect</i> , 19 April, 239 (dated 8 April)	[AH-57]	[EL-310]
65	1879	Mr.William Morris on Egyptian, Greek and Roman Art (The History of Pattern-Designing)	エジプト, ギリシア, ローマの芸術について (パターンデザインの歴史)							Lecture	<i>The Architect</i> , 19 April, 236-7 1882年に全文刊行 SPAB のための講演	[XX II -206-34]	[EL-272] [EL-310]
66	1879	English Translations from the Icelandic	アイスランド語の英語翻訳について						Letter		<i>The Athenaeum</i> , 17 May, 632-3 (dated 12 May)	[LE-127-8]	[EL-311]
67	1879	Quatrain for four paintings by E.Burne-Jones	バーン=ジョーンズの四枚の絵画のための四行詩			Quatrain					<i>Grosvenor Notes: An Illuminated Catalogue of the Summer Exhibition, No. II 46</i>	[EL-310]	[EL-310-1]
68	1879	The Annual Report 2	SPAB 年次報告2					Report			The Second Meeting of SPAB, 28 June	[AH-43-51]	[EL-311]
69	1879	Speech at the Second Meeting of SPAB	SPAB 第2回年次総会における講演							Speech	The Second Meeting of SPAB, 28 June	[i -119-24]	[EL-311]
70	1879	In support of The National Liberal League	全国自由主義同盟の支持						Letter		<i>The Daily News</i> , 18 October, 527-8 (dated 17 October)		[EL-311]
71	1879	St Mark's Venice 1	サン・マルコ寺院 ヴェニス1						Letter		<i>The Daily News</i> , 1 November, <i>The Architect</i> , 8 November (dated 31 October)	[AH-58-9]	[EL-311]
72	1879	Memorial	記念碑						Petition		<i>The Times</i> , 19 November, 8		[EL-311]
73	1879	St Mark's Venice 2	サン・マルコ寺院 ヴェニス2						Letter		<i>The Times</i> , 24 November, 5 (dated 22 November)	[AH-60]	[EL-311]
74	1879	Morris's reply to the charge of anti-Italian bias in the SPAB's St Mark's protest	SPABのサン・マルコ寺院に関する抗議文における反イタリア的偏見という告発への返答						Letter		to the editors of several Italian newspapers (dated 27 November)		[EL-311]
75	1879	St Mark's Venice 3	サン・マルコ寺院 ヴェニス3						Letter		<i>The Times</i> , 29 November, (dated 28 November)	[AH-61]	[EL-311]
76	1880	Labour and Pleasure versus Labour and Sorrow (The Beauty of Life)	労働と喜び 対 労働と悲しみ (生活の美)	[A-71-120] [B-114-82]						Lecture	London Works Birmingham Society of Arts and School of Design (delivered 19 February)	[XX II -51-80]	[EL-82-3]
77	1880	The Baptistry Ravenna	ラヴェンナ洗礼堂						Letter		<i>The Times</i> , 12 June (dated 9 June)	[AH-70]	[EL-311]
78	1880	The Annual Report 3	SPAB 年次報告3					Report			The Third Meeting of SPAB, 28 June	[AH-62-9]	[EL-311]
79	1880	Morris's Speech seconding a Resolution on Women's Rights	女性の権利に関する決議を後援する演説							Speech	<i>The Women's Union Journal</i> , 5, July, 69-70		[EL-311]
80	1880	Hints on House Decoration (Making the Best of it)	家の装飾に関する心得 (最善を尽くすこと)	[A-121-186] [B-183-278]						Lecture	<i>The Architect</i> , 18December, 384-1/同, 25 December, 400-2 (1st delivered 13Nov)	[XX II -81-118]	[EL-311]
81	1881	Speech at a Meeting of the Kyrle Society	カール協会の会合での講演							Speech	<i>The Women's Union Journal</i> , 6, 1 Feb, 13-6 (delivered 27 January)	[i -192-7]	[EL-83] [EL-311]
82	1881	The Prospects of Architecture in Civilization	文明における建築の前途	[B-279-363]						Lecture	delivered on 10 March	[XX II -119-54]	[UL-296]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
83	1881	Nottingham Kyrle Society	ノッティンガム・カール協会							Speech	a speech at The Castle, Nottingham, on 16 March	[i -197-205]	[EL-260]
84	1881	Magdalen Bridge, Oxford	マグダレン橋, オックスフォード						Letter		to the editor of <i>The Pall Mall Gazette</i> (dated 16 July)	[AH-72-3]	[EL-311]
85	1881	The Annual Report 4	SPAB年次報告4					Report			The Fourth Meeting of SPAB, 24 June		[EL-311-2]
86	1881	The Condition and Prospects of Art (Art and the Beauty of the Earth)	芸術の状態と前途(芸術と大地の美)	[H-64-88]						Lecture	<i>The Architect</i> , 29 October, 282-4/同, 5 November, 297-8 (delivered 13 Oct.)	[XX II -155-74]	[EL-83-4] [EL-312]
87	1881	Ashburnham House	アシュバーナム・ハウス						Letter		<i>The Daily News</i> , 29 November, (dated 28 Nov.)	[i -167]	[EL-312]
88	1881	Widening of Magdalen Bridge	マグダレン橋の拡幅						Memorial		intended for <i>The Times</i> or <i>The Athenaeum</i> (dated 10 November)		[EL-312]
89	1881	High Wycombe Grammar School	ハイワイコム・グラマー・スクール						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.2854, 10 December, 785	[i -167-9]	[EL-312]
90	1881	Some Hints on Pattern-Designing	ボタン・デザインに関する若干の心得							Lecture	<i>The Architect</i> , 17 December, 391-4/同, 24 December, 408-10 (delivered 10 Dec.)	[XX II -175-205]	[EL-312]
91	1882	Vandalism in Italy	イタリアにおける破壊行為						Letter		<i>The Times</i> , 12 April	[AH-91-2]	[EL-312]
92	1882	The Annual Report 5	SPAB年次報告5					Report			The Fifth Meeting of SPAB, 9 June	[AH-77-88]	[EL-312]
93	1882	Answer to Query about Blytheborough Church	ブライズボロウ教会についての疑問への回答					Reply			The Fifth Meeting of SPAB, 9 June	[AH-89]	
94	1882	Morris's Reply to accusations that the Iceland famine is exaggerated	アイスランドの飢饉が悪化しているという告発への返答						Letter		<i>The Daily News</i> , 28 September (dated 27 Sep.)		[EL-312]
95	1882	Mr. William Morris on Art Matters	モリス氏, 芸術の事柄について							Lecture	<i>The Manchester Guardian</i> , 21 October, 5/ <i>The Architect</i> , 28 October, 262-3		[EL-312]
96	1882	Art: a Serious Thing	芸術—真面目なこと							Lecture	(portions) <i>The Leek Times</i> , 12 December (delivered on 12 Dec.)	[UL-36-53]	[EL-312]
97	1882	Hopes and Fears for Art	『芸術の希望と不安』	[B]						Lectures	Ellis and White 第1講演集(5編)	[XX II -3-152]	[EL-84-8]
98	1882	Lectures on Art	『芸術講演集』							Lectures	Macmillan SPAB講演集(2編)	[XX II -206-69]	[EL-272]
99	1883	Blundell's Schools	ブルンデル学校						Letter		<i>The Daily News</i> , 26 February	[i -169-70]	[EL-312]
100	1883	Defence of the thesis of Morris's Manchester lecture	モリスのマンチェスター講演の論旨擁護のための弁論						Letter		<i>The Manchester Examiner</i> , 14 March	[LE-165-6]	[EL-312]
101	1883	Art, Wealth, and Riches	芸術, 富, 財貨	[A-187-221] [E-109-36]						Lecture	<i>The Manchester Quarterly</i> , April	[XX III -143-63]	[EL-88-9] [EL-312]
102	1883	The Annual Report 6	SPAB年次報告6					Report			The Sixth Meeting of SPAB, 6 June	[AH-93-112]	[EL-312]
103	1883	Art and the People: A Socialist's Protest against Capitalist Brutality	芸術と民衆—資本主義の残忍性に対する社会主義者の抗議							Lecture	<i>The North-Western Gazette</i> , 16, 30 June (delivered on 12, 15 June)	[ii -382-406]	[EL-312]
104	1883	Pollution of the ditch	排水溝の汚染						Letter		<i>The Daily News</i> , 15 August (dated 14 August)	[LE-179]	[EL-312]
105	1883	Chants for Socialists No.1. The Day is Coming	社会主義者のための聖歌1—その日がやってくる			Verse					Reeves	[PC-61-4]	[EL-89-90]
106	1883	A Reply to One of the audience at Morris's Oxford Lecture	モリスのオックスフォード講演におけるひとりの聴衆への返答						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 19 November (dated 17 Nov.)		[EL-313]
107	1883	A Reply to M	Mへの返答						Letter		<i>The Standard</i> , 22 November (dated 21 November)		[EL-313]
108	1883	Mr. Morris on Art and Plutocracy	モリス氏, 芸術と金権政治について							Lecture abstract	<i>The Cambridge Review</i> , 5 December, 122 (1st delivered at Oxford on 14 November)		[EL-313]
109	1884	A Summary of the Principles of Socialism	社会主義の原則についての概要						Leaflet		The Modern Press, H.M.Hyndman と共著		[EL-92-4]
110	1884	The Three Seekers	三人の探求者			Narrative Poems					<i>To-day: The Monthly Magazine of Scientific Socialism</i> , January, 25-9	[IX-117-9]	[EL-313]
111	1884	Useful Work <i>versus</i> Useless Toil	有用な仕事対無用な労苦	[C-1-66]						Lecture	1st delivered on 16 January 1885年6月にパンフレットとして初めて刊行される	[XX III -98-120]	[EL-105-8]
112	1884	An Old Fable Retold	再び物語られた古の物語		Fable						<i>Justice: The Organ of the Social Democracy</i> , 19 January, 2	[PW-3-4]	[EL-313]
113	1884	The Principles of <i>Justice</i>	『ジャスティス』の原則					Editorial			<i>Justice</i> , 19 January, 4		[EL-313]
114	1884	Mr.W.Morris at Hampstead	W.モリス氏, ハムステッドにて							Lecture	<i>Justice</i> , 19 January, 6 (1st delivered 16 Jan.)		[EL-313]
115	1884	Art and Socialism	芸術と社会主義	[A-222-60] [C-63-98]						Lecture	delivered 23 January 5月にパンフレットとして刊行	[XX III -192-214]	[EL-94-6]
116	1884	Cotton and Clay	綿と土					Comment			<i>Justice</i> , 26 January, 2	[PW-5-6]	[EL-313]
117	1884	Art under Plutocracy	金権政治下の芸術	[A-261-308]						Lecture	<i>To-day</i> , February, 79-90, March, 159-76 (1st delivered 14 November 1883)	[XX III -164-91]	[EL-313]
118	1884	The Bondholder's Battue	公債証書保有者の獲物					Leader			<i>Justice</i> , 9 February, 4	[PW-10-3]	[EL-313]
119	1884	Order and Anarchy	秩序と無秩序					Article			<i>Justice</i> , 9 February, 2	[PW-7-9]	[EL-313]
120	1884	The Way Out. An Appeal to Genuine Radicals	解決の手段—純急進者への訴え					Leader			<i>Justice</i> , 1 March, 4	[PW-14-7]	[EL-313]
121	1884	The Gothic Revival 1	ゴシック・リヴァイヴァル1							Lecture	delivered on 3 March	[UL-54-73]	[UL-300]
122	1884	The Gothic Revival 2	ゴシック・リヴァイヴァル2							Lecture	delivered on 10 March	[UL-74-93]	[UL-300]
123	1884	Meeting in Winter	冬の会合			Verse					<i>The English Illustrated Magazine</i> , March, 339-40	[IX-133-4]	[EL-313]
124	1884	Art or No Art? Who Shall Settle It?	芸術か非芸術か—誰が決めるのか					Editorial			<i>Justice</i> , 15 March, 2	[PW-18-20]	[EL-313]
125	1884	Henry George	ヘンリー・ジョージ					Editorial			<i>Justice</i> , 5 April, 4	[PW-21-3]	[EL-313]
126	1884	Chants for Socialists No.2. The Voice of Toil	社会主義者のための聖歌2—労苦の声			Verse					<i>Justice</i> , 5 April, 5	[PC-65-6]	[EL-313]
127	1884	Why Not?	なぜいけないのか					Article			<i>Justice</i> , 12 April, 2	[PW-24-7]	[EL-314]
128	1884	Chants for Socialists No.3. All for the Cause	社会主義者のための聖歌2—すべてはその理由のため			Verse					<i>Justice</i> , 19 April, 5	[PC-68-9]	[EL-314]
129	1884	The Dull Level of Life	沈滞した生活水準					Leader			<i>Justice</i> , 26 April, 4	[PW-28-31]	[EL-314]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類					初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録		
130	1884	A Factory As It Might Be	あるべき工場	[H-115-25]				Editorial			<i>Justice</i> , 17 May, 2	[ii -130-3] [EL-314]
131	1884	The Propaganda Fund	宣伝基金					Appeal			<i>Justice</i> , 17 May, 5	[EL-314]
132	1884	Individualism at the Royal Academy	王立アカデミーにおける個人主義					Leader			<i>Justice</i> , 24 May, 4	[ii -140-3] [EL-314]
133	1884	Work in a Factory as it Might Be. II	あるべき工場2	[H-115-25]				Editorial			<i>Justice</i> , 31 May, 2	[ii -133-6] [EL-314]
134	1884	Chants for Socialists No.4. No Master	社会主義者のための聖歌2—主人なし			Verse					<i>Justice</i> , 7 June, 5	[PC-67] [EL-314]
135	1884	Hammersmith Manifesto (What Socialists Want)	ハマスミス宣言文(社会主義者の求めるもの)						Manifesto		Publication: issued 16-23 June (<i>Justice</i> , 21 June 参照)	[EL-96-9]
136	1884	Work in a Factory as it Might Be. III	あるべき工場3	[H-115-25]				Editorial			<i>Justice</i> , 28 June, 2	[ii -136-40] [EL-314]
137	1884	The Exhibition of the Royal Academy	王立アカデミーの展覧会					Essay			<i>To-day</i> , July, 75-91	[i -225-41] [EL-314]
138	1884	To Genuine Radicals	純急進者へ					Editorial			<i>Justice</i> , 12 July, 4-5	[PW-47-9] [EL-314]
139	1884	Textile Fabrics	織物							Lecture	<i>The Architect</i> , 19 July, 43-5, 26 July, 50-3/ <i>The Health Exhibition Literature</i> , 173-201 (delivered 11 July)	[XX II -270-95] [EL-99-100] [EL-314]
140	1884	The Housing of the Poor	貧民の住宅					Article			<i>Justice</i> , 19 July, 4-5	[PW-50-3] [EL-314]
141	1884	Socialism in England in 1884	1884年の英国社会主義					Editorial			<i>Justice</i> , 9 August, 4	[PW-54-7] [EL-314]
142	1884	The Annual Report 7 (Architecture and History)	SPAB 年次報告7(建築と歴史)					Paper			The Seventh Meeting of SPAB, 1 July	[XX II -296-317] [i -124-45] [EL-314-5]
143	1884	Uncrowned Kings	無冠の王たち					Editorial			<i>Justice</i> , 6 September, 4	[PW-58-60] [EL-315]
144	1884	The Social Democratic Federation to the Trades Unions of GB	社会民主連盟から英国労働組合へ						Letter		<i>Justice</i> , 6 September, 5 William Morris et al.	[EL-315]
145	1884	Misery and the Way Out	苦痛と解決の手段							Lecture	1st delivered on 8 September (活字化されているのは一部)	[ii -150-64] [UL-301]
146	1884	Monthly Report	月次報告							Lecture resumé	<i>Justice</i> , 13 September, 6 (delivered 8 September)	[EL-315]
147	1884	The Hammersmith Costermongers	ハマスミスの行商人					Article			<i>Justice</i> , 20 September, 3	[PW-61-2] [EL-315]
148	1884	At a Picture Show	絵画展にて							Lecture	delivered on 20 September	[ii -406-19] [UL-301]
149	1884	Art and Labour	芸術と労働							Lecture	この講演についてのLetter; <i>The Manchester Guardian</i> , 7 Oct, 5 (dated 4 Oct. delivered 21 Sept)	[UL-94-118] [EL-315]
150	1884	Introduction to <i>A Review of European Society</i>	『ヨーロッパ社会再考』への序文					Intro			Publication: issued 15 Nov (Morris序論はdated 29 Sept)	[EL-272-3]
151	1884	A Reply to criticisms of his lecture 'Architecture and History'	講演「建築と歴史」の批評への返答						Letter		<i>The Echo</i> , 7 October, 2 (dated 4 October)	[EL-315]
152	1884	An Appeal to the Just	公正さへの訴え					Editorial			<i>Justice</i> , 11 October, 4	[PW-63-5] [EL-315]
153	1884	Literary Courtesy	文字どおりの礼儀						Letter		<i>Justice</i> , 11 October, 6	[EL-315]
154	1884	The Lord Mayor's Show	ロンドン市長就任パレード		Comment +Tale						<i>Justice</i> , 15 November, 2	[ii -143-7] [EL-315]
155	1884	The Hackney Election	陳腐な選挙					Editorial			<i>Justice</i> , 29 November, 4	[PW-71-3] [EL-315]
156	1884	How We Live and How We Might Live	いかに生きているかといかに生きるべきか	[C-169-232] [H-126-53]						Lecture	1st delivered on 30 November 1887年に <i>Commonweal</i> に発表	[XX III -3-26] [UL-301-2]
157	1884	Philanthropists	博愛主義者					Article			<i>Justice</i> , 20 December, 2	[ii -122-30] [EL-315]
158	1884	Mural Decoration in <i>Encyclopaedia Britannica</i>	「平面装飾」『ブリタニカ百科事典』					Essay			1884年版 <i>Encyclopaedia Britannica</i> の項目 Vol.XVII, 9th, 34-48	[E9-34-48] [EL-273]
159	1885	To Socialists	社会主義者へ						Leaflet		Publication: 13 January	[EL-100]
160	1885	The Socialist League Manifesto	社会主義同盟宣言文						Manifesto		Publication: issued 12-19 Jan.	[EL-100-1]
161	1885	The Meaning of Socialism (Morris's rewriting of SDF Manifesto)	社会主義の意味(モリスによる社会主義同盟宣言文の書き直し)						Manifesto		<i>To-day</i> , January, 1-10	[EL-316]
162	1885	Morris's role as <i>Commonweal</i> editor	『コモンウィール』編集者としてのモリスの役割						Letter		<i>The Daily News</i> , 27 January, 3 (dated 26 January)	[EL-316]
163	1885	Introductory	前書き					Editorial			<i>The Commonweal. The Official Journal of the Socialist League Vol.1-1</i> , February, 1	[PW-81-3] [EL-316]
164	1885	The Manifesto of the Socialist League	社会主義同盟の宣言文						Manifesto		<i>The Commonweal Vol.1-1</i> , February, 1-2	[JO-3-8] [EL-316]
165	1885	The March of the Workers	労働者の行進			Verse					<i>The Commonweal Vol.1-1</i> , February, 4	[PC-70-2] [EL-316]
166	1885	The Message of the March Wind	三月の風のメッセージ			Verse					<i>The Commonweal Vol.1-2</i> , March, 12	[PC-3-6] [EL-316]
167	1885	On the disturbance at the Socialist meeting in Oxford on 25 Feb.	2月25日オックスフォードでの社会主義者の会合での騒動について						Letter		<i>The Oxford Magazine</i> , 4 March, 124	[EL-316-7]
168	1885	Testimony on the Restoration of Westminster Hall	ウェストミンスター・ホール修復に関する証言							Testimony	testified on 11 March before the Parliamentary Committee	[UL-302]
169	1885	Commercial War	商業戦争							Lecture	portion 1st delivered on March 27	[ii -311] [UL-302-3]
170	1885	Poet's Prices	詩人の値段						Letter		<i>The Star</i> , 16 March(?)	[EL-317]
171	1885	The Worker's Share of Art	労働者の芸術の取り分					Article			<i>The Commonweal Vol.1-3</i> , April, 18-9	[PW-84-7] [EL-317]
172	1885	Signs of the Times	時のしるし					Comment			<i>The Commonweal Vol.1-3</i> , April, 22	[JO-9] [EL-317]
173	1885	Review and Notices. Socialist Rhymes. By J.L.Joyne's	書評: J・L・ジョイン『社会主義者の詩歌』					Comment			<i>The Commonweal Vol.1-3</i> , April, 23	[JO-10] [EL-317]
174	1885	Chants for Socialists	『社会主義者のための歌』			Poems					Socialist League Office (Publication: issued April) 7月版(こはThe Message of the March Wind含まれている)	[PC-59-74] [EL-90-2]
175	1885	Signs of the Times	時のしるし					Comment			<i>The Commonweal Vol.1-4</i> , May, 35	[JO-11] [EL-317]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
176	1885	Review and Notices. Social Politics. By Charles Rowley, Jun.; John Heywood Manchester	書評: チャールズ・ローリー『社会政治』					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-4, May, 35	[JO-12]	[EL-317]
177	1885	Monthly Report	月次報告					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-4, May, 36	[JO-13-5]	[EL-317]
178	1885	Unattractive Labour	魅力のない労働					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.1-4, May, 37	[PW-88-92]	[EL-317]
179	1885	Attractive Labour	魅力的な労働					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.1-5, June, 49-50	[PW-93-7]	[EL-317]
180	1885	On violence	暴力について					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-5, June, 52	[JO-16]	[EL-317]
181	1885	The Annual Report 8	SPAB 年次報告8					Report			The Eighth Meeting of SPAB, 6 June (Lecture delivered on 4)		[EL-317]
182	1885	The Hopes of Civilization	文明の希望							Lecture	1st delivered on 14 June	[XXIII-59-80]	[UL-303-4]
183	1885	On the Political Crisis	政治的危機について					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-6, July, 53-4	[JO-17-21]	[EL-317]
184	1885	Socialists at Play.	遊んでいる社会主義者			Verse					<i>The Commonweal</i> Vol.1-6, July, 56		[EL-317]
185	1885	Socialism and Politics (An Answer to 'Another View')	社会主義と政治(『アナザー・ビュー』誌への回答)					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.1-6, July, 61	[PW-98-100]	[EL-317]
186	1885	The Depression of Trade	不景気							Lecture	1st delivered on July 12	[UL-119-35]	[UL-304]
187	1885	First General Conference of The Socialist League	社会主義同盟初の全体会議					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-7, August, 65	[PW-101-2]	[EL-317-8]
188	1885	Report of the Editors of <i>Commonweal</i>	『コモンウィール』編集者の報告					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.1-7, August, 66	[JO-22-3]	[EL-318]
189	1885	Signs of the Times	時のしるし					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-7, August, 72	[JO-24]	[EL-318]
190	1885	Mr. Chamberlain at Hull	ハルでのチェンバレン氏					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.1-8, September, 77	[JO-25-6]	[EL-318]
191	1885	Meeting on the Recent Exposures	最近の露見についての会合							Speech	<i>The Commonweal</i> Vol.1-8, September, 78-9	[JO-27]	[EL-318]
192	1885	A New Party	新政党					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.1-8, September, 85	[PW-103-6]	[EL-318]
193	1885	Answer to Previous Inquiries	先の質疑への回答					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.1-8, September, 87		[EL-318]
194	1885	On the accused in the Dod Street Police Court	ドッド・ストリート警察裁判所での被告人について						Letter		<i>The Daily News</i> , 23 September (dated 22 September)		[EL-318]
195	1885	Ireland and Italy: A Warning	アイルランドとイタリア—警告					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-9, October, 86-7	[PW-107-10]	[EL-318]
196	1885	Signs of the Times	時のしるし					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-9, October, 91	[JO-28-9]	[EL-318]
197	1885	Inquiry Column. Answers.	質疑欄—回答					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.1-9, October, 92	[JO-30]	[EL-318]
198	1885	The Socialist League Manifesto (2nd Edition)	社会主義同盟宣言文(第2版)						Manifesto		Publication: issued 13 October		[EL-101-2]
199	1885	Moves in the Game Political	政治的駆引き					Analysis			<i>The Commonweal</i> Vol.1-10, November, 93	[JO-31-4]	[EL-318]
200	1885	Free Speech and the Police	自由演説と警察					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.1-10, November, 99-100	[JO-35-40]	[EL-318]
201	1885	The Dawn of a New Epoch	新時代の曙	[A-309-42] [C-115-68]						Lecture	1st delivered on 10 November	[XXIII-121-40]	[UL-305]
202	1885	On the Vulgarization of Oxford	オックスフォードの俗悪化について						Letter		<i>The Daily News</i> , 20 November, (dated 20 September)	[LE-242-3]	[EL-318]
203	1885	For Whom Shall We Vote	誰のために投票するのか						Leaflet		Publication: November		[EL-108]
204	1885	On the Eve of the Elections	選挙前夜					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-11, December, 101	[PW-111-3]	[EL-318]
205	1885	To Our Readers	読者諸君					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.1-11, December	[JO-41]	[EL-318]
206	1886	The Morrow of the Elections	選挙の直後					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-12, January, 1	[JO-46-8]	[EL-318]
207	1886	Notes	覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-12, January, 4	[JO-49]	[EL-319]
208	1886	The Husks that the Swine Do Eat	豚(強欲者)が食す穀皮					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-12, January, 7	[JO-50-1]	[EL-319]
209	1886	The Commonweal	コモンウィール					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-12, January, 8		[EL-319]
210	1886	Home Rule and Humbug	自治と詐欺						Leaflet		Publication: issued 27 January		[EL-108-9]
211	1886	Notes	覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-13, February, 12	[JO-52-6]	[EL-319]
212	1886	A Letter from the Pacific Coast	太平洋岸からの投書					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.2-13, February, 13	[PW-118-21]	[EL-319]
213	1886	The Best Hundred Books	良書百選	[R-263-70]					Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 2 February (dated 2 Feb.)	[LE-244-7]	[EL-319]
214	1886	Corrections of The Daily News' report of Morris's lecture	『デイリー・ニュース』紙上、モリスの講演報告の訂正						Letter		<i>The Daily News</i> , 12 February		[EL-319]
215	1886	Socialism. Mr. William Morris in Norwich	社会主義、モリス氏ノリッジにて					Report			[Norwich] <i>Daylight Supplement</i> , 13 March, 1-2 (delivered on 8)	[ii-193-7]	[EL-109] [EL-319]
216	1886	The Commune of Paris	パリ・コミューン						Leaflet		Publication: issued on 15 March		[EL-109-10]
217	1886	Our Policy	我々の方針					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-14, March, 17-8	[PW-118-21]	[EL-319]
218	1886	Notes on Matters Parliamentary	議会の物事に関する覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-15, April, 28	[JO-57-60]	[EL-319]
219	1886	Socialism in the Provinces	地方の社会主義					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-15, April, 30	[PW-128-31]	[EL-319]
220	1886	Shall Ireland Be Free?	アイルランドは自由になるだろうか						Leaflet		Publication: issued on 19-29 April		[EL-110-1]
221	1886	Editorial	論説					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 33	[PW-132-5]	[EL-319]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
222	1886	Independent Ireland	独立したアイルランド					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 36	[PW-136-8]	[EL-319]
223	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 36	[JO-61]	[EL-319]
224	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 37	[JO-62]	[EL-319-20]
225	1886	Concerning the <i>Commonweal</i>	『コモンウィール』に関して					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 38	[JO-63]	[EL-320]
226	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-16, 1 May, 38	[JO-65]	[EL-320]
227	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-17, 8 May, 41	[JO-66-70]	[EL-320]
228	1886	Socialism in Dublin and Yorkshire	ダブリンとヨークシャにおける社会主義					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-17, 8 May, 43	[PW-139-43]	[EL-320]
229	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-17, 8 May, 45	[JO-71]	[EL-320]
230	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-18, 15 May, 49-50	[JO-72-8]	[EL-320]
231	1886	“The Commercial Hearth” by E.Belfort Bax	書評: ペルフォート・バックス『商業の炉床』					Footnote			<i>The Commonweal</i> Vol.2-18, 15 May, 50	[JO-79]	[EL-320]
232	1886	Socialism from the Root Up.	根源からの社会主義					papers			<i>The Commonweal</i> Vol.2-18, 15 May, 53~ Vol.4-123, 19 May 1888 (published in 25 parts)	[SO][PW-495-622]	[EL-320]
233	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-19, 22 May, 57	[JO-80-4]	[EL-320]
234	1886	Our Representatives	我々の代表者					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-20, 29 May, 68	[PW-144-6]	[EL-320-1]
235	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-20, 29 May, 68	[JO-85]	[EL-321]
236	1886	Notes and Queries Practical Socialism	党書と疑問—実践的社会主義					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.2-20, 29 May, 71	[PW-147-8]	[EL-321]
237	1886	Branch Reports: Birmingham	支部報告—バーミンガム					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-20, 29 May, 72	[JO-86]	[EL-321]
238	1886	The Annual Report 9	SPAB 年次報告9					Report			Speech Seconding a Resolution to Establish a Fund for the Repair of Ancient Buildings (9 June)		
239	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-21, 5 June, 73	[JO-87-90]	[EL-321]
240	1886	Instructive Items	有益な箇条					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-21, 5 June, 79	[PW-149-50]	[EL-321]
241	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-22, 12 June, 81	[JO-91-5]	[EL-321]
242	1886	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-22, 12 June, 83	[JO-96]	[EL-321]
243	1886	Correspondence	往復文書					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.2-22, 12 June, 86		[EL-321]
244	1886	Free Speech at Stratford	ストラトフォードでの自由演説					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-22, 12 June, 87	[PW-151-2]	[EL-321]
245	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-23, 19 June, 89	[JO-97-9]	[EL-321]
246	1886	Home Rule or Humbug	自治と詐欺					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.2-24, 26 June, 100-1	[PW-153-6]	[EL-321]
247	1886	Whigs, Democrats, and Socialists	保守派, 民主派, 社会主義者							Lecture	<i>The Commonweal</i> Vol.2-24, 26 June, 97-8/ Vol.2-25, 3 July, 106-7	[XXIII-27-38]	[EL-321]
248	1886	A Letter from Scotland	スコットランドからの投書					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-25, 3 July, 105-6	[PW-157-60]	[EL-321]
249	1886	Notes on the Elections	選挙についての党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-26, 10 July, 113	[JO-100-3]	[EL-321]
250	1886	The Sequel of the Scotch Letter	スコットランドからの投書続編					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.2-26, 10 July, 114	[PW-161-3]	[EL-321]
251	1886	Notes	党書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-26, 10 July, 116	[JO-104-5]	[EL-321]
252	1886	Review. “Modern Socialism” by Annie Besant	書評: アニー・ベサント『現代の社会主義』					Review			<i>The Commonweal</i> Vol.2-26, 10 July, 117	[JO-106-7]	[EL-321]
253	1886	The Whig-Jingo Victory	保守派の対外強硬論の勝利					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-27, 17 July, 121	[JO-108-11]	[EL-321]
254	1886	An empty pocket is the worst of crimes	文無しが一番の犯罪である					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-27, 17 July, 123	[JO-112]	[EL-321-2]
255	1886	Review. “Cashell Byron’s Profession” By George Bernard Shaw	書評: バーナード・ショウ著『キャセル・バイロンの職業』					Review			<i>The Commonweal</i> Vol.2-27, 17 July, 126	[JO-113-4]	[EL-322]
256	1886	What is to Happen Next?	次に何が起こるか					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-28, 24 July, 129	[PW-164-7]	[EL-322]
257	1886	Free Speech in the Streets	街頭での自由演説					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-29, 31 July, 137	[PW-168-72]	[EL-322]
258	1886	True and False Society (The Labour Question)	真の社会と偽りの社会(労働問題)							Lecture	Publication: issued July-August (Lecture 1st delivered on 23 June)	[XXIII-215-37]	[EL-111-3] [EL-273-4]
259	1886	Political Notes	政治に関する党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-30, 7 August, 145	[JO-115-8]	[EL-322]
260	1886	2 Paragraphs	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-30, 7 August, 147	[JO-119-20]	[EL-322]
261	1886	Mr. Chamberlain’s Leader	チェンバレン氏の指導者					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-31, 14 August, 153	[PW-173-6]	[EL-322]
262	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-31, 14 August, 156	[JO-121]	[EL-322]
263	1886	The Abolition of Freedom of Speech in the Streets	街頭での演説の自由の廃止					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-32, 21 August, 161	[PW-177-9]	[EL-322]
264	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-32, 21 August, 164	[JO-122-4]	[EL-322]
265	1886	Notes on Passing Events	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-33, 28 August, 169	[JO-125-9]	[EL-322]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
266	1886	Misanthropy to the Rescue!	人間嫌いを救出する					Criticism			<i>The Commonweal</i> Vol.2-33, 28 August, 172	[PW-180-3]	[EL-322]
267	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-34, 4 September, 177	[JO-130-3]	[EL-322]
268	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-35, 11 September, 185	[JO-134-7]	[EL-322]
269	1886	The Paris Trades Union Congress	パリ労働組合の会合					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.2-35, 11 September, 187	[PW-184-6]	[EL-322-3]
270	1886	Education	教育							Lecture	<i>The Architect</i> , 17 September, 170-1		[EL-323]
271	1886	An Old Story Retold (A King's Lesson)	再び物語られた古の物語(王の教訓)		Prose Tale						<i>The Commonweal</i> Vol.2-36, 18 September, 197-8	[XVI]	[EL-323]
272	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-37, 25 September, 201	[JO-138-40]	[EL-323]
273	1886	The Reward of "Genius"	「天才」の報酬					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.2-37, 25 September, 205-6	[PW-194-8]	[EL-323]
274	1886	The Origins and Subsequent Growth of Ornamental Art (Of the Origins of Ornamental Art)	装飾芸術の起源とその後の成長(装飾芸術の起源について)							Lecture	<i>The Manchester Guardian</i> , 27 September, 6/ <i>The Architect</i> , 1 October, 197-8	[UL-136-57]	[EL-323]
275	1886	Fabian Society and Socialist Notes	フェビアン協会と社会主義者の覚書							Speech	<i>Our Corner</i> , 1 October, 252-3		[EL-323]
276	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-40, 16 October, 225	[JO-141-4]	[EL-323]
277	1886	Comrade William Morris on "Socialism: Its Aims and Methods" (The End and the Means)	同志ウィリアム・モリスによる社会主義—その目的と方法(目的と方法)							Lecture	<i>Daylight</i> , 16 October, 2-4 (1st delivered on 11 October)	[ii -420-34]	[EL-323]
278	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-41, 23 October, 233	[JO-145-6]	[EL-323]
279	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-42, 30 October, 241-2	[JO-147-52]	[EL-323]
280	1886	English Literature at the Universities	英国文学と大学						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 1 November, 1-2	[LE-261-2]	[EL-323]
281	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-43, 6 November, 249	[JO-153-5]	[EL-323]
282	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-44, 13 November, 257	[JO-156-9]	[EL-323]
283	1886	A Dream of John Ball	ジョン・ボールの夢		Prose Romance						<i>The Commonweal</i> Vol.2-44, 13 November, 257-8 ~ <i>Vol.3-54</i> , 22 January, 28-9 (published in 11 installments)	[XVI]	[EL-324]
284	1886	The Moral of Last Lord Mayor's Day	先日の市長就任日の教訓					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-45, 20 November, 265	[PW-199-201]	[EL-323]
285	1886	Mr. Jawkins at the Mansion House	マンション・ハウス(公邸)のジョーキンス氏					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-45, 20 November, 268-9	[PW-202-4]	[EL-324]
286	1886	The Ten Commandments	十戒					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.2-46, 27 November, 276	[PW-205-6]	[EL-324]
287	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-47, 4 December, 281	[JO-160-1]	[EL-324]
288	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-48, 11 December, 289	[JO-162-3]	[EL-324]
289	1886	Early England	初期英国							Lecture	1st delivered on 12 December	[UL-158-78]	
290	1886	Corrections to a published report of Morris's lecture, 'Early England'	モリスの講演「初期英国」の訂正						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 15 December, 2	[LE-264-5]	[EL-324]
291	1886	Notes on Passing Events	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-49, 18 December, 297	[JO-164-7]	[EL-324]
292	1886	Is Trade Recovering?	商業は回復しているのか					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.2-49, 18 December, 300	[PW-207-10]	[EL-324]
293	1886	"The Law" in Ireland	アイルランドの「法」					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.2-50, 25 December, 305	[PW-211-3]	[EL-324]
294	1887	Political Notes	政治に関する覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-51, 1 January, 1	[JO-171-3]	[EL-324]
295	1887	Editorial	論説					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-51, 1 January, 4	[PW-217-8]	[EL-324]
296	1887	The Battle of Trafalgar Square—Classes v. Masses	トラファルガー広場での競争—上流階級対一般大衆					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-51, 1 January, 5	[JO-174]	[EL-324]
297	1887	Words of Forecast for 1887	1887年の予言					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-52, 8 January, 9	[PW-219-21]	[EL-324]
298	1887	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-52, 8 January, 11	[JO-175]	[EL-324]
299	1887	Notes on News	時事覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-53, 15 January, 17	[JO-176]	[EL-324-5]
300	1887	The Political Crisis	政治的危機					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-53, 15 January, 20	[JO-177-9]	[EL-325]
301	1887	Notes on Passing Events	時事覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-54, 22 January, 25	[JO-180-3]	[EL-325]
302	1887	On the sentencing of the Socialists of Norwich	ノリッジの社会主義者の判決について						Letter		<i>The Daily News</i> , 24 January, 33 (dated on 22 January)		[EL-325]
303	1887	Notes on Passing Events	時事覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-55, 29 January, 33	[JO-184-8]	[EL-325]
304	1887	The Norwich Socialists. A Town in Turmoil	ノリッジの社会主義者—混乱する街					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-55, 29 January, 37		[EL-325]
305	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-56, 5 February, 41	[JO-189-90]	[EL-325]
306	1887	The Little Vagabond	小さな放浪者					Note			<i>The Commonweal</i> Vol.3-56, 5 February, 43 (on William Blake)	[JO-191]	[EL-325]
307	1887	On the proper objectives of art education	芸術教育の適切な目標について						Letter		<i>The Architect</i> , 18 Feb, 100-2 / <i>The Manchester Guardian</i> , 11 February, 8		[EL-325]
308	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-57, 12 February, 49	[JO-192-4]	[EL-325]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類					初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書			
309	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-58, 19 February, 57	[JO-195-8]	[EL-325]
310	1887	Facing the Worst of It	最悪に直面すること				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-58, 19 February, 60-1	[PW-222-7]	[EL-325]
311	1887	The Aims of Art	芸術の目的	[A-1-30] [C-67-114] [E-39-62]					Lecture	Publication: issued on 12-19 February /Lecture: 1st delivered on 14 March 1886	[XXIII-81-97]	[EL-113]
312	1887	Against	対抗				Comment			<i>The Pall Mall Gazette</i> , 22 Feb.2 Morris's comment against the railway		[EL-325]
313	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-59, 26 February, 65	[JO-199-200]	[EL-325]
314	1887	Fighting for Peace	平和への闘争				Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-59, 26 February, 68	[PW-228-31]	[EL-325-6]
315	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-60, 5 March, 73	[JO-201]	[EL-326]
316	1887	Political Notes	政治に関する覚書				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-61, 12 March, 81	[JO-202-3]	[EL-326]
317	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-61, 12 March, 84	[JO-204-5]	[EL-326]
318	1887	Correspondence. The Ambleside Railway Bill	往復文書—側対歩の鉄道法案				Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.3-61, 12 March, 85	[JO-206-7]	[EL-326]
319	1887	Political Notes	政治に関する覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-62, 19 March, 89	[JO-208-11]	[EL-326]
320	1887	Why We Celebrate the Commune of Paris	なぜパリ・コミューンを祝うのか				Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-62, 19 March, 89-90	[PW-232-5]	[EL-326]
321	1887	How Chains are Forged at Cradley Heath	クラッドリー・ヒースでいかに鎖が鍛造されるか				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-62, 19 March, 91		[EL-326]
322	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-63, 26 March, 97	[JO-212-3]	[EL-326]
323	1887	The Odyssey of Homer	ホメロスの『オデュッセイア』				Translation			2volumes Publication: Reeves and Turner Vol. I issued 1-15 April, Vol. II issued 1-15 Nov.	[XIII]	[EL-113-6]
324	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-64, 2 April, 105	[JO-214-6]	[EL-326]
325	1887	Law and Order in Ireland	アイルランドの法と秩序				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-65, 9 April, 113	[PW-236-8]	[EL-326]
326	1887	The Revival of Trade(?)	商業のリヴァイヴアル(?)				Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-65, 9 April, 115	[JO-217-8]	[EL-326]
327	1887	Unheaded Paragraph	無題の短評				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-65, 9 April, 117	[JO-219]	[EL-326]
328	1887	The Socialists and the Miners. The Great Demonstration at Horton.	社会主義者と炭鉱労働者—ホートンでの大規模デモ				Article			<i>The Newcastle Chronicle</i> , 12 April, 4 (delivery was on 11 April)		[EL-326]
329	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-67, 23 April, 129	[JO-220-3]	[EL-326]
330	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-68, 30 April, 137	[JO-224-6]	[EL-326]
331	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-69, 7 May, 145	[JO-227-9]	[EL-326]
332	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-70, 14 May, 153	[JO-230-2]	[EL-327]
333	1887	Coercion for London	ロンドンへの威圧				Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-70, 14 May, 153-4	[PW-239-43]	[EL-327]
334	1887	Art and Industry in the 14th Century	14世紀の芸術と産業						Lecture	1st delivered on 15 May	[XX II-375-90]	
335	1887	The Reward of Labour. A Dialogue	労働の報酬—対話劇				One-act Comedy			<i>The Commonweal</i> Vol.3-71, 21 May, 165/ Vol.3-72, 28 May, 170-1	[PW-244-56]	[EL-327]
336	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-72, 28 May, 172	[JO-233-6]	[EL-327]
337	1887	How We Live and How We Might Live	いかに生きているかといかに生きるべきか	[C-169-232] [H-126-53]					Lecture	<i>The Commonweal</i> Vol.3-73, 4 June, 177-8 ~ Vol.3-77, 2 July,210-1(published in 5 parts)	[XXIII-3-26]	[EL-327]
338	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-74, 11 June, 188	[JO-237-41]	[EL-327]
339	1887	Unheaded Paragraph	無題の短評				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-74, 11 June, 191	[JO-242]	[EL-327]
340	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-75, 18 June, 193	[JO-243-5]	[EL-327]
341	1887	Notes	覚書				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-75, 18 June, 196	[JO-246]	[EL-327]
342	1887	Common-sense Socialism. By H.Kempner. A Review	書評：H・ケンブナー『コモン・センス社会主義』				Review			<i>The Commonweal</i> Vol.3-75, 18 June, 197	[PW-257-8]	[EL-327]
343	1887	2 Paragraphs	無題の短評				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-75, 18 June, 198-9		[EL-327]
344	1887	An Old Superstition-A New Disgrace	古い迷信と新しい不名誉				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-76, 25 June, 204	[PW-259-61]	[EL-327]
345	1887	North of England Socialist Federation	北イングランドの社会主義連盟					Postscript		<i>The Commonweal</i> Vol.3-76, 25 June, 205	[JO-247-8]	[EL-327]
346	1887	Appeal for the Preservation of Inglesham Church	イングルシャム教会の保存の懇請					Leaflet		Publication: June 1898に SPABから再版		[EL-116-7]
347	1887	Notes	覚書				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-77, 2 July, 212	[JO-249-50]	[EL-327]
348	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-78, 9 July, 217	[JO-251-3]	[EL-327-8]
349	1887	Untitled note	無題の覚書				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-79, 16 July, 227		[EL-328]
350	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-79, 16 July, 228	[JO-254-6]	[EL-328]
351	1887	Notes on News	時事覚書				Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-80, 23 July, 236	[JO-257-8]	[EL-328]
352	1887	The Policy of Abstention	不干渉という方針						Lecture	1st delivered on 30 July	[ii-434-52]	

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
353	1887	The Boy-Farms at Fault	当惑するボーイ・ファーム					Dialogue			<i>The Commonweal</i> Vol.3-81, 30 July, 241	[PW-262-5]	[EL-328]
354	1887	Notes	覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-82, 6 August, 249	[JO-259-61]	[EL-328]
355	1887	Bourgeois Versus Socialist	中産階級対社会主義者					Analysis			<i>The Commonweal</i> Vol.3-82, 6 August, 252	[PW-266-70]	[EL-328]
356	1887	Notes	覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-83, 13 August, 257	[JO-262-5]	[EL-328]
357	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-84, 20 August, 265-6	[JO-266-8]	[EL-328]
358	1887	Feudal England	封建時代の英国							Lecture	<i>The Commonweal</i> Vol.3-84, 20 August, 266-7 ~ Vol.3-87, 10 Sept. 290-1 (published in 4 parts) lecture 1st delivered on 13 Feb.	[XXIII-39-58]	[EL-328]
359	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-85, 27 August, 271	[JO-269-71]	[EL-328]
360	1887	A Note on Passing Politics	最近の政治に関する覚書					Analysis			<i>The Commonweal</i> Vol.3-85, 27 August, 276	[PW-271-3]	[EL-328]
361	1887	Is Lipski's Confession Genuine?	リプスキの供述は本当か					Analysis			<i>The Commonweal</i> Vol.3-85, 27 August, 276	[PW-274-5]	[EL-328]
362	1887	The Annual Report 10	SPAB年次報告10					Report			Speech Proposing the Adoption of the Annual Report (Publication: August/Annual Meeting was held on 8 June)		[EL-328-9]
363	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-86, 3 September, 281	[JO-272-4]	[EL-329]
364	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-87, 10 September, 289	[JO-275-8]	[EL-329]
365	1887	Artist and Artisan. As an Artist Sees It	一芸術家の思うアーティストとアーティスト					Reply			<i>The Commonweal</i> Vol.3-87, 10 September, 291	[ii-492-6]	[EL-329]
366	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-88, 17 September, 297	[JO-279-82]	[EL-329]
367	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-89, 24 September, 305	[JO-283-5]	[EL-329]
368	1887	A Plea for the American Anarchists	アメリカの無政府主義者への嘆願					Article			<i>The Pall Mall Gazette</i> , 28 September, 5		[EL-329]
369	1887	Notes	覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-91, 8 October, 321	[JO-286-9]	[EL-329]
370	1887	Free Speech in America	アメリカでの自由演説					Analysis			<i>The Commonweal</i> Vol.3-91, 8 October, 324	[PW-280-1]	[EL-329]
371	1887	The Early Literature of the North- Iceland	北アイルランドの初期文学							Lecture	1st delivered on 9 October	[UL-179-98]	[UL-311]
372	1887	Notes	覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-92, 15 October, 329	[JO-290-2]	[EL-329]
373	1887	The Police and the People	警察と民衆						Letter		<i>The Daily News</i> , 18 October, 7 (dated 17 October)	[LE-276-7]	[EL-329]
374	1887	The Tables Turned; or, Nupkins Awakened	テーブルはくつがえる。またはナプキンは目覚める							Play	Publication: issued on 22 Oct. 副題As for the first time played at the Hall of the Socialist League on Saturday October 15	[ii-528-67]	[EL-117-8]
375	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-93, 22 October, 337	[JO-293-5]	[EL-329]
376	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-94, 29 October, 345	[JO-296-300]	[EL-329]
377	1887	The Unemployed	失業者						Statement		<i>The Commonweal</i> Vol.3-94, 29 October, 348-9		[EL-329]
378	1887	Practical Politics at Nottingham	ノッティンガムでの実践的政治					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.3-94, 29 October, 349	[PW-282-5]	[EL-329]
379	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-95, 5 November, 353	[JO-301-4]	[EL-329]
380	1887	Honesty is the Best Policy; or, The Inconvenience of Stealing	正直が最善の方針。盗みの迷惑					Dialogue			<i>The Commonweal</i> Vol.3-95, 5 November, 356-7 / Vol.3-96, 12 November, 364-5	[PW-286-301]	[EL-330]
381	1887	The Chicago Anarchists. English Efforts for Their Reprieve	シカゴの無政府主義者—かれらの執行猶予への英国人の奮闘						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 7 November, 12		[EL-330]
382	1887	On free speech and the right of public meeting in Trafalgar Square	トラファルガー広場での自由演説と大衆集会の権利について						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 11 November, 6		[EL-330]
383	1887	What Socialist Want	社会主義者の求めるもの							Lecture	1st delivered on 6 November	[UL-217-33]	[UL-311]
384	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-96, 12 November, 361	[JO-305-9]	[EL-330]
385	1887	The Society of the Future	未来の社会							Lecture	1st delivered on 13 November	[ii-453-68]	
386	1887	On the name and intentions of the Law and Liberty League	法と自由同盟の名目と意図について						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 18 November, 5 (dated 17 Nov.)		[EL-330]
387	1887	London in a State of Siege	攻囲状態のロンドン					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-97, 19 November, 375	[PW-302-6]	[EL-330]
388	1887	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.3-97, 19 November, 375	[JO-310]	[EL-330]
389	1887	the inaugural meeting of the Law and Liberty League	法と自由同盟の発会集会						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 21 November, 3		[EL-330]
390	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-98, 26 November, 377	[JO-312-5]	[EL-330]
391	1887	Insurance Against Magistrates	行政長官への保証					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-98, 26 November, 377	[PW-307-8]	[EL-330]
392	1887	The Liberal Party Digging its Own Grave	みずから墓穴を掘る自由党					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.3-98, 26 November, 380	[PW-309-12]	[EL-330]
393	1887	Correction of a report of the 'London Sunday Forum'	「ロンドン日曜フォーラム」の訂正						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 1 December, 5 (dated 29 Nov.)		[EL-330]
394	1887	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-99, 3 December, 385	[JO-316-20]	[EL-330]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類					初出および備考	引用文献	Lemire研究	
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書				講演録
395	1887	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-100, 10 December, 393	[JO-321-5]	[EL-330]
396	1887	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-101, 17 December, 401	[JO-326-30]	[EL-330]
397	1887	The Conscience of the Upper Classes	上流階級の良心					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-101, 17 December, 404	[PW-313-6]	[EL-330]
398	1887	The Present Outlook in Politics	現在の政治の見通し							Lecture	1st delivered on 18 December	[UL-199-216]	
399	1887	A Death Song	死の歌			Verse					Publication: issued on 18 Dec.	[PC-75-6]	[EL-118]
400	1887	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-102, 24 December, 409	[JO-331-4]	[EL-330-1]
401	1887	Emigration and Colonisation	移民と植民地化					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-103, 31 December, 417-8	[JO-335-9]	[EL-331]
402	1887	Correspondence. Empirical Socialism	往復文書—経験的の社会主義					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.3-103, 31 December, 421	[JO-340]	[EL-331]
403	1887	On the External Coverings of Roofs	屋根の外皮について						Leaflet		SPAB おそらく1887年発行	[XX II -406-9]	[EL-118]
404	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-104, 7 January, 1	[JO-343-5]	[EL-331]
405	1888	Police Spies Exposed	暴かれた警察の密偵					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.4-104, 7 January, 1-2	[PW-319-22]	[EL-331]
406	1888	What 1887 Has Done	1888年に起こったこと					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-104, 7 January, 4-5	[PW-323-9]	[EL-331]
407	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-105, 14 January, 9-10	[JO-346-7]	[EL-331]
408	1888	Radicals Look Around You	急進者が見ている					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-105, 14 January, 12-3	[PW-330-5]	[EL-331]
409	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-106, 21 January, 17	[JO-348-52]	[EL-331]
410	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-107, 28 January, 25	[JO-353-7]	[EL-331]
411	1888	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-107, 28 January, 29	[JO-358]	[EL-331]
412	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-109, 11 February, 41	[JO-359-62]	[EL-331]
413	1888	Untitled Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-109, 11 February, 43	[JO-363]	
414	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-110, 18 February, 49	[JO-364-7]	[EL-331]
415	1888	On Some “Practical” Socialists	「実践的」社会主義者について					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-110, 18 February, 52-3	[PW-336-42]	[EL-332]
416	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-111, 25 February, 57	[JO-368-71]	[EL-332]
417	1888	Correspondence. “Practical” Socialists	往復文書—「実践的」社会主義者について					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-111, 25 February, 61	[JO-372]	[EL-332]
418	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-112, 3 March, 65	[JO-373-5]	[EL-332]
419	1888	A Triple Alliance	三つの同盟					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-112, 3 March, 68	[PW-343-6]	[EL-332]
420	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-113, 10 March, 73	[JO-376-9]	[EL-332]
421	1888	A Dream of John Ball and A King’s Lesson	『ジョン・ボールの夢／王の教訓』	[G] [N]	Prose Romance						Publication: Reeves and Turner issued 1-15 March	[XVI]	[EL-118-25]
422	1888	Dead At Last	ついに死んだ					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-114, 17 March, 81	[PW-347-9]	[EL-332]
423	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-115, 24 March, 89	[JO-381-2]	[EL-332]
424	1888	A Speech from the Dock	ドックからの演説					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-115, 24 March, 93	[PW-350-1]	[EL-332]
425	1888	Unheaded Letter	無題の投書						Letter		<i>The Scotsman</i> , 28 March, 9 (dated 26 March)		[EL-332]
426	1888	Preface to Fairman’s <i>Principles</i>	フェアマン『原則』への緒言					Preface			Publication: Reeves issued on 24-31 March		[EL-274]
427	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-117, 7 April, 105	[JO-383-4]	[EL-332]
428	1888	Socialism Militant in Scotland	スコットランドでの戦闘的の社会主義					Report			<i>The Commonweal</i> Vol.4-117, 7 April, 106-7	[PW-352-6]	[EL-332]
429	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-118, 14 April, 113	[JO-385-7]	[EL-332]
430	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-119, 21 April, 121	[JO-388-90]	[EL-332]
431	1888	Untitled Verses	無題の韻文			Verse					<i>The Commonweal</i> Vol.4-119, 21 April, 125 later titled 'Drawing Near the Light'	[IX-188]	[EL-332-3]
432	1888	The Revival of Architecture	建築のリヴァイヴアル					Article			<i>The Fortnightly Review</i> , 1 May, 665-74	[XX II -318-30]	[EL-333]
433	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-120, 28 April, 129	[JO-391-4]	[EL-333]
434	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-121, 5 May, 137	[JO-395-7]	[EL-333]
435	1888	The Reaction and the Radicals	反動と急進者					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-121, 5 May, 137-8	[PW-357-9]	[EL-333]
436	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-122, 12 May, 145-6	[JO-398-403]	[EL-333]
437	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-123, 19 May, 153	[JO-404-6]	[EL-333]
438	1888	Signs of Change	『変化の兆し』							Lectures	Reeves and Turner 第2講演集(7編)	[XX III -3-140]	[EL-125-7]
439	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-124, 26 May, 161	[JO-407-8]	[EL-333]
440	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-125, 2 June, 169	[JO-409-13]	[EL-333]
441	1888	The Policy of the Socialist League	社会主義同盟の方針					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-126, 9 June, 180	[PW-360-3]	[EL-333]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
442	1888	Revolutionary Calender. Week ending June 16, 1888. Wat Tyler	革命暦—1888年6月16日を最後とする一週間 ワット・タイラー					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.4-126, 9 June, 182	[JO-414-5]	[EL-333]
443	1888	The Burghers' Battle	中産階級市民の闘争			Verse					The Athenaeum, No.3164, 16 June, 761	[IX-104-6]	[EL-334]
444	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-127, 16 June, 185	[JO-416-7]	[EL-334]
445	1888	The Skelton at the Feast	興を殺ぐ者					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-127, 16 June, 188	[PW-364-6]	[EL-334]
446	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-128, 23 June, 193	[JO-418-9]	[EL-334]
447	1888	Pentonville Prison	ペントンヴィル刑務所					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-128, 23 June, 195	[PW-367-8]	[EL-334]
448	1888	Counting Noses	覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-128, 23 June, 196	[PW-369-72]	[EL-334]
449	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-129, 30 June, 201-2	[JO-420-6]	[EL-334]
450	1888	Thoughts on Education under Capitalism	資本主義下の教育に関する考察	[H-185-90]				Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-129, 30 June, 204-5	[i -496-500]	[EL-334]
451	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-130, 7 July, 209-10	[JO-427-31]	[EL-334]
452	1888	The Revolt of Ghent	ゲントの反乱							Lecture	<i>The Commonweal</i> Vol.4-130, 7 July, 210~ Vol.4-136, 18 August, 258-9 (published in 7 parts/ 1st delivered on 29 Jan)		[EL-334]
453	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-131, 14 July, 217	[JO-432-5]	[EL-334]
454	1888	Sweaters and Sweaters	搾取そして搾取					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-132, 21 July, 225-6	[PW-378-82]	[EL-334]
455	1888	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-132, 21 July, 227		[EL-334]
456	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-132, 21 July, 228	[JO-436]	[EL-334-5]
457	1888	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-132, 21 July, 229	[JO-437]	[EL-335]
458	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-133, 28 July, 233	[JO-438-41]	[EL-335]
459	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-134, 4 August, 241	[JO-442-4]	[EL-335]
460	1888	The Annual Report 11	SPAB年次報告11					Report			The Eleventh Meeting of SPAB, June (Publication: August)		[EL-335]
461	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-135, 11 August, 249	[JO-445-9]	[EL-335]
462	1888	Revolutionary Calender... Death of WStanley Jevons	革命暦—ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズの死					Footnote			<i>The Commonweal</i> Vol.4-135, 11 August, 251		[EL-335]
463	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-136, 18 August, 257-8	[JO-450-4]	[EL-335]
464	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-137, 25 August, 265	[JO-455-6]	[EL-335]
465	1888	Socialist Work at Norwich	ノリッジの社会主義者の仕事					Article			<i>The Commonweal</i> Vol.4-137, 25 August, 268	[PW-383-6]	[EL-335]
466	1888	Ugly London	醜いロンドン					Article			<i>The Pall Mall Gazette</i> , 4 September, 1-2		[EL-335]
467	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-139, 8 September, 281	[JO-457]	[EL-335]
468	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-140, 15 September, 289	[JO-458-9]	[EL-335]
469	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-141, 22 September, 297	[JO-460-3]	[EL-335-6]
470	1888	A Modern Midas	現代のミダース					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-141, 22 September, 300	[PW-387-9]	[EL-336]
471	1888	Equality	平等							Lecture	1st delivered on 30 September	[ii -197-203]	[UL-312]
472	1888	Textiles	織物					Essay			<i>Arts and Crafts Exhibition Society Catalogue of the First Exhibition MDCCCLXXXVIII</i> , 4 October, 17-29	[i -244-51]	[EL-336]
473	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-143, 6 October, 313-4	[JO-464-8]	[EL-336]
474	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-146, 27 October, 337-8	[JO-469-73]	[EL-336]
475	1888	Unheaded Note	無題の覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-146, 27 October, 343		[EL-336]
476	1888	The Revival of Handicraft	手工芸のリヴァイヴァル	[H-154-65]				Article			<i>The Fortnightly Review</i> , 1 November, 603-10	[XX II -331-41]	[EL-336]
477	1888	Mr. Morris on Tapestry	モリス氏、タピストリについて							Lecture	<i>The Pall Mall Gazette</i> , 2 November, 6		[EL-336]
478	1888	Unheaded Note	無題の覚書					Comment			<i>The Commonweal</i> Vol.4-148, 10 November, 353-4	[JO-474-7]	[EL-336]
479	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-148, 10 November, 356	[JO-478-81]	[EL-336]
480	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-149, 17 November, 361	[JO-482-4]	[EL-337]
481	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-151, 1 December, 380	[JO-485-7]	[EL-337]
482	1888	Art and its Producers	芸術とその制作者たち							Lecture	<i>Transactions of the National Association for the Advancement of Art and Its Application to Industry</i> , 228-36 delivered on 5 Dec.	[XX II -342-55]	[EL-337] [UL-313]
483	1888	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal</i> Vol.4-152, 8 December, 385	[JO-488-9]	[EL-337]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
484	1888	In and About Cottonopolis	綿業都市(マンチェスター)にて、綿業都市について					Report			<i>The Commonweal Vol.4-153</i> , 15 December, 396	[PW-390-3]	[EL-337]
485	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.4-153</i> , 15 December, 397	[JO-490-1]	[EL-337]
486	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.4-154</i> , 22 December, 401	[JO-492-6]	[EL-337]
487	1888	Talk and Art	講話と芸術					Report			<i>The Commonweal Vol.4-154</i> , 22 December, 404	[PW-394-7]	[EL-337]
488	1888	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.4-155</i> , 29 December, 409	[JO-497-9]	[EL-337]
489	1889	The House of the Wolfings	『ウォルフング族の家の物語』		Prose Romance						Publication: Reeves and Turner issued 15 and 31 Dec. 1888	[XIV]	[EL-127-33]
490	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-156</i> , 5 January, 4-5	[JO-503-7]	[EL-337]
491	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-157</i> , 12 January, 12	[JO-508-9]	[EL-337]
492	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-158</i> , 19 January, 17-8	[JO-510-5]	[EL-337]
493	1889	Whigs Astray	道に迷った保守派					Dialogue			<i>The Commonweal Vol.5-158</i> , 19 January, 18-9/ <i>Vol.5-159</i> , 26 January, 26-7 (<i>The Pall Mall Gazette</i> , 10 December 1888)	[PW-401-12]	[EL-337-8]
494	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-159</i> , 26 January, 25	[JO-516-20]	[EL-338]
495	1889	Unheaded Protest against addition to monuments in Westminster Abbey	ウェストミンスター寺院の記念建造物への増築に対する無題の抗議文						Letter		<i>The Daily News</i> , 30 January, 3	[i -171-3]	[EL-338]
496	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-160</i> , 2 February, 33	[JO-521-4]	[EL-338]
497	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-161</i> , 9 February, 41	[JO-525-9]	[EL-338]
498	1889	Gothic Architecture	ゴシック建築	[E-161-87]						Lecture	Publication: Kelmscott Press, issued 21 October 1893 (Lecture 1st delivered on 11 February)	[i -266-86]	[EL-176-7]
499	1889	On News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-163</i> , 23 February, 57	[JO-530-3]	[EL-338]
500	1889	Mr Morris on Art Education	モリス氏、芸術教育について							Speech	<i>The Macclesfield Courier and Herald</i> , 23 February, 3 (delivered on 14 February)		[EL-338]
501	1889	Westminster Abbey and Its Monuments	ウェストミンスター寺院とその記念建造物					Article			<i>The Nineteenth Century</i> , March, 409-14	[i -174-81]	[EL-338]
502	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-164</i> , 2 March, 65	[JO-534-7]	[EL-338]
503	1889	Mine and Thine	時事党書			Translation					<i>The Commonweal Vol.5-164</i> , 2 March, 67	[IX-200]	[EL-338]
504	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-165</i> , 9 March, 73	[JO-538-40]	[EL-338]
505	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-166</i> , 16 March, 81	[JO-541-3]	[EL-338]
506	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-167</i> , 23 March, 89	[JO-544-7]	[EL-338-9]
507	1889	Some Greetings...From William Morris	挨拶文、ウィリアム・モリスより						Letter		<i>The Commonweal Vol.5-167</i> , 23 March, 91	[JO-548-9]	[EL-339]
508	1889	To Manchester Friends	マンチェスターの友へ						Letter		<i>The Commonweal Vol.5-167</i> , 23 March, 93	[JO-550]	
509	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-168</i> , 30 March, 97-8	[JO-551-5]	[EL-339]
510	1889	The Society of the Future	未来の社会							Lecture	<i>The Commonweal Vol.5-168</i> , 30 March, 98-9~ <i>Vol.5-170</i> , 13 April, 114-5 (published in 3 installments)	[ii -453-68]	[EL-339]
511	1889	Great Men Become Great by Looking at Nature. A Word to Art Students	偉大な人間は自然に見入ること で偉大になる—芸術学校生への言葉							Speech	<i>The Artist</i> , April, 95-6		[EL-339]
512	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-169</i> , 6 April, 105	[JO-556-8]	[EL-339]
513	1889	Ducks and Fools	アヒルと愚人		Fable						<i>The Commonweal Vol.5-169</i> , 6 April, 107	[PW-413]	[EL-339]
514	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-170</i> , 13 April, 113	[JO-559-62]	[EL-339]
515	1889	On the Cloisters and Chapter House of Westminster Abbey	ウェスト・ミンスター寺院の回廊とチャプター・ハウス						Letter		<i>The Daily News</i> , 17 April, 6	[LE-311-2]	[EL-339]
516	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-171</i> , 20 April, 121	[JO-563-6]	[EL-339]
517	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-172</i> , 27 April, 129	[JO-567-8]	[EL-339]
518	1889	Statement of Principles	原則声明書						Statement		<i>The Commonweal Vol.5-173</i> , 4 May, 137	[JO-569-70]	[EL-339]
519	1889	Unheaded Paragraph	無題の短評					Comment			<i>The Commonweal Vol.5-173</i> , 4 May, 137	[JO-571]	[EL-340]
520	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-173</i> , 4 May, 140	[JO-572-4]	[EL-340]
521	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-174</i> , 11 May, 145	[JO-575-7]	[EL-340]
522	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-175</i> , 18 May, 153	[JO-578-9]	[EL-340]
523	1889	Correspondence	往復文書					Reply			<i>The Commonweal Vol.5-175</i> , 18 May, 157	[PW-414-8]	[EL-340]
524	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-178</i> , 8 June, 177	[JO-580-3]	[EL-340]
525	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-179</i> , 15 June, 185	[JO-584-6]	[EL-340]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
526	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-180</i> , 22 June, 193	[JO-587-9]	[EL-340]
527	1889	Looking Backward	かえりみれば					Review			<i>The Commonweal Vol.5-180</i> , 22 June, 193	[ii -501-7]	[EL-340]
528	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-181</i> , 29 June, 201	[JO-590-1]	[EL-340]
529	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-182</i> , 6 July, 209	[JO-592-6]	[EL-340]
530	1889	Under an Elm-Tree; or Thoughts in the Country-Side	榆の木の下で—田舎での随想					Essay			<i>The Commonweal Vol.5-182</i> , 6 July, 212-3	[ii -507-12]	[EL-340-1]
531	1889	Impressions of the Paris Congress	パリ会議の印象					Comment			<i>The Commonweal Vol.5-185</i> , 27 July, 234/ <i>Vol.5-186</i> , 3 August, 242	[PW-431-40]	[EL-341]
532	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-186</i> , 3 August, 241	[JO-597-600]	[EL-341]
533	1889	The Annual Report 12	SPAB 年次報告12					Report			The Twelfth Meeting of SPAB, 3 July (Publication: August)	[i -146-57]	[EL-341]
534	1889	Trial by Judge v. Trial by Jury	裁判官による裁判対陪審員による裁判					Criticism			<i>The Commonweal Vol.5-188</i> , 17 August, 257	[PW-441-4]	[EL-341]
535	1889	Correspondence. Communism and Anarchism	往復文書—共産主義と無政府主義					Reply			<i>The Commonweal Vol.5-188</i> , 17 August, 261	[PW-445-9]	[EL-341]
536	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-189</i> , 24 August, 265	[JO-601-3]	[EL-341]
537	1889	The Lesson of the Hour	時間の教訓					Comment			<i>The Commonweal Vol.5-191</i> , 7 September, 281-2	[PW-450-4]	[EL-341]
538	1889	The Preservation of Peterborough Cathedral	ピーターバラ大聖堂の保存						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 10 September, 3	[LE-317-9]	[EL-341]
539	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-192</i> , 14 September, 289	[JO-604-7]	[EL-341]
540	1889	Mr. William Morris writes to us as follows	ウィリアム・モリス氏は以下のように我々に書いた						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 20 September, 2		[EL-341]
541	1889	Notes on News	時事党書					Comment			<i>The Commonweal Vol.5-193</i> , 21 September, 297	[JO-608-10]	[EL-341]
542	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-194</i> , 28 September, 305	[JO-611-4]	[EL-341]
543	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-197</i> , 19 October, 329	[JO-615-8]	[EL-341]
544	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-198</i> , 26 October, 337	[JO-619-20]	[EL-341]
545	1889	The Arts and Crafts of To-day	今日の芸術と工芸							Lecture	delivered on 30 October (Publication: 1890 as "The Presidential Address")	[XX II -356-74]	[UL-316] [EL-343]
546	1889	Of Dyeing as an Art	芸術としての染色					Essay			<i>Arts and Crafts Exhibition Society Catalogue of the Second Exhibition MDCCCLXXXIX</i> , 7 Nov, 56-67	[i -260-6]	[EL-341-2]
547	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-200</i> , 9 November, 356	[JO-621-3]	[EL-342]
548	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-201</i> , 16 November, 361	[JO-624-5]	[EL-342]
549	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-202</i> , 23 November, 369	[JO-626-30]	[EL-342]
550	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-203</i> , 30 November, 377	[JO-631-3]	[EL-342]
551	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-204</i> , 7 December, 385	[JO-634-6]	[EL-342]
552	1889	Monopoly	独占							Lecture	<i>The Commonweal Vol.5-204</i> , 7 December, 388-9~ <i>Vol.5-206</i> , 21 December, 401-2 (published in 3 installments) 1st L: 20 F 87	[XX III -238-54]	[EL-342]
553	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-205</i> , 14 December, 393	[JO-637-40]	[EL-342]
554	1889	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.5-207</i> , 28 December, 409	[JO-641-3]	[EL-342]
555	1890	The Roots of the Mountains	『山々の麓』		Prose Romance						Publication: Reeves and Turner issued 16 and 21 Nov. 1889	[X V]	[EL-133-7]
556	1890	Unheaded Speech	無題の演説							Speech	<i>Protocol of the International Worker's Congress, Paris, Held from 14-20 July, 1889</i> , 17 (published 1890)		[EL-342]
557	1890	Unheaded Speech	無題の演説							Speech	<i>Protocol of the International Worker's Congress, Paris, Held from 14-20 July, 1889</i> , 39-43 (published 1890)		[EL-342]
558	1890	Art and Industry in the Fourteenth Century	14世紀の芸術と産業							Lecture	Time: a Monthly Magazine, January, 23-36 (1st delivered on 15 May 1887)	[XX II -375-90]	[EL-342]
559	1890	News from Nowhere	ユートピアだより		Prose Romance						<i>The Commonweal Vol.6-209</i> , 11 January, 9-10~ <i>Vol.6-247</i> , 4 October, 314-5 (published in 39 weekly installments)	[XVI]	[EL-343]
560	1890	Fabian Essays in Socialism	社会主義におけるフェビアン協会の評論					Review			<i>The Commonweal Vol.6-211</i> , 25 January, 28-9	[PW-457-63]	[EL-343]
561	1890	The Hall and the Wood	ホールと森			Verse					The English Illustrated Magazine, February, 351-4	[IX -109-14]	[EL-343]
562	1890	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-212</i> , 1 February, 33	[JO-647-8]	[EL-343]
563	1890	Notes on News	時事党書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-213</i> , 8 February, 41	[JO-649-50]	[EL-343]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
564	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-214</i> , 15 February, 49	[JO-651-2]	[EL-343]
565	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-215</i> , 22 February, 57	[JO-653]	[EL-343]
566	1890	Coal in Kent	ケントの石炭					Comment			<i>The Commonweal Vol.6-217</i> , 8 March, 77	[PW-464-6]	[EL-343]
567	1890	Correspondence. Christianity and Socialism	往復文書—キリスト教と社会主義					Reply			<i>The Commonweal Vol.6-217</i> , 8 March, 77	[PW-467-8]	[EL-343-4]
568	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-219</i> , 22 March, 89	[JO-654]	[EL-344]
569	1890	The Great Coal Strike	大石炭ストライキ					Comment			<i>The Commonweal Vol.6-219</i> , 22 March, 91	[PW-469-70]	[EL-344]
570	1890	The Class Struggle. Address by Mr. William Morris	階級闘争—ウィリアム・モリス氏による講演							Lecture	<i>The Leeds Mercury</i> , 26 March, 3 (delivered on 25 March, 1st delivered on 13 Oct. 1889)		[EL-344]
571	1890	Notes	覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-220</i> , 29 March, 100	[JO-655]	[EL-344]
572	1890	Monopoly; or, How Labour is Robbed	独占—労働はいかに収奪されるか	[E-137-60]						Lecture	Publication: The Socialist Platform issued 22-9 March Lecture 1st delivered on 20 February, 1887	[XXIII-238-54]	[EL-137-9]
573	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-221</i> , 5 April, 105	[JO-656-7]	[EL-344]
574	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-222</i> , 12 April, 116	[JO-658]	[EL-344]
575	1890	Labour Day	労働の日					Article			<i>The Commonweal Vol.6-225</i> , 3 May, 137	[PW-471-4]	[EL-344]
576	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-225</i> , 3 May, 140	[JO-659-62]	[EL-344]
577	1890	The "Eight Hours" and the Demonstration	「八時間」とデモ					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-227</i> , 17 May, 153	[PW-475-9]	[EL-344]
578	1890	Notes	覚書					Comment			<i>The Commonweal Vol.6-227</i> , 17 May, 157	[JO-663-5]	[EL-344]
579	1890	Unheaded Response (Vandalism in Oxford)	無題の返答(オックスフォードにおける破壊)						Response		<i>The Speaker</i> , 24 May, 559-70 (dated 19 May)		[EL-344]
580	1890	The Glittering Plain; or, The Land of the Living Men	『輝く平原の物語』	[M]	Prose Romance						<i>The English Illustrated Magazine</i> , June, 687-98~September, 884-900 (published in 4 installments)	[XIV]	[EL-344-5]
581	1890	Anti- Parliamentary	反議会					Comment			<i>The Commonweal Vol.6-230</i> , 7 June, 180-1	[PW-480-3]	[EL-345]
582	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-232</i> , 21 June, 192	[JO-666-7]	[EL-345]
583	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-233</i> , 28 June, 204	[JO-668-70]	[EL-345]
584	1890	Stratford-on-Avon Church	ストラットフォード・アボン・エイボン教会						Letter		<i>The Times</i> , 15 August, 10	[LE-325-6]	[EL-345]
585	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-234</i> , 5 July, 212	[JO-671]	[EL-345]
586	1890	The Development of Modern Society	近代社会の発展							Lecture	<i>The Commonweal Vol.6-236</i> , 19 July, 225-6~ <i>Vol.6-240</i> , 16 August, 260-1 (published in 5 weekly installments) L: 13 April		[EL-345]
587	1890	Notes on News	時事覚書					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-237</i> , 26 July, 235	[JO-672-4]	[EL-345]
588	1890	The Day of Days	その日			Verse					<i>The Humane Review</i> , July	[IX-115]	[EL-345]
589	1890	Unheaded Letter	無題の投書						Letter		<i>The Times</i> , 10 September, 12		[EL-345]
590	1890	News from Nowhere	『ユートピアだより』	[D] [F] [J] [Q]	Prose Romance						Robert Brothers issued 31 Oct / Reeves and Turner: 21-8 March 1891 他	[XVI]	[EL-139-48]
591	1890	Workhouse Socialism	ワークハウス社会主義					Article			<i>The Commonweal Vol.6-251</i> , 1 November, 345-6	[PW-484-7]	[EL-345]
592	1890	Where Are We Now?	我々はどこにいるか					Editorial			<i>The Commonweal Vol.6-253</i> , 15 November, 361-2	[ii-512-8]	[EL-345]
593	1890	The Relations of Art to Labour	芸術と労働の関係					Article			<i>Co-operative Wholesale Societies Annual</i>	[UL-94-118]	[EL-345]
594	1890	Principles of the HSS	ハマスミス社会主義協会の原則						Statement		Publication: The Society at Kelmscott, December		[EL-152-3]
595	1890	Glass, Painted or Stained' in Chamber's Encyclopaedia	「絵入ガラス、ステンドグラス」 『チャンバース百科事典』					Essay			1890年版 New Edition of Chamber's, 246-8	[i-356-64]	[EL-275]
596	1891	The Saga Library Vol. I	『サガ叢書』第1巻				Translation				Publication: Bernard Quaritch E.Magnússonとの共訳		[EL-149-52]
597	1891	The Socialist Ideal I —Art	社会主義者の理想—芸術					Article			<i>The New Review</i> , 1 January, 1-8	[XXIII-255-63]	[EL-346]
598	1891	The: "Triumph of the Innocents"	勝利と潔白						Letter		<i>The Liverpool Daily Post</i> , 7 February, 6		[EL-346]
599	1891	Westminster Abbey	ウェストミンスター寺院						Letter		<i>The Times</i> , 11 February, 4 (dated on 5 February)	[LE-335-7]	[EL-346]
600	1891	The Glittering Plain	『輝く平原の物語』	[M]	Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 4 April	[XIV]	[EL-153-9]
601	1891	A King's Lesson	『王の教訓』	[N]	Prose Romance						Publication: James Leatham, 3 May	[XVI]	[EL-159-61]
602	1891	Under an Elm-Tree; or Thoughts in the Country-Side	『楡の木の下で』					Essay			Publication: James Leatham	[ii-507-12]	[EL-161-4]
603	1891	The Annual Report 14	SPAB年次報告14					Report			The Fourteenth Meeting of SPAB, 10 June (Publication: August)		[EL-346]
604	1891	Seven Years Ago and Now	七年前と今							Lecture	<i>Justice</i> , 5 September, 1 (delivered on 30 August)		[EL-346]
605	1891	Poems by the Way	『折節の詩』			Poems					Publication: Kelmscott Press, 24 September	[IX]	[EL-166-71]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
606	1891	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , October, 1		[EL-346]
607	1891	Address on the Collection of Paintings of the English Pre-Raphaelite School	英国ラファエル前派絵画展における講演							Lecture	delivered on 2 October	[i -296-310]	[UL-318] [EL-171]
608	1891	Socialism Up-to-Date	最新の社会主義							Lecture	delivered on 4 October	[ii -341-3]	[UL-318]
609	1891	Unheaded 'statement of principles'	無題の原則声明書					Comment			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.1, October, 4		[EL-346-7]
610	1891	Unheaded Protest	無題の抗議						Letter		<i>The Pall Mall Gazette</i> , 27 October, 2 (dated 22 October)		[EL-347]
611	1891	The Influence of Building Materials on Architecture	建材の建築への影響							Lecture	<i>The Century Guild Hobby Horse</i> , January, 1-14 (delivered on 20 November)	[XX II -391-405]	[EL-347]
612	1892	The Saga Library Vol. II	『サガ叢書』第2巻				Translation				Publication: Bernard Quaritch E. Magnússonとの共訳		[EL-164-5]
613	1892	The New Year	新しい年			Verse					<i>The Artist</i> , January, 3		[EL-347]
614	1892	The Woodcuts of Gothic Books	ゴシック本の本版画	[Q-97-133]						Lecture	<i>Journal of the Society of Arts</i> , 12 February, 246-60 (a paper read on 26 January)	[IB-25-44]	[EL-347]
615	1892	Preface' to <i>The Nature of Gothic</i>	『ゴシックの本質』への緒言					Preface			Publication: Kelmscott Press, issued 22 March	[i -292-5]	[EL-275-6]
616	1892	May Day	メーデー			Verse					<i>Justice</i> , 30 April, 1	[PG-77-9]	[EL-347]
617	1892	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.8, May, 1-2		[EL-347]
618	1892	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.9, May, 1-2		[EL-347]
619	1892	The Annual Report 15	SPAB 年次報告 15					Report			The Fifteenth Meeting of SPAB, 28 June (Publication: August)		[EL-347]
620	1892	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.11, August, 1-3		[EL-347]
621	1892	Communism, i.e. Property	共産主義、所有について							Lecture	delivered on 21 August	[ii -345-52]	[UL-319]
622	1892	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.12, September, 1-2		[EL-347]
623	1892	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.12, October, 1-2		[EL-347-8]
624	1892	Unheaded Reply	無題の返答						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 31 October, 4 (dated 29 October)		[EL-348]
625	1892	The Order of Chivalry	『騎士道』			Translation					Publication: Kelmscott Press, 10 November		[EL-173-5]
626	1892	The Reward of Labour: A Dialogue	『労働の報酬についての対話』					Dialogue			Publication: Christy and Lilly, issued by 10 December		[EL-171]
627	1893	The Saga Library Vol. III	『サガ叢書』第3巻				Translation				Publication: Bernard Quaritch E. Magnússonとの共訳 (8 Feb.)		[EL-172]
628	1893	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.17, February, 1-2		[EL-348]
629	1893	Communism	共産主義							Lecture	1st delivered on 19 February	[XX III -264-76]	[UL-320]
630	1893	Preface' to <i>Medieval Lore</i> by Robert Steele	ロバート・スティール『中世の伝承』への緒言					Preface			Publication: Elliot Stock, issued February	[i -286-9]	[EL-276]
631	1893	Hammersmith Socialist Society, Kelmscott House. Friends and Comrades	ハマスミス社会主義協会、ケルムスコット・ハウスの仲間たち					Editorial			<i>The Hammersmith Socialist Record</i> , No.19, April, 1-2		[EL-348]
632	1893	William Morris on "Town and Country"	ウィリアム・モリス氏、都市と田園について							Lecture	<i>The Journal of Decorative Art</i> , April, 106, 1st delivered on 29 May 1892)		[EL-348] [UL-319]
633	1893	Manifesto of English Socialists	英国社会主義者の宣言文						Manifesto		Publication: 1 May		[EL-175-6]
634	1893	Concerning Westminster Abbey	ウェストミンスター寺院に関して					Essay			Publication: June	[XX II -410-20]	[EL-176]
635	1893	The Ideal Book	理想の書物	[Q-171-84]						Lecture	<i>Transactions of the Bibliographical Society</i> , 179-86 (delivered on 19 June)	[IB-67-73]	[EL-349]
636	1893	Unheaded Letter	無題の投書						Letter		<i>The Labour Prophet</i> , July, 60 (dated on 5 May)		[EL-348]
637	1893	The Annual Report 16	SPAB 年次報告 16					Report			The Sixteenth Meeting of SPAB, 18 July (Publication: August)		[EL-349]
638	1893	Foreword' to More's <i>Utopia</i>	トマス・モア『ユートピア』への序文					Preface			Publication: Kelmscott Press, 4 August	[i -289-92]	[EL-276]
639	1893	200 Curtain and Valance (For the Bed at Kelmscott)	200のカーテンと掛け布(ケルムスコットのベッド用)					Essay			<i>Arts and Crafts Exhibition Society Catalogue of the Fourth Exhibition</i> , 5 October, 36-7		[EL-348]
640	1893	The Coal Struggle, Some Obvious Thoughts Thereon	石炭闘争—明白な思想					Article			<i>The Sun</i> , 16 October, 6	[ii -519-21]	[EL-348]
641	1893	Gothic Architecture	『ゴシック建築』	[E-161-87]				Essay			Publication: Kelmscott Press, issued 21 October	[i -266-86]	[EL-176-7]
642	1893	Mr. William Morris on the Printing of Books	ウィリアム・モリス氏、書物の印刷について							Lecture	<i>The Times</i> , 6 November, 4		[EL-348] [UL-320-1]
643	1893	The Deeper Meaning of the Struggle	闘争の深い意味						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 10 Nov. (dated on 9 Nov.)	[LE-355-7]	[EL-177]
644	1893	Socialism: Its Growth and Outcome	『社会主義—その成長と帰結』					Papers			Baxと共著 Publication: Swan Sonnenschein, issued 11-18 November	[SO]	[EL-178-9]
645	1893	The Tale of King Florus and Fair Jehane	『フローラス王と麗しのジャンヌ』			Translation					Publication: Kelmscott Press, 16 December	[XVII-265-94]	[EL-179-81]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
646	1893	Preface', 'Textiles', 'Printing', and 'Of Dyeing as an Art'	「緒言」「織物」「印刷」「芸術としての染色」『アーツ・アンド・クラフツ論集』	[Q-157-70]				Essays			<i>Arts and Crafts Essays</i> Publication: Percival	[AC]	[EL-277]
647	1893	What Is: What Should Be: What Will Be: What May Be	あるもの、あるべきもの、あるであろうもの、あるかもしれないもの							Lecture	delivered sometime in 1893	[ii-356-7]	[UL-321]
648	1894	Some Notes on the Illuminated Books of the Middle Ages	中世の彩飾写本に関する覚書	[Q-67-80]				Essay			<i>The Magazine of Art</i> , January, 83-9	[IB-7-14]	[EL-349]
649	1894	Early England. Address by William Morris	初期英国—ウィリアム・モリスの講演					Report			<i>The Daily Chronicle</i> , 15 January, 6 (delivered on 14 January)		[EL-349]
650	1894	Why I Am a Communist	私はなぜ社会主義者か					Article			<i>Liberty: A Journal of Anarchist Communism</i> , February, 13-5		[EL-349] [EL-278]
651	1894	The Proposed Addition to Westminster Abbey	ウェストミンスター寺院への増築の企て						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 27 February, 3 (dated on 26 Feb)	[LE-358]	[EL-349]
652	1894	South Salford Branch(Waste)	サウスソールフォード支部							Lecture	<i>Justice</i> , 17 March, 3		[EL-349]
653	1894	Amis and Amile	『アミとアミールの友情』				Translation				Publication: Kelmscott Press, 13 March	[XVII-295-312]	[EL-181-3]
654	1894	May-Day, 1894	メーデー, 1894			Verse					<i>Justice</i> , 5 May, 1	[PC-80-1]	[EL-349]
655	1894	The Wood beyond the World	『世界のかなたの森』	[K]	Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 30 May	[XVII]	[EI-186-94]
656	1894	How I became a Socialist	私はいかにして社会主義者になったか	[E-99-107]				Essay			<i>Justice</i> , 16 June, 6	[XXIII-277-81]	[EL-349] [EL-207]
657	1894	An Address Delivered at the Distribution of Prizes to Students of the Birmingham Municipal School of Art	芸術学校生への講話	[H-166-84]						Lecture	Publication: Museum&School of Art Committee issued before 8 July (Lecture: delivered on 21 February)	[XX II-421-37]	[EI-183-5]
658	1894	Mr. Morris's "Chaucer"	モリス氏の『チョーサー』						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 24 July, 3 (dated on 20 July)		[EL-349]
659	1894	The Saga Library Vol.IV	『サガ叢書』第4巻				Translation				Publication: Bernard Quaritch E.Magnússonとの共訳 (26 July.)		[EL-185-6]
660	1894	The Emperor Coustans and Over Sea	『クースタンス王と異国の物語』				Translation				Publication: Kelmscott Press, 30 August	[XVII-313-52]	[EL-186]
661	1894	Introduction to <i>Good King Wenceslas</i> by Dr. Neale	ジョン・メイソン・ニール『慈しみ深き王ウエンセスラス』への前書き					Intro			Publication: Cornish BRS, dated September	[i-295-6]	[EL-277-8]
662	1894	Untitled Paragraph	無題の短評						Letter		<i>Liberty: A Journal of Anarchist Communism</i> , 1 October, 76		[EL-349-50]
663	1894	Unheaded Letter	無題の投書						Letter		<i>The Clarion</i> , 3 November, 8 (dated on 25 October)		[EL-350]
664	1894	Makeshift	間に合わせ							Lecture	delivered on 18 November (Manchester)	[ii-469-83]	[UL-321]
665	1894	Letters on Socialism	社会主義に関する投書						Letters		Privately Printed		[EL-195]
666	1894	Some Thoughts on the Ornamented Manuscripts of the Middle Ages	中世の彩飾写本に関する若干の考察	[Q-55-65]				Essay			初出はNew York, Melbort B. Cary, Jr.の序文附した私家版 (原稿Huntington Library所蔵)	[IB-1-6]	
667	1895	The Tale of Beowulf	『ベオウルフ』				Translation				Publication: Kelmscott Press, 10 January	[X]	[EL-195-8]
668	1895	What We Have to Look For	我々は何を期待すべきか							Lecture	1st delivered on 31 March	[ii-357-61]	[UL-322]
669	1895	Unheaded Letter (On Peterborough Cathedral)	無題の投書(ピーターバラ大聖堂について)						Letter		<i>The Daily News</i> , <i>The Daily Chronicle</i> , <i>The Standard</i> , <i>The Times</i> , <i>The Morning Post</i> , 2 April, (dated 1 April)		[EL-350]
670	1895	Tree-felling in Epping Forest	エビングの森における伐採						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 23 April, 3 (dated 22 April)	[LE-363-5]	[EL-350]
671	1895	Epping Forest	エビングの森						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 30 April, 3 (dated 27 April)		[EL-350]
672	1895	As to Bribing Excellence	美德を買収すること					Article			<i>Liberty: A Journal of Anarchist Communism</i> , 1 May, 131		[EL-350]
673	1895	Change of Position-Not Change of Condition-	地位の変更—状況の変更ではなく					Article			<i>Justice</i> , 1 May	[XXIII-277-81]	[EL-350]
674	1895	Epping Forest. Mr. Morris's Report	エビングの森—モリス氏の報告						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 9 May, 3 (dated 8 May)	[LE-365-6]	[EL-350]
675	1895	The Royal Tombs in Westminster Abbey	ウェストミンスター寺院の王室の墓						Letter		<i>The Times</i> , 1 June, 13 (dated 31 May)	[i-186-8]	[EL-350]
676	1895	On 'The Wood Beyond the World'	「世界のかなたの森」について						Letter		<i>The Spectator</i> , 20 July, 81 (dated 16 July)	[LE-370-1]	[EL-350]
677	1895	Child Christopher and Goldilind the Fair	『チャイルド・クリストファーと麗しのゴルディリンド』		Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 25 July	[XVII]	[EL-198-9]
678	1895	Casts v. Tapestries	キャスト対タペストリ						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.3539, 264-5 (dated 13 August)	[LE-371-3]	[EL-350]
679	1895	Casts v. Tapestries	キャスト対タペストリ						Letter		<i>The Athenaeum</i> , No.3540, 298-9 (dated 26 August)	[LE-374-5]	[EL-350]
680	1895	The Restoration of Rouen Cathedral	ルーアン大聖堂の修復						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 14 October, 3 (dated 12 October)	[i-188-90]	[EL-351]
681	1895	Gossip about an Old House on the Upper Thames	テムズ河上流の古い邸について					Essay			<i>The Quest</i> , 1 November, 5- 14 (dated on 25 October)	[i-364-71]	[EL-351]
682	1895	Preservation of the Trinity Almshouses. A Ready Response. The Whole Amount Subscribed	トリニティ救貧院の保存について						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 26 November, 6 (dated 25 Nov.)	[LE-377-8]	[EL-351]
683	1895	Unheaded Letter	無題の短評						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 7 December, 6 (dated 5 Dec.)		[EL-351]
684	1895	Unheaded Letter	無題の短評						Letter		<i>The Daily Chronicle</i> , 13 December, 9 (dated 12 Dec.)	[LE-379]	[EL-351]
685	1895	Chichester Cathedral	チチェスター大聖堂						Letter		<i>The Times</i> , 14 December, 6 (dated 12 December)	[i-191-2]	[EL-351]

No.	発表年	タイトル	タイトル邦訳	邦訳書	分類						初出および備考	引用文献	Lemire研究
					散文	詩	翻訳	論文・批評	声明・投書	講演録			
686	1895	Funeral of Stepniak	ステブニークの葬儀						Letter		<i>The Times</i> , 30 December, 9 (the funeral was on 28 Dec.)		[EL-351]
687	1895	On the Artistic Qualities of the Woodcut Books of Ulm and Augsburg in the Fifteenth Century	ウルムとアウグスブルグの木版画本の芸術的特性について	[Q-136-56]						Lecture	<i>Bibliographica</i> , 437-55	[IB-45-58]	[EL-351]
688	1896	Between Ourselves (One Socialist Party)	我々のあいだ(ひとつの社会主義党)							Lecture	<i>Liberty: A Journal of Anarchist Communism</i> , 5 January, 7		[EL-351]
689	1896	Speech Against the Abuses of Public Advertising	公共広告の濫用に対する演説							Lecture	<i>A Beautiful World</i> , December, 16-8 (delivered on 31 January)		[EL-352]
690	1896	Early Illustration: a Lecture (The Early Illustration of Printed Books)	初期挿絵—講演(印刷本の初期の挿絵)	[Q-81-95]						Lecture	<i>The British and Colonial Printer and Stationer</i> , 9 January, 10-1	[IB-15-24]	[EL-351-2]
691	1896	The Well at the World's End	『世界の果ての泉』	[L]	Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 2 March (同年Longmans Green)	[XVII] [XIX]	[EL-201-6]
692	1896	William Morris on Socialism and Art	ウィリアム・モリス、社会主義と芸術について						Letter		<i>Justice</i> , 7 March, 8		[EL-352]
693	1896	Unheaded Letter	無題の投書						Letter		<i>Justice</i> , 28 March, 4		[EL-352]
694	1896	The Kelmscott Press	ケルムスコット・プレス					Report			<i>Modern Art</i> (Boston), 1 April, 36-9		[EL-352]
695	1896	Old French Romances	昔のフランス・ロマンス				Translation				Publication: George Allen, issued 2 April	[XVII]	[EL-199-200]
696	1896	The Present Outlook of Socialism in England	英国における社会主義の現在の見通し					Article			<i>The Forum</i> , 21 April, 193-200		[EL-352]
697	1896	The Promise of May	五月の約束					Article			<i>Justice</i> , 1 May, 5-6		[EL-352]
698	1896	The Walsall Anarchists: The Amnesty Agitation	ウォールソールの無政府主義者								<i>Liberty: A Journal of Anarchist Communism</i> , 1 May, 51		[EL-352]
699	1897	The Water of the Wondrous Isles	『不思議な島々のみずうみ』	[P]	Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 1 April (同年Longmans Green)	[XX]	[EL-212-6]
700	1897	The Sundering Flood	『引き裂く川』	[I]	Prose Romance						Publication: Kelmscott Press, 15 November (1898にLongmans Green)	[XX I]	[EL-218-23]
701	1898	A Note by William Morris on His Aims in Founding the Kelmscott Press	ケルムスコット・プレス設立趣意書	[Q-185-93]				Note			Publication: Kelmscott Press 4 March (dated on 11 November 1895)	[IB-75-78]	[EL-223-4]

図版出典

表 1, 図 1, 図 2 : 筆者作成

図 3 ~ 図 8 : ウィリアム・モリス作 / 高野陽子, 三田村泉美編集『ウィリアム・モリスの 100 デザイン』, 藝祥, 2008

図 9 : Jan Marsh : William Morris & Red House, National Trust Books, 2005

写真 1, 写真 2 : 筆者撮影

図 10 ~ 図 12 : 福岡大学電子図書館 <http://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/tenji/kp/kp.htm> (2011 年 2 月現在)

論文目録

第1章 ウィリアム・モリスの建築的思索の構造—制作論における「自然」と「歴史」の問題

日本建築学会計画系論文集, 第73巻 第627号, 1125-1130, 2008年5月

第2章 ウィリアム・モリスの制作論における「家造り」と「庭作り」の問題

日本建築学会計画系論文集, 第74巻 第639号, 1213-1220, 2009年5月

第3章 ウィリアム・モリスの制作論における「手工芸」の問題

—アーツ・アンド・クラフツ運動の背景的思想として—

日本建築学会計画系論文集, 第75巻 第655号, 2261-2268, 2010年9月

第4章 ウィリアム・モリスの書物論とアーツ・アンド・クラフツ運動

日本建築学会学術講演梗概集, F-2 建築歴史・意匠, 821-822, 2010年9月

謝辞

本研究を纏めるにあたり，懇切なご教示を頂くとともに，ご多忙のなか審査にあたって頂いた，京都大学大学院工学研究科，門内輝行教授，高松伸教授，高田光雄教授に深謝の意を表したい。

研究の当初から完成まで京都大学名誉教授，前田忠直先生にご指導を頂いた。先生には建築論研究の道を常に示して頂いた。心から感謝を申し上げる次第である。

京都大学大学院工学研究科，田路貴浩准教授に度々ご教示及びご助言を頂いた。深く感謝を申し上げる。

建築論研究会の諸先生ならびに諸先輩の学恩に謝意を表する。水上優先生，朽木順綱先生，田中明先生，研究室の畏友諸兄には常日頃から励ましを頂いたことに謝意を表する。